京都市内遺跡発掘調査報告

平成23年度

2012年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

京都市内遺跡発掘調査報告

平成23年度

2012年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

ご あ い さ つ

京都市は，平安京建都以来，我が国の政治・文化・宗教の中心として様々な歴史が展開され，華麗かつ繊細な文化が重層的に今に伝わる，世界でも稀有な歴史・文化都市であります。

市内には，全国の国宝の19％，重要文化財の14％をはじめ，数多くの文化財が存在し，埋蔵文化財の包蔵地も広く分布しています。古代から近世まで時代ごとに積み重なった遺跡は，我が国の歴史や文化を正しく理解するうえで，欠かすことのできない大切な国民共有の財産であります。

本市では，先人が残したこうした貴重な埋蔵文化財を適切に後世に伝える責務を果たしつつ，将来にわたって日本文化を国内外に発信していけるよう，埋蔵文化財の保護とその活用に取り組んでおります。

この度，平成２３年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成いたしました。この報告書が，京都の歴史と文化財への理解を深めるために，広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに，各調査の実施に当たって，御理解，御協力を賜りました市民の皆様と，御指導を賜りました関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成２４年３月

京都市文化市民局文化芸術担当局長

平　竹　耕　三

例　言

1　本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成23年度の京都市内発掘調査報告書である。発掘調査は、京都市が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。なお、本書では平成23年１月から12月までに実施した発掘調査成果を報告する。

2　調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

Ⅰ　法勝寺跡・岡崎遺跡

京都市左京区岡崎法勝寺町　京都市動物園内

2011年６月６日～８月９日　　315㎡　　高橋　潔・家原圭太

Ⅱ　角社瓦窯跡（文化財保護課番号　11Ｓ225）

京都市北区西賀茂角社町125-1

2011年９月１日～10月７日　　157㎡　　吉崎　伸・鈴木久史

Ⅲ　植物園北遺跡（文化財保護課番号　10Ｓ377）

京都市左京区下鴨北園町５・６

2010年12月20日～2011年１月14日　　140㎡　　津々池惣一

Ⅳ　山科本願寺跡16次調査

京都市山科区西野山階町30-1他

2011年１月11日～３月11日　　295㎡　　柏田有香

山科本願寺跡17次調査

京都市山科区西野山階町30-1他

2011年７月21日～９月28日　　305㎡　　柏田有香

Ⅴ　長岡京跡北辺隣接地

京都市南区久世築山町地内

2011年４月14日～４月28日　　116㎡　　伊藤　潔

なお、文化財保護課番号とは、「文化財保護法」第93・94条および125条にかかる申請に対して文化財保護課が付す受理固有番号のことである。

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。

Ⅰ　高橋　潔・家原圭太

Ⅱ　吉崎　伸・鈴木久史

Ⅲ　津々池惣一

Ⅳ　柏田有香

Ⅴ　伊藤　潔

4　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。

5　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

6　本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。

7　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「吉田」「岡崎」「西賀茂」「幡枝」「鷹峯」「植物園」「山科」「久世」を調整したものである。

8　本書の編集は、柏田有香・児玉光世が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　法勝寺跡・岡崎遺跡

1．調査の経緯 …… 1
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査の経過 …… 2
2．遺　　跡 …… 5
（1）遺跡の位置と環境 …… 5
（2）周辺の調査 …… 6
3．遺　　構 …… 11
（1）1区の調査 …… 11
（2）2区の調査 …… 16
（3）3～5区の調査 …… 21
4．遺　　物 …… 26
（1）遺物の概要 …… 26
（2）平安時代から室町時代の遺物 …… 27
（3）古墳時代前期の遺物 …… 33
5．ま と め …… 40
（1）本調査のまとめ …… 40
（2）平成22・23年度調査の総括 …… 42
（3）昭和54年の試掘調査 …… 45

Ⅱ　角社瓦窯跡

1．調査経過 …… 47
2　周辺の調査 …… 48
3．遺　　構 …… 50
（1）基本層位 …… 50
（2）遺構 …… 50
4．遺　　物 …… 55
5．ま と め …… 61

Ⅲ　植物園北遺跡

1．調査経過 …… 65
（1）調査の経過 …… 65
（2）位置と周辺調査 …… 66

2．遺　　構 …… 70
（1）基本層序 …… 70
（2）遺構の概要 …… 70
3．遺　　物 …… 77
（1）出土遺物の概要 …… 77
（2）出土遺物 …… 77
4．ま と め …… 78

Ⅳ　山科本願寺跡
1．調査経過 …… 79
2　遺　　跡 …… 81
（1）遺跡の位置と歴史 …… 81
（2）周辺の調査 …… 81
3．遺　　構 …… 87
（1）基本層序 …… 87
（2）室町時代の遺構 …… 88
（3）江戸時代から近代の遺構 …… 105
4．遺　　物 …… 109
（1）土器・土製品 …… 109
（2）瓦類 …… 123
（3）金属製品 …… 125
（4）石 …… 126
5．ま と め …… 127
（1）遺構の変遷とその性格 …… 127
（2）土塁の構築と規模 …… 130
（3）本願寺廃絶以後の様相 …… 131

Ⅴ　長岡京跡北辺隣接地
1．調査経過 …… 148
2．遺　　構 …… 150
（1）1区 …… 150
（2）2区 …… 151
3．遺　　物 …… 151
4．ま と め …… 152

報告書抄録 …… 153

図　版　目　次

巻頭図版１	山科本願寺跡	遺構	17次調査１区　石組溝群全景（北東から）
巻頭図版２	山科本願寺跡	遺構	1　現存土塁断面（東北東から）
			2　埋納遺構2160（北から）
図版１	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺構	1　１区西半全景（北から）
			2　１区東端池41完掘状況（西から）
			3　２区全景（東から）
			4　２区北西部西壁基壇版築検出状況（南東から）
図版２	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺構	1　３区基壇掘込地業検出状況（北東から）
			2　４区掘込地業検出状況（北西から）
			3　５区西壁断割状況（北から）
			4　５区南区北壁断割状況（東から）
図版３	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	２区出土軒瓦
図版４	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	４区出土軒瓦
図版５	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	1　五輪塔押印文瓦・文字瓦・ヘラ記号瓦
			2　土器・土製品
図版６	法勝寺跡・岡崎遺跡	遺物	土器
図版７	角社瓦窯跡	遺構	1　北区全景（北東から）
			2　南区全景（北東から）
図版８	角社瓦窯跡	遺構	1　２号窯検出状況（東から）
			2　灰原１状況（北西から）
図版９	角社瓦窯跡	遺物	軒丸瓦・軒平瓦
図版10	角社瓦窯跡	遺物	軒平瓦・丸瓦・平瓦
図版11	角社瓦窯跡	遺物	鴟尾・塼・須恵器・焼土塊・坩堝
図版12	植物園北遺跡	遺構	1　第１回調査区全景（北から）
			2　掘立柱建物１（北から）
図版13	植物園北遺跡	遺構	1　第２回調査区全景（北から）
			2　竪穴住居90（北から）
図版14	植物園北遺跡	遺構・遺物	1　竪穴住居78（北西から）
			2　出土遺物
図版15	山科本願寺跡	遺構	1　16次調査区　通路状遺構全景（西から）
			2　集石1061（北から）

			3	16次調査区　北半全景（北から）
図版16	山科本願寺跡	遺構	1	17次調査１区　石組溝群全景（西から）
			2	溝2084・2087合流部（北東から）
図版17	山科本願寺跡	遺構	1	土坑2134土器出土状況（北西から）
			2	土坑2156（南から）
			3	礫敷き（北から）
			4	土坑2061・2064（北西から）
図版18	山科本願寺跡	遺構	1	17次調査１区　南半全景（東から）
			2	溝2143土器出土状況（北東から）
図版19	山科本願寺跡	遺構	1	土塁基底部と溝2148（北東から）
			2	土塁断割状況（南東から）
			3	土塁断割断面短刀出土状況（北から）
			4	17次調査２区　土塁斜面（北北東から）
図版20	山科本願寺跡	遺物		土器
図版21	山科本願寺跡	遺物		土器・土製品
図版22	山科本願寺跡	遺物		土器・金属製品
図版23	長岡京跡北辺隣接地	遺構・遺物	1	１区西半全景（西から）
			2	１区東半全景（東から）
			3	２区全景（北から）
			4	出土遺物

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）…… 1
図２　１・２区配置図（１：500）…… 2
図３　３～５区配置図（１：500）…… 3
図４　調査前全景１・２区（北東から）…… 4
図５　重機掘削 …… 4
図６　チャレンジ体験 …… 4
図７　５区掘削作業 …… 4
図８　１区北拡張掘削作業 …… 4
図９　３区埋め戻し状況 …… 4
図10　調査地と周辺調査位置図（１：2,500）…… 6

図11　調査地と周辺調査位置図２（１：1,000）…… 7
図12　１区平面図（１：200）…… 12
図13　１区西壁・北壁断面図（１：100）…… 13
図14　１区溝56・土坑57実測図（１：50）…… 14
図15　１区溝60実測図（１：50）…… 14
図16　１区池41実測図（１：50）…… 15
図17　２区平面図（１：200）…… 16
図18　２区西壁・北壁断面図（１：100）…… 17
図19　２区版築部分平面図（１：100）、Ａ断面図（１：50）…… 18
図20　２区版築部分Ｂ・Ｃ・Ｄ断面図（１：50）…… 19
図21　２区土坑１・２実測図（１：50）…… 20
図22　３～５区平面図（１：100）…… 22
図23　３区断割断面図（1：50）…… 23
図24　３区東断面図（１：50）…… 23
図25　４区断割断面図（１：50）…… 24
図26　５区断割断面図（１：50）…… 25
図27　１・２区出土瓦実測図（１：４）…… 28
図28　３～５区出土瓦実測図（１：４）…… 29
図29　各調査区出土瓦拓影（１：３）…… 30
図30　各調査区出土土器・土製品実測図（１：４）…… 32
図31　下層出土土器実測図１（１：４）…… 34
図32　下層出土土器実測図２（１：４）…… 35
図33　法勝寺跡南半　平安時代遺構配置図（１：1,000）…… 43
図34　昭和54年度試掘調査（調査４）遺構実測図（１：100）…… 45
図35　調査区配置図（１：400）…… 47
図36　作業風景…… 48
図37　大将軍神社…… 37
図38　周辺瓦窯跡および調査位置図（１：5,000）…… 49
図39　土層断面図（１：50）…… 51
図40　遺構平面図（１：200）…… 52
図41　Ⅱ号窯実測図（１：40）…… 53
図42　中央セクション断面図（１：50）…… 54
図43　土器実測図（１：４）…… 55
図44　軒丸瓦・鴟尾・塼拓影・実測図（１：４）…… 56
図45　軒平瓦拓影・実測図（１：４）…… 57

図46　丸瓦・平瓦拓影・実測図（１：４）…… 58
図47　調査位置図（１：2,500）…… 65
図48　調査区配置図（１：1,000）…… 66
図49　調査前全景（北から）…… 66
図50　地元説明会風景…… 66
図51　周辺既往調査位置図（１：10,000）…… 67
図52　南壁断面図（１：50）…… 70
図53　遺構平面図（１：100）…… 71
図54　掘立柱建物１実測図（１：80）…… 72
図55　竪穴住居90実測図（１：50）…… 73
図56　竪穴住居90竈実測図（１：20）…… 74
図57　竪穴住居90竈支脚（西から）…… 74
図58　竪穴住居78実測図（１：50）…… 75
図59　竪穴住居78竈実測図（１：20）…… 75
図60　竪穴住居78竈支脚（東から）…… 76
図61　土坑102・103実測図（１：50）…… 76
図62　出土土器実測図（１：４）…… 77
図63　16次調査前全景（北から）…… 80
図64　16次調査現地説明会…… 80
図65　16次調査埋め戻し状況…… 80
図66　17次調査前全景（北北東から）…… 80
図67　調査前現存土塁全景（北東から）…… 80
図68　現存土塁保護状況…… 80
図69　主要調査位置図（１：4,000）…… 82
図70　調査区配置図（１：800）…… 85
図71　調査区断面模式柱状図（１：50）…… 88
図72　室町時代遺構平面図（１：300）…… 89
図73　16次調査南端平面図（１：50）…… 90
図74　16次調査南端断面図（１：50）…… 91
図75　石組溝群平面図（１：60）…… 93
図76　溝2084・2087・2117・2151、土坑2134断面図（１：50）…… 94
図77　土坑2061・2064実測図（１：50）…… 97
図78　17次調査西端平面図（１：60）…… 98
図79　17次調査西端断面図（１：50）…… 99
図80　埋納遺構2160実測図（１：20）…… 100

図81　17次調査２区平面図（１：100）…… 101
図82　土塁断面図（１：60）…… 102
図83　土塁断面土色…… 103
図84　江戸時代から近代遺構平面図（１：300）…… 106
図85　集石1061、溝1119、焼土層出土土器実測図（１：４、１：６）…… 111
図86　土坑2134出土土器実測図（１：４）…… 113
図87　溝2084、溝2084下層・掘形、溝2151・2117、土坑2156出土土器実測図（１：４）114
図88　溝2087出土土器実測図（１：４）…… 115
図89　溝2143・2148出土土器実測図（１：４）…… 117
図90　土坑2157出土土器実測図（１：４）…… 118
図91　整地面、整地層、土塁構築土、土塁構築以前整地層出土土器実測図（１：４）…… 120
図92　近世整地層、土坑1086出土土器実測図（１：４、１：８）…… 121
図93　土坑2001・2105・2115出土土器実測図（１：４、１：８）…… 122
図94　瓦類拓影および実測図（１：４、１：６）…… 124
図95　金属製品実測図（１：３、１：２、１：１）…… 125
図96　土坑1086出土　石１…… 126
図97　周辺遺構分布図（１：800）…… 128
図98　「本願寺」『都名所図会』…… 129
図99　調査位置図（１：5,000）…… 148
図100　調査区配置図（１：1,000）…… 149
図101　１区西半調査前全景（西から）…… 149
図102　１区東半調査前全景（東から）…… 149
図103　２区調査前全景（北から）…… 149
図104　２区作業風景（北から）…… 149
図105　１区遺構実測図（１：80）…… 150
図106　出土土器実測図（１：４）…… 152

表　目　次

表１　既往調査一覧表…… 8
表２　遺構概要表…… 11
表３　遺物概要表…… 26
表４　出土瓦観察表…… 36

表５　出土土器観察表 …… 37
表６　下層出土土器観察表 …… 39
表７　遺構概要表 …… 50
表８　遺物概要表 …… 55
表９　瓦観察表 …… 59
表10　土器・土製品観察表 …… 60
表11　周辺既往調査一覧表 …… 68
表12　遺構概要表 …… 70
表13　遺物概要表 …… 77
表14　主要調査一覧表 …… 83
表15　山科本願寺関係略年表 …… 84
表16　16次調査遺構概要表 …… 87
表17　17次調査遺構概要表 …… 87
表18　16次調査遺物概要表 …… 110
表19　17次調査遺物概要表 …… 110
表20　釘状金属製品計測表 …… 126
表21　掲載土器・土製品一覧表 …… 134
表22　遺構概要表 …… 151
表23　遺物概要表 …… 151

Ⅰ　法勝寺跡・岡崎遺跡

1　調査の経緯

（1）調査に至る経緯

本調査は、京都市動物園の敷地内で行った文化庁国庫補助事業による発掘調査である。京都市動物園の敷地は、平安時代後期に白河天皇の御願によって造営された法勝寺の推定地の南半部、また弥生時代から古墳時代の集落遺跡である岡崎遺跡の南東部にあたっている。明治36年（1903）に開園した京都市動物園では開園100年を過ぎて、園内施設の全面的なリニューアル工事が計画されたことから、工事に伴って法勝寺跡等の遺跡への影響が予想された。このため、平成21・22年度に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって、遺構の残存状況の把握を目的とした試掘調査が行われた（調査32・34）。この結果に基づいて、平成22年度には八角九重塔跡の南半部および塔の南側・東側の池の確認を目的とした発掘調査を行い、八角九重塔跡の掘込地業の構築状況を明らかにした（調査33）。

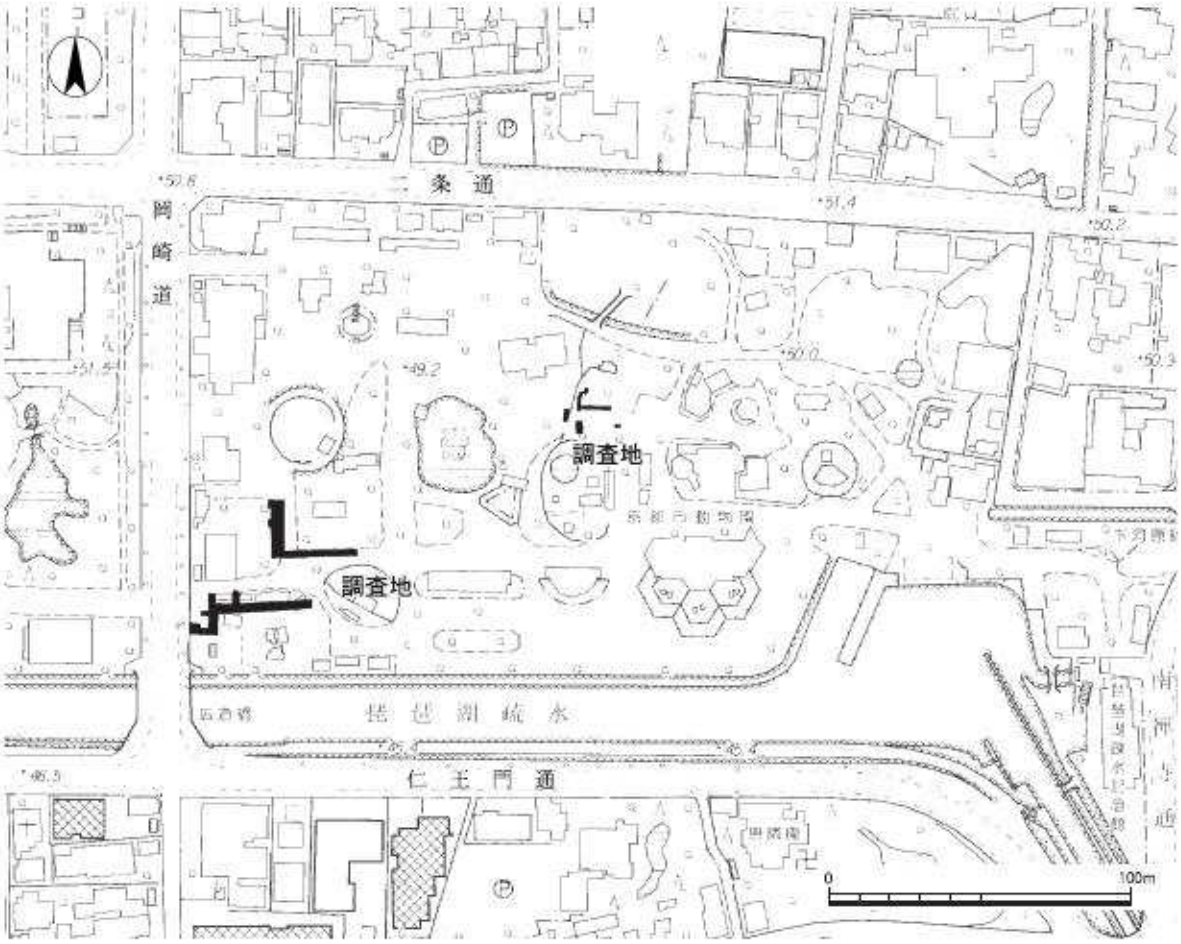


図1　調査位置図（1：2,500）

本年度は八角九重塔跡の北側の状況の確認と、八角九重塔跡の西側に推定され先の試掘調査（調査34）で基壇版築の一部とみられる土層が確認された阿弥陀堂跡の推定位置および範囲の確定のために、文化財保護課の指導の下、(財) 京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。

（2）調査の経過

調査の目的と調査区の設定　本年度調査の目的は大きく３点である。１点目は、八角九重塔の西側に推定されている阿弥陀堂に関する遺構を確認することである。調査34では、地表下0.2m前後で建物の基壇版築とみられる土層を検出しており、本調査でその範囲の確認を行うことである。

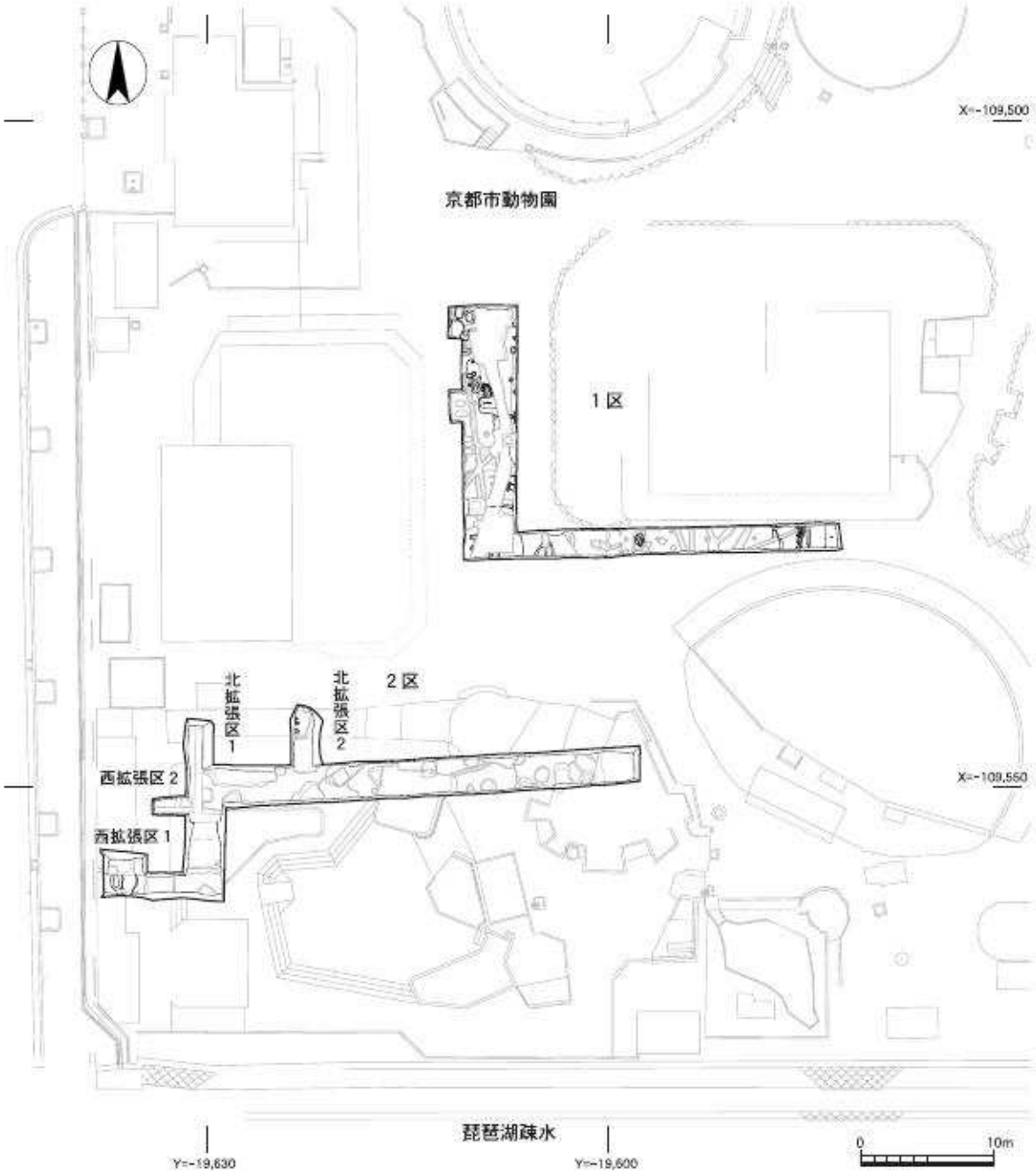


図２　１・２区配置図（１：500）

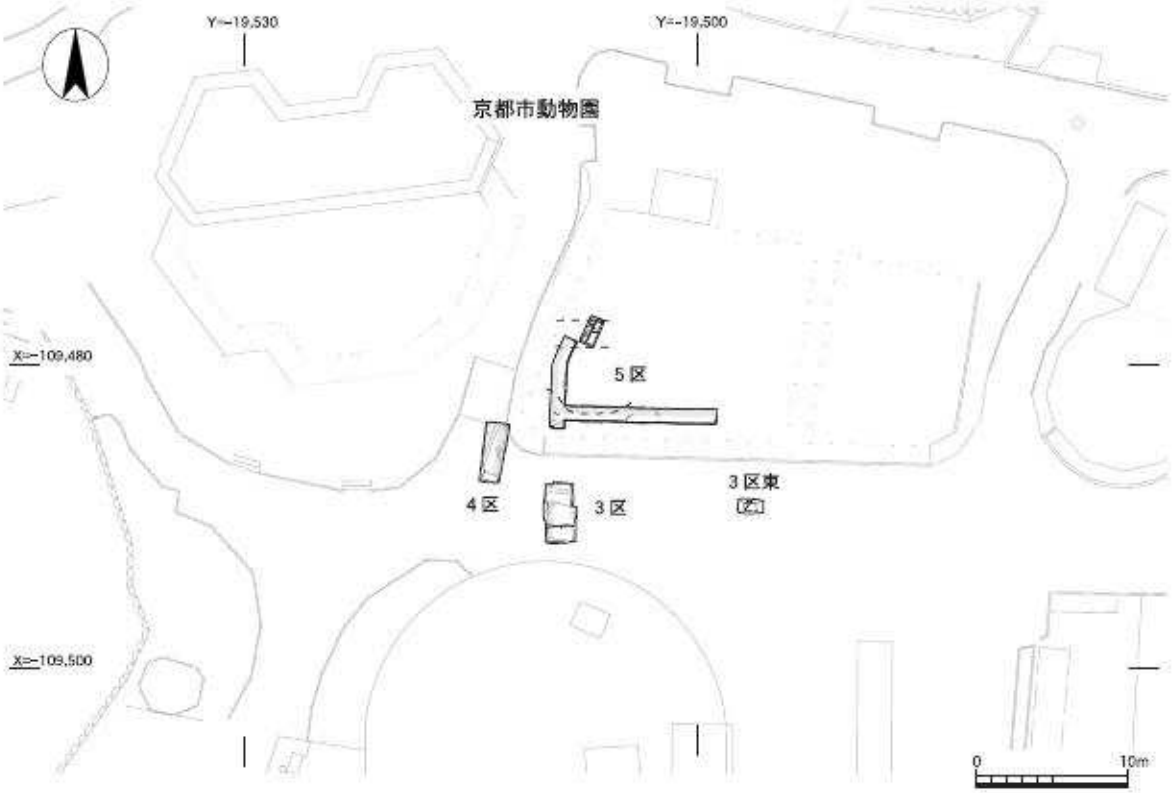


図３　３～５区配置図（１：500）

２点目は、八角九重塔を囲む池の西肩部を検出することである。３点目は、池が回り込むとされる塔の北側の状況を把握することである。

調査では、１区から５区までの調査区を設定した。１点目の目的達成のため、動物園敷地の南西部に１区と２区を設定した。１区は推定されている阿弥陀堂の北東部、２区は中央西寄りにあたり、１区は池の西肩を検出するという２点目の目的の達成も兼ねた。３点目の目的である八角九重塔の北側の状況把握のために、塔の基壇の北側に３～５区を設定した。八角九重塔が池の中島に建立されているとの記述があることから、これまでに塔の周囲で確認されてきた池が塔の北側でも検出されることが見込まれたためである。

いずれの調査区においても、文化財保護課の指導により部分的、全面的な拡張を随時行ったため、当初計画とは形状・面積が異なることとなった。

調査経過　調査は１区より開始した。次いで３区に着手し、調査を終了し埋め戻す際に、３区東側の補足調査を行い、記録を取って当日のうちに埋め戻した。引き続き、４区と５区の調査を行った。その後、２区の調査を開始した。この間、１区は途中調査を一時中断していたが、２区に合わせて調査を終了した。

５区は現在使われていない獣舎檻内での調査であったため、掘削の最初から埋め戻しまで、すべての作業を人力で行った。他の調査区は現代盛土・攪乱の掘削と埋め戻しは、重機によって行い、遺構の掘削や断割作業は人力で行った。遺構の記録は、随時平面図・断面図を作成し、写真撮影を行った。埋め戻しにあたっては、遺構面を明示するために土嚢を適宜配置した後に排土によって埋めた。なお、３区・４区の断ち割り部分は土嚢を充填して埋めている。

図４　調査前全景１・２区（北東から）

図５　重機掘削

図６　チャレンジ体験

図７　５区掘削作業

図８　１区北拡張掘削作業

図９　３区埋め戻し状況

調査中、上原真人教授・西山良平教授（京都大学）、鈴木久男教授（京都産業大学）、冨島義幸教授（滋賀県立大学）、高 正 龍教授（立命館大学）にそれぞれ現地にてご指導頂いた。

なお、６月８日午後、京都市考古資料館の実施する「生き方探求・チャレンジ体験」の一環として、京都市立北野中学校・双ケ丘中学校の２年生４名を受け入れ、発掘作業の体験を行った。また、７月25日に動物園職員向けに成果の説明会を行うなどして、成果の普及啓発活動にも努めた。

（高橋）

2　遺　　跡

（1）遺跡の位置と環境

法勝寺が造営された白河地域は、京都盆地の北東部に位置し、東山と鴨川に挟まれた平野部にある。この白河地域は東山と吉田山の間を流れる白川によって形成された扇状地であり、地形は全体に北東から南西に傾斜する。所々で段差もみられ、道路や寺院造営の際には大規模な造成が行われたものと考えられる。平安京から東国への主要道路は、平安京の東西メインストリートである二条大路から東に進み、鴨川をわたり山科へ至る道路であり、白河地域はこの道路に面した交通の重要地点である。

この白河地域には、平安時代中期に藤原氏の別業「白河院」がおかれた。承保元年（1074）には藤原道長の孫である師実が藤原氏代々の別業を白河天皇に献上した。これを期に、白河天皇の発願により法勝寺が造営されることになった。まず、金堂・講堂・五大堂・阿弥陀堂・法華堂・築地・門などが造られ、承暦元年（1077）12月18日に落慶供養が行われる（『水左記』）。その後、永保元年（1081）には、金堂前面の中島に八角九重塔の造営が開始され、永保３年（1083）に落慶供養されている（『扶桑略記』）。法勝寺の寺域については、西限は広道（現在の岡崎道）、東限については白川の堤までとされ、東西約２町とみられる。南限・北限については文献史料などから推定するしかないが、南限は押小路末よりも南、北限は冷泉小路までか、それ以北とされ、南北幅は２町以上とみられる。このような寺域は六勝寺のなかでも特に広大で、六勝寺の筆頭寺院としてふさわしいものである。また、広大な寺域の中にある園池とその中島に建立された八角九重塔も他の寺院にはみられず、白河天皇の権力の大きさを反映したものといえる。

法勝寺は、度重なる地震や落雷により多くの堂塔が被害に遭うものの、その度に修理がなされる。しかしながら、暦応五年（1342）の大火災により阿弥陀堂・金堂・講堂・塔・南大門などが焼失した後は、北朝により復興が計画されるものの、主要な建物が再建されることはなかった。

さらに応仁の乱や、享禄四年（1531）の兵火などに巻き込まれて、壊滅的な打撃を受け、元亀二年（1571）に法脈を近江・坂本の西教寺に付属させられるに至り廃絶した。

法勝寺の跡地はその後田畑となり、金堂と八角九重塔の基壇の高まりを残すのみとなった。明治34年（1901）に法勝寺南半にあたる範囲に京都市動物園の建設が開始され、翌年完成、そして翌々年開園された。動物園の建設に際しては、八角九重塔の基壇跡「塔の壇」は高まりとしてそのまま残され、休憩所などに利用されていた。しかし、戦後の昭和21年（1946）に米軍の第58通信大隊基地として京都市美術館が接収されるにあたり、動物園の敷地南半が駐車場の用地として接収された。この際に「塔の壇」も削平され、地表から塔の痕跡を窺い知ることができなくなった[1]。

昭和47年（1972）以降、獣舎の建設などに伴って遺跡の調査が開始され、法勝寺にかかわる園池などの遺構がみつかっている。

（2）周辺の調査（図10・11、表1）

弥生時代から古墳時代　東山より発した白川は鴨川との間に広大な扇状地を形成する。この扇状地は花崗岩の風化崩壊物を主体とするもので、白色の細砂から粗砂が当地周辺の基盤層となっており、これを切り込む自然流路を各所で検出している（調査6・13・14・19・20）。この流路は、北東が高く南西に低い旧地形に沿って流れており、弥生時代から古墳時代の遺物を含むものがあり、それらは当時の短時的な白川の支流であった。また、京都市動物園の敷地は、岡崎遺跡

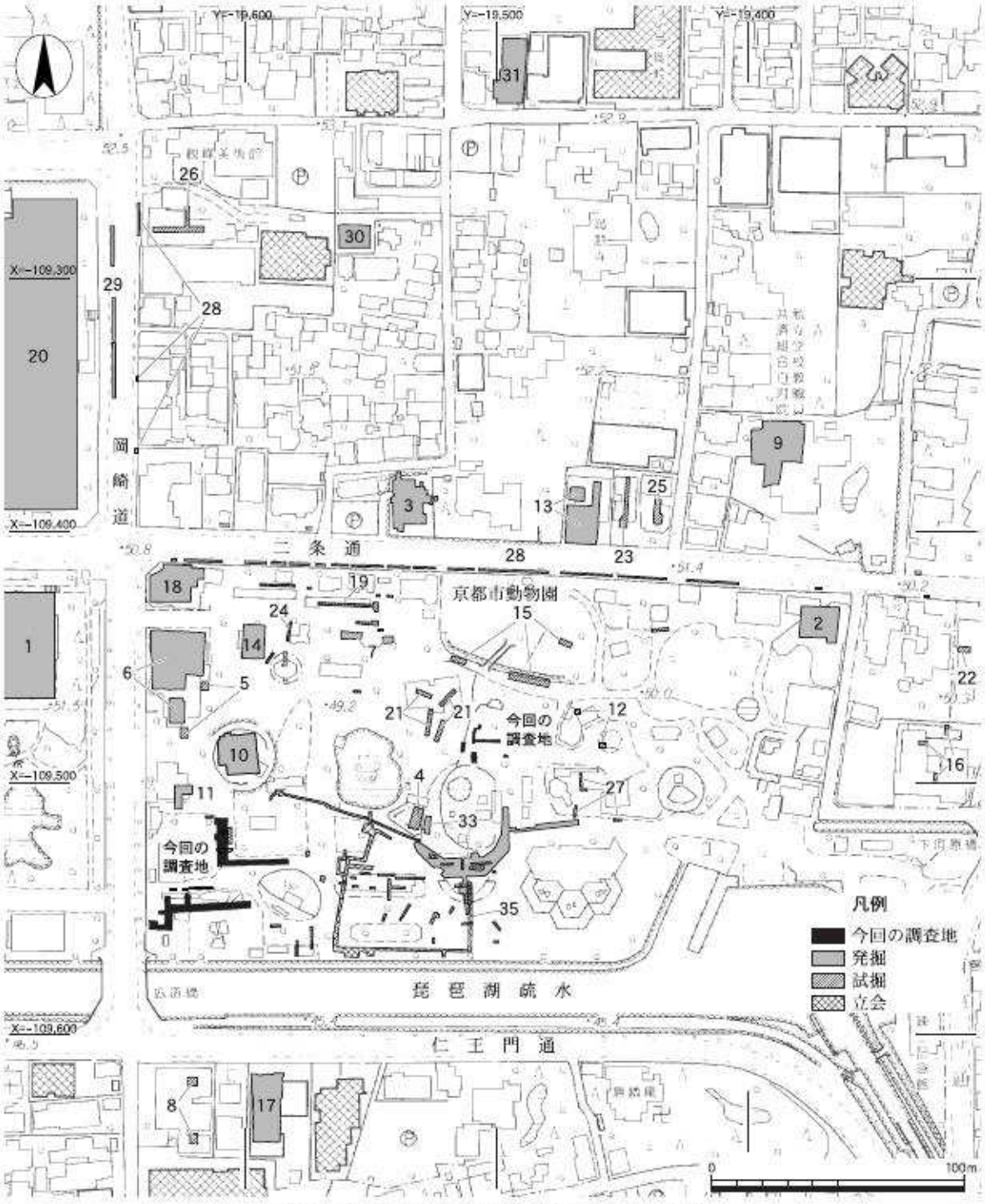


図10　調査地と周辺調査位置図1（1：2,500）

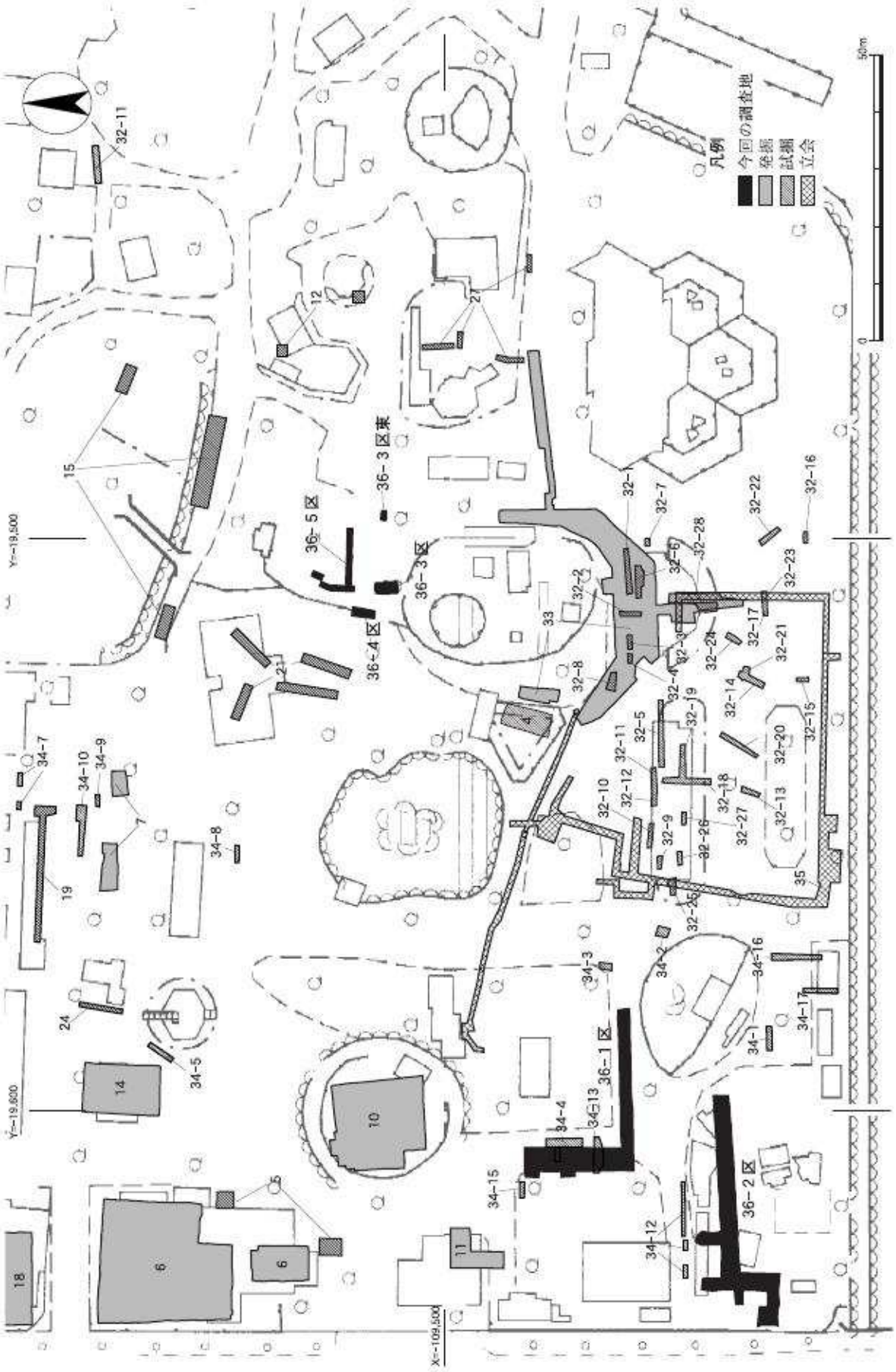


図11　調査地と周辺調査位置図２（１：1,000）

表1　既往調査一覧表

	推定位置	種類	調査組織	調査略記号 番号	所在地	調査期間	調査 面積 (㎡)	主な遺構	文献
1	(円勝寺)	発掘	円勝寺発 掘調査団		円勝寺町(京 都市美術館)	1970.07.13～ 09.30		平安～鎌倉期：礎石据付穴・掘立 柱建物・南北方向築地据形・雨落	1
2	園池	発掘	六勝寺 研究会		法勝寺町	1972.09.01～ 10.12		平安後期？：池の汀	2
3	金堂	発掘	市文観 保護課		法勝寺町124	1975.02.03～ 03.12	150	金堂基壇・礎石据付穴・西縁延石 （凝灰岩）・雨落溝	3
						1975.10～11	200		4
4	八角九重塔	試掘	研究所	79KS-ZO001	法勝寺町	1979.02.19～26	32	平安後期：池跡？	5
5	西辺	試掘	研究所	80KS-ZO002	法勝寺町	1981.02.02～05	21	古墳後期：包含層，平安期：包含層	6
6	西築地	発掘	研究所	81KS-ZO003	法勝寺町	1981.08.03～ 10.06	508	古墳時代：自然流路，平安後期： 井戸・土坑・柱穴，室町：南北 溝・土坑	7
7	鐘楼	発掘	研究所	81KS-ZO004	法勝寺町	1981.08.20～25	27.4	平安後期：整地層	
8	南側	試掘	研究所	82BB-KS031	円勝寺町 149-3他	1981.10.20		平安末期：包含層、土坑	8
9	園池	発掘	研究所	82KS-OF	法勝寺町16	1982.09.16～ 11.15	400	古墳後期：掘立柱建物，平安前期 ～中期：溝，平安後期～室町：池	9
10	園池	発掘	研究所	82KS-ZO005	法勝寺町	1983.01.10～ 02.01	213	時期不明：掘立柱建物・土坑	10
11	西辺	発掘	平安京 調査会	85KS-ZO006	法勝寺町	1985.06.17～ 06.20	41	平安～鎌倉：柱穴・東西溝	11
12	中央	試掘	研究所	85BB-KS001	法勝寺町	1985.04.08		平安後期：包含層，鎌倉期：包含層	12
13	金堂東回廊	発掘	研究所 (国補)	86KS-TS	法勝寺町30	1986.04.01～ 05.15	247	古墳期：流路，平安後期：金堂東 回廊（雨落溝，礎石据付穴）	13・14
14	園池	発掘	研究所	87KS-ZO008	法勝寺町	1987.09.07～28	110	弥生末期～古墳初頭：流路， 平安後期：池	15
15	金堂前面	試掘	研究所	87KS-ZO007	法勝寺町	1987.08.10～19	70	平安後期：南北溝	16
16	伽藍東辺	試掘	研究所	88BB-KS011	法勝寺町55他	1988.07.06		鎌倉～江戸期：流路	17
17	南側	発掘	研究所	88KS-SS	円勝寺町 149-2他	1988.11.07～ 1989.01.30	394	平安後期～鎌倉期：溝・流路，室 町期：掘立柱建物・溝・自然流路	18
18	西築地	発掘	研究所	89KS-ZO009	法勝寺町	1989.04.24～ 06.20	252	旧石器：動物足跡 平安～室町期：南北溝（側溝？） 江戸期：掘立柱建物	19
19	金堂 西回廊？	試掘	市埋セ	No.79 (91R252)	法勝寺町	1991.11.25	27	古墳期：流路堆積	20
20	（最勝寺）	発掘	研究所	91KS-OG003	最勝寺町(岡 崎グランド)	1991.09.30～ 1992.09.17	10041	古墳期：流路，古墳後期：古墳， 平安後期：二条大路末の北築地と 北側溝	21
21	金堂前面	試掘	市埋セ	No.47 (92R020)	法勝寺町	1992.04.27， 05.25	48	平安後期：東西溝，土坑状遺構	22
22	伽藍東辺	試掘	市埋セ	No.72 (93R538)	法勝寺町	1994.04.04	34	顕著な遺構なし	23
23	金堂東回廊	試掘	市埋セ	No.59 (95R206)	法勝寺町29	1995.09.27	32	古墳後期：柱穴3，平安中期：土坑	24
24	園池	試掘	市埋セ	No.57 (98R131)	法勝寺町	1998.07.08	6	時期不明：東西溝	25
25	金堂東回廊	試掘	市埋セ	No.56 (99R135)	法勝寺町29-2	1999.07.07	10	平安後期：整地層、金堂東回廊 東辺の東へ落ちる段差	26
26	西辺	試掘	市埋セ	No.17 (99R355)	南御所町35-15	2000.01.11	51	平安期：瓦廃棄土坑	27
27	園池	試掘	市埋セ	No.12 (02R460)	法勝寺町	2003.02.24	16	平安後期：池跡	28
28	金堂前面	発掘	研究所	2004KS-JC 001	法勝寺町・南 御所町（二条 通）	2005.01.11～ 03.09		平安後期：土坑	29
29	西側	発掘	研究所	2005KS-JC 002	南御所町（岡 崎道）	2005.07.19～ 09.21	76	古墳前期：土坑	30
30	北西部	発掘	研究所 (国補)	2007KS-IH 001	南御所町（二 条通）	2007.07.09～27	112.5	中世末～近世：南北溝（堀）・土 塁	31
31	北限	発掘	研究所	2007KS-TA 001	天王町70他	2007.10.24～ 11.27	265	平安後期：土坑、室町後期：溝・ 土坑・柱穴など	32
32	八角九重塔 園池	試掘	市文市 保護課	H21=No.65 H22=No.16 (09R403)	法勝寺町	2009.12.21～25 2010.02.9～17	126	28Tr，八角九重塔の掘込地業， 中島を囲む池確認	33・34
33	八角九重塔 園池	発掘	研究所 (国補)	2010KS- ZO010	法勝寺町	2010.05.17～ 08.02	370	平安後期：八角九重塔基壇地業， 池跡	35
34	園池	試掘	市文市 保護課	No.70 (09R580)	法勝寺町	2010.04.13～15 12.15～16	315	18tr．平安後期：阿弥陀堂基壇 地業、池跡	36
35	園池	詳細 分布	研究所 (立会)	2010BBKS 258 (09R403)	法勝寺町			平安後期：池跡	37
36	阿弥陀堂 八角九重塔 園地	発掘	研究所 (国補)	2011KS- ZO011	法勝寺町	2011.06.06～ 08.09	315	古墳前期：流路，平安後期：溝・ 土坑阿弥陀堂基壇、池跡， 八角九重塔基壇地業	本報告

※所在地は字名である「岡崎」を省略して表記した。また、単に「法勝寺町」としたものは京都市動物園内での調査である。
※調査組織の表記は以下の様に略した。市文観保護課：京都市文化観光局文化財保護課、研究所：（財）京都市埋蔵文化財研究所、
市埋セ：京都市埋蔵文化財調査センター、市文市保護課：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

の東端に位置するが、古墳時代の掘立柱建物を調査９・23で検出しており、自然流路には多くの遺物が含まれることから、周辺には集落が存在することが想定される。

平安時代　昭和47年（1972）、京都市動物園内において計画された爬虫類館の建設に先立って発掘調査を行い、はじめて法勝寺の遺構を検出した（調査２）。この調査では、小礫を敷いた州浜のある平安時代の池の汀を検出した。同じ池のものとみられる汀状遺構は、調査９・27・32・35などでみつかっている。また、同じ池の堆積土と考えられる土層は調査14・32などで検出している。これらの調査成果などから、この園池は法勝寺の北東から白川の水を引き、寺域の北東から八角九重塔の南へ回り、さらに西へ大きく回る広大な園池であることが復元できるようになった。この成果は、文献史料ともおおかた一致する。しかし、金堂と八角九重塔の間については幾度かの試掘調査を行ってきたが池の汀や堆積土などが検出されず、八角九重塔が池の中島に建っていたという文献史料の記述[2)]が正しいかどうかについては明らかにできていなかった。

法勝寺の堂宇跡については、以前から周囲より一段高く金堂跡と目されていた地点で、基壇や礎石据付穴を検出し、金堂であることを確認した（調査３）。その後、金堂東半とそれに取り付く軒廊を検出した（調査13）ことにより、金堂の規模や軒廊の位置、経蔵と鐘楼の位置を推定することが可能となった。ただし、調査７・19・34で軒廊と鐘楼推定位置を、調査15で経蔵推定位置を調査したが、顕著な遺構は検出できなかった。法勝寺の西端では調査６・18において、南北方向の溝を検出している。この南北溝は、法勝寺の西限築地にかかわる溝である可能性が高い。調査33では、約81mの高さがあったとされる八角九重塔基壇の掘込地業を検出した。この地業は平面が八角形を呈し、現地表から約1.4～1.6mまで掘り下げて、川原石と粘土を交互に入れ込み強固に固めていたことがわかった。また、調査４では調査時には認識されなかったが、この八角九重塔基壇の西辺の掘込地業が南北約８m分検出されていたことが判明した[3)]。調査34では、法勝寺境内の南西の阿弥陀堂推定地において試掘調査を行った。その結果、八角九重塔の掘込地業とよく似た土層を検出したことから、阿弥陀堂の掘込地業と判断したが、今回の発掘調査で、この土層が後世に動かされたのものであることが明らかになった。　（家原）

文献一覧（表１の文献番号と一致）

1　円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査（上・下）」『佛教藝術』82・84　1971・1972年

2　六勝寺研究会「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ　京都市文化観光局文化財保護課　1975年

3　『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974-Ⅱ　京都市文化観光局文化財保護課　1975年

4　「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』京都市文化観光局文化財保護課　1976年

5　「昭和54年度試掘・立会調査一覧表」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2012年（刊行予定）

6　「昭和55年度試掘・立会調査一覧表」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2011年

7　鈴木廣司・平方幸雄「法勝寺跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983年

8　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局　1983年
9　辻　裕司・平方幸雄「法勝寺跡（1）」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987年
10　菅田　薫「法勝寺跡（2）」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1987年
11　小森俊寛「白河街区3」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1988年
12　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局　1986年
13　上村和直・辻　裕司『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987年
14　辻　裕司「法勝寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年
15　平方幸雄「法勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年
16　辻　裕司「法勝寺跡（試掘）」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年
17　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989年
18　内田好昭「白河街区・岡崎遺跡Ⅰ」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
19　内田好昭「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
20　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成3年度』京都市文化観光局　1992年3月
21　内田好昭・丸川義広・平方幸雄「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年
22　長谷川行孝「法勝寺跡　No.47」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成4年度』京都市文化観光局　1993年
23　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成6年度』京都市文化観光局　1995年
24　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成7年度』京都市文化市民局　1996年
25　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成10年度』京都市文化市民局　1999年
26　堀　大輔「法勝寺跡　No.56」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　2000年
27　「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成12年度』京都市文化市民局　2001年
28　長谷川行孝「法勝寺跡　No.12」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』京都市文化市民局　2004年
29　吉村正親・長宗繁一『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2004-17　2005年
30　吉村正親『白河街区跡・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2005-9　2005年
31　網　伸也「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』京都市文化市民局　2008年
32　辻　裕司『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-09　2007年
33　「試掘調査一覧表」65『京都市内遺跡試掘調査報告　平成21年度』京都市文化市民局　2010年
34　家原圭太「法勝寺・岡崎遺跡1　No.16」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
35　柏田有香「法勝寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
36　堀　大輔「法勝寺・岡崎遺跡2　No.70」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年
37　吉本健吾「法勝寺跡・岡崎遺跡（10KS258）」『京都市内詳細分布調査報告書　平成23年度』京都市文化市民局　2012年

3　遺　　構

本調査では、１～５区と３区東の６箇所の調査区で調査を実施した。１・２区は法勝寺南西部の阿弥陀堂推定地、３～５区は中央南寄りの八角九重塔の北側に設定した。調査面積は１区129㎡、２区162㎡、３区11㎡、３区東１㎡、４区６㎡、５区18㎡、合計327㎡であった。

（１）１区の調査（図12・13）

現キリン舎の東に東西４m、南北19mの南北方向（南北部）、東西24m、南北２mの東西方向（東西部）に設定したL字状の調査区である。南北部は、調査34において基壇版築とみられる土層を検出した箇所を中心に設定した、阿弥陀堂の痕跡を確認するための調査区である。また東西部は、調査35で八角九重塔を囲む池の西肩を検出した付近にまで延長して設定した、池の西肩および阿弥陀堂との関係を知るための調査区である。調査区は全面にわたり、近代以降の削平や埋設管などの攪乱により残存状況は悪く、既にある程度削り込まれた地山の上面が遺構検出面となっている。古墳時代の溝１条・土坑１基、平安時代中期の東西溝１条、平安時代後期の池・景石、時期不明の土坑・柱穴などを検出した。

基本層序　基本層序は、地表下0.6～0.7mまで近代以降の整地・盛土層、以下よく締まった微砂から粗砂の堆積層（白川砂＝地山）である。地山上面は、標高49.0m前後と平坦で、近代以降に全体が削平されたものとみられる。現代盛土の中には、標高49.2～49.5mで平安時代の瓦を多く含む、調査33で検出した八角九重塔の掘込地業に用いられた土層によく似た厚さ0.2m程度の黄橙色粘質土層がみられた。先行して行った調査34では、この層を阿弥陀堂の基壇地業跡と判断した。しかし、本調査で精査したところ、同層の下層にガラス片などの近代以降の遺物が含まれていることが判明し、阿弥陀堂の基壇地業ではなく、近代以降に動かされた盛土の一部であると判断した。東半には、地山直上で固く締まった黄灰色砂泥の整地層がみられるが、染付などを含んでおり、これも近世以降の整地によるものとみられる。

表２　遺構概要表

	時　　代	遺　　構
１区	古墳時代前期	溝56、土坑57
	平安時代中期	溝60
	平安時代後期	池41、景石
	時期不明	柱穴、土坑
２区	古墳時代前期	流路１・２、堆積層
	平安時代後期	整地層、版築層、土坑１・２
３区	平安時代後期～鎌倉時代	掘込地業、池埋立層（３区東）
４区	平安時代後期～鎌倉時代	掘込地業、池埋立層
５区	平安時代後期～鎌倉時代	整地層Ⅰ・Ⅱ、池北肩、池埋立層、溝１

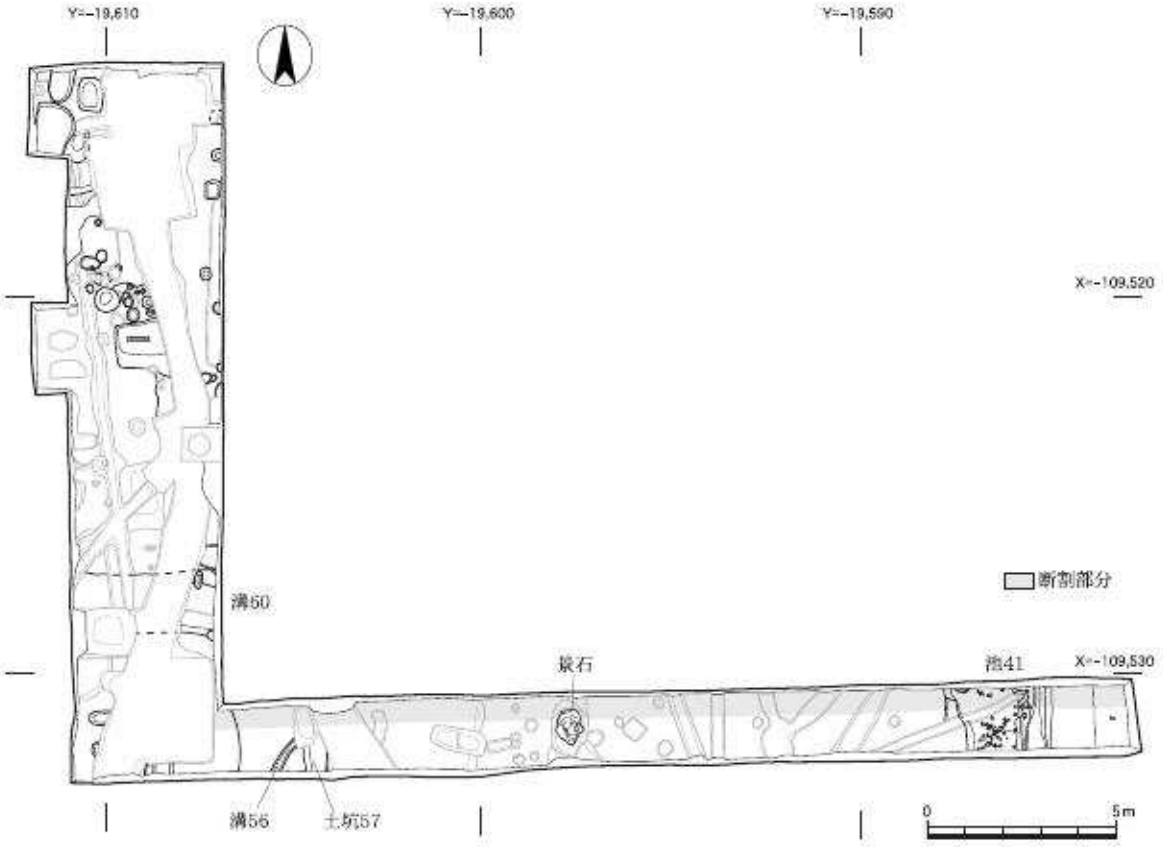


図12　1区平面図（1：200）

古墳時代の遺構

溝56（図14）　東西部で検出した北東から南西方向の溝である。幅0.2～0.3m、深さ0.1mで古墳時代の土器片が少量出土した。

土坑57（図14）　東西部で検出した土坑である。北側が近世以降の土坑に、東側が近代以降の攪乱により削られている。また、南は調査区外に延びていて全容は知れないが、南北0.7m以上、東西0.6m、深さ0.4mである。埋土は大きく3層に分けられ、上層が黒褐色砂泥、中層が褐灰色砂泥、下層がにぶい黄褐色砂泥である。上層と中層の間には細砂が帯状に堆積し、下層埋土にも帯状に細砂（ラミナ）が堆積することから溝状の遺構である可能性がある。古墳時代の土器片が少量出土した。

平安時代中期（白河院）の遺構

溝60（図15）　南北部南寄りで検出した東西方向の溝である。幅1.5～1.7m、深さ0.3～0.4mである。埋土は上下2層に大別され、上層は直径約0.1mの小礫を多量に含む泥砂層、下層は褐色粘土と白色細砂の互層となっている。近代以降の削平および攪乱により、遺構そのものの残存状況は悪い。下層から10世紀代の土師器と緑釉陶器が出土した。

平安時代後期（法勝寺）の遺構

池41（図16）　東端で東へ下がる池の西肩を検出した。池の西肩は標高48.9m、Y=-19,587.8から東へ約5m分を検出した。緩やかに下がる一段目は標高48.7mで平坦部を形成しており、瓦片

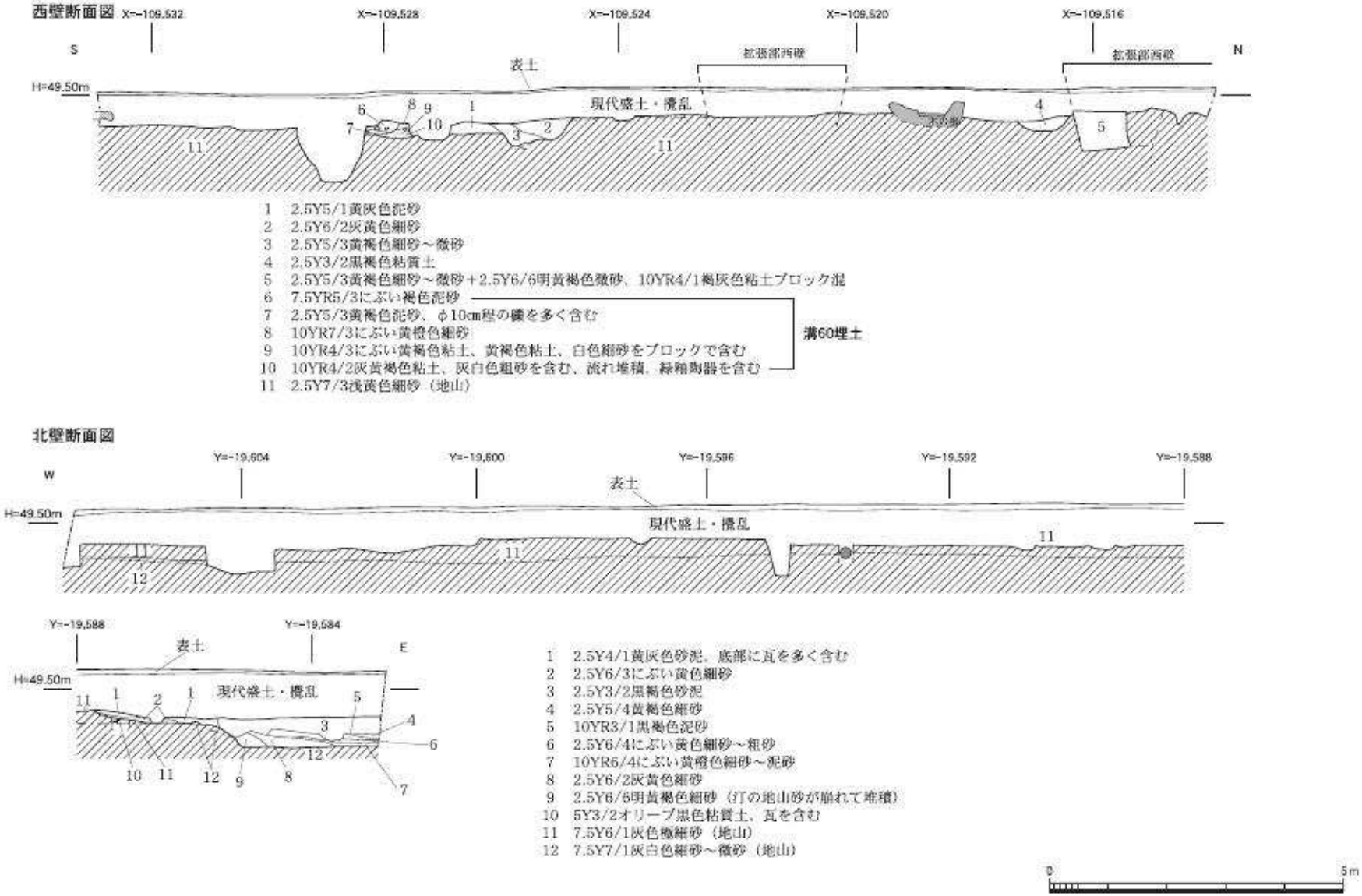


図13　1区西壁・北壁断面図（1：100）

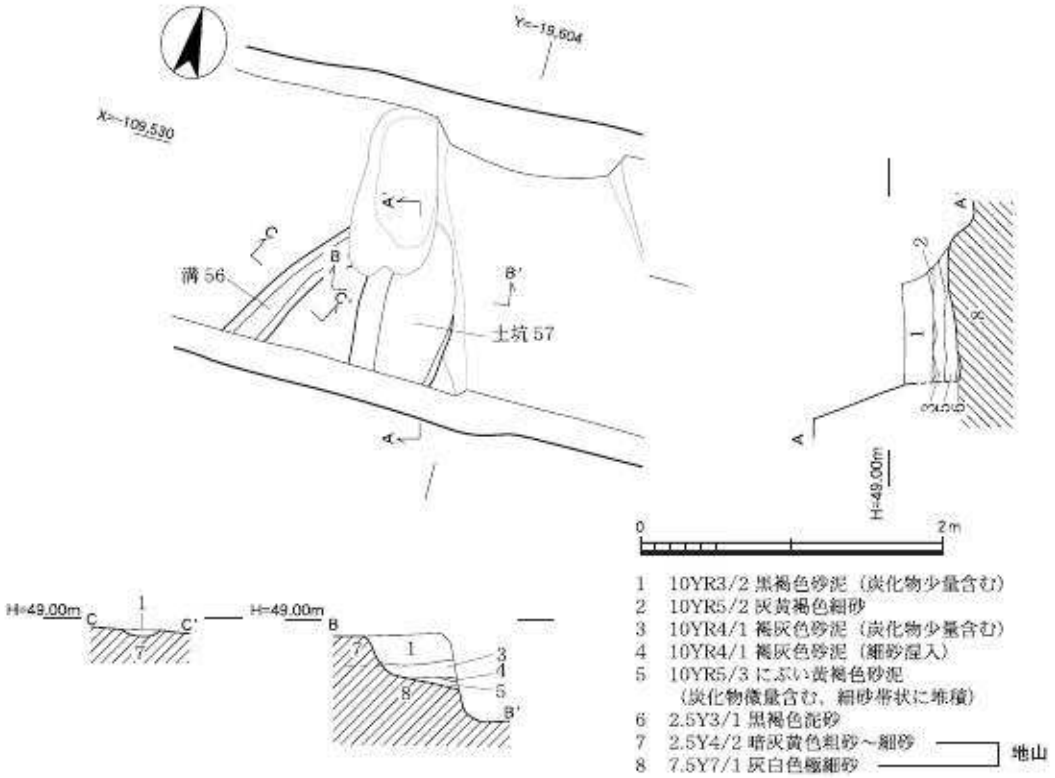


図14　1区溝56・土坑57実測図（1：50）

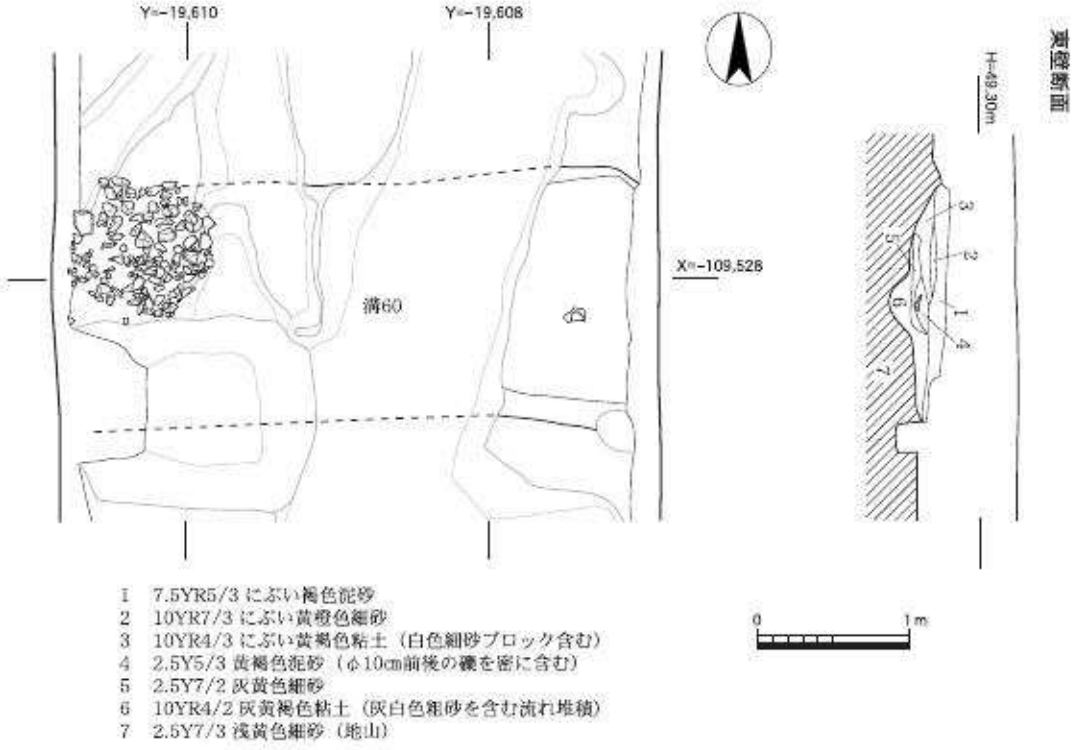
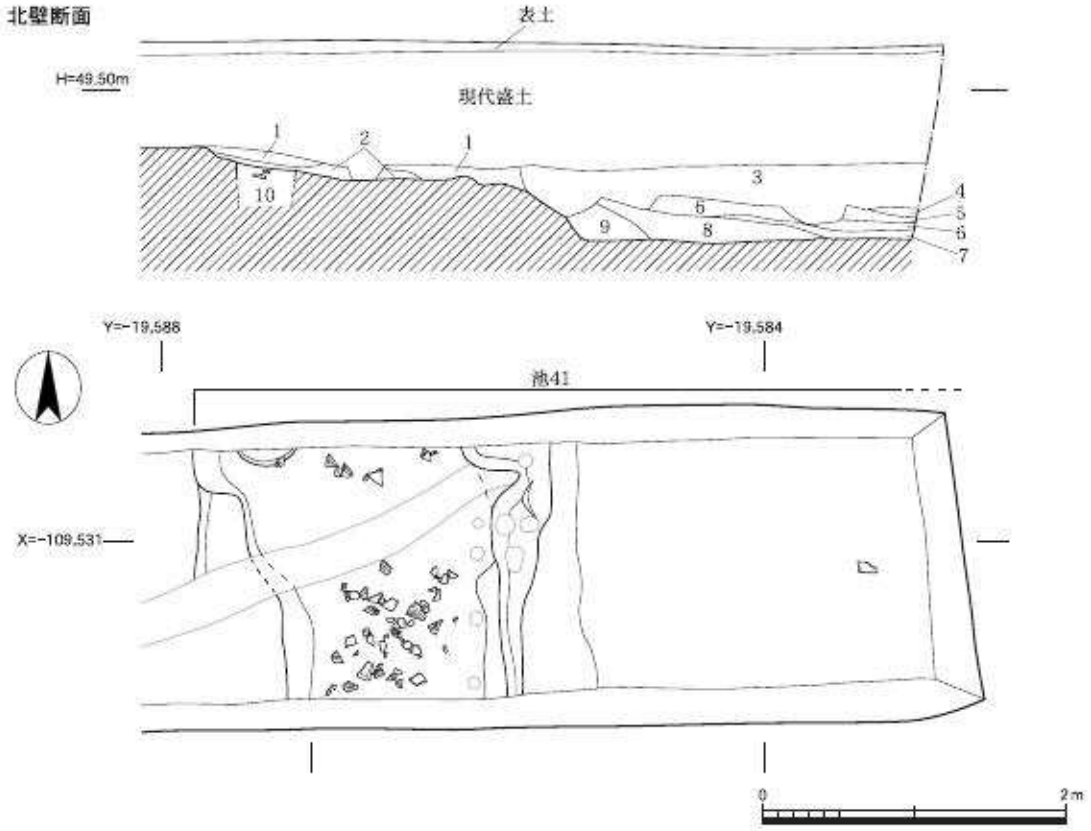


図15　1区溝60実測図（1：50）



1　2.5Y4/1黄灰色砂泥、底部に瓦を多く含む
2　2.5Y6/3にぶい黄色細砂
3　2.5Y3/2黒褐色砂泥
4　2.5Y5/4黄褐色細砂
5　10YR3/1黒褐色泥砂
6　2.5Y6/4にぶい黄色細砂～粗砂
7　10YR6/4にぶい黄橙色細砂～泥砂
8　2.5Y6/2灰黄色細砂
9　2.5Y6/6明黄褐色細砂（汀の地山砂が崩れて堆積）
10　5Y3/2オリーブ黒色粘質土，瓦を含む

図16　1区池41実測図（1：50）

が散乱した状態で出土したが、汀部分に敷いたものではない。西肩より約2m（Y=-19,586.0）で0.3～0.4mの段差を持って落ち底面に至る。池底は標高48.3mである。したがって、肩部から池底までは約0.6mの深さがある。池の造り替えはみられず、肩部・池底に貼土・貼石や盛土はしていない。池底は灰白色細砂（白川砂）の地山で、二段目段差下部には、もともとの池西肩が崩れて堆積した明黄褐色細砂が溜まる。池埋土は砂層主体で、0.1～0.2mの厚さで堆積することから、水が長期間滞留していたわけではなく、ある程度の流れがあったものとみられる。

これまでの調査でも確認されてきたが、池の部分の上層には近世以降と考えられる旧耕作土が堆積する。池部分は周囲よりも低かったため水田として利用されたと思われるが、実際に明治20年頃の水田分布範囲[4]は法勝寺の池推定範囲とほぼ一致することがよみとれる。今回検出した耕作土の分布状況も明治の水田分布範囲とほぼ合致し水田土壌は池、畑土壌は陸地であることが改めて確認された。池が一段下がる部分には南北方向の溝や杭列があり、池の名残が近世頃まで残存していた可能性がある。

景石　東西部で検出した長辺1mの石である。近代以降に直径約1.5mの穴を掘り、落とし込まれたもので、原位置は失われている。東端で検出した池41の西側の陸部に据えられて庭園に使用された景石の一つとみられる。（家原）

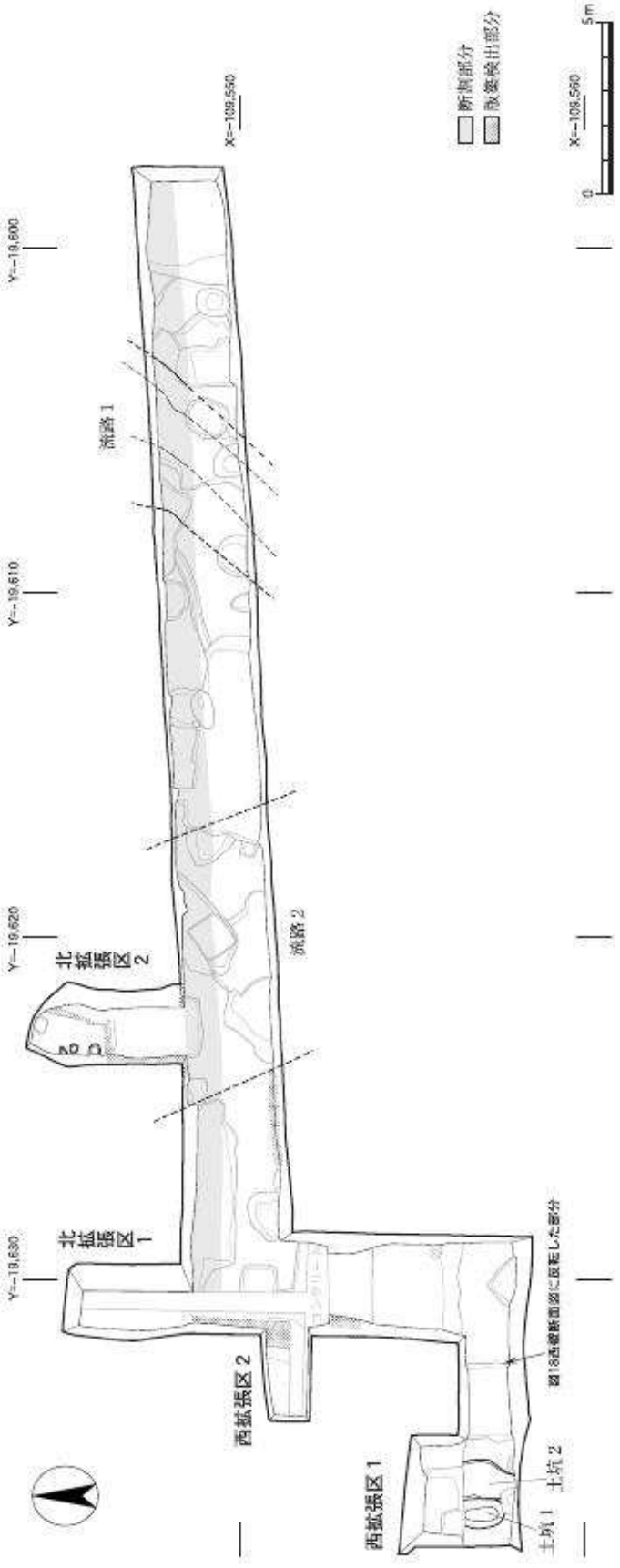


図17　２区平面図（１：200）

（２）２区の調査（図17・18）

現キリン舎の南に東西３m、南北10mの南北方向（南北部）、東西５m、南北３mの東西方向（東西部）に設定したＬ字状の調査区である。阿弥陀堂推定地の中央付近に該当する。現状は更地であったが、以前は動物園の「おとぎの国」があった場所であり、部分的に現地表から１m程度基礎が掘り込まれた施設があったことがわかっていたため、それらの箇所を避け比較的残存状況の良好であろうと思われる箇所に調査区を設定した。阿弥陀堂の遺構が残っていれば、基壇や礎石・根石などが検出されることが予想された。調査開始後、遺構や整地層などの検出状況から、東西部を東へ約29m、南北部の南端を西へ約６m拡張した（西拡張区１）。また調査の最終段階には、東西部の西寄り２箇所を北に約４m（北拡張区１・２）、南北部北寄り１箇所を西に約2.5m拡張した（西拡張区２）。１区同様、近代以降の削平や埋設管、既存建物による攪乱などにより、全体に遺構の残存状況は良くなかった。東西部を東に拡張した東端では、昨年まで使用されていた海獣のプール施設（アシカ池）の解体に伴う深い攪乱坑を検出したため、それ以上東には拡張しなかった。検出した遺構は、古墳時代の流路２条、平安時代後期の整地層、基壇版築、土坑２基などである。

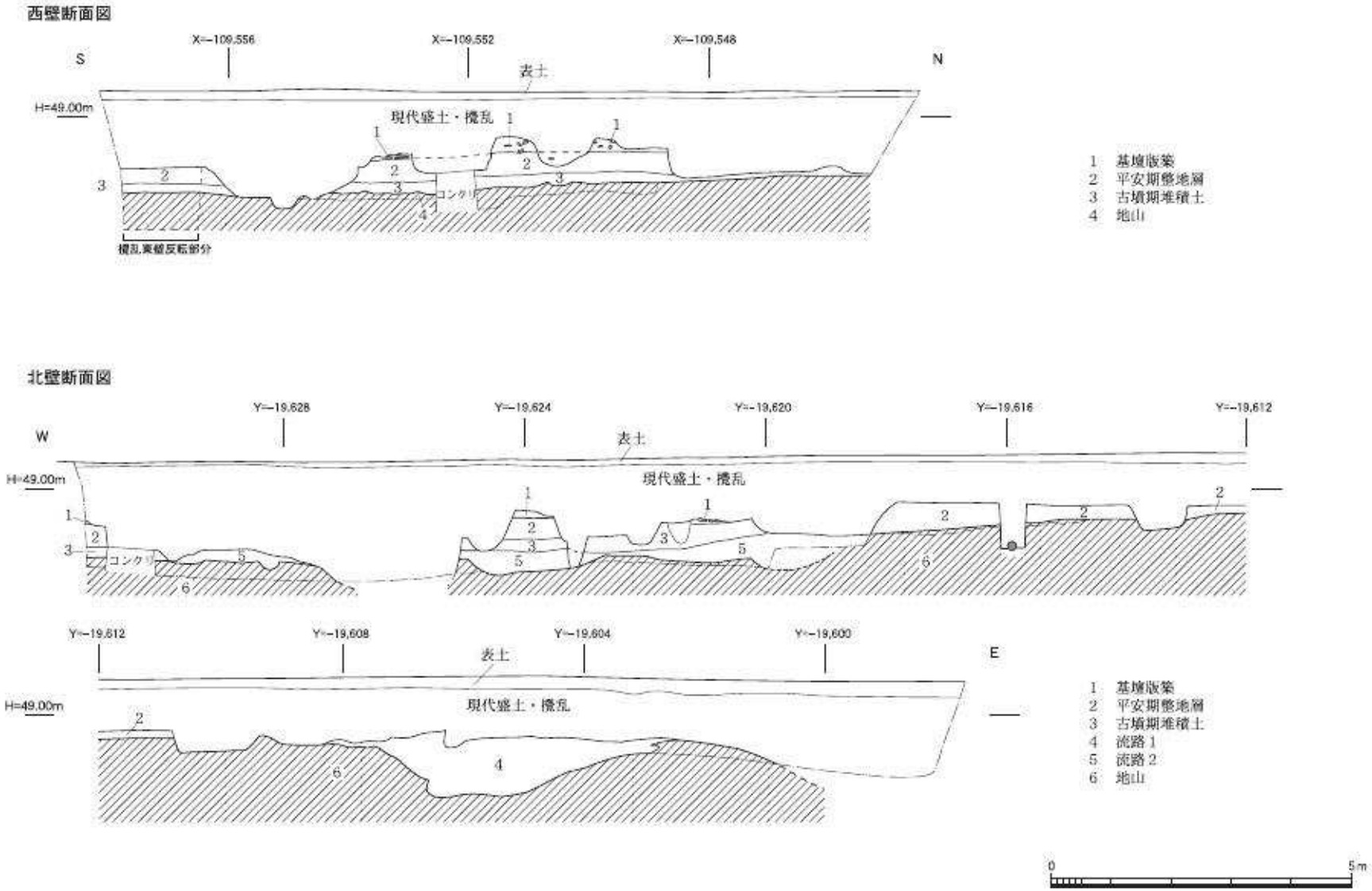
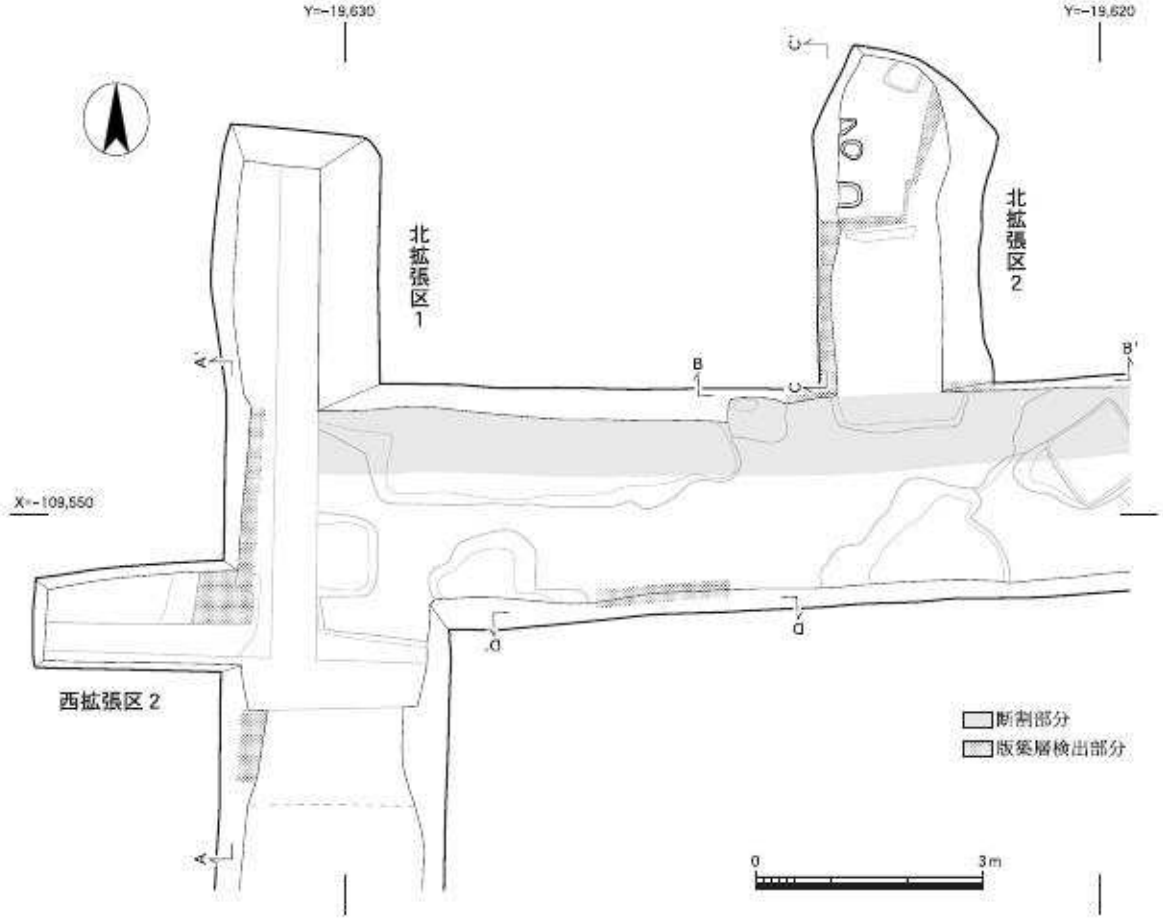
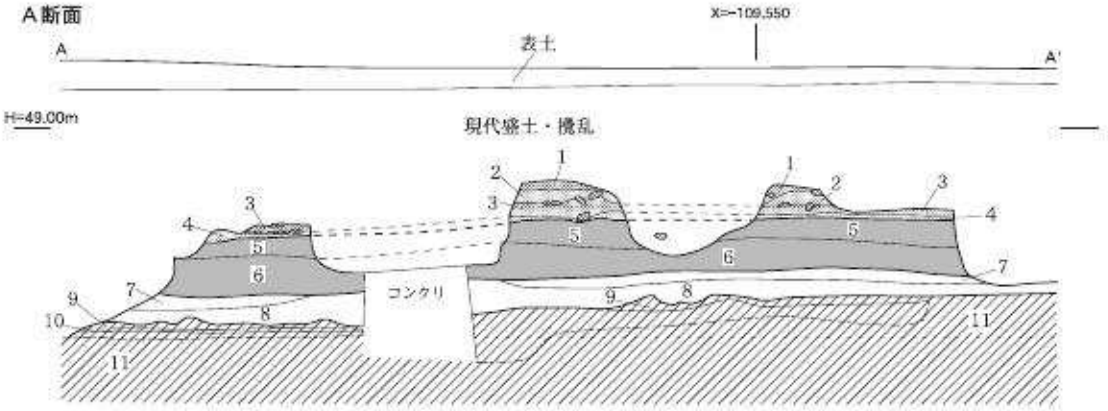


図18　2区西壁・北壁断面図（1：100）





1 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
3 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥（粘質）
4 2.5Y5/3 黄褐色砂泥（粘質、粗砂・φ2～3㎝小礫混）
5 2.5Y5/3 黄褐色泥砂（粗砂多く、土器小片・炭化物まばらに含む）
6 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂（粗砂・土器小片・炭化物少量含む）
7 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（中～粗砂少量含む）
8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥（やや粘質、中砂少量含む）
9 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂（中～粗砂主体）
10 2.5Y5/3 黄褐色粗砂（細～中砂少量含む）
11 2.5Y4/2 暗灰黄色泥土

版築層
平安期整地層
古墳期堆積土
地山

0 2m

図19　２区版築部分平面図（１：100）、A断面図（１：50）

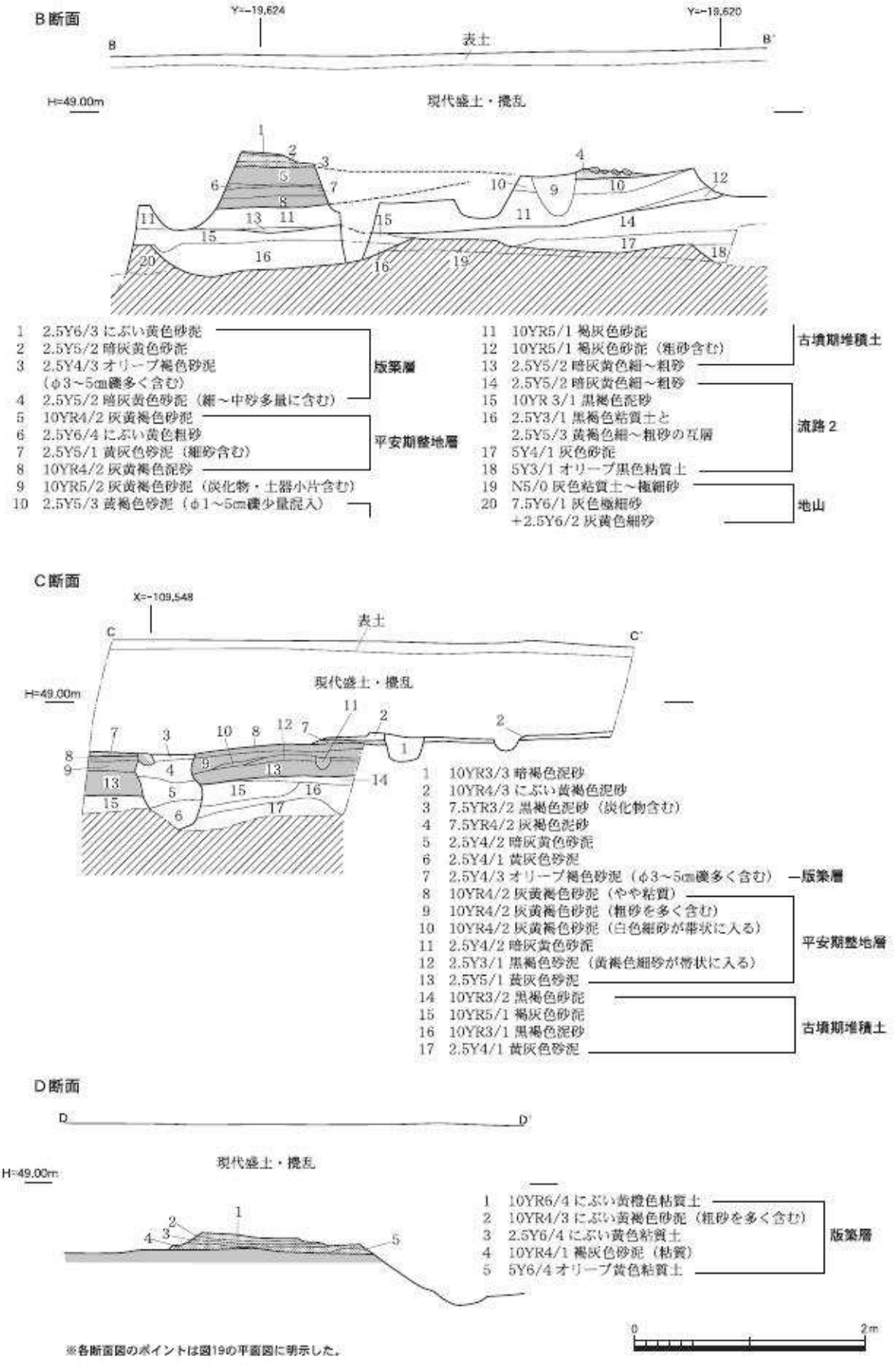


図20　2区版築部分B・C・D断面図（1：50）

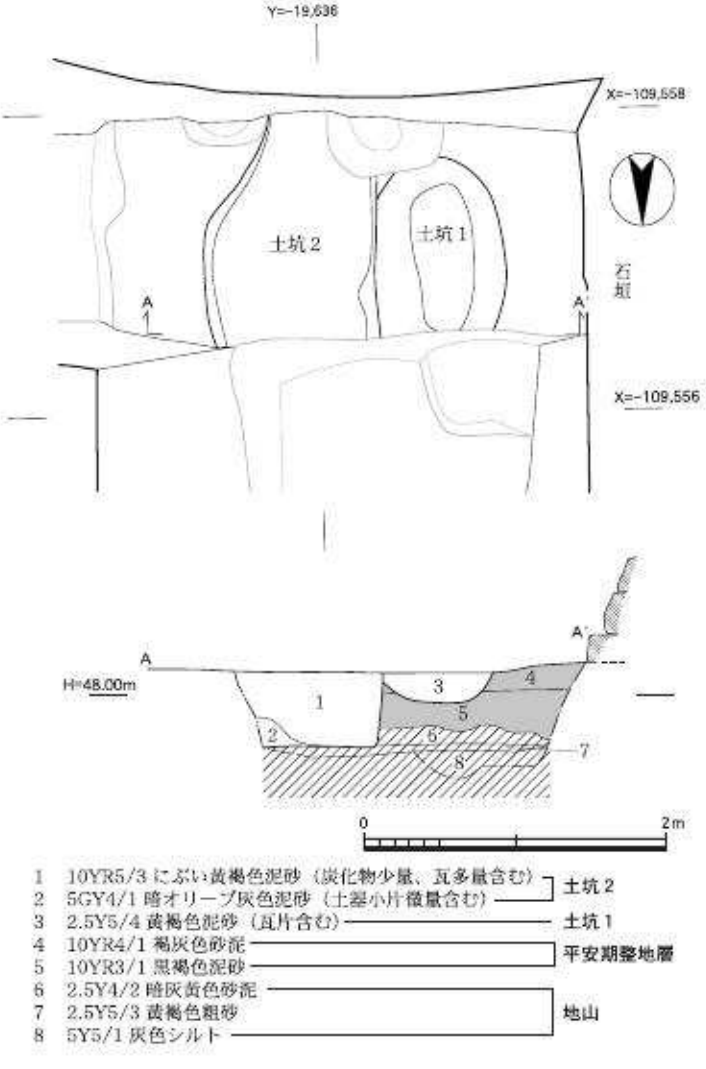


図21　２区土坑１・２実測図（１：50）

基本層序（図18）　地表下1.0mまで近代以降の整地・盛土層で、以下平安時代後期の整地層、古墳時代前期の堆積層、微砂から粗砂の堆積層（白川砂＝地山）が堆積する。東西部中央の盛土内には標高48.9～49.2mで１区と同様、平安時代の瓦を多く含む八角九重塔基壇の掘込地業とよく似た黄橙色粘質土層がみられた。これも近代以降に動かされた層である。地山である白川砂の上面は北東で標高48.6m、南西で47.7mと北東から南東に傾斜している。

古墳時代の遺構

流路１　東西部東寄りで検出した北東から南西に流れる流路である。規模は、幅３m、深さ約１mである。埋土は大きく３層にわけられ、上層は黒褐色砂泥で厚さ約0.4m、中層はオリーブ黒色粘質土から極細砂で厚さ約0.3m、下層は黒褐色砂泥で厚さ約0.5mである。磨滅が少なく完形に近い古墳時代前期の遺物を多量に含んでいる。

流路２　東西部西寄りで検出した北から南に流れる流路である。断割北壁断面と深い攪乱の底で、部分的に検出した。

平安時代後期（法勝寺）の遺構

整地層（図18）　Y=-19,604.0以西で検出した平安時代の整地層（図18の２層）である。検出した範囲は、南北約10m、東西約34mである。この整地の厚さは南西で0.5m、北東で約0.2mと南西にいくほど厚くなる。下層には古墳時代の流路があり、北東から南西に下がる自然地形を法勝寺造営時に平坦に均すことを目的とした整地とみられる。整地層上面は北東部で標高48.8m、南西部で標高48.3mとなっており北東から南西になだらかに傾斜する。

版築層（図19・20）　西半で検出した版築層である。後世の削平や攪乱などにより、残存状況が極めて悪いが、平安時代整地層の上面に構築している。下層の平安時代整地層上面の高さがやや低くなった部分でのみ確認した。確認できた範囲は、おおよそ東西10.5m、南北9.5mである。

最も残りが良好であった南北部西壁（A断面）では、標高48.7mで版築の上面を検出した。厚さ５～10㎝の粘質土、砂質土、小礫を多く含む砂泥層を積み固く叩き締める。版築の厚さは残りが良好な部分で0.3mである。

土坑１（図21）　西拡張区１で検出した土坑である。長辺1.2m、短辺0.8mの楕円形で、深さ0.2mである。埋土から平安時代の瓦が多く出土した。土坑２に切られる。

土坑２（図21）　西拡張区１で検出した土坑である。土坑１より新しい。北は攪乱により削平されており、南は調査区外まで延びる長辺1.5m以上、短辺1.1mの楕円形で、深さ0.5mである。埋土から平安時代の瓦が多く出土した。（家原）

（３）３～５区の調査（図22～26）

３～５区は、昨年度の調査で明らかとなった八角九重塔跡の基壇の北側の状況を確認するために設定した。まず園内通行などの制約により塔の中軸線の北延長上より、東へ約４ｍずれた位置に３区を設けた。３区の調査終了時に約10m東に３区東を一時的に掘削し、３区を埋め戻した後に３ｍ西、北へ延ばす形で４区を設定した。５区は使用されていない獣舎内で、南北方向の調査区と北拡張区を設けた後に東西方向の南区を付け足して、４区の調査と併行して行った。

３・４区には電気や上水の配管などが掘り込まれるが、いずれの調査区も現代盛土を除去した地表下0.2～0.3m程で、平安時代後期以降の遺構面に達する。

３区（図23）　東西２ｍ、南北４ｍの調査区である。

地表面は平坦で標高50.20m前後、比較的浅い地表下0.3mまでに東西方向の電気埋設管が３条検出され、調査が制限されたものの、地表下0.25～0.4m（標高49.8～49.9m）で遺構面に達した。調査区の西半を断ち割り、下層の状況の確認を行った結果、調査33において八角九重塔基壇の外周に検出された地業Ⅳ・Ⅴと類似する掘込地業であることが判明した。

地表下1.0m（標高49.2m）以下は自然堆積層（地山）である。これを基盤として積み上げられた基壇側の細砂を主体とする砂層（11～14層）を掘り込んで北側（基壇外側）に地業が構築される。掘込地業は、底面より0.55mの高さ（標高50.10m）までは、0.1～0.2mの厚さを一つの単位として粘土・粘質土と細砂を混ぜ込み、長径0.2～0.3mのチャート系の礫を入れて固める。それより上層は褐色系の粘質土を主体として、0.05～0.1mの厚さで水平に積む。

３区東（図24）　東西1.2m、南北0.8mの調査区である。

地表面は平坦で標高は50.3m、地表下0.7m（標高49.6m）までは近代以降の盛土・攪乱、以下は白川砂由来の細砂から粗砂層となる。調査区が狭く、下層の細砂から粗砂層が自然堆積層か、人為層か判断できなかった。後に行った４区、５区の調査成果より、下層の細砂から粗砂層は八角九重塔の北側に広がっていた池を埋め立てた人為層であると判断した。

４区（図25）　東西1.5m、南北4.0mの調査区である。塔中軸線の北延長上にあたる。

地表面は平坦で標高は50.2mである。近代以降の盛土を除去した、地表下0.2m（標高50.0m）前後で遺構面となる。調査区の東半を断ち割り、下層の状況の確認を行った。南端において３区

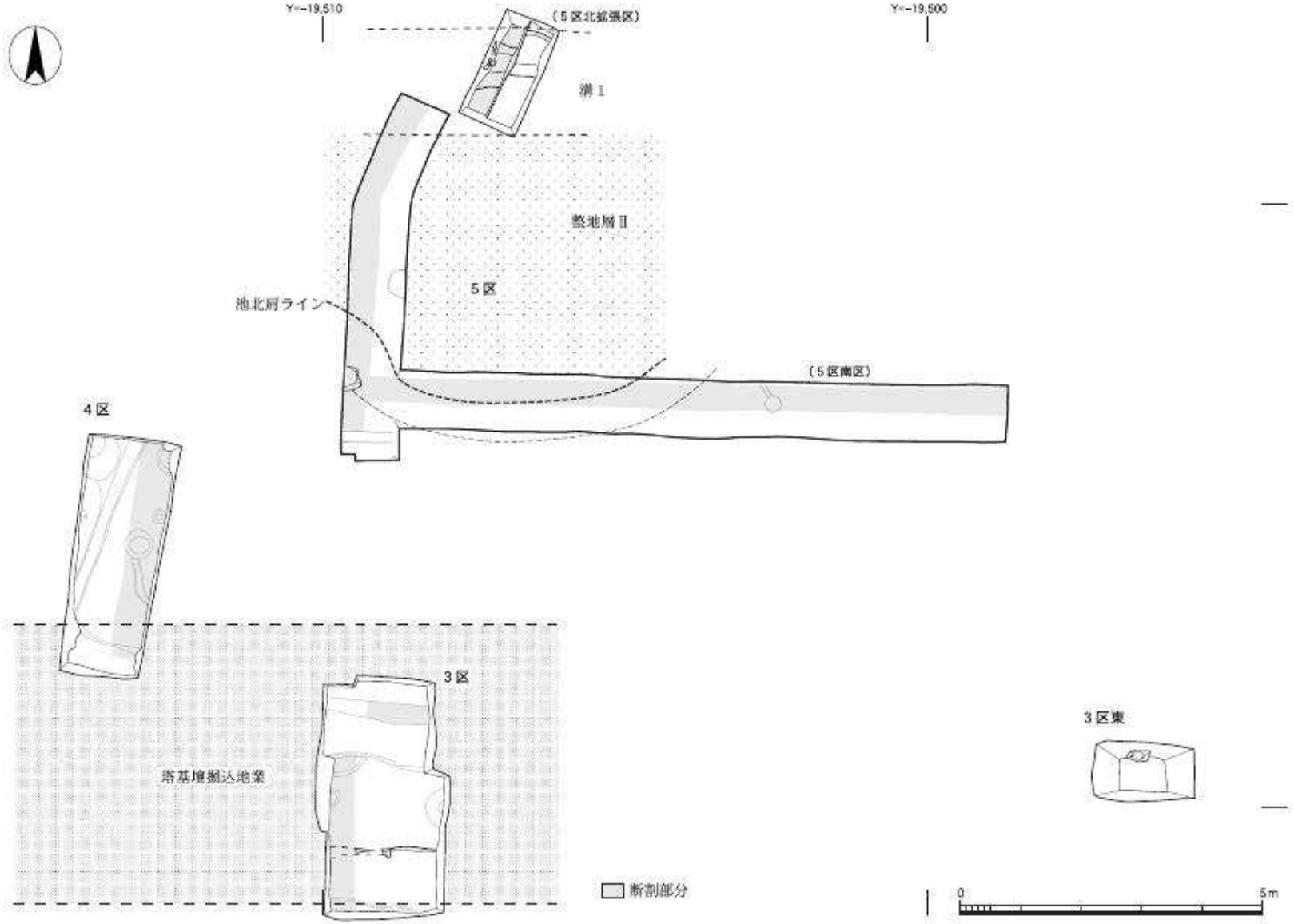
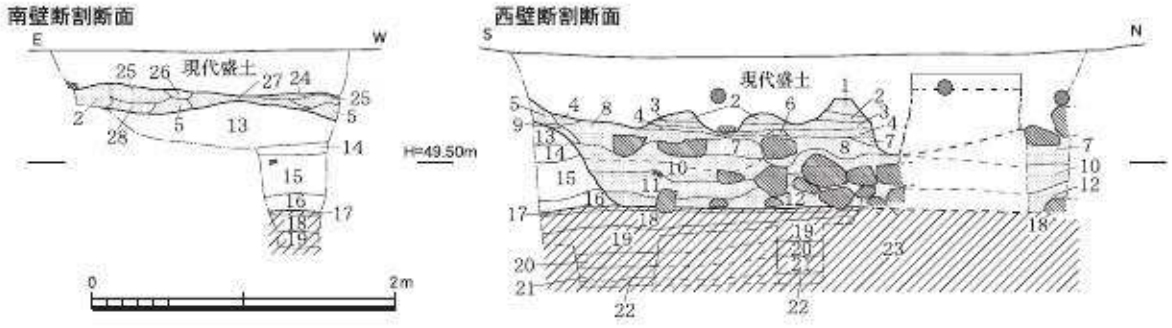


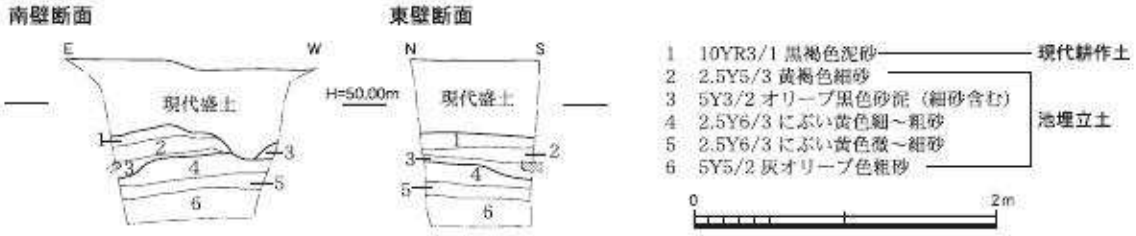
図22　3～5区平面図（1：100）



1 7.5YR4/4 褐色粘質土＋10YR7/6 明黄褐色粘質土
2 7.5YR4/3 褐色粘質土（粗砂少量含む）
3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥（N6/ 灰色粘土ブロック混、粗砂やや多めに混入）
4 7.5YR4/4 褐色粘質土（5Y6/2 灰オリーブ色粘土ブロック少量含む）
5 5Y6/2 灰オリーブ色粘土（微砂混入）
6 N6/ 灰色粘土（10YR5/2 灰黄褐色砂泥混じる）
7 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
8 7.5GY4/1 暗緑灰色粘土＋10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土（細砂含む、φ20cm大礫少量）
9 2.5Y5/1 黄灰色砂泥
10 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（7.5GY7/1 明緑灰色粘土ブロック少量、細砂、φ20～30cm大礫少量含む）
11 7.5YR6/4 にぶい橙色砂混、7.5GY7/1 明緑灰色粘土ブロック少量、炭化物少量含む、鉄分沈着）
12 2.5Y5/3 黄褐色泥砂（7.5GY7/1 明緑灰色粘土ブロック含む）
13 5Y5/2 灰オリーブ色細砂（2.5Y5/1 黄灰色砂泥斑点状に含む）
14 2.5Y5/1 黄灰色砂泥（11層ブロック状に混じる）
15 7.5Y7/1 灰白色中～細砂（φ1～2cm小礫多く含む）
16 7.5Y5/1 灰色細砂～微砂
17 5YR4/4 にぶい赤褐色細砂（鉄分沈殿により硬化）
18 7.5Y4/1 灰色細砂＋7.5Y3/1 オリーブ黒色泥土＋5Y6/2 灰オリーブ色極細砂
＋5GY5/1 オリーブ灰色シルト（炭化物少量含む）本来水平堆積と思われる４つの層が攪拌を受け混じり合う
19 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂（ラミナ明瞭、鉄分沈殿）
20 2.5Y5/4 黄褐色細砂
21 5B7/1 明青灰色粗砂
22 7.5Y3/1 オリーブ黒色泥土
23 10YR4/4 褐色微砂（鉄分沈着）
24 5Y7/1 灰白色粘質土（粗砂含む）
25 N5/0 灰色極細砂
26 5Y7/1 灰白色粘土
27 7.5Y5/1 灰色砂泥（2.5Y4/1 黄灰色砂泥斑点状に含む）
28 7.5Y5/1 灰色砂泥（7.5YR4/3 褐色粘質土ブロック含む）

基壇掘込地業
基壇積土
地山
基壇掘込地業

図23　３区断割断面図（１：50）



1 10YR3/1 黒褐色泥砂
2 2.5Y5/3 黄褐色細砂
3 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥（細砂含む）
4 2.5Y6/3 にぶい黄色細～粗砂
5 2.5Y6/3 にぶい黄色微～細砂
6 5Y5/2 灰オリーブ色粗砂

現代耕作土
池埋立土

図24　３区東断面図（１：50）

で検出した掘込地業の北端を検出したが、３m程しか離れていないにもかかわらず、下層の状況が異なる。地表下1.2～1.4m以下は、上面が北から南に下がる自然堆積層である。その上層、地表下0.8m（標高49.4m）前後までは多量の瓦片を含む砂層を主体とした積土（17～26層）が施され、上面はおおよそ平坦になる。この上に砂層（厚さ0.6m、12～16層）を積み上げ、南側に掘込地業（１～11層）がなされている。３区では存在しなかった下層の積土の分、砂層と掘込地業の厚みが減じているようである。５区の調査により判明したが、下層の瓦片を多く含む砂主体の積土は、塔北側の池を埋めたものと考えられる。すなわち、今回検出した掘込地業は、池を埋

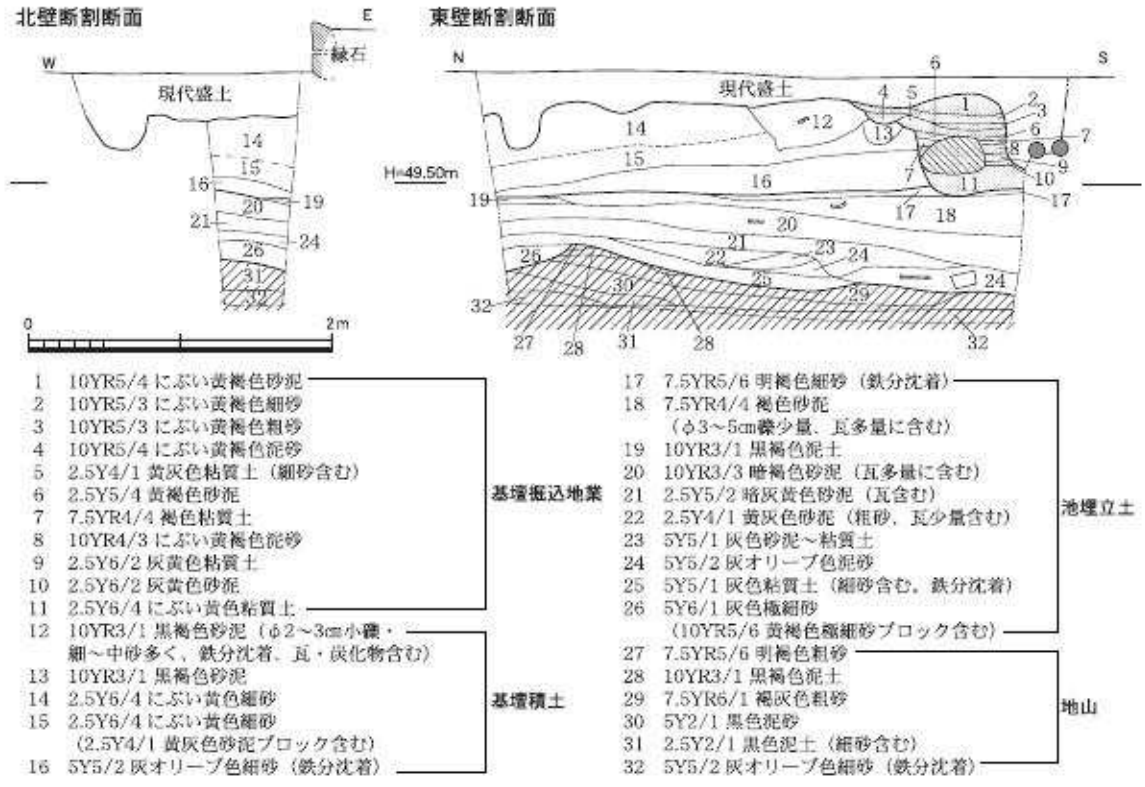


図25　4区断割断面図（1：50）

め立てた積土層（17～26層）の上に構築されているということになる。

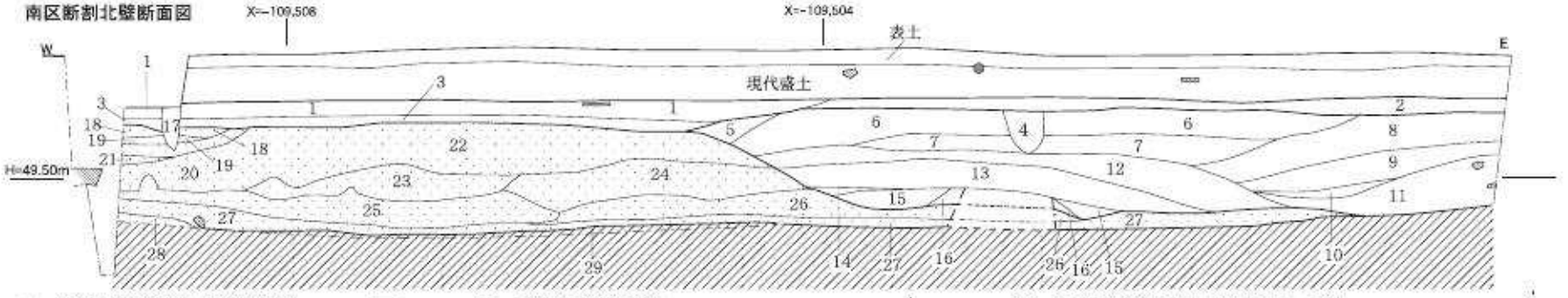
5区（図26）　当初、途中で東へ折れる幅1m、長さ約6m南北方向の調査区を設定し、ややずらして北側に幅1m、長さ2mの北拡張区を設けた。後に、南端部に直交して東側に幅1m長さ10mの東西方向の南区を追加した。

地表面は平坦で標高は50.5m前後、近現代層を除去した地表下0.4m（標高50.0m）前後で固く締まった整地層を検出した。以下については断割調査を行い、南北方向の調査区では西側を地表下1.6mまで、南区では北側を地表下1.5mまで掘削して、土層の状況を確認した。

断割西壁断面では、北側で地表下0.9m（標高49.6m）、南側で地表下1.4mで北から南へ緩やかに下がる白川砂の自然堆積層を検出した。大きく下がる南半部には礫層や砂礫層（23～26層）などが入れられて、ある程度平坦面を確保した上で、厚さ0.2m前後の単一な灰オリーブ色粘質土（19層：整地層Ⅱ）によって、上面が平坦な整地（標高49.9m前後）が行われる。この整地はX=-109,482付近より大きく南へ落ち込み、その前面には長径0.4mの人頭大の礫が据えられ、上面を黄褐色砂泥（17層）で被覆する。整地層Ⅱは金堂前面に施された整地層であり、この南への落込みが池の北肩部と考えられる。落込みの前面は、標高49.1mまで下がり、灰色粘土、黄灰色粘土、灰オリーブ色細砂から粗砂、よく締まった明褐色と灰オリーブ色の粘質土などによって埋められる（12～16層）。つまり、池はある段階で故意に埋め立てられ、北側の陸地部と平坦にし、さらにその上面を、部分的に瓦を多く含む箇所もあるが、厚さ0.05～0.1mの砂を主体とする層を数層重ねた厚さ0.2m前後の整地層Ⅰ（1～11層）が覆う。

図26　5区断割断面図（1：50）

南区断割北壁断面図

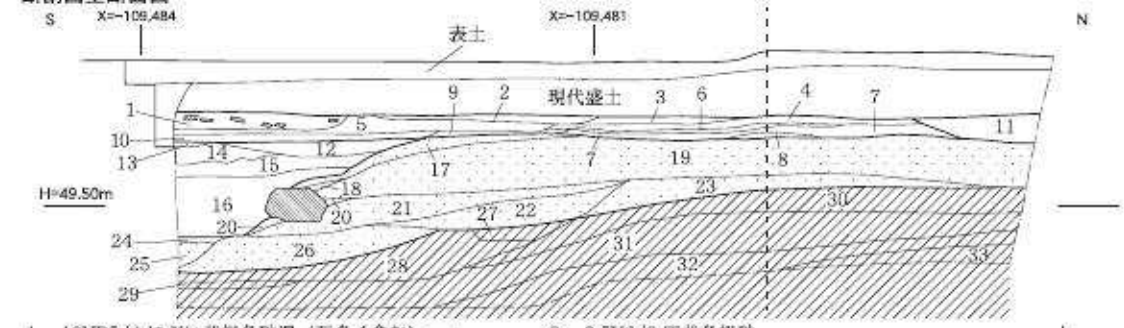


1　10YR4/4褐色砂泥（瓦多く含む）
2　10YR4/2 灰黄褐色砂泥
3　2.5Y4/1黄灰色砂泥
4　2.5Y5/1 黄灰色細砂
5　10YR3/1 黒褐色砂泥
　＋10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
6　5Y6/2 灰オリーブ色細～泥砂
7　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
8　2.5Y6/3 にぶい黄色砂泥
　（同色の粘土ブロック含む）
9　2.5Y5/2 暗灰黄色細～中砂
10　2.5Y5/1 黄灰色細砂
　（2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック含む）
11　2.5Y6/1 黄灰色細砂
　（2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック含む）
12　5Y6/3 オリーブ黄色細～粗砂
13　7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂
　（10YR3/1 黒褐色砂泥ブロック多量に含む）
14　2.5Y5/6 黄褐色細～粗砂
15　7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂
　（2.5Y5/6 黄褐色細砂含む）
16　10Y5/1 灰色粘質土
17　2.5Y6/3 にぶい黄色細砂
18　2.5Y5/4 黄褐色粘質土
19　10YR5/6黄褐色粘質土
20　2.5Y6/2 灰黄色粘質土
21　2.5Y5/3 黄褐色細～中砂（固くしまる）
22　5Y6/2 灰オリーブ色粘質土（鉄分少量沈着）
23　7.5Y6/1 灰色粘質土
　＋2.5Y6/6 明黄褐色粘質土
24　2.5Y6/6 明黄褐色粘質土
　（5Y5/1 灰色粘質土ブロック含む）
25　2.5Y7/1 灰白色極細砂（同色粘土含み、鉄分少量沈着）
26　5Y5/1 灰色極細砂～粘質土
27　2.5Y3/2 黒褐色泥砂
　（2.5Y3/1 黒褐色泥土、5Y7/2 灰白色微砂ブロック含む）
28　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（φ10cm大の礫多く含む）
29　10Y6/1灰色微砂

整地層Ⅰ　整地層Ⅱ　池埋立土　地山

0　2m

断割西壁断面図



1　10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥（瓦多く含む）
2　2.5Y5/4 黄褐色細砂
3　2.5Y5/4 黄褐色細～粗砂
4　2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土（細砂含む）
5　10YR4/4 褐色砂泥（固くしまる）
6　10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂
7　2.5Y5/3 黄褐色粗砂
8　2.5Y6/2 灰黄色粗砂
9　2.5Y4/4 オリーブ褐色細～中砂（固くしまる）
10　2.5Y5/3 黄褐色細砂～中砂
　（固く締まる）
11　2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂（固くしまる）
12　7.5YR5/6 明褐色粘質土（固くしまる）
13　7.5YR5/6 明褐色細砂
14　7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質土（5Y4/1 灰色砂泥含む）
15　7.5YR5/6 明褐色砂泥（5Y6/2 灰オリーブ色粘土含む）
16　5Y5/2 灰オリーブ色細～粗砂
17　2.5Y5/4 黄褐色砂泥
18　7.5Y5/1 灰色粘土
19　5Y6/2 灰オリーブ色粘質土（鉄分沈着）
20　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
21　2.5Y3/2 黒褐色泥砂
　（2.5Y3/1 黒褐色泥土、5Y7/2 灰白色微砂ブロック含む）
22　2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫（φ3～5cm礫多く含む）
23　2.5GY6/1 オリーブ灰色微～細砂
24　10YR5/6 黄灰色粘土
25　5Y5/1 灰色粘土
26　2.5Y4/1 黄灰色泥砂（φ10cm台礫多く含む）
27　2.5Y3/1 黒褐色泥砂
28　5Y5/4 オリーブ色細～中砂
29　10Y6/1 灰色極細砂
30　2.5Y5/1 黄灰色細～粗砂
31　2.5Y5/1黄灰色粗砂と2.5Y7/1灰白色粗砂互層
32　5Y4/2 灰オリーブ色細～粗砂
33　5Y4/4暗オリーブ色泥砂
　（5Y7/2灰白色シルト、5Y3/2オリーブ黒色シルトブロック含む）

整地層Ⅰ　池埋立土　溝1　整地層Ⅱ　地山

北拡張区では、整地層Ⅰ上面より切り込む溝１を検出した。東西方向の溝で幅は1.6m、深さ0.85m、埋土上部には瓦片を多く含む。西側（猛獣舎）で行った調査17において検出した東西溝と同一の溝と考えられる。

南区では、整地層Ⅰ（図26断割北壁断面図１～３層）の下面、西部で整地層Ⅱ（18～28層）を検出、Y=-19,505付近で東へ落ち込み、池の肩部となる。後に落込みの東部の池部分は南側と同様に砂層（４～16層）で埋められる。（高橋）

４　遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理箱に57箱出土した[5)]。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、石製品、土製品、金属製品などがある。全体の７割程度を瓦類が占める。遺物の時代は古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代以降である。平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物が主体である。

土器・陶磁器類は各調査区で出土したが、全体量は少ない。１区の溝や池、２区の整地層などから比較的まとまって土師器を中心として出土した。土製品には、緑釉土製円塔がある。５区の整地層Ⅰから出土した。

瓦類は、各調査区から出土した。他の遺物に比べ、圧倒的に出土量は多い。平安時代後期から室町時代の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがあるが、いずれも破片であり、完形のものはほとんどない。４区の池を埋め立てた層からまとまって出土した以外は、ほとんどが近代以降の盛土・整地土や撹乱などから出土したものである。他には近世以降の桟瓦も多く出土している。

石製品には凝灰岩の破片がある。主に１・２区の近代以降の盛土・整地土や撹乱などから出土したものであるが、法勝寺期の建物などの基壇外装に用いられたものと考えられる。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
古墳時代前期	土師器	11箱	土師器34点	７箱	０箱
平安時代中期	土師器、緑釉陶器、黒色土器		土師器８点、黒色土器２点、緑釉陶器１点		
平安時代後期～室町時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、瓦類、土製品、石製品	50箱	土師器28点、灰釉陶器２点、須恵器１点、緑釉土製円塔３点、軒丸瓦21点、軒平瓦19点、丸瓦９点、平瓦４点、鬼瓦１点	45箱	０箱
江戸時代～近代	土師器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品	５箱		５箱	０箱
合　計		66箱	133点（９箱）	57箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より９箱多くなっている。

また、１・２区では古墳時代前期の遺構を検出した。庄内式期から布留式期の土師器が出土している。

（２）平安時代から室町時代の遺物

１）瓦類（図27～29、表４）

１区出土瓦（図27　１～11、図29　42）　１区では軒丸瓦８点、軒平瓦９点の他、鬼瓦と思われるもの１点、塼１点、五輪塔文の押捺された平瓦１点がある。遺構に伴うものは、池41から出土した54のみで、大半が現代の盛土層から出土した。

軒丸瓦は５点図示した（１～５）。１・３は複弁８弁蓮華文、４は巴文とみられる。１は大和系あるいは山城系、２～４は播磨系である。５も複弁８弁蓮華文であるが、中房に「七」字を陽刻する。軒平瓦は５点図示した（６～10）。いずれも唐草文で、６・８が播磨系、７が大和系か、９・10は顎部の成形が折曲げ技法によっており丹波系とみられる。鬼瓦とみられる11は大粒の珠文とその上下を平行する圏線部分である。笵面・裏面ともが平坦であること、平行する珠文上下の圏線が円弧を描かないことなどから鬼瓦片と考える。

42は平瓦凹面に五輪塔文の押捺が施される。水輪に梵字の「ア」字を陽刻する。

２区出土瓦（図27　12～22、図29　46～54）　２区では軒丸瓦６点、軒平瓦７点、ヘラ記号のある丸瓦９点がある。西拡張区１で検出した土坑１から21・48～50・53、土坑２から12～19・22・46・47・51・54、現代盛土層から20・52が出土した。

軒丸瓦は５点図示した（12～16）。12・13は複弁８弁蓮華文で、12は周縁に珠文を巡らせる。14・15は単弁蓮華文、16は右巻きの巴文である。12は大和系、13・14は山城系、15は播磨系である。軒平瓦は６点図示した（17～22）。21が剣頭文である以外は唐草文である。17・21・22が山城系、18～20は瓦当下面から平瓦凸面まで特徴的な縄タタキを施す丹波系である。

今回の調査で確認したヘラ記号のある瓦はすべて２区の西拡張区１から出土している。いずれも丸瓦の凸面に線刻される。46～49は「×」、52～54は縦２本に斜めの１本を組み合わせたものでヘラ状あるいは串状の先端の細い工具で施文している。51は３本の櫛状工具で引かれた平行線である。

３区出土瓦（図28　23～25、図29　43・45）　３区では軒丸瓦２点、軒平瓦１点、五輪塔文を押捺した平瓦１点、文字がヘラ書きされた平瓦１点が出土した。いずれも現代層から出土している。

軒丸瓦は２点図示した（23・24）。23は複弁８弁蓮華文、24は宝塔文である。軒平瓦は１点(25)、五輪塔文である。また平瓦凹面にも五輪塔文が押捺される。水輪には梵字の「ア」字が陰刻される。43は平瓦凹面に五輪塔文を押捺したもので、水輪には梵字の「ア」字が陽刻される。45は平瓦凹面に文字をヘラ書きしたものである。「□天　日如□」と読める。23は大和系、24は和泉あるいは河内系、25は和泉系かとみられる。

４区出土瓦（図28　26～37）　４区からは軒丸瓦７点、軒平瓦５点が出土した。35が現代層か

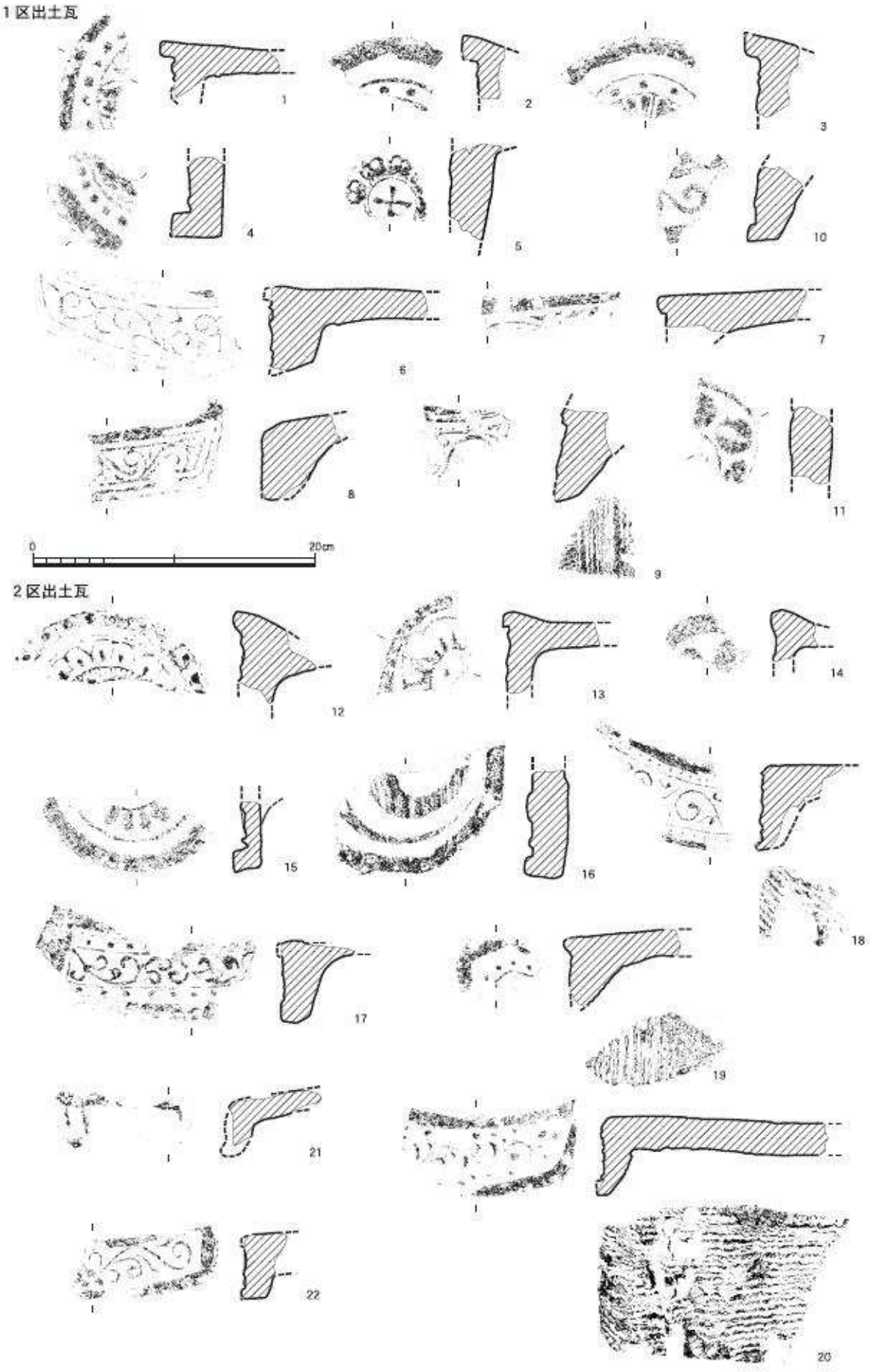
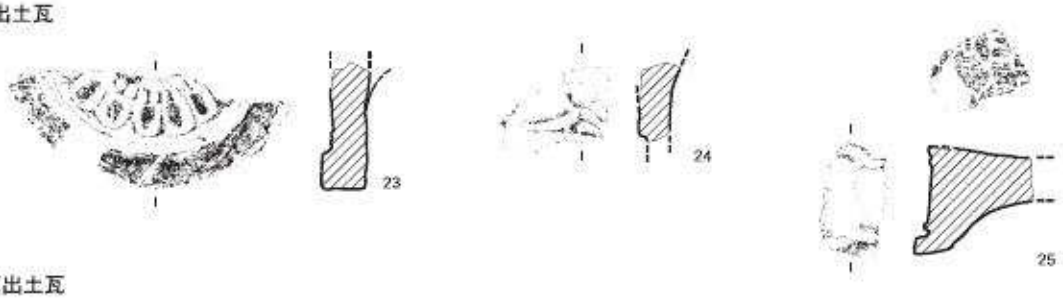
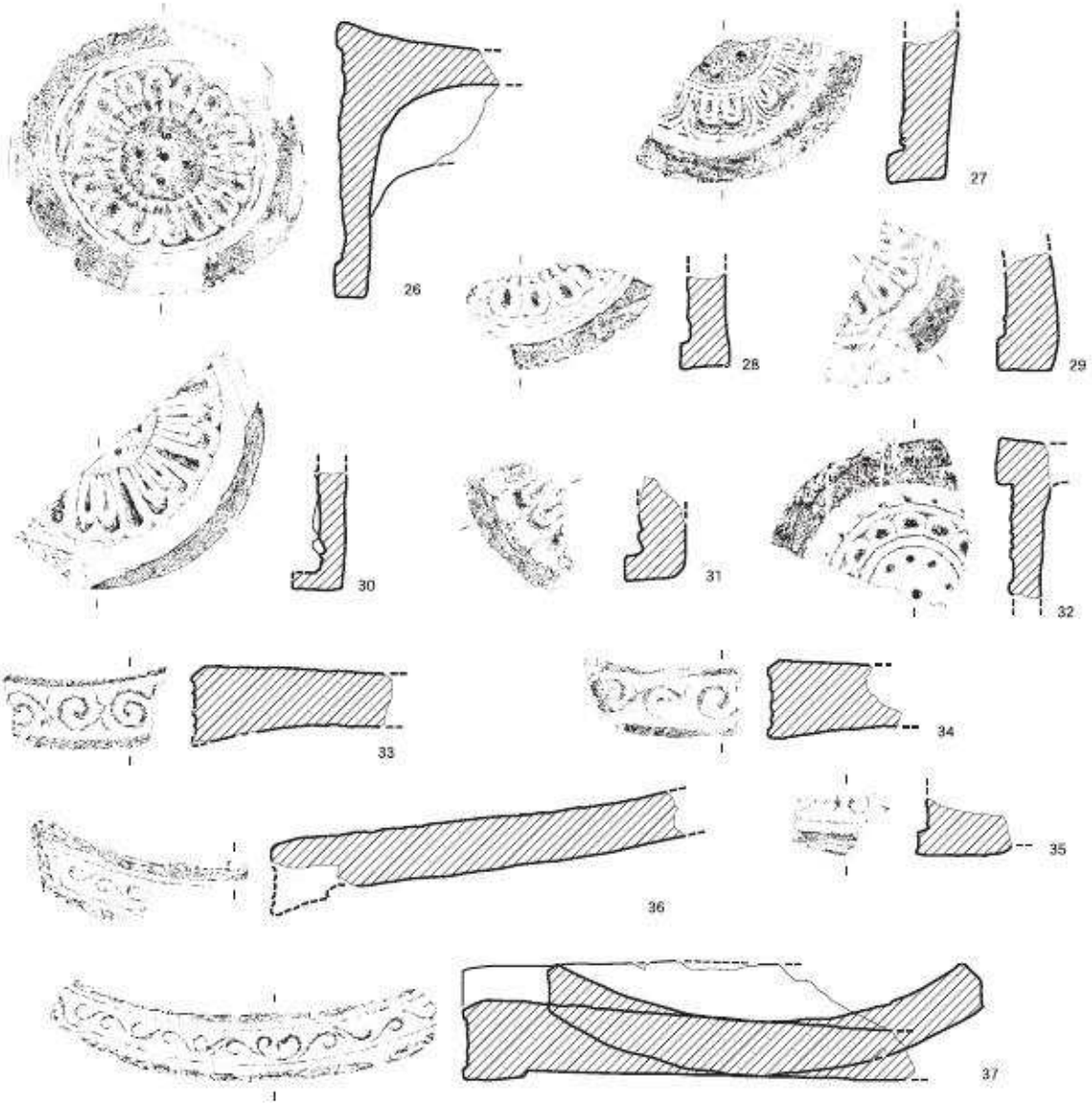


図27　1・2区出土瓦実測図（1：4）

3区出土瓦



4区出土瓦



5区出土瓦

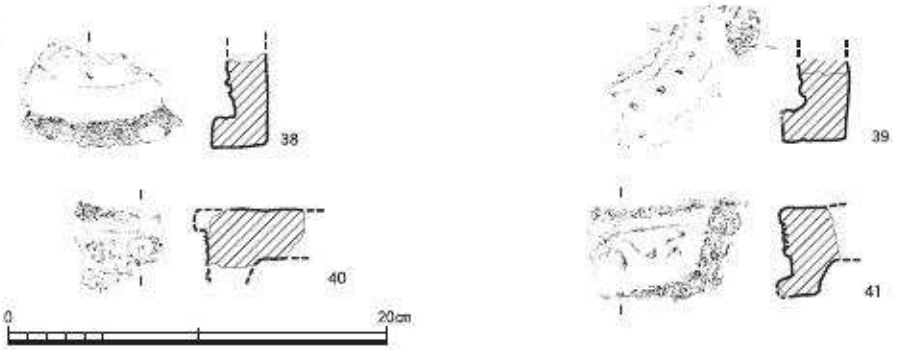


図28　3～5区出土瓦実測図（1：4）

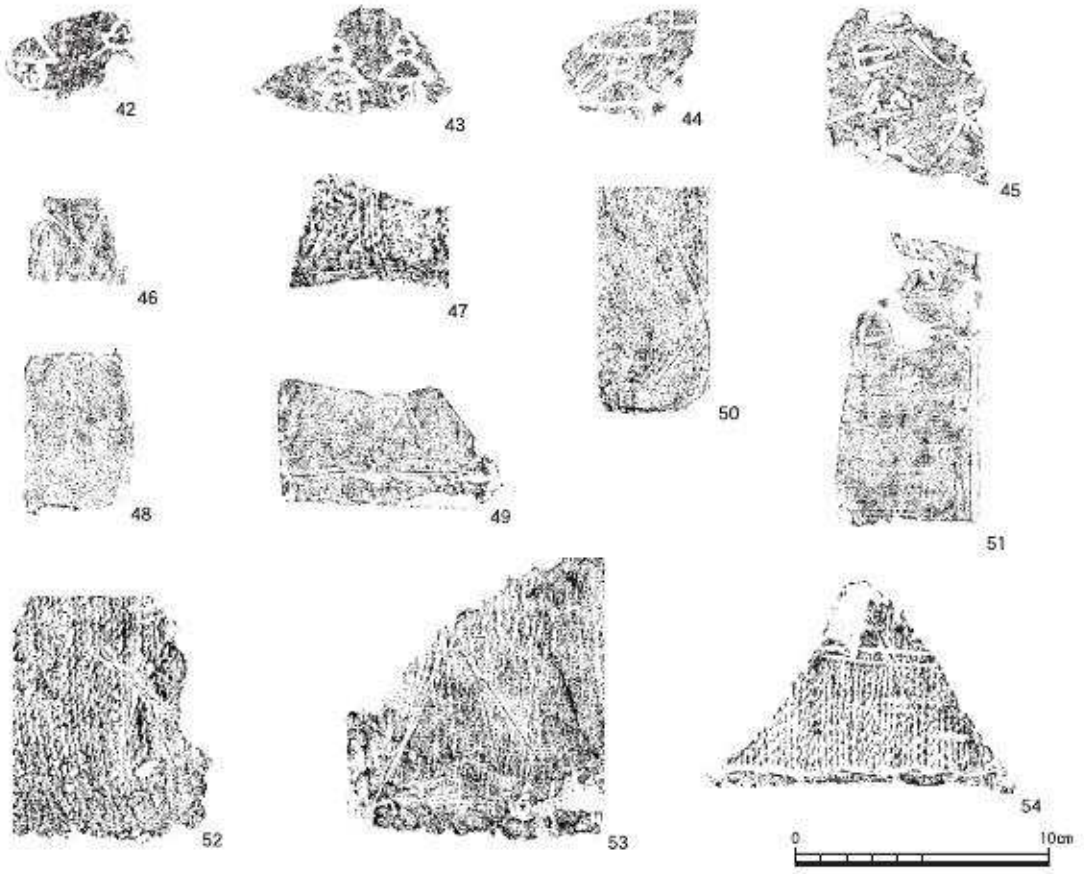


図29　各調査区出土瓦拓影（１：３）

ら出土した以外はすべて池を埋め立てた層から出土している。

軒丸瓦は７点図示した（26～32）。26～29は複弁８弁蓮華文、30・31は間弁をもつ複弁８弁蓮華文、32は単弁15弁蓮華文である。軒平瓦は５点図示した（33～37）。いずれも唐草文である。33・34は同笵とみられ直線顎、33～35も同笵あるいは同文で顎部が比較的長い段顎である。26・28～31は大和系、32が播磨系、35・36は和泉系とみられる。

５区出土瓦（図28　38～41、図29　44）　５区では軒丸瓦３点、軒平瓦４点、五輪塔文を押捺した平瓦１点がある。いずれも現代層から出土している。

軒丸瓦は２点図示した（38・39）。いずれも残りが悪く、中心の文様は失われているが、39は巴文とみられる。軒平瓦は２点図示した（40・41）。いずれも唐草文とみられる。40は二次焼成によって硬質に変質している。44は平瓦凹面に五輪塔文を押捺したものである。38が播磨系、44は和泉系かとみられる。

本調査で出土した軒瓦や特殊瓦は点数が少なく、遺構に伴うものも少ないが、それぞれ出土地点の傾向をある程度示しているようである。阿弥陀堂推定地に設けた１・２区では播磨系・丹波系・山城系のものが数的にほぼ拮抗し、これに対して八角九重塔北側の３・４区では大和系のものが主体を占める。１・２区と３・４区の軒瓦はその系統を全く異にしており、その点からみて

１・２区の瓦については塔とは別の建物（ここでは阿弥陀堂の可能性が高い）に使用された瓦とみて良いと考える。なお、同じ八角九重塔の南側で行った調査33で多くみられた梵字文の軒丸瓦・軒平瓦は北側の本調査３～５区では全くみられなかった。

２）土器類・土製品（図30、表５）

１区溝60出土土器（図30　55～64）　55～61は土師器皿、62は土師器高台、63は土師器台付皿の脚部、64は緑釉陶器椀である。土師器皿には小型で口縁部が強く屈曲するもの（55・56）と口縁部外面を強く２段ナデするもの（57～61）がある。62は厚手の底部に粘土紐を円形に貼り付けた高台で、端部は丸く納める。高さは1.2㎝ある。63は底部からやや外へ開いて延び、端部は外へつまみ出して仕上げる。外面には強いナデが施される。緑釉陶器椀（64）は精良で硬質な素地に釉が施されたもので、内面外面ともナデで仕上げられ、底部内面には沈線が１条巡る。底部外面中央には糸切痕が残り、貼り付けられた高台はやや外へ開いて、四角く納められた端面に沈線が巡る。土師器の年代観が示すように出土遺物に時期差がみられる。溝が開削されて機能していた時期（平安京［京都］Ⅲ期新段階）と埋められた時期（Ⅳ期中段階）を示すと考えられる。

１区池41出土土器（図30　65～71）　65～70は土師器皿、71は灰釉陶器椀である。土師器皿は口径11㎝前後のもの（65～67）と口径13㎝前後のもの（68～70）がある。いずれも内外面ともナデ調整を施す。69は口縁部内面に油煙が付着する。灰釉陶器椀（71）は丸みを帯びた底部に低い高台を貼り付けたもので、内面はナデ、外面はヘラケズリの後ナデて仕上げる。底部外面に墨書がみられるが、文字の判別はむずかしい。また、内面は平滑で墨痕も明瞭であることから、転用硯として使われたものと思われる。土師器の年代観は、平安京（京都）Ⅳ期新段階からⅤ期古段階に相当する。

２区土坑２出土土器（図30　72・73）　土師器皿（72）と須恵器椀（73）である。72は口縁端部を四角く納め、面を持たせる小型の皿である。外面口縁部は２段ナデが施される。73は底面糸切り痕が残り、高台部は削り出しによって整形する。

２区平安期整地層出土土器（図30　74～96）　74～93は土師器皿、94は灰釉陶器壷、95・96は黒色土器椀である。土師器皿には小型で口縁部が強く屈曲するもの（74～79）、口縁部の屈曲がやや弱いもの（80～83）、口縁部外面を２段ナデするもの（84・90）、口縁部外面を１段ナデするもの（85～89、91～93）などがある。灰釉陶器（94）は貼り付け高台をもつ小型壷の底部である。内面底部に釉が付着する。高台は断面三角形で端部は細く丸く納める。黒色土器椀（95・96）は内外面とも黒色のいわゆるＢ類で、両面とも横方向の細かいヘラミガキが丁寧に施される。内湾気味に立ち上がる体部から口縁部はやや外反し、端部は丸く納める。端部よりやや下がった内面に沈線が巡る。土師器の年代観は、平安京（京都）Ⅲ期新段階からⅣ期にかけてのものとⅣ期中段階を中心とするものがあり、主体は後者にある。

５区整地層Ⅰ出土土製品（図30　97～99）　いずれも土製円塔である。中実の半円球体の底面に鍔が巡る。型を用いて成型しており、上面に緑釉を施す。98・99は残存状態が良くない。

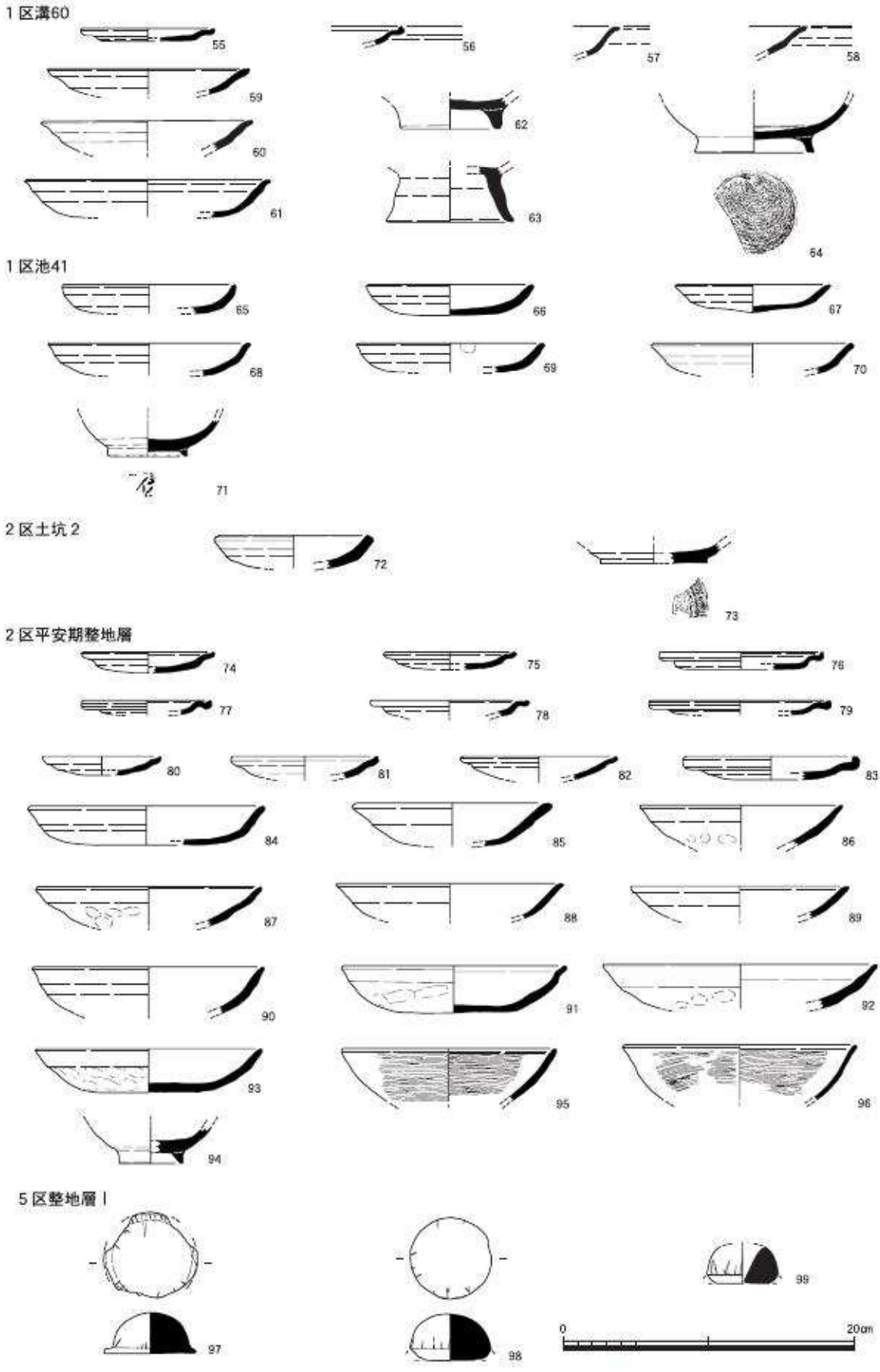


図30　各調査区出土土器・土製品実測図（１：４）

（３）古墳時代前期の遺物（図31・32、表６）

１区整地層出土土器（図31　100・101）　この整地層は近代以降の動物園造成や進駐軍による造成に伴うものと考えられるが、溝56・土坑57の周辺部分から比較的まとまって同時期の遺物が出土した。それらのうち、壷１点、甕１点を図示した。

壷（100）は、口縁部の端部を拡張して、端面を沈線３条と円形浮文を飾る壷である。甕（101）は受口状口縁のいわゆる近江系の甕である。櫛描文や列点文は施さない。

１区土坑57出土土器（図31　102～104）　壷、甕、鉢、高杯などが出土した。うち３点を図示した。

壷（102）は小型の壷、103はタテハケ調整を主体とする甕の底部、104は高杯の脚裾部である。

２区流路２出土土器（図31　105）　流路２は平安期整地層の下層で検出された自然流路である。攪乱などの掘削にともなって部分的に調査したが、壷、甕、高杯などが出土した。図示できたのは１点のみであった。

甕（105）はいわゆる布留式甕である。口縁部が直線的に立ち上がり、体部内面のヘラケズリが頸部からやや下がった位置以下となっており、やや新しい要素をもつ。

２区流路１出土土器（図31・32　106～133）　流路１は２区東端で検出した地山（白川砂）を切り込む自然流路である。堆積状況の確認のための北壁断割時に部分的に掘削した。壷・甕・鉢・高杯・器台・甑などほとんど磨滅しない完形に近い土器を含む、多量の土器群が出土した。それらのうち壷３点、甕13点、鉢６点、高杯３点、甑１点、器台１点、脚台１点を図示した。

壷（106）は頸部が外反して開き段をもって短い口縁部がやや内向きに立ち上がる直口壷である。107は口縁部が直立する小型直口壷、108は体部に回転タタキが施される広口壷である。

甕には、受口状口縁の近江系のもの（109～112、114～116）と球形体部の内面をヘラケズリする布留式甕（124～126）、体部外面を回転タタキする弥生第Ⅴ様式系のもの（127）がある。受口状口縁の近江系の甕には、口縁部外面や体部に施文をしない109～112とクシ状工具によって口縁部外面に刺突文、頸部から肩部の外面に直線文・刺突文・波状文などを施す114～116がある。113は施文をしない甕の底部で、底面にヘラ状工具による「×」字が線刻される。117は施文する甕の底部で、胴部下半に粗い波状文が施文される。

鉢では、受口状口縁をもつ近江系のものが目立つ（118～122）。いずれもクシ状工具によって口縁部外面に刺突文、頸部から肩部の外面に直線文・刺突文・波状文などを施す。119はややすぼまった体部であるが、ほかのものは扁平な体部である。このほか、底部から体部が開き、端部を丸く納める小型の鉢（129）がある。

高杯には、受部が深く、屈曲して口縁部が開く130がある。脚部には柱部が中空で、裾部が開くものがあり、やや小型の131は外面をハケで仕上げ、大型の132はヘラミガキで仕上げる。

甑と考えられる128は、小振りの底部に焼成前に穿孔する。体部はあまり開かず、やや内湾気味に立ち上がる。

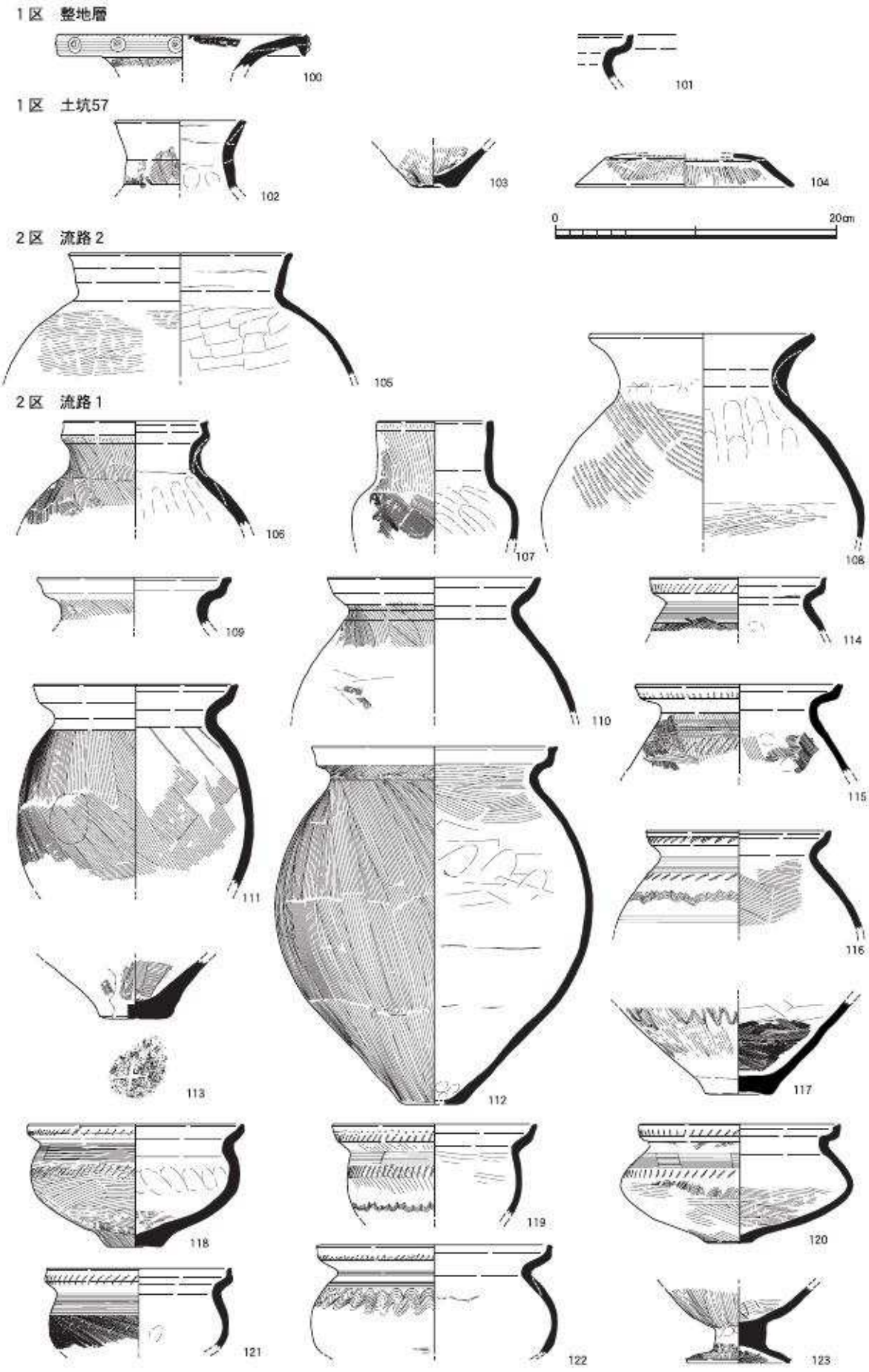


図31　下層出土土器実測図1（1：4）

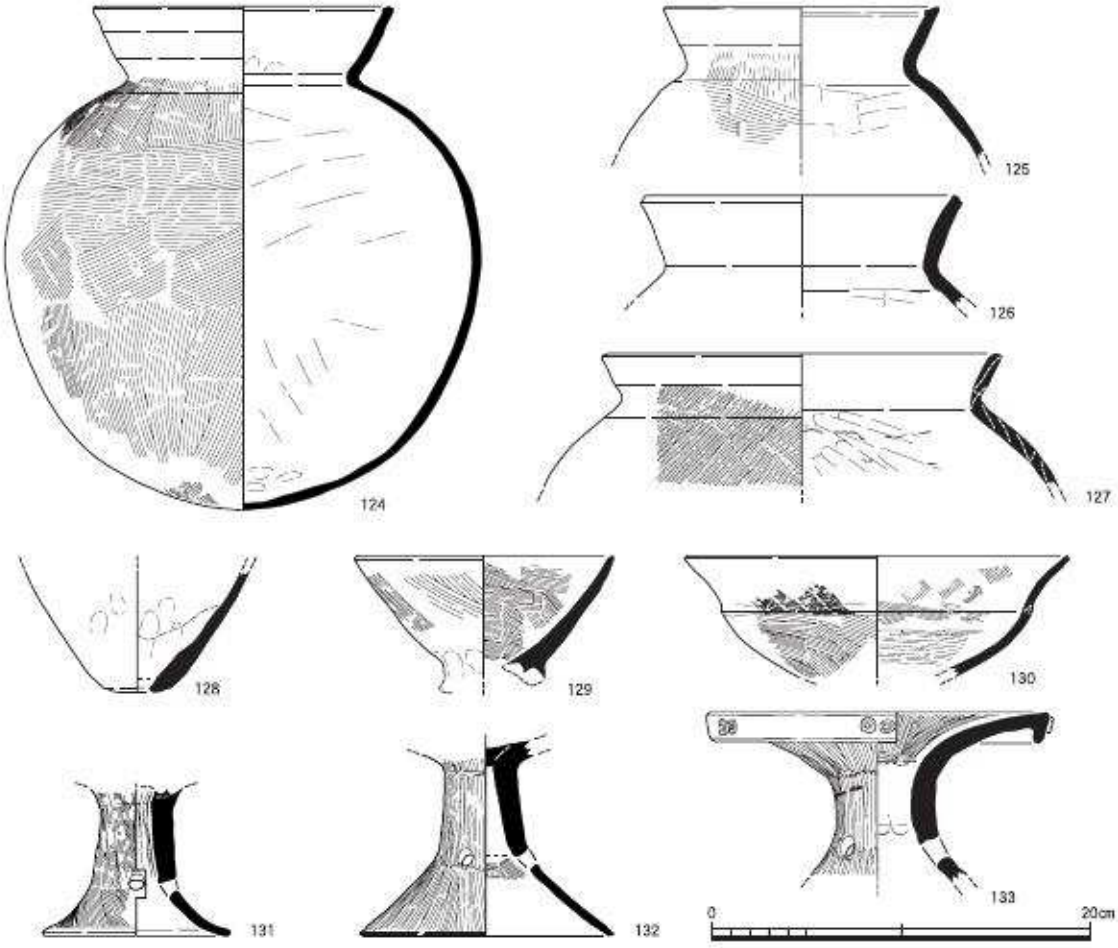


図32　下層出土土器実測図２（１：４）

器台は、中空の柱部から大きく開く受部の端部に粘土紐を付加して、下垂させ面をつくる。２個一組の円形浮文を巡らせる。裾部は欠損している。

脚台（123）は、甕あるいは鉢の底部に柱実の短い柱部を付け、裾部が短く開くものである。

（高橋）

表4　出土瓦観察表

	調査区	出土遺構	種類	色調・胎土	調整・特徴	備考
1	1区	現代盛土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面7.5Y6/1灰色・断面N8/0灰白色，焼成良．胎土密　φ1.0㎜以下の長石・チャート・雲母・黒色粒子を含む	瓦当上面から丸瓦凸部縦ケズリ，瓦当裏面狭い横ナデ．丸瓦凹部ナデ．	大和あるいは山城系
2	1区	現代盛土	軒丸瓦	外面N5/0灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成良． 胎土密　φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当上面ヨコナデ，平瓦凹部縦ナデ．顎部貼り付け剥離．平瓦凸部縦方向板ナデ．	播磨系
3	1区	現代盛土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N6/0灰色・断面N8/0灰白色，焼成良． 胎土密　φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを少量含む	瓦当面ハナレ砂付着．周縁オサエ，ナデ，側面から丸瓦凸部縦ナデ．瓦当裏面は剥離．	播磨系
4	1区	現代盛土	軒丸瓦 巴文？	外面10Y6/1灰色・断面N7/0灰白色，焼成良，胎土密 φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む	瓦当面ハナレ砂付着．周縁オサエ，ナデ，側面縦ナデ．瓦当裏面ナデ．	播磨系
5	1区	現代盛土	軒丸瓦 蓮華文	色2.5Y7/1灰白色・断面N5/0灰色，焼成やや軟，胎土密 φ2.0㎜以下の長石・チャート・雲母・黒色粒子を含む	瓦当裏面ナデ．中房に「七」字が偏刻．	
6	1区	現代層	軒平瓦 唐草文	外面5Y6/2灰オリーブ色・断面N7/0灰白色，焼成良． 胎土密　φ1.5㎜以下の長石・チャート・黒色粒子を含む	瓦当上面ケズリ，顎部ケズリ，瓦当裏面強いナデ．平瓦部凹面布目，凸面縦ナデ．	播磨系
7	1区	現代盛土	軒平瓦	外面N4/0～6/0灰色・断面8/0灰白色，焼成良． 胎土密　φ1.5㎜以下の長石・チャートを含む	瓦当面ハナレ砂付着．瓦当上面横ナデ，丸瓦凸部縦ナデ．	大和系？
8	1区	現代盛土	軒平瓦 唐草文	外面7.5Y7/1灰白色・断面N5/0灰色，焼成やや軟， 胎土密　φ3.0㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む	瓦当上面面取り，瓦当裏面ナデ．顎部貼り付け．	播磨系
9	1区	池41	軒平瓦	外面N7/0灰白色・断面5YR6/3にぶい橙色，焼成硬質， 胎土密　φ1.5㎜以下の長石・雲母を少量含む	瓦当下面横方のち縦方向綱タタキ，裏面横方向縄タタキ．平瓦凸部縦方向縄タタキ，折曲げ技法．	丹波系
10	1区	現代盛土	軒平瓦 唐草文	外面・断面5Y6/1灰色，焼成良，胎土やや粗　φ9.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む，長石多い	瓦当面布目，瓦当下面から裏面横ナデ，折曲げ技法．	丹波系
11	1区	現代層	鬼瓦か	外面・断面2.5Y7/1灰白色，焼成良． 胎土密　φ2.5㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む	裏面ナデ．	
12	2区	土坑2	軒丸瓦 蓮華文	外面10Y5/1灰色・断面5Y8/2灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当周縁に珠文巡る．上面横ナデ，裏面ナデ．丸瓦凸面縦方向ナデ．	大和系
13	2区	土坑2	軒丸瓦 蓮華文	外面N6/0灰色・外面7.5Y7/1灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを少量含む	瓦当上面から丸瓦凸部縦方向ナデ．瓦当裏面ナデ．丸瓦凹部布目ナデ消し．瓦当面花弁部に指頭圧痕．	山城系
14	2区	土坑2	軒丸瓦 蓮華文	外面N4/0灰色・断面2.5Y7/2灰黄色，焼成やや軟， 胎土粗　φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを多く含む	瓦当周縁から丸瓦凸部ナデ，裏面ナデ．	山城系
15	2区	土坑2	軒丸瓦 蓮華文	外面・断面N6/0灰色，焼成良， 胎土やや粗　φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当面ハナレ砂付着．周縁，側面から裏面ナデ．	播磨系
16	2区	土坑2	軒丸瓦 巴文	外面N2/0黒色・断面5Y7/2灰白色，焼成やや軟， 胎土密　φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	周縁・側面・裏面ナデ．	山城系
17	2区	土坑2	軒平瓦 唐草文	外面N5/0灰色・断面N8/0灰白色，焼成やや軟質， 胎土密　φ2.0㎜以下の長石・チャートを含む	瓦当面と芯がずれる．瓦当上面ナデ，平瓦との接合部に段あり，下面ケズリ，裏面ナデ，オサエ，朱付着．平瓦凹面布目．	山城系
18	2区	土坑2	軒平瓦 唐草文	外面N6/0灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成硬質， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・チャートを少量含む	瓦当上面面取り．下面から裏面縦方向綱タタキ．平瓦凹面布目，折曲げ技法．	丹波系
19	2区	土坑2	軒平瓦	外面・断面7.5YR7/4にぶい橙色，焼成軟， 胎土密　φ2.0㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む	瓦当裏面横方向縄タタキ，平瓦凹面布目，側面ケズリ．	丹波系
20	2区	現代層	軒平瓦 唐草文	外面・断面N6/0灰色，焼成硬質， 胎土密　φ2.0㎜以下の長石・チャート・黒色粒子を含む	瓦当面布目残存，上面ケズリによる面取り，下面から裏面，平瓦凸部縦方向綱タタキ，平瓦凹面布目，側面ケズリ，折曲げ技法．瓦当裏面に朱付着．	丹波系
21	2区	土坑1	軒平瓦 剣頭文	外面N5/0灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成やや軟， 胎土やや粗　φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当上面面取り，瓦当裏面ナデ，平瓦凹面布目．	山城系
22	2区	土坑2	軒平瓦 唐草文	外面・断面7.5Y7/1灰白色，焼成やや軟， 胎土やや粗　φ10.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当面・平瓦凹面布目，瓦当上面ケズリによる面取り．下面から裏面横ナデ，側面ケズリ，折曲げ技法	山城系
23	3区	現代層	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N3/0暗灰色・断面N8/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当周縁ナデ，側面ケズリのちナデ，裏面ナデ．	大和系
24	3区	撹乱 （地業？）	軒丸瓦 宝塔文	外面・断面5Y8/1灰白色，焼成良， 胎土やや粗　φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む	瓦当裏面ナデ．	河内系・和泉系
25	3区	撹乱 （地業？）	軒平瓦 五輪塔文	外面N4/0灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成良，胎土密 φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む	瓦当上面横ナデ，下面から裏面ナデ．平瓦凹面布目ののち五輪塔文押捺．	和泉系？
26	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N3/0暗灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成良，胎土密　φ 1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む，瓦当面に鉄分沈着	瓦当周縁から丸瓦凸部ナデ．裏面板状工具によるナデ．一部瓦当面にヘラ状工具でキズ．	大和系
27	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N4/0灰色・断面N8/0灰白色，焼成良， 胎土やや粗　φ1.0㎜以下の長石・石英を含む	瓦当周縁から裏面ナデ．笵が2度押しされる．	
28	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N4/0灰色・断面N8/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を少量含む	瓦当周縁から裏面ナデ．	大和系
29	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面N4/0灰色・断面N8/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を含む	瓦当周縁から裏面ナデ．	大和系
30	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面・断面7.5Y7/1灰白色・裏面N2/0黒色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を含む	瓦当周縁から裏面ナデ．	大和系
31	4区	池埋立土	軒丸瓦 複弁蓮華文	外面5Y4/1灰色～N2/0黒色・断面N4/0灰色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を含む，瓦当面に鉄分沈着	瓦当周縁から裏面ナデ．	大和系
32	4区	池埋立土 下層（青灰色粗砂）	軒丸瓦 蓮華文	外面N4/0灰色・断面N7/0灰白色，焼成良， 胎土やや粗　φ1.0㎜以下の長石・チャート・黒色粒子を含む	瓦当周縁から裏面ナデ．	播磨系
33	4区	池埋立土	軒平瓦 唐草文	外面・断面2.5Y8/1灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を少量含む	瓦当面にハナレ砂付着，瓦当上面面取り，下面横ナデ．平瓦凹面布目，凸面ナデ．凸面に朱塗布．	
34	4区	池埋立土	軒平瓦 唐草文	外面N3/0暗灰色・断面N7/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0㎜以下の長石・石英を含む	瓦当面にハナレ砂付着，瓦当上面面取り，下面横ナデ．平瓦凹面布目，凸面ナデ．	

	調査区	出土遺構	種類	色調・胎土	調整・特徴	備考
35	4区	現代層	軒平瓦 唐草文	外面N4/0灰色・断面2.5Y8/2灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャートを含む	貼り付けた顎部が剥離。瓦当下面ナデ。	
36	4区	池埋立土	軒平瓦 唐草文	外面N7/0～4/0灰白～灰色・断面N7/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む	瓦当上面面取り，下面ケズリ。平瓦凹面布目，凸面ナデ。側面ケズリ。	和泉系
37	4区	池埋立土	軒平瓦 唐草文	外面N7/0～4/0灰白～灰色・断面N7/0灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0mm以下の長石・石英・金雲母を含む，平瓦凸面に鉄分沈着	瓦当上面面取り，下面ケズリ。平瓦凹面布目，凸面ナデ。側面ケズリ。	和泉系
38	5区	北拡張 現代層	軒丸瓦	外面・断面5Y7/1灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0mm以下の長石・石英・黒色粒子を含む	瓦当周縁から裏面ナデ。	播磨系
39	5区	北拡張 現代層	軒丸瓦 巴文	色7.5YR6/4にぶい橙色，焼成良，胎土密	瓦当周縁から裏面ナデ。	
40	5区	北拡張 現代層	軒平瓦	外面・断面5YR5/4にぶい赤褐色，焼成良，胎土密　φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む，二次焼成	瓦当裏面ナデ。平瓦凹面布目，凸面ナデ，瓦当面に二次焼成に伴う離着あり。	
41	5区	南区 現代層	軒平瓦 唐草文	外面・断面2.5YR4/4にぶい赤褐色，焼成良， 胎土密　φ3.0mm以下の長石・石英を含む，二次焼成	瓦当面上面・下面ナデ，裏面ナデ，側面ケズリ。 平瓦凹面布目，瓦当面に二次焼成に伴う離着あり。	
42	1区	現代盛土	平瓦 五輪塔文	外面N3/0暗灰色・断面N7/0灰白色，焼成やや軟質， 胎土やや粗，φ1.5mm以下の長石・チャート・黒色粒子を含む	凹面・凸面ともナデか。凹面に五輪塔文押捺。水輪に梵字「ア」字。	和泉系
43	3区	攪乱 (地業?)	平瓦 五輪塔文	外面・断面10YR5/1褐灰色，焼成良， 胎土やや粗　φ2.5mm以下の長石・石英・チャートを含む	凸面ナデ。凹面に五輪塔文押捺。水輪に梵字「ア」字を陽刻。	和泉系
44	5区	北拡張 現代層	平瓦 五輪塔文	外面10YR8/4浅黄橙色・断面10YR8/2灰白色，焼成良， 胎土密　φ2.0mm以下の長石・石英を含む	凸面ナデ。凹面に五輪塔文押捺。	和泉系
45	3区東	現代層	平瓦	外面7.5YR5/1褐灰色・断面7.5YR6/3にぶい褐色，焼成良， 胎土密　φ3.0mm以下の長石・石英・チャートを含む	凸面・凹面ナデ。凹面に文字がヘラ状工具により線刻。	和泉系
46	2区	土坑2	丸瓦	外面・断面10YR7/4にぶい黄橙色，焼成良， 胎土密　φ5.0mm以下の長石・チャートを含む	凸面ナデ。凹面布目，凸面にヘラ記号。	
47	2区	土坑2	丸瓦	外面N3/0暗灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成軟， 胎土密　φ5.0mm以下の長石・石英・チャートを含む	凸面縄タタキ，凹面布目，凸面にヘラ記号。	山城系
48	2区	土坑1	丸瓦	外面・断面5Y8/1灰白色，焼成良， 胎土やや粗　φ5.0mm以下の長石・石英・チャートを含む	凸面縄タタキのちナデ，凹面布目，側面ケズリ， 凸面にヘラ記号。	
49	2区	土坑1	丸瓦	外面N5/0灰色・断面7.5Y8/1灰白色，焼成良， 胎土密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャートを含む	凸面縄タタキのちナデ，凹面布目，側面ケズリ， 凸面にヘラ記号。	
50	2区	土坑1	丸瓦	外面・断面5B6/1青灰色，焼成硬質，胎土やや粗 φ5.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む	凸面縄タタキのちナデ，凹面布目，側面ケズリ， 凸面にヘラ記号。	
51	2区	土坑2	丸瓦	外面・断面5Y5/1灰色，焼成良，胎土密 φ5.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む	凸面ナデ。凹面布目，側面ケズリ，凸面にヘラ記号。	播磨系
52	2区	西拡張 現代層	丸瓦	外面・断面2.5Y8/1灰白色，焼成良， 胎土密　φ5.0mm以下の長石・石英・チャートを多く含む	凸面縄タタキのちナデ，凹面布目をナデ消す。 凸面にヘラ記号。	山城系
53	2区	土坑1	丸瓦	外面N5/0灰色・断面7.5Y7/1灰白色，焼成良，胎土やや粗 φ7.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む	凸面縄タタキのちナデ，凹面布目をナデ消す。 側面ケズリ，凸面にヘラ記号。	山城系
54	2区	土坑2	丸瓦	外面N4/0灰色・断面5Y7/2灰白色，焼成良， 胎土密　φ2.0mm以下の長石・石英・黒色粒子を含む	凸面縄タタキ，凹面布目，凸面にヘラ記号。	

表5　出土土器観察表

	調査区	出土遺構	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残高(cm)	残存	色調	焼成	胎土
55	1区	溝60	土師器	Ⅲ	9.2		0.9		1/6	10YR8/3　浅黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母・赤色粒子を含む
56	1区	溝60	土師器	Ⅲ				1.3	破片	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャートを含む
57	1区	溝60	土師器	Ⅲ				2.0	破片	7.5YR5/4 にぶい褐色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む
58	1区	溝60	土師器	Ⅲ				1.95	破片	10YR8/3　浅黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・金雲母・赤色粒子を含む
59	1区	溝60	土師器	Ⅲ	13.4			1.8	1/12	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャートを含む
60	1区	溝60	土師器	Ⅲ	13.3			2.1	1/8	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む
61	1区	溝60	土師器	Ⅲ	17.5			2.6	1/16	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	密　φ2.5mm以下の長石・石英・チャートを含む
62	1区	溝60	土師器	?		6.7		2.1	底部完形	10YR8/3　浅黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母・赤色粒子を含む
63	1区	溝60	土師器	台付皿		8.5		3.8	1/3	7.5YR7/4 にぶい橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む
64	1区	溝60	緑釉陶器	椀		7.9		3.5	3/4	5Y7/1　灰白色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む
65	1区	池41	土師器	Ⅲ	11.8			2.0	1/3	2.5Y7/2　灰黄色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む

	調査区	出土遺構	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残高(cm)	残存	色調	焼成	胎土
66	1区	池41	土師器	皿	11.3		2.0		1/4	2.5Y7/2 灰黄色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む
67	1区	池41	土師器	皿	10.0		1.9		1/4	2.5Y8/2 灰白色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャートを含む
68	1区	池41	土師器	皿	13.7			1.8	1/12	7.5YR7/4 にぶい橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
69	1区	池41	土師器	皿	12.7			2	1/8	2.5Y7/2 灰黄色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む
70	1区	池41	土師器	皿	13.6			2.1	1/12	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
71	1区	池41	灰釉陶器	椀		5.1		2.5	1/1	5Y7/1 灰白色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む
72	2区	土坑2	土師器	皿	10.1			2.25	1/6	7.5YR7/6 橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・金雲母・赤色粒子を含む
73	2区	土坑2	須恵器	椀		6.4		1.4	1/7	N6/0 灰色	良	密　φ0.5mm以下の長石・金雲母を含む
74	2区	平安期整地層	土師器	皿	9.0		1.4		1/6	10YR8/3 浅黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・黒色粒子を含む
75	2区	平安期整地層	土師器	皿	6.7		1.2		1/8	10YR7/4 にぶい黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・金雲母・赤色粒子を含む
76	2区	平安期整地層	土師器	皿	11.1		1.2		1/7	7.5YR6/4 にぶい橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む
77	2区	平安期整地層	土師器	皿	8.8			1.0	1/5	10YR8/3 浅黄橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・金雲母を含む
78	2区	平安期整地層	土師器	皿	10.8			1.05	1/10	2.5Y7/2 灰黄色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャートを含む
79	2区	平安期整地層	土師器	皿	11.4		1.0		1/7	2.5Y8/2 灰白色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・金雲母を含む
80	2区	平安期整地層	土師器	皿	7.9		1.3		1/4	10YR8/2 灰白色	良	密　φ0.1mm以下の長石・石英を含む
81	2区	平安期整地層	土師器	皿	10.0			1.5	1/5	10YR8/2 灰白色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャートを含む
82	2区	平安期整地層	土師器	皿	10.7			1.1	1/10	10YR8/2 灰白色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
83	2区	平安期整地層	土師器	皿	11.8		1.6		1/8	2.5Y7/2 灰黄色	良	密　φ0.2mm以下の長石・石英・金雲母・赤色粒子を含む
84	2区	平安期整地層	土師器	皿	16.1			2.7	1/6	10YR6/2 灰黄褐色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャートを含む
85	2区	平安期整地層	土師器	皿	12.7			3.0	1/8	10YR8/2 灰白色	良	密　φ1.0mm以下の長石・金雲母・赤色粒子を含む
86	2区	平安期整地層	土師器	皿	13.5			2.8	1/8	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・金雲母・赤色粒子を含む
87	2区	平安期整地層	土師器	皿	15.4			2.7	1/6	10YR8/3 浅黄橙色	良	密　φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
88	2区	平安期整地層	土師器	皿	15.5			2.4	1/12	10YR4/1 褐灰色	良	密　φ0.2mm以下の長石・石英・金雲母を含む
89	2区	平安期整地層	土師器	皿	14.9			2.2	1/12	10YR6/2 灰黄褐色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・金雲母を含む
90	2区	平安期整地層	土師器	皿	15.8			3.2	1/10	10YR8/2 灰白色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む
91	2区	平安期整地層	土師器	皿	15.2		3.25		ほぼ完形	10YR8/3 浅黄橙色	良	密　φ2.0mm以下の長石・石英・チャートを含む
92	2区	平安期整地層	土師器	皿	18.8			2.5	1/12	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
93	2区	平安期整地層	土師器	皿	15.4		3.05		9/10	10YR7/3 にぶい黄橙色	良	密　φ2.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
94	2区	平安期整地層	灰釉陶器	壺		4.0		2.6	1/4	5Y7/1 灰白色	良	密　φ0.5mm以下の長石・金雲母・黒色粒子を含む
95	2区	平安期整地層	黒色土器	椀	14.4			3.7	1/8	N2/0 黒色	良	密　φ0.2mm以下の長石・石英・雲母を含む
96	2区	平安期整地層	黒色土器	椀	16.0			3.5	1/8	N2/0 黒色	良	密　φ0.2mm以下の長石・石英・金雲母を含む
97	5区	整地層1	緑釉土製円塔			6.5	2.85			10YR8/3 浅黄橙色	良	密　φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
98	5区	整地層1	緑釉土製円塔			5.7	2.2			7.5YR8/4 浅黄橙色	良	密　φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む
99	5区	整地層1	緑釉土製円塔					2.5		7.5YR8/4 浅黄橙色	良	密　φ2.0mm以下の長石・石英・チャートを含む

表6　下層出土土器観察表

	調査区	遺構・層	器種	口径(cm)	器高(cm)	残高(cm)	底径(cm)	残存状況	色調・焼成・胎土	調整・特徴
100	1区	整地層	壺	17.8		2.55		1/5	7.5YR8/2灰白色，焼成良，胎土精良(φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート，クサリ礫少量)	頸部外面タテハケ，口縁部内外面ヨコナデ。
101	1区	整地層	甕			3.2		破片	7.5YR7/4にぶい橙色，焼成良，胎土良(φ0.5㎜以下の長石・石英)	口縁部内外面ヨコナデ。
102	1区	土坑57	壺	9.0		5.0		(口縁～頸部)1/5	10YR8/2灰白色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・金雲母，クサリ礫少量)	頸部外面タテハケ，内面はナデ。口縁部内外面ヨコナデ。
103	1区	土坑57	甕　底部			2.8	2.9	底部完形	2.5Y7/1～6/1灰白～黄灰色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・クサリ礫)	内外面ともタテハケ。底部外面はナデ。
104	1区	土坑57	高杯	15.6		2.4		1/5	10YR8/3浅黄橙色，焼成良，胎土精良(φ1.0㎜以下の長石・石英・金雲母，クサリ礫少量)	内外面とも縦方向のヘラミガキ。
105	2区	流路2	甕	16.8		8.7		1/4	7.5YR7/3にぶい橙色，焼成良，胎土やや粗(φ6.0㎜以下の長石・石英・チャート，赤色粒子多量)	口縁部～頸部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコハケ，内面横方向ケズリ。
106	2区	流路1	壺	10.4		7.6		(口縁～肩部)2/5	2.5Y7/1灰白色，焼成良，胎土良(φ3.5㎜以下の長石・石英・チャート・金雲母・クサリ礫)	口縁部内外面・頸部内面ヨコナデ。頸部から体部外面タテハケ。体部内面縦方向ナデ。
107	2区	流路1	壺	8.2		8.55		(口縁～肩部)2/5	10YR8/2灰白色，焼成良，胎土良(φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・金雲母)	口縁端部から口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面タテハケ。体部外面斜め方向ハケ，内面ナデ。
108	2区	流路1	壺	15.6		14.7		(口縁端部)1/1 (体部)2/5	7.5YR7/4にぶい橙色，焼成やや軟，胎土良(φ4.0㎜以下の長石・チャート・クサリ礫多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面平行条線による回転タタキのちナデ消し。内面上半縦方向ナデ。胴部内面横方向ナデ，ミガキ状。
109	2区	流路1	甕	13.6		3.5		(口縁部)2/5	5YR7/6橙色，焼成良，胎土良(φ1.5㎜以下の長石・石英・金雲母・チャート多量)	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテハケ，内面ナデ。
110	2区	流路1	甕	15.1		9.7		(口縁～肩部)1/4	10YR7/2にぶい黄橙色，焼成良，胎土良(φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ，内面ナデ。
111	2区	流路1	甕	14.6		14.5		(口縁～体部)1/3	5YR7/4にぶい橙色，焼成やや軟，胎土良(φ3.0㎜以下の石英・チャート，長石多量，クサリ礫ごく少量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面タテハケ。
112	2区	流路1	甕	17.4	25.5		3.7	1/5	5YR6/4にぶい橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・金雲母)	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面ヨコハケ。体部外面タテハケ，内面ナデ。底面ナデ。
113	2区	流路1	甕　底部			4.2		(底部)4/5	10YR7/3にぶい黄橙色，焼成やや軟，胎土良(φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・クサリ礫多量)	体部外面タテハケ，内面「クモの巣」状ハケ。底面ナデ。「×」線刻あり。
114	2区	流路1	甕	12.6		3.9		(口縁～肩部)1/6	7.5YR5/2灰褐色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・チャート，赤色粒子少量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向ハケ，内面ヨコナデ。
115	2区	流路1	甕	14.0		6.4		1/6	10YR8/3浅黄橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の石英・クサリ礫，長石多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ，内面ナデのちハケ。
116	2区	流路1	甕	13.0		7.3		(口縁～肩部)1/3	7.5YR6/2灰褐色～10YR7/2にぶい黄橙色，焼成良，胎土良(φ3.0㎜以下のチャート・クサリ礫多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ，内面ヨコハケ。
117	2区	流路1	甕　底部			6.7	4.3	2/3	7.5YR7/4にぶい橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・黒色粒子)	体部外面タテハケ，内面ヨコハケ。底面ナデ。
118	2区	流路1	鉢	15.3	8.75		3.9	完形	7.5YR6/4にぶい橙色，焼成良，胎土良(φ3.0㎜以下の石英・チャート，長石多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向ハケ，内面ナデ・指オサエ。底面ヘラケズリ。
119	2区	流路1	鉢	14.5		6.6		(口縁～体部)1/6	2.5Y6/2灰黄色，焼成良，胎土良(φ1.5㎜以下の長石・チャート・赤色粒子・金雲母多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向ハケ，内面ヨコナデ。
120	2区	流路1	鉢	14.2	8.5		3.65	3/5	5YR7/6橙色，焼成良，胎土良(φ3.0㎜以下の長石・石英・金雲母・チャート)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向ハケ，内面ヨコナデ。下半ヨコハケ。底面ナデ。
121	2区	流路1	鉢	13.2		5.75		(口縁～体部)1/3	5YR6/6橙色，焼成良，胎土良(φ3.0㎜以下の長石・石英・金雲母・クサリ礫)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向ハケ，内面ヨコナデ。
122	2区	流路1	鉢	16.2		7.7		1/4	2.5Y8/3淡黄色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の石英・クサリ礫，長石多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ，下半ハケ，内面ナデ。
123	2区	流路1	台付鉢？脚台部			5.5	6.8	1/3	7.5YR8/3浅黄橙色，焼成良，胎土精良(φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート，クサリ礫少量)	底部外面タテハケ，内面「クモの巣」状ハケ。脚部外面指オサエ・ナデ。裾部外面タテハケ，内面ヨコハケ。
124	2区	流路1	甕	15.4	26.7			3/5	10YR6/3にぶい黄橙色，焼成良，胎土良(φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケのち頸部にヨコハケ。内面上半は横方向，下半は縦方向ヘラケズリ。底部指オサエ痕。
125	2区	流路1	甕	14.5		8.1		(口縁～肩部)1/6	7.5YR8/3浅黄橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・クサリ礫多量)	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテハケ。体部外面ヨコハケ，内面横方向ヘラケズリ。
126	2区	流路1	甕	16.2		5.9		(口縁部)2/5	10YR6/2灰黄褐色，焼成良，胎土良(φ6.0㎜以下の長石・石英・チャート多量)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコハケ，内面横方向ヘラケズリ。
127	2区	流路1	甕	20.4		7.1		1/8	2.5Y7/3浅黄色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・金雲母)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面平行条線による回転タタキ，内面ナデ。
128	2区	流路1	鉢（甑）			6.4	3.6	(底部)2/5	7.5YR6/2灰褐色，焼成良，胎土良(φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート多量)	内外面ともナデ。底部に焼成前穿孔。
129	2区	流路1	鉢	13.7		6.5		3/5	7.5YR7/4にぶい橙色，焼成やや軟，胎土良(φ4.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子多量)	頸部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ，下半指オサエ，内面ヨコハケ。
130	2区	流路1	高杯	20.1		6.4		1/6	10YR7/3にぶい黄橙色，焼成良，胎土良(φ0.5㎜以下の長石・石英・金雲母)	口縁部内外面ヨコナデ。杯部外面ヨコハケ，内面横方向ヘラミガキ。
131	2区	流路1	高杯脚部			7.8	9.7	1/6	7.5YR8/4浅黄橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の長石・石英・クサリ礫)	穿孔４箇所。柱部外面タテハケ，内面上部ンポリ痕，下部ヨコナデ。裾端部ヨコナデ。
132	2区	流路1	高杯脚部			10.8	12.9	4/5	10YR8/2灰白色，焼成良，胎土良(φ0.5㎜以下の長石・石英・クサリ礫)	穿孔３箇所。外面縦方向ヘラミガキ。柱部内面ケズリ・ヨコハケ。裾部内面～端部ヨコナデ。
133	2区	流路1	器台	17.8		9.0		3/5	10YR8/3浅黄橙色，焼成良，胎土良(φ2.0㎜以下の石英・長石・金雲母・チャート，クサリ礫少量)	穿孔３箇所。口縁端部ヨコナデ。受部内外面・柱部外面縦方向ヘラミガキ。柱部内面ナデ。

5　ま と め

（1）本調査のまとめ

以下では本年度の調査において明らかになった事柄を項目ごとに記述し、まとめとする。

阿弥陀堂跡について

１区では、試掘調査（調査34）の４・13トレンチで地表下0.2m前後に検出された阿弥陀堂基壇地業と考えられた版築状の土層の面的な広がりを検出することが最大の目標であった。たしかに版築状の土層は西側調査区で検出したが、精査の結果、下層にガラスなどを含んでいることが明らかとなり、近代以降に動かされた土層であることが判明した。１区では全面的に近代以降に整地が行われ、地表下0.6m程度の地山（白川砂）よりも上位の整地層などは削平され一切残存しておらず、阿弥陀堂に関する遺構も皆無であった。一方、阿弥陀堂推定地の中央にあたる２区では元来のベース面（白川砂）が北東（標高48.6m）から南西（標高47.8m）に緩やかに低くなる地形であり、法勝寺建立時に北東に薄く南西に厚く積み土による整地を行って、平坦面（標高48.3～48.8m）を確保している。この整地層の上面に厚さ0.05～0.1mの小礫・粘土・砂混じり粘土の互層に積み上げられた版築層を調査区壁面４箇所で確認した。版築層が確認できたのは整地層の西寄り、おおよそ東はY=-19,621、西はY=-19,632、北はX=-109,455、南はX=-109,545の範囲であった。建物基壇に伴う版築層とみられ、検出地点から阿弥陀堂の基壇である可能性が高いと考える。阿弥陀堂は九体の阿弥陀仏を納める２間×11間身舎に四面に庇・孫庇が巡り、さらに南に５間以上の廊が付属する南北棟が想定されている。この建物の土台となる基壇は幾回りか大きいと考えられるので、検出した範囲はごく一部にとどまる。また、基壇の端部に関連する遺構を検出できなかったので正確な位置は明らかにはできなかった。しかし、少なくともその一部と考えられる版築層を検出したことは、これまで文献史料などの検討によって推測されていた阿弥陀堂の位置を裏付ける成果と評価できる。

八角九重塔西側の池について

１区の東西方向調査区の東端で、池の西肩を検出した。池は白川砂の堆積による地山を掘り込んで造られており、検出した西肩口は標高48.9mで、なだらかに東へ下がり、２m東で段をもって0.4m下がって池底に至る。検出した範囲での池底は平坦で、標高は48.3mである。この西肩の位置はこれまでの調査で判明している位置と大きな齟齬はない。今回検出した池41には貼石などの護岸は施されていなかった。また、陸地部で景石とみられる大きな石を検出していることから、後世に削平されてしまっているが、西岸に庭園が形成されていたと考えられる。

八角九重塔北側の状況について

３～５区の断割調査の成果より、まだ詳細な出土遺物の検討などが必要であるが、塔北側では塔の造営当初と塔焼失後の再建時の大きく２つの時期の遺構を検出したと考えられる。

まず、塔の造営当初の状況は、金堂の前面には整地層Ⅱ（灰オリーブ色粘質土、上面の標高

49.9m前後）による平坦面が広がり、５区の南端辺りで南へ大きく下がって、池の北肩となる。北肩は直線的ではなく、南北に出入りがあるようである。文献史料の記述にあるように、北側に池が回り込んで金堂前面の陸部とは縁の切れた中島に塔が建っていたことを確認した。

塔の真北にあたる地点では、池は後に埋められてしまうことが判明した。４区では厚さ0.4～0.8mの積土によって池を埋め立てて平坦面を確保した上で、砂層を積んで、掘込地業が構築されることがわかった。掘込地業は、平らな底面より0.1～0.2mの厚さを一つの単位として粘土・粘質土に細砂を混ぜ込み、長径0.2～0.3mのチャート系の礫を入れて固める。上層は褐色系の粘質土を主体として、0.05～0.1mの厚さで水平に積む。掘込地業の幅は約５mあり、調査33で検出した塔基壇の外周に検出した「地業Ⅳ・Ⅴ」に相当するとみられる。５区では池の埋立て層の上面を厚さ0.2m前後の整地層Ⅰで平坦に整地する。これら池を埋め立てて行われた掘込地業や整地は、金堂前面と塔の建つ池の中島を陸続きに変更するもので、承元２年（1208）に焼失した塔の再建（建保元年[1213]）に伴って行われたと考えられる。再建に伴って資材などを運ぶために造られた搬入路としても機能していたと考えられる。５区北拡張区で検出した東西溝（溝１）は整地層Ⅰの上面より掘削されている。調査21で検出している東西溝の１本と規模や瓦を多く含む埋土の状況などが類似しており、同一の溝と考えられる。池を埋めた後に、金堂の前面と塔との間に設けられた排水と区画を兼ねた溝とみられる。

寺域西限について

寺域の西限は広道、現在の岡崎道と考えられてきた。実際に調査６・18で検出した南北方向の溝は、これまで西限築地に関連する溝と考えられてきた。本調査の２区西拡張１は、この溝の南延長部を検出することを目的として設定したが、溝状の遺構は検出されず、土坑１・２を検出した。土坑１・２は平安時代整地層を切り込んで成立しており、土坑２からは鎌倉時代前期頃の土師器が出土している。先の調査６・18で検出した溝は幅が２m前後と広く、平安時代後期以降、室町時代にかけて何度か掘り直された痕跡があるという（文献７・19）。

今回溝という形では検出できなかったが、上部が削平された下部の凹み部分を土坑状に検出したことも否定できない。ただし、法勝寺造営時とみる平安時代の整地層が西拡張区１でも検出していることや建物の基壇と考えられる版築層を西拡張区２で確認していることなどから、西拡張区１に西限築地に関連する溝が検出されると、あまりにも寺域の西端と主要伽藍の建物が近すぎるという懸念があり、寺域西限については現時点では結論を保留したい。

「白河院」に関連する遺構について

明確な遺構は、１区で検出した東西溝（溝60）のみである。近代以降の攪乱が多く、残存状況は良くないが、ほぼ正方位にのる、幅の広い溝で、上層には礫を敷くように多く含んでいる。近辺に建物などの存在が考えられる。

岡崎遺跡について

１区で土坑と小溝、２区で自然流路を検出した。いずれも古墳時代前期（庄内式期～布留式期）である。２区の流路１からは、ほとんど磨滅のない完形に近い土器が多量に出土しており、近辺

に集落があったことを示している。　（高橋）

（2）平成22・23年度調査の総括

平成22年度および平成23年度に実施した法勝寺跡範囲確認調査（調査33・36）の総括を行う。この範囲確認調査は、法勝寺推定境内の南半を対象としたことになる。これまでに行った法勝寺跡の調査では、主要伽藍のうちの金堂の位置や園池の一部は明らかになっていたが、八角九重塔や阿弥陀堂の位置は明らかになっておらず、園池についてもその広がりは不明な部分が多かった。今回の２年度にわたる範囲確認調査では、明治時代以降の度重なる京都市動物園の施設建て替えや戦後の進駐軍の駐車場に接収された時の整地などにより、遺構の残存状況が悪かったところもあるが、法勝寺主要伽藍南半の遺構の状況を明らかにすることができた。

平成22年度（調査33）

八角九重塔基壇の掘込地業とその外周の地業、その東で園池を検出した。八角九重塔基壇の掘込地業は、南半部の四辺（五隅）を検出した。掘込地業は平面八角形で、一辺の長さが12.5～14.5m、東西幅は約32.5mであった。ここから復元される総面積は約820㎡となる。掘込みの深さは検出面から1.4～1.6mで、径1.5m以上の土坑を連続して掘り重ねて構築している。土坑はそれぞれ、下層を径50～70㎝の川原石と黄橙色粘土で固め、上層には粗砂や小礫を混ぜた粘土層と混じり気のない粘土層を交互に厚さ３～10㎝の単位で水平に積み版築を行っていた。基壇の上部は削られて失われており、建物の柱位置を知る痕跡は認められなかったが、掘込地業の東面では方形の凝灰岩が敷かれた状態で検出し、基壇規模の復元の手がかりを得ることができた。また、これまで、創建時の塔は檜皮葺と考えられていたが、今回の調査で出土した梵字文の軒丸瓦・軒平瓦などを用いた瓦葺の塔を創建時の形態と考えることが妥当との見解を得た。

これらの調査成果から塔の基壇復元を直径約31mとし、その上に初層一辺３間（中央10尺・脇間９尺）平面の直径約20m（67尺）の外側に一辺５間の吹き放しの裳階をつけた、高さ81m（27丈）の瓦葺の塔復元案を提示することが可能となった[6)]。

金堂中心から塔地業中心間の距離は約126m、金堂基壇南端から塔地業北端間の距離は約96mとなる。八角九重塔の位置と規模、構築方法が明らかになった重要な成果といえる。

また、この八角九重塔基壇掘込地業の外周、東と南に、さらに地業が施されていることが明らかになった。この地業は、基盤層の砂層の動きを抑制するためのものとみられ、当時の土木技術を知る重要な成果である。

園池は、塔地業の東側約16.5mで検出した。４時期の変遷がある。造営当初の池底は標高49.0mである。塔基壇掘込地業の東端部検出面は49.9m前後で約0.9m低い。

平成23年度（調査36）

阿弥陀堂推定地周辺と、八角九重塔北側の調査を行った。

阿弥陀堂周辺の調査では、阿弥陀堂推定位置付近から建物基壇の一部と考えられる版築がみつかった。残存状況は極めて悪く、部分的な検出に留まり、その全容を明らかにすることはできな

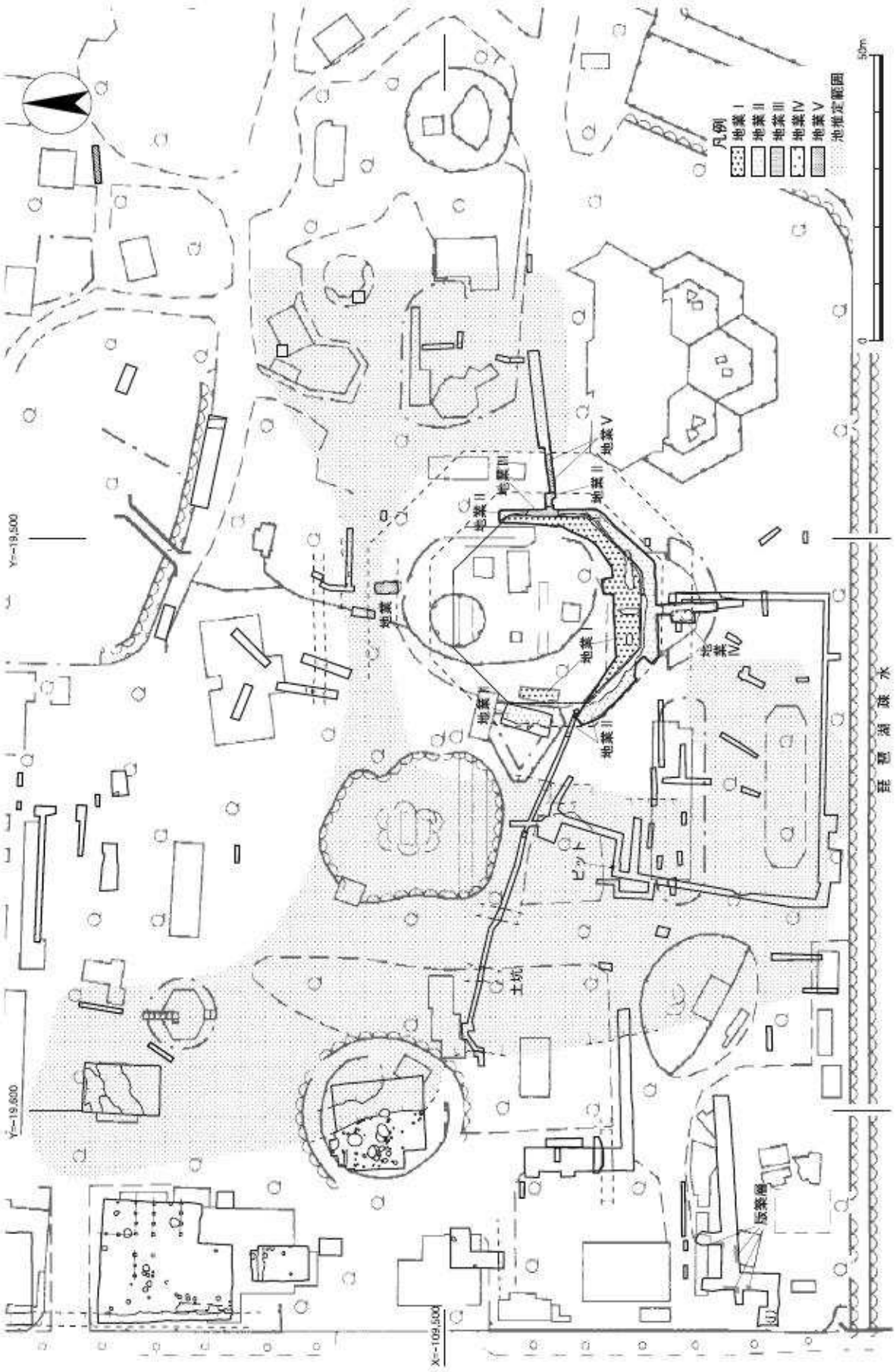


図33　法勝寺跡南半　平安時代遺構配置図（１：1,000）

かったが、阿弥陀堂の基壇にかかわるものである可能性が高い。この版築は、八角九重塔の基壇地業中心から西へ約110mの位置にある。塔と阿弥陀堂の間には園池があり、本調査の１区東端で西汀を検出した。池の西汀は肩口が標高48.9mでなだらかに下がり、池底は標高48.3mであった。塔の東側で検出した池の底より約0.7m低く、池の底面が東から西に傾斜していたことがわかる。また、32・35では池の塔側の東汀を検出しており、塔と阿弥陀堂の間の池は約40mの幅があったことが明らかになった。

冨島義幸氏によれば、『経範卿記』建長五年（1253）十二月二十二日条には、阿弥陀堂基壇東面から東１丈５尺に高座・礼盤を置き、その東は池の仮板敷となり舞台などの舗設されたことが記載されており、舞台は高座から東２丈程の位置にあったので、仮板敷（池西汀）は阿弥陀堂基壇東端から高座などの寸法を除いて、１丈５尺から３丈５尺の位置まででせまっていたと解釈される[7]。つまり、池西汀から西へ５～11mの位置に阿弥陀堂基壇の東端が位置していたという。本調査で検出した版築は、池西汀から西約35mの位置にあり、阿弥陀堂の基壇の一部である可能性が高いが、その規模や正確な位置の特定には至らなかったものの、基壇の一部と認めれば、西端に近い位置と考えてよいかも知れない。今後文献史料も参考に阿弥陀堂の位置を復元していく必要があるだろう。

八角九重塔の北側については、池と中島・塔との関係で新しい知見を得ることができた。これまでは、文献史料の記述から八角九重塔は中島上に建ち、周囲を池がめぐるものと解釈されていたものの、調査などで塔の北側で池に関する遺構や堆積は確認されて来なかった。今回の調査では、金堂の前面に施工された整地層とともに、法勝寺創建時の池の北肩を、復元した塔基壇の北辺から約20m北側で検出した（本調査５区）。この塔の北側の池は、後に埋められ、その上に塔基壇の外周の掘込地業が構築される（本調査３・４区）。これらの状況から、当初は北側に池が回り込み、塔は池の中に独立した中島に建っていた。しかし、承元２年（1208）に焼失し、その再建に伴って塔の北側部分の池は埋められ、当初の基壇の補強のためさらに外周に掘込地業が付加される。再建された塔は金堂前面の整地面と陸続きとなり、池に岬状に張り出した元の中島に建てられたとみられる。

京都市動物園内では、これまで30次を超える発掘調査・試掘調査を行っている。今回の範囲確認調査では、これまでの調査では明らかになっていなかった八角九重塔・阿弥陀堂周辺の状況を知る重要な成果があった。また、法勝寺主要伽藍の配置だけでなく、平安時代後期の土木・建築技術を知る重要な成果があったといえる。今後、京都市動物園内で開発工事などがあった場合は、今回の成果をもとに遺跡の保存を図る必要があるだろう。なお、平成22・23年度の調査で検出した遺構は、すべて地中保存している　（家原）

（３）昭和54年の試掘調査

昭和54年に京都市動物園内において獣舎建設に先立ち試掘調査が実施されている（図10・11-調査４）。当時は、その成果についてあまり重要視されていなかったが、今回改めて平面図を全体図（図33参照）に落とし込み、その内容を点検し直したところ、昨年度の発掘調査（調査33）において検出した八角九重塔の基壇掘込地業の一部を検出していたと評価できる。この調査については、報告がなされていないため、この場を借りて略報告しておきたい。

調査期間は昭和54年（1979）12月19日から26日、東西４m、南北8.5mの方形の調査区を設定した。調査地点の地表面の標高は50.0～50.4mで、地表下0.7～1.0mまでの現代盛土を除去し、遺構面に達する。調査区の西約１／３程度の砂層をベースとして、東約２／３の粘質土層が溝状に落ち込むように検出された。粘質土層には、落ち込み肩部の方向に対して斜めに、一定の間隔をおいて長径0.3～0.5mの角礫・亜角礫が帯状に入る。この状況は、調査33で検出した八角九重塔基壇の掘込地業に良く似ており、実際に全体図に位置付けると、調査33の「地業Ⅱ」に相当することがわかる。出土遺物は整理用コンテナに20箱あり、ほとんどが瓦であった。

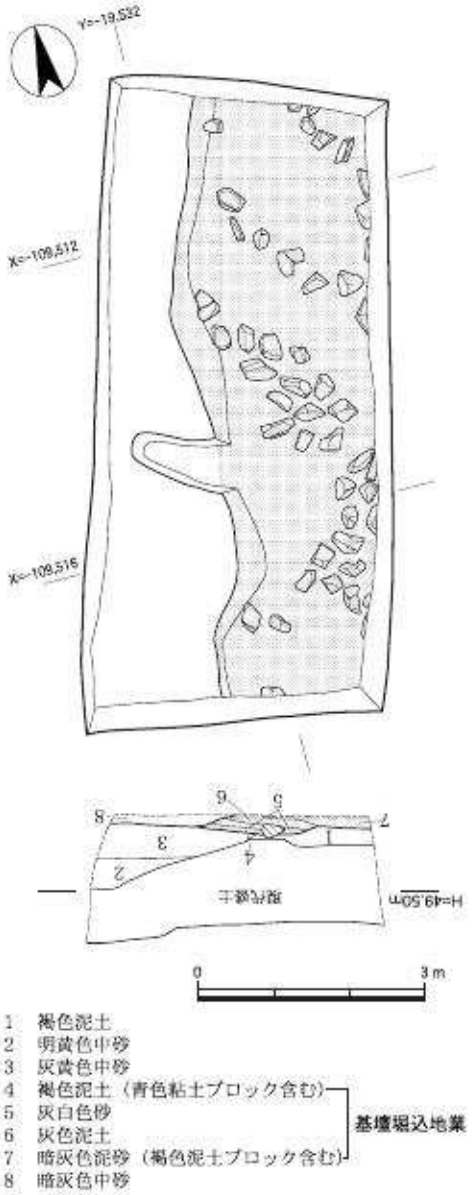


図34　昭和54年度試掘調査（調査４）
遺構実測図（１：100）

なお、この当時まだ国土座標は使用されておらず、ここに掲載した平面図の座標は、作成された調査区の位置図（平板図）を基に、全体図の中に位置付け起こし直したものである。（高橋）

註

1）　京都市動物園『京都市動物園100周年記念誌　京都市動物園100年のあゆみ』　2003年

2）　『法勝寺御塔供養呪願文』記載の「金堂南面、瑤池中心、更課二馬釣一、新造二雁塔一」を根拠として、金堂の南にある池の中島に塔が建てられたと解釈され、法勝寺伽藍の復原がなされている。

3）　本章５．まとめ（３）参照。

4） 西田直二郎「法勝寺遺趾」『京都府史蹟勝地調査会報告　第六冊』京都府　1925年所収の第六図参照。

5） 整理の段階で，抽出や組み換えを行ったため，最終的に表３に示したように遺物は計66箱に増えている。

6） 冨島義幸「法勝寺八角九重塔の復元について」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』京都市文化市民局　2011年

7） 冨島義幸「法勝寺の伽藍形態とその特徴」『日本建築学会計画系論文集』第516号　日本建築学会　1999年

Ⅱ　角社瓦窯跡

1．調査経過

この調査は文化庁国庫補助事業による角社瓦窯跡の発掘調査である。賀茂川の西、京都五山の送り火の一つ、船形で知られる舟山から南西に延びる台地の先端には、西賀茂瓦窯跡群が存在している。これは平安京創建時の瓦生産を担った瓦窯群であり、その中に角社瓦窯跡がある。

角社瓦窯は大将軍神社（角社）の周辺に設けられた瓦窯跡で、昭和45～46年に平安博物館を主体とした調査団によって発見、調査された。大将軍神社は西賀茂の台地先端にあって、低い独立丘陵上に鎮座している。その丘陵の西斜面には角社西群４基、東斜面には東群２基とさらに１基の焚口が確認されている。いずれも有牀式の平窯である。これらは調査後に埋め戻され保存されていた。

今回、宅地開発の計画を受けて、東群の一部とその周辺を発掘調査することとなった。調査対象地の周辺は既に宅地が建ち並んでいるが、対象地は果樹園と庭園に利用されており、一部に倉

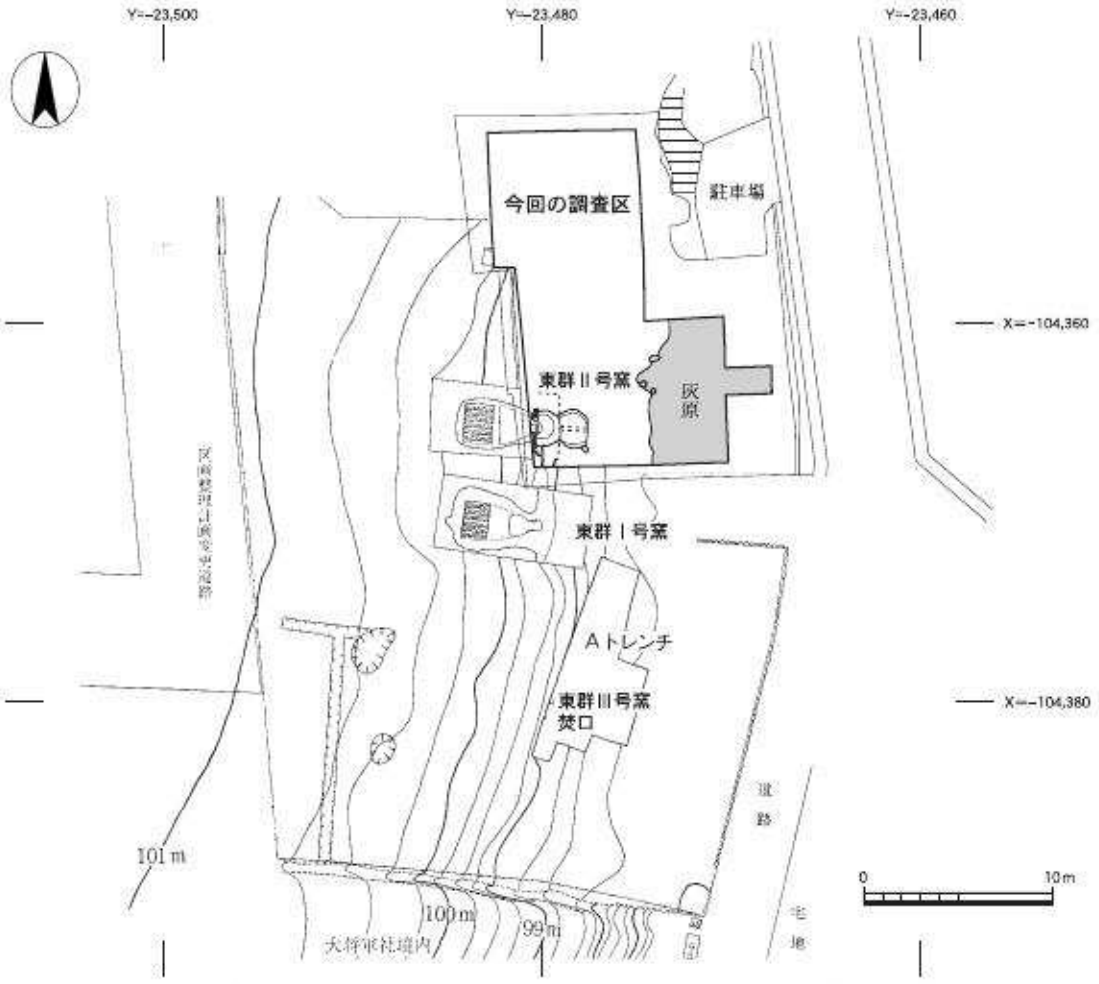


図35　調査区配置図（１：400）　※昭和46年の図面に今回の調査区を記載

図36　作業風景

図37　大将軍神社

庫が建っていた。調査は排土処理の関係上、南北（北区・南区）に分け、北区から実施し、終了後反転して南区を行った。その結果、北区では西から東に下がる自然地形を検出したものの窯跡は検出できなかった。一方、南区では調査区の西端で昭和46年に確認された角社東群Ⅱ号窯の焚口部分を再検出した。また、新たに調査区の東側ではⅡ号窯に伴う灰原を検出することができた。最終的に南区の東側を一部拡張し、灰原がさらに東へ広がることを確認して調査を終えた。

なお、検出した窯については、昭和46年度の調査成果を尊重してⅡ号窯の名称を踏襲して報告する。（吉崎）

2．周辺の調査

西賀茂瓦窯群跡は、明治末年に田坂謙一氏が大将軍神社付近（角社瓦窯跡）より古瓦を採取したことにより、その存在が明らかになった。その後、大正２年に梅原末治氏が実地踏査し、近隣住民から鴟尾の破片を寄託されたが、この時には瓦窯跡としての認識はなく、西賀茂廃寺として取り扱われ、調査等は行われなかった[1]。一方、昭和初期に平安京跡から出土する古瓦に興味をよせていた政所政治郎氏によって、再び同場所が採掘され窯体や瓦を採取されたといわれるが、瓦窯を見つけるに至らなかったようである。このような中、昭和５年に木村捷三郎氏が、岩倉幡枝地域・西賀茂地域に瓦窯が点在していることを確認し、これらが『延喜式』木工寮車載項記載の栗栖野瓦屋の一部であることを明らかにした[2]。これを受け、昭和８年に京都府史蹟勝地保存委員会が、同地区を踏査し、木村氏の想定を追認、さらに同報告書内に西方寺の北方の丘陵部（西賀茂鎮守庵瓦窯跡）と神光院付近からも瓦が多量に出土することを記している。しかし、この調査でも西賀茂地域の発掘調査を実施するに至らなかった。

はじめて西賀茂瓦窯跡を確認したのは、昭和46年（1971）に推定鎮守庵瓦窯付近での区画整理事業に伴って実施した発掘調査である[3]。調査では、焼成室床面が平坦となる特殊な窯跡１基と有牀式平窯３基を確認している。その翌年、平安博物館を主体とした古代學協會によって、角社瓦窯跡、醍醐ノ森瓦窯跡推定地の本格的な発掘調査が実施された[4]。調査の結果、角社瓦窯跡は大きく東西の支群に分かれ、西群で４基、東群で３基の有牀平窯を確認した。一方の醍醐ノ森瓦窯跡

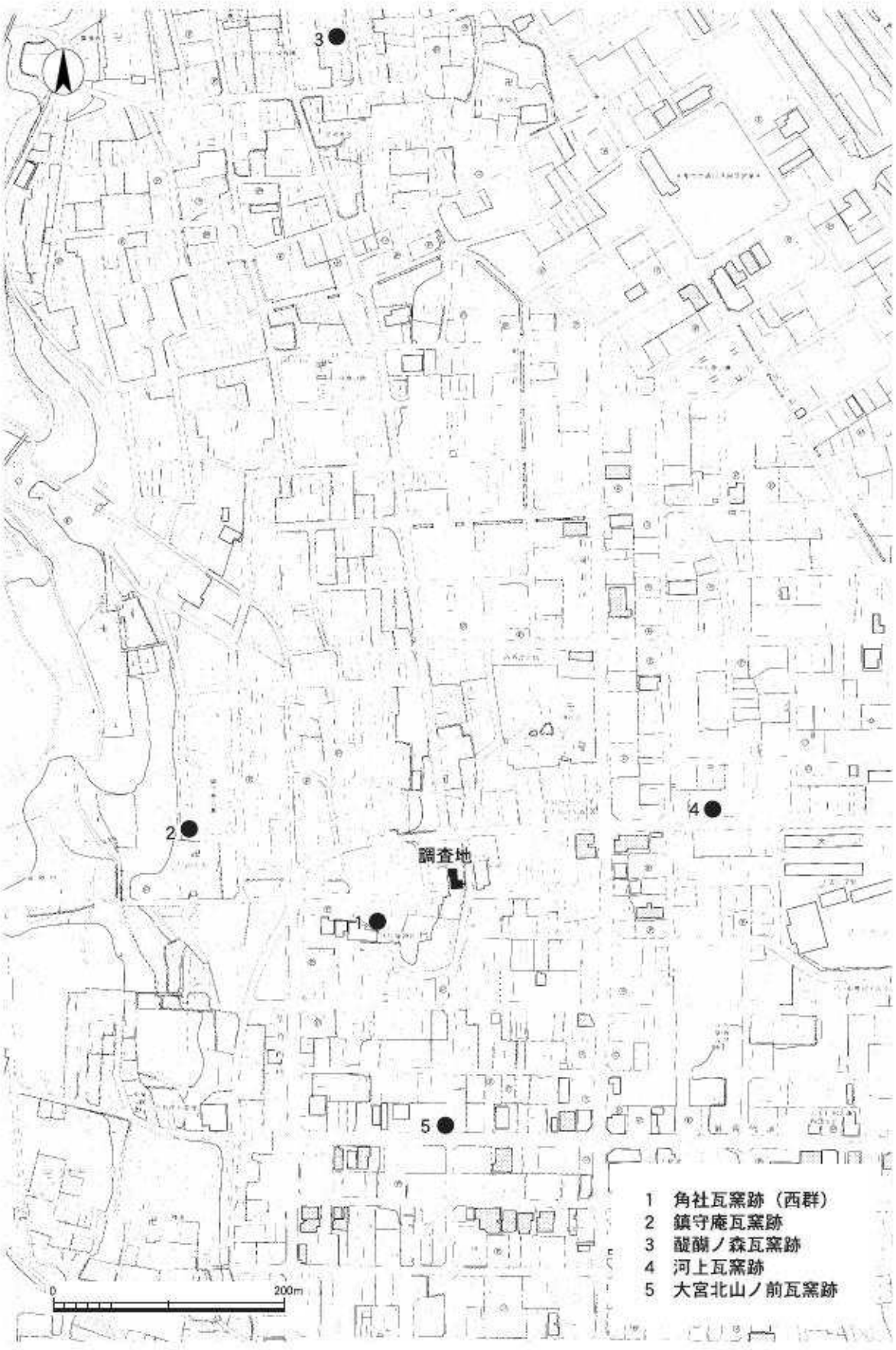


図38　周辺瓦窯跡および調査位置図（１：5,000）

でも平窯を１基検出した。さらにこの調査では、各支群間の出土瓦の同笵関係や笵傷による瓦笵の移動が検討され、大阪府吹田市に所在する岸部瓦窯を含めた、平安京遷都時の瓦生産の様相を明らかにした。

また、角社の東側、西賀茂丸川町では木村捷三郎氏によって、瓦当面に「河上」銘のある平安時代中期の瓦が採集されており、発掘調査はなされていないが河上瓦窯跡として認識されている。さらに、角社の南方、大宮北山ノ前町でも森ヶ東瓦窯と類似した中期の軒瓦が採集されており、大宮北山ノ前瓦窯跡として認識されている。

このように角社の周辺では、平安時代前期から中期の多くの瓦窯群が比較的近接して営まれている状況が明らかになりつつある。（鈴木）

３．遺　　構

（１）基本層位（図39）

調査区の地形は本来、西から東へ下がる斜面地である。現状では敷地の東端に石垣を積んで造成し、平坦地としている。また、北半は一段高く盛り上げられており、敷地としては南が一段低いひな壇状となっている。このため、基本層序は北区と南区、さらに各調査区の東西で大きく異なっている。南区の南壁を参考に述べると、調査区の西端は耕土・旧耕土が約25㎝、その下はすぐに明黄褐色シルト層（10～50㎝大の礫を多量に含む）の地山となる。また、東端では上から現代の盛土（約55㎝）、旧耕土（30㎝）、窯の灰原層（40㎝）と続き、灰原の下が明黄褐色シルト層の地山となる。なお、最も東側に設定した東拡張区では、灰原１の上部に平安時代後期の遺物包含層が認められる（図42）。一方、北区では現代盛土が南区に比べて約1.4mほど高く積み上がっている。

（２）遺構（図40）

検出した主な遺構は、瓦窯とその灰原である。

瓦窯（角社東群Ⅱ号窯）（図41・42）　Ⅱ号窯は前述したとおり、昭和46年の調査で検出された全長４m、焼成室の長さ1.56m、幅2.12m、燃焼室の長さ2.07m、焚口の幅0.65mの平安時代前期の有牀式平窯である。今回、再検出した焚口は両側に高さ50㎝前後の石柱を据えており、両袖は水平に積んだ平瓦で整えられている。焚口の石材は、南側は砂岩、北側はチャートである。い

表７　遺構概要表

時　代	遺　　構
平安時代	瓦窯（焚き口部分）、灰原、溝
平安時代以降	柱穴、土坑

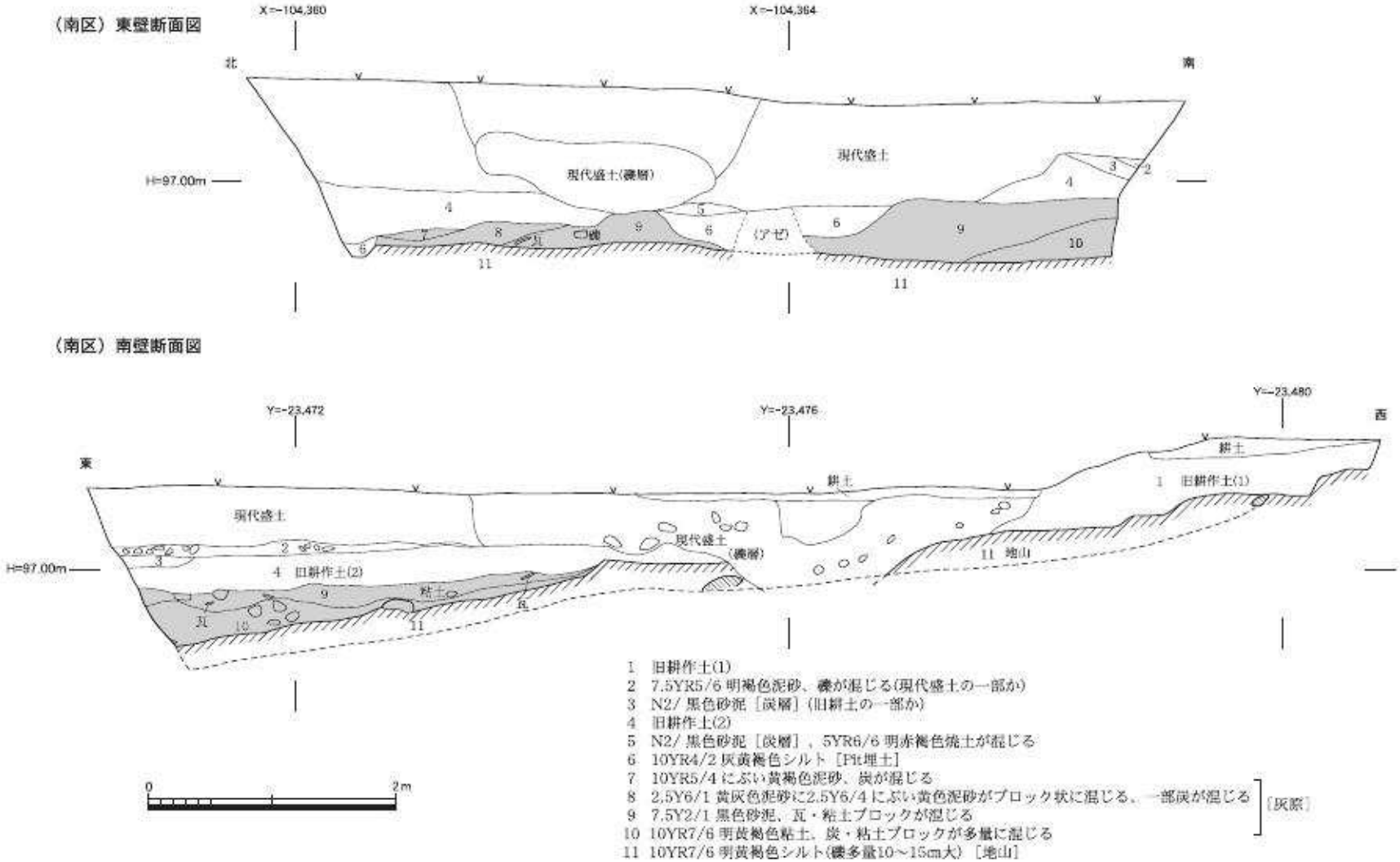


図39　土層断面図（1：50）

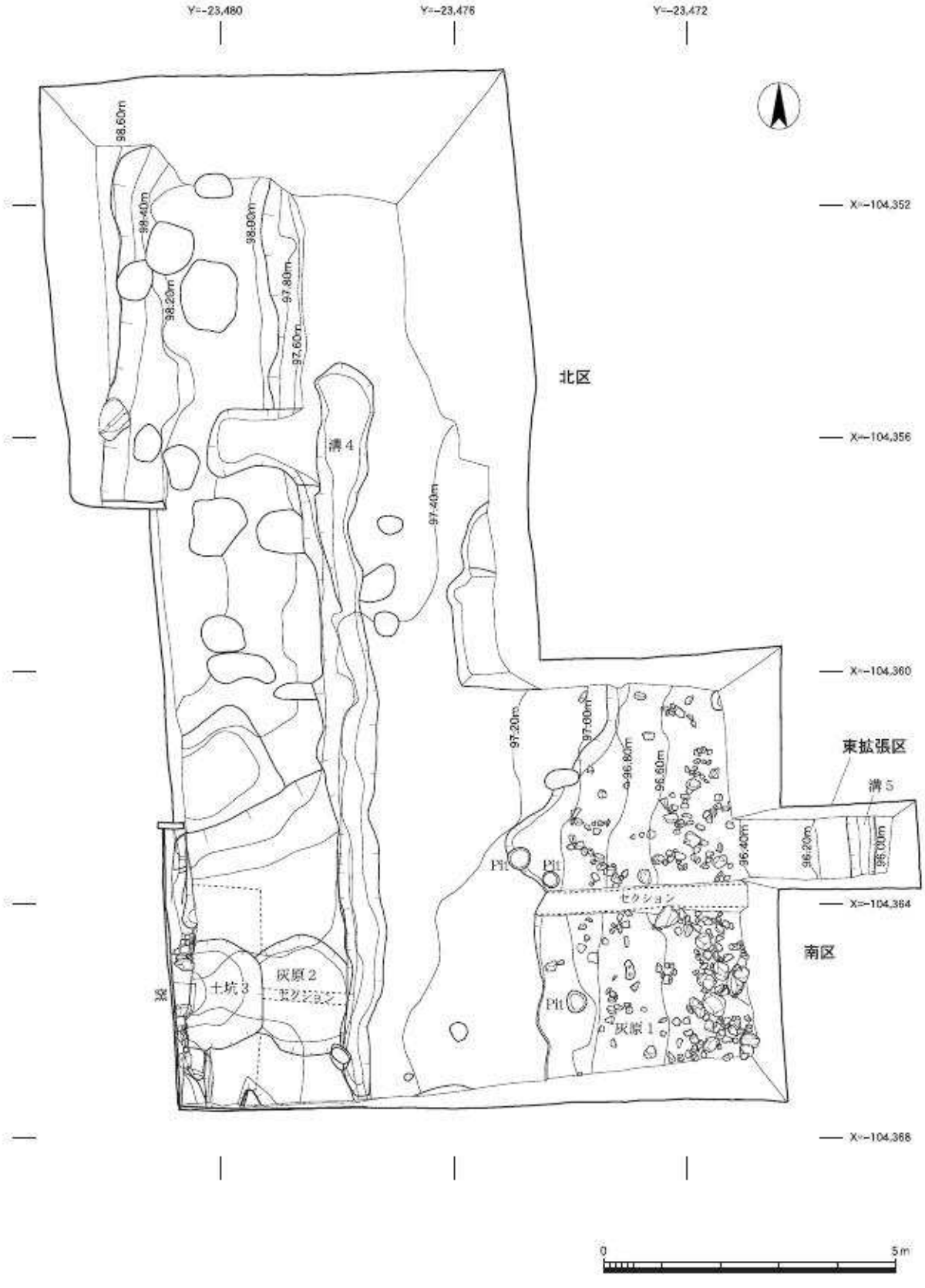


図40　遺構平面図（1：200）

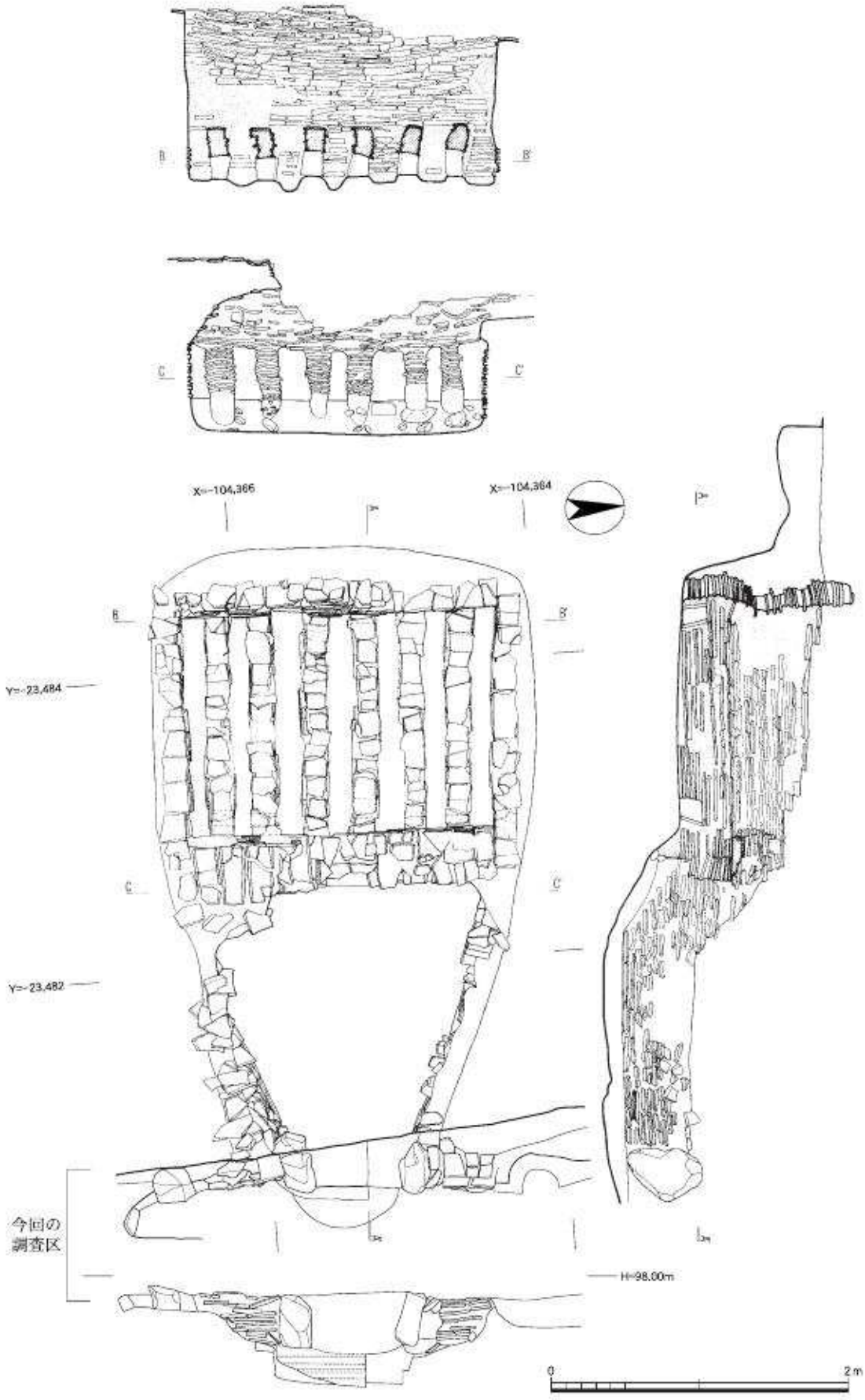
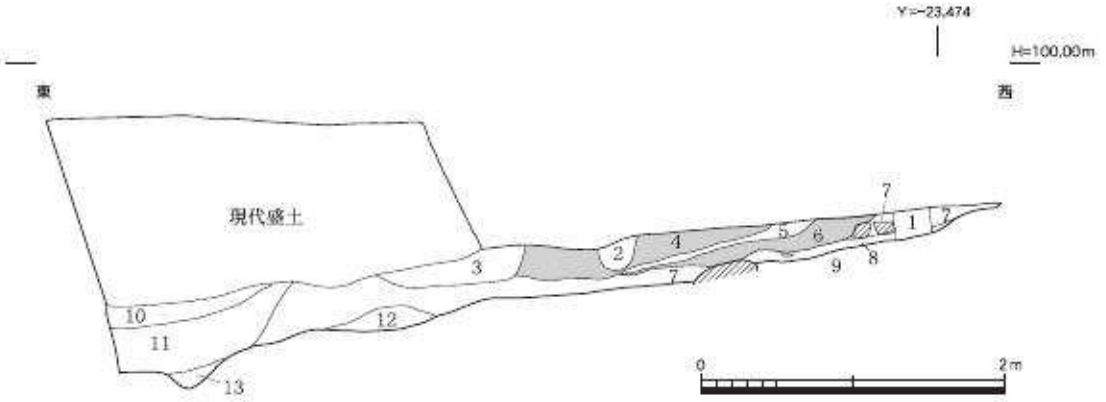


図41　Ⅱ号窯実測図（１：40）　※昭和46年の図面に今回の調査部分を加えて調整



1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、焼土・炭化物少量
2　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、焼土・炭化物少量
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、焼土・炭化物少量
4　2.5Y2/1 黒色土、炭と灰の混じったもの、焼土ブロック少量
5　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（地山に近い）
6　5Y2/1 黒色土、炭と灰の混じったもの、焼土ブロック少量
7　10YR7/6 明黄褐色粘土に炭が混じる、生粘土が多量に混じる
8　10YR3/3 暗褐色砂泥（地山が土壌化したもの）
9　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、10～50㎝の礫含む（地山）
10　7.5YR5/3 にぶい褐色泥砂（平安時代後期遺物包含層）
11　7.5YR5/1 褐灰色泥砂
12　2.5Y4/1 黄褐色砂泥、炭と粘土ブロック多量混じる
13　10Y3/2 オリーブ黒色砂泥、礫・瓦を含む（土坑埋土）

図42　中央セクション断面図（１：50）

ずれも火を受けて一部が赤変している。

また、焚口の下部は一旦船底状に掘り窪められており（土坑３）、そこに焼土と炭層を交互に積み、元の高さに埋め戻されているが、石柱は埋め戻す途中の段階で据えられている。

灰原２　Ⅱ号窯の前庭部に広がる灰層である。Ⅱ号窯の前面は傾斜面が「ハ」の字に削り込まれ平坦面（前庭部）が形成されている。その中央に直径約２ｍの範囲で灰層が薄く広がる。灰層は土や砂などはほとんど含まず、きめの細かい灰で形成されている。厚さは最大で５㎝程度である。

溝２　窯が築造される傾斜面は、調査区の西から2.5～3.0mで一旦緩くなる。その境目に溝２が形成される。幅0.3～1.0m、深さ0.1mの浅い溝で、北調査区の中ほどから南区にかけて検出している。窯の前底部もこの溝によって区画されるが、灰層２との重複関係から、それよりも新しいと考えられる。

灰原１　溝２から続く緩傾斜は2.5mほど東へ続き、また、ここから東へ大きく落ち込む。その部分に灰原１が形成されている。灰原の堆積は中間に認められるにぶい黄褐色砂泥層を挟んで灰層が上下に２層認められ、調査区の東端で最大40㎝ほどの厚さがある。灰層には瓦片が認められるものの、その量は少ない。しかしながら、径10～50㎝大の礫が大量に含まれている。この礫は本来近辺の地山に含まれていたのものと考えられる。また、南側を中心に灰原の最下層には白色と黄色の粘土、焼土などのブロックを多く含む土層が堆積しており、窯体の構築部材の一部が破棄されたものとみられる。

溝５　東拡張区で検出した幅0.5m、深さ0.1mの南北方向の溝である。灰層の下で検出しているが時期は不明である。

その他、柱穴・土坑などを少数検出したが、時期や性格は不明である。　（吉崎）

4．遺　　物

今回出土した遺物の大半は瓦類で、土器類は極めて少ない。その他に土製品や窯材と見られる焼土塊がある。

瓦類（図44～46、図版９～11、表９）

瓦類はいずれも瓦窯に関連するもので平安時代前期に属する。多くは灰原から出土したものであるが、調査前に表面採集したものもある。種類としては軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・塼などがあり、鴟尾の破片とみられるものもある。軒丸瓦５形式７点、軒平瓦５形式14点、丸瓦40点、平瓦546点、鴟尾１点、塼２点である。詳細については、観察表（表９）にまとめる。なお、丸瓦・平瓦は細片が多く、個体数にすると点数は減少する。

土器類（図43、図版11、表10）

土器類は平安時代前期の土師器（甕）・須恵器（杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋）などが、主に灰原１から出土している。図化できたものはわずかに須恵器の杯蓋と杯Ｂ類である。いずれも平安時代前期の遺物である。

この他、平安時代中期の黒色土器（椀）、後期の土師器（皿）が東拡張区の灰原上に堆積した包含層から出土している。これらはいずれも小片で、磨滅しているものも多いことから丘陵の裾部に再堆積したものと考えられる。

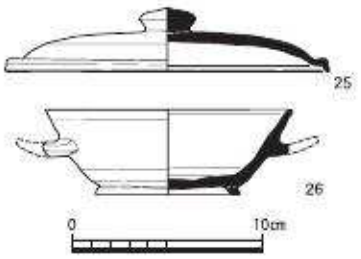


図43　土器実測図（１：４）

土製品（図版11、表10）

土製品としては焼土塊と坩堝の破片がある。焼土塊は、スサを大量に含んだ粘土を方形に焼き固めたレンガ状のもので、その形状と材質から窯体の構築部材として製作されたものと考えられる。また、坩堝は口径30㎝前後に復元できる大型のもので、底部内面の破片に鉄滓が付着していることから、鋳造にかかわる遺物と考えられる。

土器類・土製品ともに詳細は土器・土製品観察表（表10）にまとめた。　　（鈴木）

表８　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	瓦類、土器類、土製品	27箱	軒丸瓦６点、軒平瓦11点、丸瓦２点、平瓦２点、鴟尾１点、塼２点、須恵器２点、坩堝４点、焼土塊２点	13箱	10箱
平安時代以降	土器類	少量		少量	０箱
合　計		27箱	32点（４箱）	13箱	10箱

※　平安時代以降の土器類はＢランクの遺物に一部含まれる。

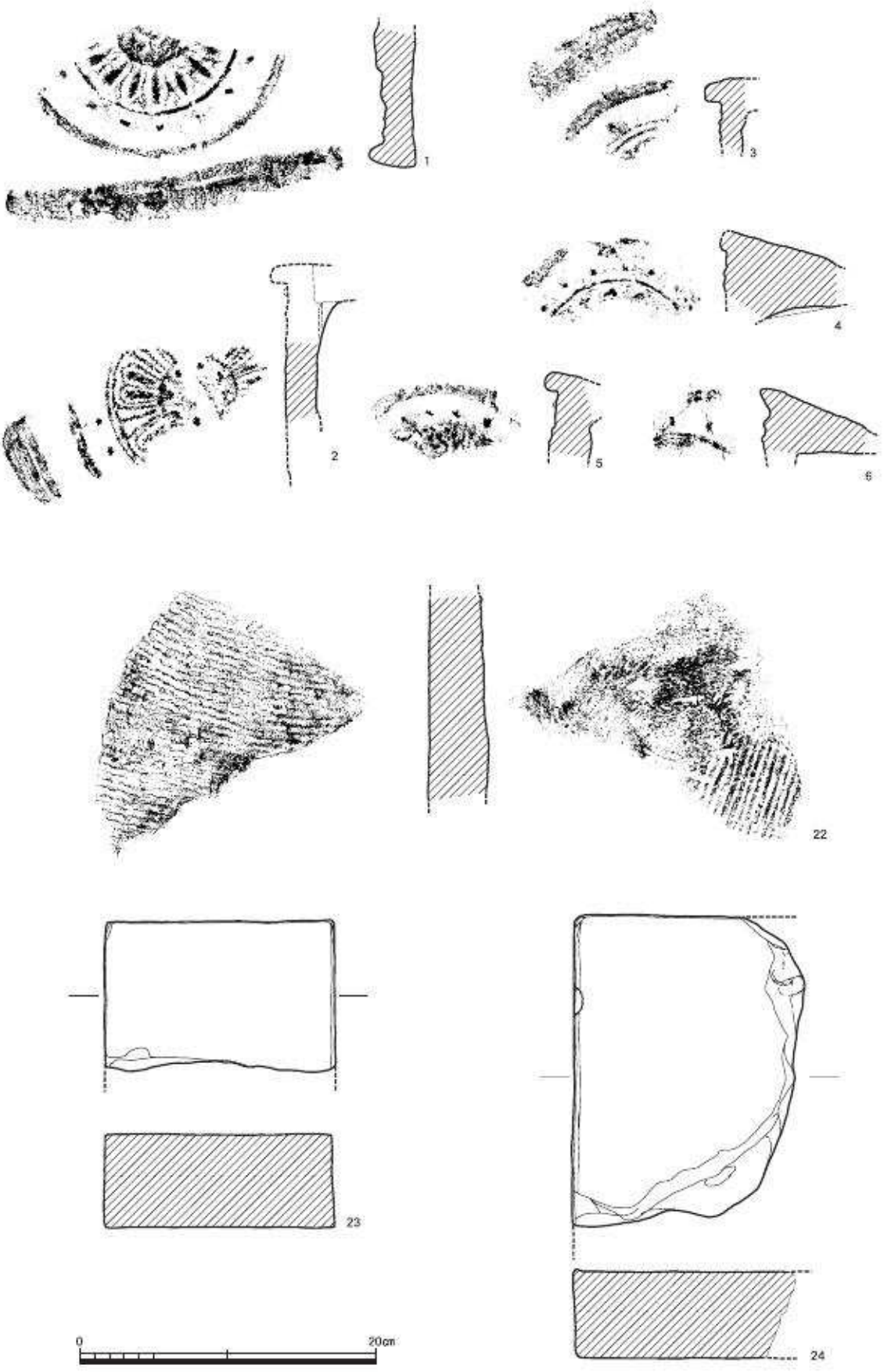


図44　軒丸瓦・鴟尾・塼拓影・実測図（1：4）

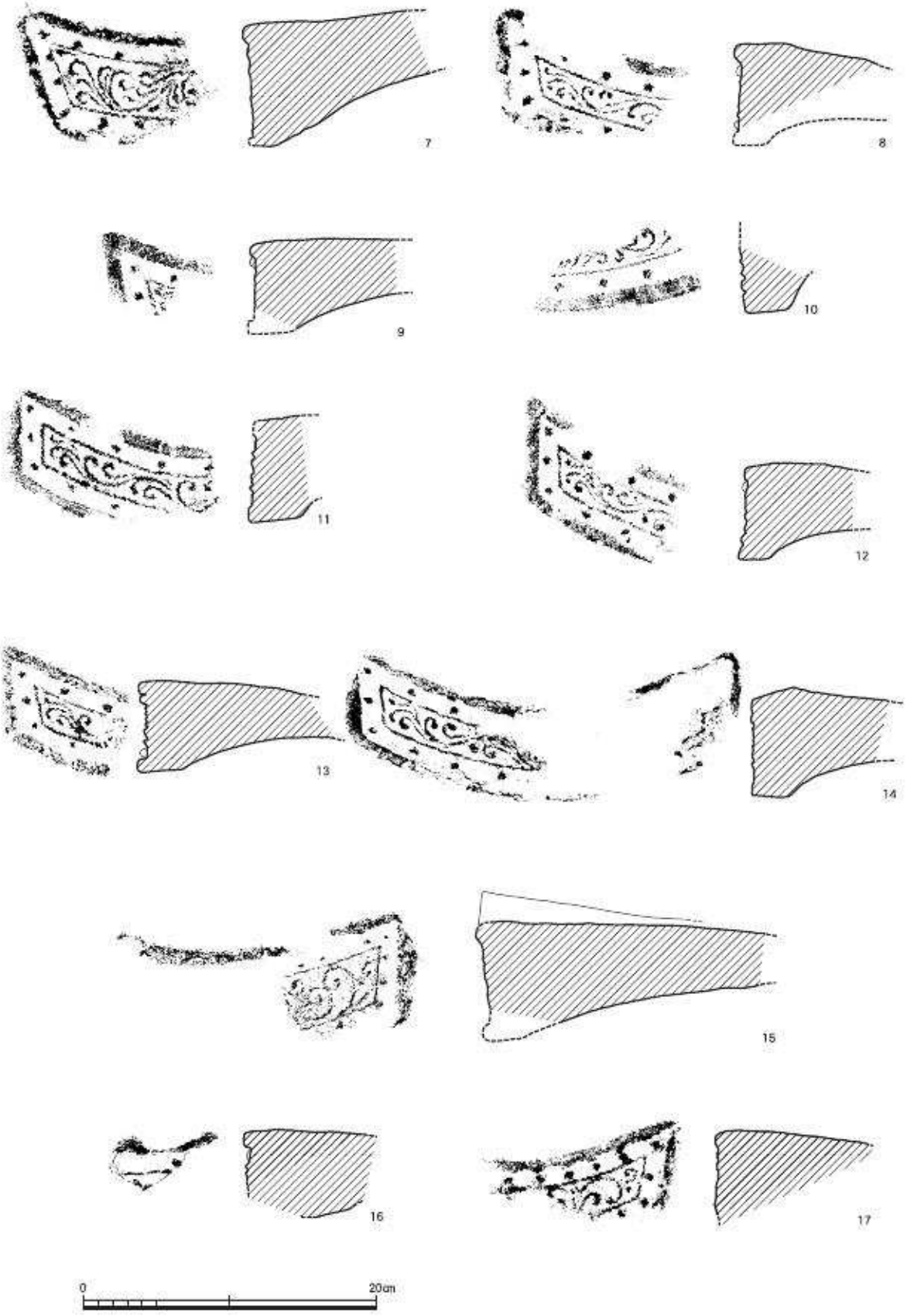


図45　軒平瓦拓影・実測図（１：４）

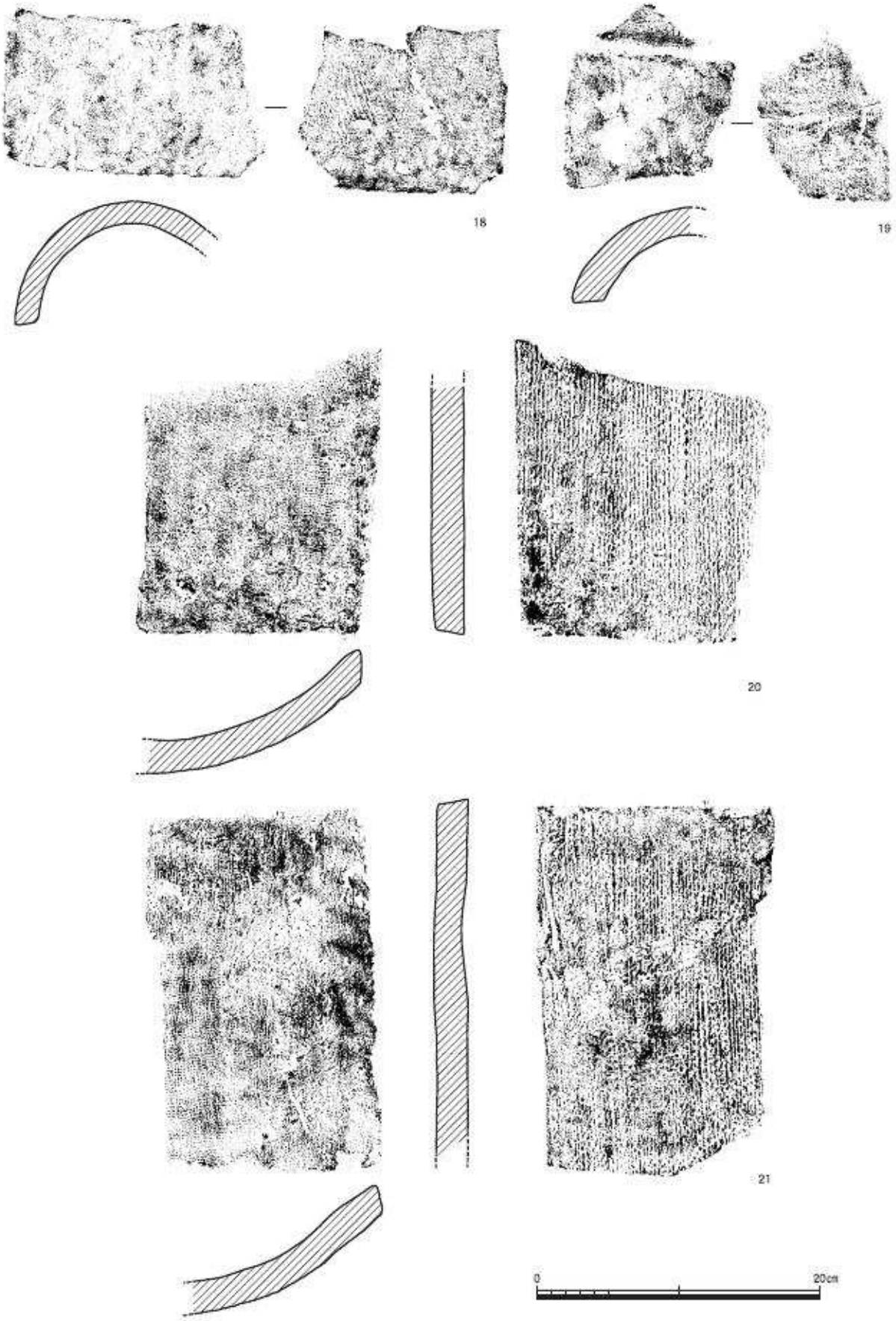


図46　丸瓦・平瓦拓影・実測図（１：４）

表９　瓦観察表

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	調整技法の特徴	備考	昭和47年出土状況
1	軒丸瓦	1類	「官」銘単弁十六葉蓮華文。中房は盛り上がり平坦で中央に「官」銘を配す。子葉は盛り上がり、花弁の先端は圏線に接し、外区には珠文が巡る。文様は不明瞭で珠文帯に範傷が認められる。	瓦当成形は瓦当接合。周縁側縁に櫛型痕。胎土は１～３㎜の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は浅黄褐色。	(NS109)　１点 現代盛土層	西群Ⅰ・Ⅱ号
2		2類	複弁七葉蓮華文。花弁は複弁８葉であるが１箇所単弁１葉になり同弁も欠く。中房はやや盛り上がり。蓮子は１＋８を配す。子葉は盛り上がり、花弁は輪郭線で囲まれる。間弁は撥型で花弁輪郭線と連結する。外区には小粒の珠文が巡る。文様の凹凸が明瞭でない。	瓦当成形は瓦当接合。側縁にナデ。櫛型圧痕。瓦当裏面は不定方向のナデ。胎土は細砂と３㎜の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰色。	(NS151A)　１点 東拡張区灰原１	東群Ⅰ・Ⅱ号
3		3類	複弁八葉蓮華文。中房は盛り上がり、蓮子は１＋６を配す。子葉は盛り上がり、間弁は撥型、二重の圏線が巡る。外区は珠文が巡る。	瓦当成形は瓦当接合。周縁側縁に櫛型痕。胎土は多量の砂粒と６㎜石粒を含み、焼成は軟質、色調は浅黄橙色。	(NS154A)　１点 表採 ２重圏線などの特徴からNS154Aと同笵と認識。	
4		4類	単弁十四葉蓮華文。中房はわずかに突出し１＋６の蓮子を配す。花弁の先端は三角形状に尖り圏線にわずかに接する。外区には珠文が巡る。	瓦当成形は瓦当接合。丸瓦部凸面にヘラ傷、全体に磨滅が著しく、調整は不明。胎土は多量の砂粒と３～９㎜の石粒を含み、焼成は軟質、色調は浅黄色。	(NS105)　１点 表採 花弁の特徴からNS105と同笵と認識。	
5 6		5類	不明。	残存率が低いうえに磨滅が著しく不明。 ５は、胎土は多量の砂粒と７～10㎜の石粒を含み、焼成は軟質、色調は浅黄色。 ６は、瓦当貼り付け補足粘土に縄叩きの圧痕。胎土は多量の砂粒と３～５㎜の石粒を含み、焼成は軟質、色調はにぶい橙色。	２点 表採	
7	軒平瓦	1類	唐草文。唐草は両側に緩やかに３回反転する。主葉・支葉の先端は大きく巻き込み、支葉の一部は二又に分かれる。外区には珠文が巡り、上９・両脇４・下10個配す。珠文脇区に範傷。	瓦当部凹面は横ナデ、顎部横ナデ、裏面から平瓦部凸面にかけてケズリ後ナデ。平瓦凹面は細かい布目を残し、側縁ナデ。胎土は多量の砂粒と２㎜の石粒を含み、焼成はやや軟質、色調は明褐色。	(NS205A)　１点 東拡張区灰原１ 脇区珠文の数からNS205Aと同笵と認識。	東群Ⅰ・Ⅱ号、西群Ⅰ・Ⅱ号、醍醐ノ森瓦窯
8 9 10		2類	唐草文。唐草は両側に緩やかに３回反転し、主葉の先端は二又に分かれ、支葉は緩やかに巻き込む。外区には珠文が巡り、上７・両脇３・下７個配す。９は珠文の範傷進行。	８・９は、瓦当部凹面は横ナデ（瓦当に向かって左から右へ）、顎部縦ナデ、平瓦部凹面細かい布目、側縁はケズリによる面取り。胎土は多量の砂粒を含み、焼成はやや硬質、色調は灰色。 10は、裏面不定方向ナデ。胎土は多量の砂粒と10㎜の石粒を含み、焼成は硬質、色調は灰色。	(NS203)　３点 ８は土坑３ ９・10は表採 ９は二次焼成を受けており窯材と推測。	東群Ⅰ・Ⅱ号
11 12 13 14		3類	唐草文。中心飾りはナデ消されており不明、唐草は両側に３回反転し、主葉の先端は二又に分かれ、第一支葉は圏線と接する。外区珠文は、上７・脇３・下３個を配す。珠文に範傷が認められる。 14は、上・脇区に範傷が認められる。	11・14は、瓦当部凹面は不定方向のナデ、顎部はナデ、裏面から平瓦部凸面にかけてケズリ、側縁はケズリによる面取り。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は硬質、色調は褐灰色。 12は、瓦当部凹面横ナデ、顎部横ナデ、裏面から平瓦部凸面にかけて横ナデ後、縦ナデ。側縁横ナデ、瓦当付近に段が認められる。平瓦部凹面に細かい布目が残り、スサ入り粘土が付着する。胎土は多量の砂粒と石を含み、焼成は硬質、色調はにぶい赤褐色。 13は、平瓦部凹面側縁付近は縦ナデ。	(NS204)　４点 11は東拡張区灰原１ 12～14は表採 中心飾りには「近」銘を配しているものがある。 12・13は二次焼成を受けており窯材と推測。	
15		4類	唐草文。唐草は各単位が離れて派生し、主葉・支葉の先端は大きく巻き込む。外区は珠文が密に巡り、上16・脇４・下17個配す。	磨滅が著しく、平瓦部凹面にわずかに布目が残る。胎土は多量の砂粒と所々に２㎜の石粒を含み、焼成は軟質、色調は橙色。	(NS201)　１点 表採	東群Ⅰ・Ⅱ号、鎮守庵瓦窯
16		5類	唐草文。主葉の先端は二又に分かれる。外区は珠文が巡る。	緑釉が掛かる。平瓦部凹面側縁付近には緑釉が掛けられていない。瓦当部凹面横ケズリ（瓦当に向かって左から右へ）、顎部裏面ナデ。胎土は１～３㎜の砂粒を含み、焼成は軟質、素地の色調は浅黄橙色。	(NS111)　１点 灰原１掘り下げ 釉薬が掛かっていることや唐草の特徴からNS111と同笵と認識。	
17		6類	唐草文。唐草は各単位が離れて派生し、先端は二又に分かれる。外区は珠文が巡り、上13・脇３・下14個配す。	平瓦部凹面に細かい布目が残る。胎土は多量の砂粒と10㎜の小石を含み、焼成は軟質、色調は浅黄橙色。	(NS206B)　１点 灰原１掘り下げ 唐草の特徴からNS206Bと同笵と認識。	西群Ⅰ・Ⅱ号、鎮守庵瓦窯

遺物番号	種類	形式	文様の特徴	調整技法の特徴	備考	昭和47年出土状況
18 19	丸瓦	1類		凸面横ナデ、凹面布目で糸切り痕跡あり。端面付近横ナデ、側面横ナデ。胎土は砂粒を含み、焼成は硬質。色調は褐灰色。	2点 東拡張区灰原1	
20 21	平瓦	1類		凸面細叩き、凹面細かい布目、端面・側縁付近横ナデ、端面・側縁ナデ。胎土は砂粒と5㎜の石粒を含み、焼成はやや軟質。色調は黄橙色。	2点 Ⅱ号窯焚口袖構築材	
22	鴟尾	1類		外面全面に叩き、内面一部叩き。胎土は多量の砂粒と3㎜の石粒を含み、焼成は硬質、色調は灰色。	1点 表採	
23	塼	1類	形態は長方形と推測。 厚さ6.3cm、長さ15cm。	箱型に粘土を詰め込み成形。上下側面ナデ。胎土はごく少量の砂粒を含み、焼成は硬質、色調は暗灰色。	1点 灰原1	
24		2類	形態は長方形と推測。厚さ5.8cm。	箱型に粘土を詰め込み成形。上下不定方向ナデ、側面横ナデ。胎土は多量の砂粒と小石を含み、焼成はやや硬質、色調はにぶい褐色。	1点 灰原1	

表10　土器・土製品観察表

遺物番号	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	形態・手法の特徴	焼成・胎土・色調	備考
25	須恵器	蓋	17.0	3.4	25	天井部は扁平で口縁部は屈曲して垂下する。天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付く。ロクロナデ。	焼成は良好。胎土はきめ細かく砂粒は少量。色調は5B6/1青灰色。	1点　灰原1 内面が研磨され一部に墨が認められる。転用硯として使用か。
26		杯身	13.0	4.5	90	底部外面に貼り付け高台。体部から口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。体部外面中程に左右一対の把手が付く。ロクロナデ。	焼成は良好。胎土はきめ細かく砂粒は少量。色調はN6/0灰色。	1点　東拡張区灰原1
27 28	焼土塊			10.0		厚さ10cm程度のレンガ状を呈する。原料粘土を箱状のものに詰めて成形か。	焼成はあまく軟質。胎土は0.5～3㎝大の円礫、5㎝前後のスサを大量に含む。色調は2.5Y8/2灰白色。	2点　灰原1 窯の用材として焼成したものか。
29 30 31 32	坩堝		約30	約20		丸底椀形に復元できる。口縁端部（29・30）は丸く収める。器壁は5㎝前後の厚さで内外2層構造である。	内側：焼成は良好堅緻。胎土は砂粒を多く含む。色調は5Y6/1灰色。 外側：焼成はあまく軟質。胎土は植物繊維を多く含む。色調は5YR3/1黒褐色。	4点　灰原1 底部(31)内面には鉄滓が付着。

5．ま と め

今回の調査では，昭和46年度調査の角社東群Ⅱ号窯の一部を再確認し、新たにその灰原を検出する成果を得た。以下いくつかの項目について考察を加えまとめとする。

窯跡の位置について

角社東群Ⅱ号窯の大部分は、西側民家下の擁壁の中に埋没した状態であり、検出できたのは焚口部分のみである。造成工事が行われたにもかかわらず、焚口部分は、昭和46年当時の状態を良く保っていた。今回、その部分の詳細な記録を得ることができたことは、大きな成果である。すなわち、昭和46年当時の図面には座標が与えられておらず、今回の記録と重ね合わせることで、はじめて絶対的な位置を得ることができるからである。これによって角社窯跡群全体の位置関係を、正確につかむことができるようになった。

今回の調査ではⅡ号窯以外には窯跡を検出することができなかった。角社瓦窯西群では４基の窯が並列した状態で検出されており、各窯間の距離は４～4.5mである。東群においても今回のⅡ号窯と、その南にあるⅠ号窯の間隔は４mである。したがって、１グループ内の窯は４～4.5m間隔に並んで構築されていると推測できる。今回の調査はⅡ号窯の北方14m地点まで及んでいるが、この間には窯跡が存在しないことが明らかとなった。したがって、このⅡ号窯が東群の最北端の窯であると認識できる。ところで、東群では北側からⅡ号・Ⅰ号・Ⅲ号の順に窯が並んでいる。Ⅲ号窯は焚口部分のみの確認であるが、１号窯との間が８mほど離れている。東群が西群と同じように４基の窯で構成されているとすれば、残りの１基はⅠ号とⅢ号の間かⅢ号窯の南側にあると推測できる。（吉崎）

窯体の状況について

検出した窯の焚口部分は記録保存の対象となったため、解体して調査することになった。これによって、焚口の構築状況について新たな知見を得ることができた。昭和46年の報告では、焚口北側の石柱と窯体の瓦積との間が10㎝ほど離れており、その間が粘土で補填されていること、南側の瓦積が乱れていることから焚口部分は改修されていると推測されていた。ところが今回の調査では、北側の石柱も背の部分は窯体に接していることが明らかとなった。石柱の背が丸みを帯びていたために、その先端のみが窯体に接することとなり、正面には隙間が生じた。ここに粘土が充填されたため、窯体と石柱が離れて見えたのである。

また、南袖の瓦積についても、平瓦が整然と積まれており、乱れはほとんど認められないことも明らかとなった。これらの知見によって、Ⅱ号窯の焚口部分については、改修されておらず構築当初の状態を保っている可能性が高くなったと言えよう。

また、焚口下部の掘り込み（土坑３）を埋める焼土層についても、補修によるものであるとする見解があった。しかしながら、補修であるならば焼土層の下に補修以前の床面が認められるはずであるが、今回はそれを確めていない。したがって、掘り込みと焼土層も当初から設置されていた可能性がある。ただ、この掘り込みの性格については湿気防止などと推測できるが、判然と

しない。（吉崎）

灰原について

灰原１については、厚い部分で40㎝の堆積が認められた、中間ににぶい黄褐色砂泥層を挟んで上下２層の灰層が認められた。これによって少なくとも２回の操業が認められる。灰層も薄く、瓦などの遺物もさほど多くは含まれていない。焚口と灰原の間に距離があることから、焚き口近くの灰原は削平された可能性はあるものの、本来、操業期間が比較的短かった結果ではないだろうか。ところで、灰層から出土した木炭について樹種鑑定を行ったところ、マツ属およびカエデ属が識別できた。中でもカエデ属が多く、窯の燃料には主に雑木が用いられていたと考えられる。

また、灰層には地山から掘り出されたものと思われる10～50㎝大の礫が大量に含まれている。さらに、坩堝の破片が認められ、中には鉄滓の溶着しているものもある。こうした遺物がなぜ出土するのかは不明であり、今後の探究課題である。（吉崎）

出土瓦について

角社瓦窯跡では、窯材に軒瓦を使用しているため、灰原から出土した全ての瓦を生産品として比定することはできない。しかし、多くの粗悪品は窯出しの際に前庭部から灰原にかけて破棄されることから、生産品である可能性が最も高い資料でもある。そこでまず、灰原から出土した瓦について検討する。

軒瓦のうち、軒丸瓦２類（NS151A）、軒平瓦１類（NS205A）・２類（NS203）・３類（NS204）・５類・６類（NS206B）が灰原から出土した。このうち、軒平瓦５類・６類（NS206B）は、今回はじめて確認することができた。なお、灰原から出土した軒瓦は、各々１点ずつである。

軒平瓦２類（NS203）は、これまでの調査で出土点数が最も多く、Ⅱ号瓦窯の主生産品であった可能性が高い。また、軒丸瓦２類（NS151A）、軒平瓦１類（NS205A）も灰原から出土したことに加え、前調査[5]において燃焼室内・焼成室内・焚口付近のいずれかで出土を確認しており、Ⅱ号瓦窯の生産品と推定することができる。

軒平瓦６類（NS206B）は、これまで東群では出土していないが、角社西群で一定量の出土を確認している。両支群は隣接していることに加え、数種の瓦笵の移動も認められる。このようなことから、Ⅱ号瓦窯で生産されていた可能性が高い。

前調査報告によると、軒平瓦３類（NS204）をⅠ号瓦窯からの混入品と推測している。しかし、本調査において灰原からの出土を確認したため、Ⅱ号瓦窯の生産品と想定しておく。

軒平瓦５類の詳細は後述するためここでは省略するが、以上のように、本調査において灰原から出土した軒瓦は、Ⅱ号瓦窯で生産していた製品として推定できる。なお、軒平瓦３類（NS204）のなかに、平瓦部凹面にスサ入り粘土が付着しているものが認められ、瓦窯の構築材に用いられたものと考えられる。前調査報告によると、Ⅱ号瓦窯には軒瓦を窯材として利用していないが、Ⅰ号瓦窯では隔壁や焼成室の一部に軒瓦を使用している。したがって、これらの軒瓦は近隣の宅地造成もしくは前調査の際に、本調査地へと運びこまれた可能性が考えられる。（鈴木）

瓦から見た操業年代

今回の調査では瓦窯本体部分を調査していないこともあり、操業年代を考察するには慎重を要する。しかし、瓦窯本体箇所は、既に宅地造成されており、これ以上の調査は望めない。そこで、これまでの調査成果を踏まえていくつかの指摘をしておく。

Ⅱ号瓦窯は灰原の堆積状況から、短期間で２回以上の操業を行っており、生産の主体は軒平瓦２類（NS203）であった。軒平瓦２類（NS203）は、長岡宮式7757型式Ｅ種と同笵関係にあり、長岡京からの瓦笵の移動が認められる。したがって、平安京遷都事業開始とともに、瓦笵が移動したこととなり、西賀茂瓦窯跡群内でも比較的早い段階に操業を開始していたことがわかる。

もう１つ留意しておきたいのが、同文関係にある軒平瓦３類（NS204）である。Ⅱ号瓦窯では、軒平瓦３類（NS204）の中心飾りに刻まれている「近」銘をナデ消したものを生産している。「近」銘にどのような意味があったのかは明らかにされていないが、生産の途中で必要としなくなりナデ消したものと考えられる。「近」銘をナデ消さない軒平瓦３類（NS204）はⅠ号瓦窯で多量に出土している。さらにⅠ号瓦窯では、逆「近」銘を配す軒平瓦４類（NS201）も一定量出土しており、「近」銘を配す軒瓦を主体的に生産していたものと推測することができる。したがって、Ⅱ号瓦窯の操業開始は、Ⅰ号瓦窯の操業開始後に位置付けることができる。　　（鈴木）

緑釉軒平瓦について

軒平瓦５類は、豊楽殿・朝堂院から出土する緑釉軒平瓦と同文である。平瓦部凹面側縁付近には釉薬をかけておらず、豊楽殿から出土したものと同様に丁寧に仕上げる。一方、素地には角社瓦窯跡出土瓦全般に認められる小石などを多量に含んだ非常に粗い粘土を使用している。

前調査ではⅢ号瓦窯焚口付近で特殊な窯跡とともに、銅滓と推測された遺物が出土している。緑釉瓦が１点も出土していないことから慎重な見解となっているが、ここで緑釉瓦の釉薬を製作していた可能性を指摘している。本調査でも、灰原内から坩堝破片が数点出土したが、鉄滓が付着したものであり、釉薬生産との関係を明らかにすることができなかった。しかし、軒平瓦５類は角社瓦窯跡特有の小石混じりの粘土を使用していること、灰原から出土したことなどから、角社瓦窯東群で生産していたものと推測することができる。ただし、瓦窯の構造が問題となる。これまでの発掘調査成果によると、緑釉瓦の焼成には、窖窯を使用していたことが明らかにされている。しかし、これまでに角社瓦窯跡では窖窯を確認しておらず、さらに本調査によって、Ⅱ号瓦窯が東群の最北端に築かれていたことが明らかとなり、窯場の展開を考えることはできない。

このようなことから、角社瓦窯跡内では平窯によって緑釉瓦を焼成していた可能性があり、窯の構造については今後の課題となる。

軒平瓦５類とセット関係にある緑釉軒丸瓦は、醍醐ノ森瓦窯跡で生産されていたことが明らかにされている。このように、軒丸瓦と軒平瓦を別々の瓦窯で生産するのは、前代の長岡京期の谷田瓦窯跡と萩ノ庄瓦窯跡の関係と同様であり、注目することができる。

ところで、本調査によって西賀茂瓦窯群跡の全ての支群で緑釉瓦生産を行っていたことが明らかとなった。その特徴は出土点数が非常に少ないことであり、豊楽殿や大極殿の軒先などに飾る

ための必要枚数を生産していたとは考えにくい。したがって、西賀茂瓦窯群跡における緑釉瓦生産は大量生産を実施できる前段階に位置付けられる。このことは栗栖野瓦窯から出土する軒丸瓦（HS111）の笵傷が、醍醐ノ森瓦窯跡から出土するものに比べ進行していることも傍証となる。また、これまでに西賀茂瓦窯群跡で緑釉陶器の生産を確認していないことも留意しなければならない。当然、現在確認されている瓦窯跡周辺に施釉陶器生産をしていた窯跡の存在も想定することができる。しかし、現在の調査成果を見る限りでは、緑釉陶器生産の中心は幡枝地域であり、施釉製品生産の統括は幡枝地区で行われたものと考えられる。（鈴木）

粘土

灰原には粘土塊が破棄されていた。火を受けていないことから様々な形を呈しているが、多くは土饅頭形となっている。胎土の相違から大きく３種に分類することができる。すなわち、ほとんど砂粒を含まないもの、微細の砂粒を含むもの、多量に砂・石粒を含むものである。この粘土塊は瓦窯の修築材に使用するために用意されたものであった可能性が高いが、出土した塼には粗い胎土のもののほか、細かい砂粒を含むものもあり、製品用の粘土として用意された可能性がある。『延喜式』木工寮作瓦には「夫一人一日打埴大三百斤。雇人加百斤。以沙一斗五升交埴四百斤以一千八百斤為一畳。以四畳至一夫。工一人日造瓩瓦九十枚。（省略）」とあり、粘土に混ぜる砂の量が決められている。３種類の粘土の相違が、上記した内容とどのような関係にあるのかは、未だ明らかにすることはできないが、今後留意するべき問題である。（鈴木）

終わりに

今回の調査で出土した焚口の石柱は、調査地の南側にある大将軍神社の境内地で保管していただけることになった。大将軍神社は付近に展開する西賀茂瓦窯で働いていた人々の鎮守とも伝えられている。そうした意味でも、瓦窯に関連した遺構の一部が現地に残ったことは喜ばしい。歴史的遺産として活用していただければ幸いである。（吉崎）

註

１）京都府『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第15冊 （株）臨川書店 1983年

２）木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址－延喜式に見えたる栗栖野瓦屋」『史林』第15巻第４号 1930年

３）「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1971』 京都市文化観光局文化財保護課 1971年

４）平安博物館考古学第三研究室 近藤喬一「西賀茂瓦窯址」『平安京跡研究調査報告』第４輯 （財）古代學協會1978年

５）前調査は特に断らないかぎり註４と同じ。

Ⅲ　植物園北遺跡

1．調査経過

（1）調査の経過

今回の調査は、住宅新築工事に伴うものである。調査地は京都市左京区下鴨北園町５・６番地にあたる。今回の調査に先立つ京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の試掘調査では、柱穴群が検出され、建物の存在が想定された。そのため、当研究所が委託を受け、発掘調査を実施した。調査面積は140㎡である。

調査は重機掘削より開始し、その後人力による作業に切り替えた。遺構検出を行った結果、同一面で掘立柱建物と竪穴住居を検出した。このため、先に掘立柱建物、ついで竪穴住居の調査を行った。検出した遺構については、写真撮影など記録採取作業を行った。調査終了後、重機による埋戻し作業を行い、資材およびリース品を撤去して現地調査を終了した。

なお、１月８日に地元を対象とした説明会を開催し、約80名の参加を得た。

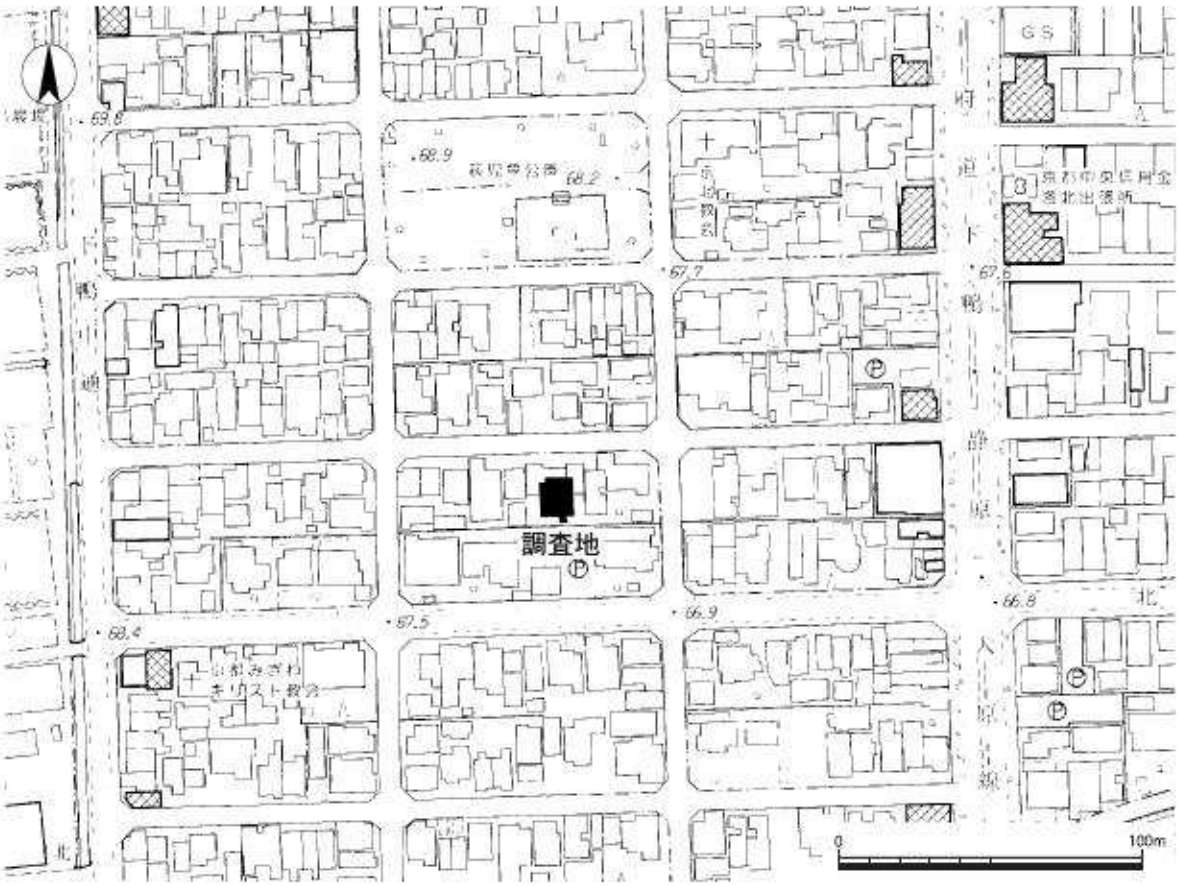


図47　調査位置図（１：2,500）

図48　調査区配置図（１：1,000）

（２）位置と周辺調査

この一帯は、弥生時代から古墳時代の集落遺跡を中心とした縄文時代から中世までの遺構を含む複合遺跡である植物園北遺跡の範囲にあたる。植物園北遺跡は、上賀茂神社の南から賀茂川の左岸一帯に広がり、南限は当地付近までがその範囲となっている。

植物園北遺跡の調査は多岐に及んでいるが、近隣では北西に位置する京都コンサートホール敷地内（図51－14）で、奈良時代の竪穴住居群や掘立柱建物群が検出されている。

図49　調査前全景（北から）

図50　地元説明会風景

図51　周辺既往調査位置図（1：10,000）

表11　周辺既往調査一覧表

No.	調査年	方法	所在地	縄文時代	弥生時代	古墳（飛鳥）時代	奈良・平安時代	鎌倉時代以降	文献
1	1975	分布	府立植物園北側、北山通沿い						1
2	1978	立会	上賀茂～左京区下鴨		竪穴住居、溝、土坑（弥生後期～古墳前期）				2
3	1982	発掘	上賀茂榊田町15					道路	3
4	1983	発掘	上賀茂桜井町15				土坑3基		4
5	1984	発掘	上賀茂鎌ケ垣内町47		竪穴住居2棟（後期）	竪穴住居2棟、土坑（前期）、溝（後期）			5
6 7 9	1984 ～1986	立会	松ヶ崎、下鴨、上賀茂一帯			竪穴住居10棟以上（前期）			6 7 9
8	1986	発掘	上賀茂桜井町～岩ケ垣内町	甕棺墓（晩期）	柱穴（前期）	落込み（後期） 柱穴（飛鳥～平安中期）	溝、柱穴（平安後期）	暗渠、柱穴	8
10	1989	発掘	上賀茂竹ケ鼻町4			竪穴住居2棟（前期） 竪穴住居8棟（後期）		井戸、溝、土坑、柱穴	10
11	1990	発掘	下鴨半木町他			溝	溝状遺構（平安中期）	溝、土坑、柱穴	11
12	1990	発掘	上賀茂松本町98			竪穴住居9棟、流路1条、土坑2基（前期）	掘立柱建物4棟（平安後期～鎌倉）	溝、土坑、柱穴	12
13	1990	発掘	下鴨野々上町1			竪穴住居8棟、土坑、柱穴（前期）、竪穴住居3棟（後期）、土坑、柱穴			13
14	1991 ～1992	発掘	下鴨半木町地内	土器棺墓		竪穴住居6棟（古墳末期～奈良）	掘立柱建物16棟、種列、溝、埋納遺構14基	土坑、柱穴	14
15	1992 ～1993	発掘	上賀茂岩ケ垣内町～松ヶ崎芝本町地内		竪穴住居4棟（後期）	溝（古墳以前）		柱穴	15
16	1992	発掘	下鴨半木町			溝（前期）、掘立柱建物、柵、土坑、柱穴			16
17	1993	発掘	上賀茂烏帽子ケ垣内町1		流路（～古墳後期）	竪穴住居3棟（前期）	掘立柱建物（平安）	井戸、土坑、柱穴（中世）、土坑（近世）	17
18	1993	発掘	下鴨北芝町12		竪穴住居1棟、土坑（後期中頃～後半）、竪穴住居2棟（後期末～庄内式初期）、土坑6基（後期～古墳前期）	集石遺構（庄内式中頃）、竪穴住居1棟（庄内式末～布留式初期）、竪穴住居1棟（布留式中頃）	掘立柱建物3棟（平安後期）		18
19	1994	発掘	上賀茂松本町94		流路状遺構（弥生～古墳）		流路状遺構（平安）		19
20a	1994	試掘	上賀茂岩ケ垣内町93-1・2、94			溝、柱穴群			20
20b	1994	試掘	下鴨南茶ノ木町29			竪穴住居1棟、溝、土坑			20
20c	1994	試掘	下鴨野々神町1-2			土坑、柱穴（飛鳥）			20
21	1995	発掘	下鴨北芝町		竪穴住居4棟、集石遺構2基（終末期～古墳初期）	竪穴住居2棟、土坑6基（前期）			21
22	1995	発掘	松ヶ崎井出ケ海道町地内				掘立柱建物2棟（奈良～平安前期）		22
23	1995	立会	下鴨前萩町5-1	土坑（中期）	竪穴住居、掘立柱建物（末～古墳初期）				23
24	1997	発掘	上賀茂岩ケ垣内町109-1				掘立柱建物1棟、柱穴		24
25	1997	試掘	上賀茂向縄手町61他2筆				掘立柱建物1棟		25
26	1997	立会	上賀茂岩ケ垣内町90			竪穴状遺構、溝状遺構、落込み、柱穴（古墳以降）			26
27	1999	立会	上賀茂岩ケ垣内町100			竪穴住居2棟（前期）	溝、土坑（平安）		27
28	2000	発掘	上賀茂土門町39		流路（後期～古墳前期）	竪穴住居（前期）、竪穴住居（中期）			28
29	2002	発掘	上賀茂烏帽子ケ垣内町24			掘立柱建物2棟、自然流路		土坑7基、柱穴4基（室町）	29
30	2002	立会	下鴨水口町			竪穴住居4棟（前期）			30
31	2005	立会	下鴨水口町57-1			竪穴住居、落込み、柱穴			31
32	2006	立会	松ヶ崎芝本町6-1			竪穴住居6棟、柵1条、土坑、柱穴（前期）			32
33	2006	立会	上賀茂池端町41-1			竪穴住居1棟（前期）			33
34	2006	立会	上賀茂松本町53			竪穴住居1棟（前期）			34
35	2006	立会	下鴨神殿町23			竪穴住居1棟（後期）			35
36	2007	発掘	下鴨北野々神町20		竪穴住居9棟、土坑7基、柱穴群（後期～古墳前期）	溝（飛鳥）	包含層（平安）		36
37	2007	発掘	松ヶ崎芝本町4-1			竪穴住居3棟（前期）	竪穴住居1棟（奈良後半）		37
38	2007	発掘	上賀茂豊田町26、36				溝、土坑（奈良）、掘立柱建物3棟、礫敷、溝、土坑、柱列（平安）		38

文献一覧（表11の文献番号と一致）

1　『平安京関係遺跡発掘調査概報』－京都市高速鉄道烏丸線内遺跡発掘調査－　京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1975年
2　「公共下水道工事及び配水管敷設工事に伴う立会調査」　1978年11月～1981年２月にかけて実施　未報告
3　家崎孝治・卜田健司『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和57年度　京都市文化観光局　1983年
4　久世康博「植物園北遺跡（２）」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983年
5　辻　裕司・木下保明『植物園北遺跡発掘調査概報』昭和59年度　京都市文化観光局　1985年
6　調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』　京都市文化観光局　1984年
7　調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局　1985年
8　小森俊寛・原山充志・長戸満男「植物園北遺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1986年
9　調査一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局　1986年
10　高 正 龍『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度　京都市文化観光局　1990年
11　長戸満男・小森俊寛「植物園北遺跡２」『平成元年度　京都市埋蔵文化財財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年
12　高橋　潔「植物園北遺跡」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1990年
13　長谷川行孝『ノートルダム女子大学構内遺跡発掘調査報告－植物園北遺跡－』　ノートルダム女子大学　1991年
14　久世康博「植物園北遺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1991年
15　高橋　潔・高 正 龍「植物園北遺跡」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1992年
16　竹原一彦「植物園北遺跡第11次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993年
17　久世康博・津々池憲一「植物園北遺跡１」『平成５年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
18　岸岡貴英・長友朋子・杉本厚典「植物園北遺跡第13次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第58冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994年
19　高橋　潔「植物園北遺跡（第14次調査）」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成６年度』　京都市文化観光局　1994年
20　馬瀬智光「植物園北遺跡№63、№64、№65」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成６年度』　京都市文化観光局　1994年
21　石尾政信・杉本厚典「植物園北遺跡第16次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第70冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996年
22　久世康博「植物園北遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1995年
23　高橋　潔「植物園北遺跡（96RH224）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』　京都市文化市民局　1996年
24　百瀬正恒「植物園北遺跡」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1997年
25　調査一覧表『京都市内遺跡試掘調査概報』平成９年度　京都市文化市民局　1998年
26　近藤章子「植物園北遺跡（97RH202）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』　京都市文化市民局　1997年
27　吉本健吾・竜子正彦「植物園北遺跡（99RH18）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』京都市文化市民局　1999年
28　近藤章子・菅田　薫「植物園北遺跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　2000年
29　鈴木廣司・津々池憲一『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-14　（財）京都市埋蔵文化財研究所　2002年
30　堀内寛昭「植物園北遺跡（02RH51・53）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成14年度』　京都市文化市民局　2003年
31　堀内寛昭「植物園北遺跡（05RH276）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成17年度』　京都市文化市民局　2006年
32　吉崎　伸「植物園北遺跡（06RH234）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成18年度』　京都市文化市民局　2007年
33　吉本健吾「植物園北遺跡（06RH253）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成18年度』　京都市文化市民局　2007年
34　吉本健吾「植物園北遺跡（06RH313）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成18年度』　京都市文化市民局　2007年
35　吉本健吾「植物園北遺跡（06RH322）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成18年度』　京都市文化市民局　2007年
36　平田泰『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-１　（財）京都市埋蔵文化財研究所　2007年
37　山本雅和「植物園北遺跡１」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』　京都市文化市民局　2008年
38　柏田有香「植物園北遺跡２」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成19年度』　京都市文化市民局　2008年

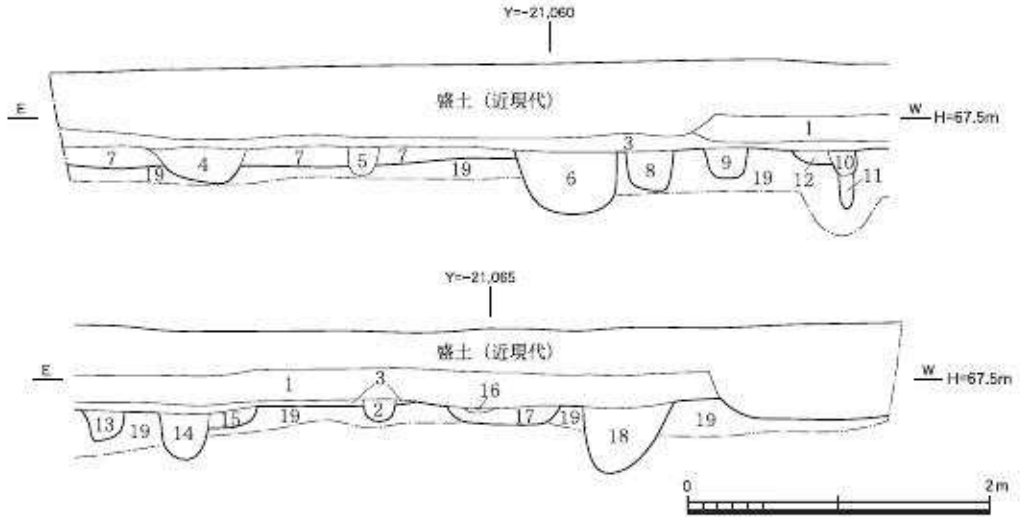
2．遺　　構

（1）基本層序

調査地の基本層序については、表土下0.5m前後までは、ほぼ全域において近・現代層である。その下に中世の耕作土層（厚さ0.2m前後）もしくは中世の遺物包含層が0.02～0.05mほど薄く堆積している。それ以下は、にぶい黄褐色砂泥からなるいわゆる地山であり、遺構の大半はその上面で成立している。

（2）遺構の概要

検出した遺構総数は121基で、その大半は飛鳥時代のものである。主な遺構に、竪穴住居跡２棟と掘立柱建物１棟がある。以下、主な遺構について述べる。



1　10YR5/2灰黄褐色砂泥［中世層］
2　10YR2/2黒褐色砂泥、10YR3/2黒褐色砂泥少量混［ピット４］
3　10YR4/3～4/4にぶい黄褐色～褐色砂泥～泥砂、7.5YR4/6褐色マンガン塊多量混［中世層］
4　10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭少量混
5　10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥中量混、礫径3cm以下少量混
6　［掘立柱建物１柱穴10　図54参照］
7　10YR3/2黒褐色砂泥
8　10YR3/3暗褐色砂泥
9　10YR3/3暗褐色砂泥
10　10YR3/3～3/4暗褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥中量混
11　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
12　10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥
13　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
14　10YR4/2灰黄褐色砂泥
15　10YR4/2～5/2灰黄褐色砂泥
16　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
17　10YR4/2灰黄褐色砂泥
18　［掘立柱建物１柱穴２　図54参照］
19　10YR5/4にぶい黄褐色砂泥［地山］

図52　南壁断面図（１：50）

表12　遺構概要表

時　代	遺　　構	備　考
飛鳥時代	竪穴住居78・90、掘立柱建物１、土坑102・103	

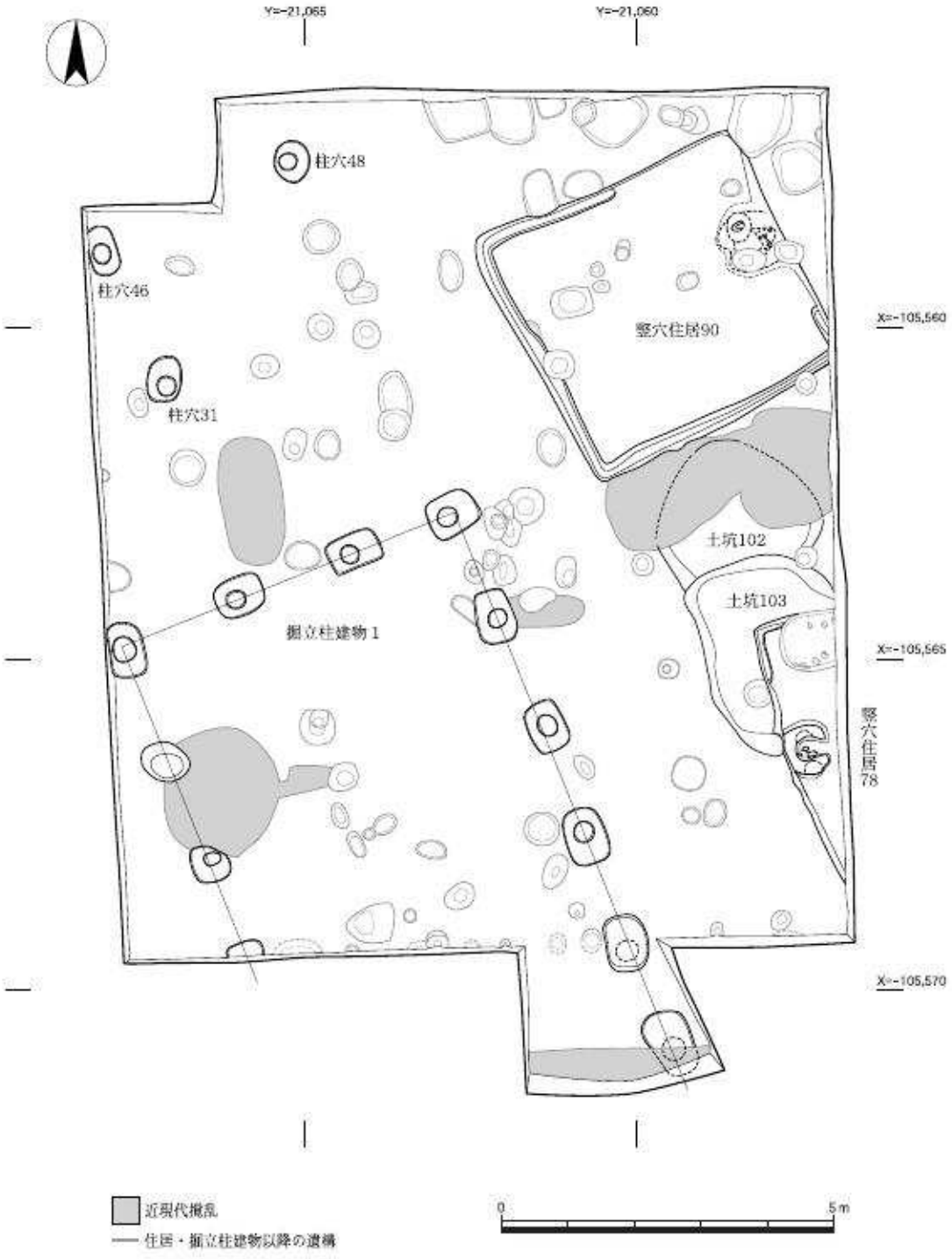
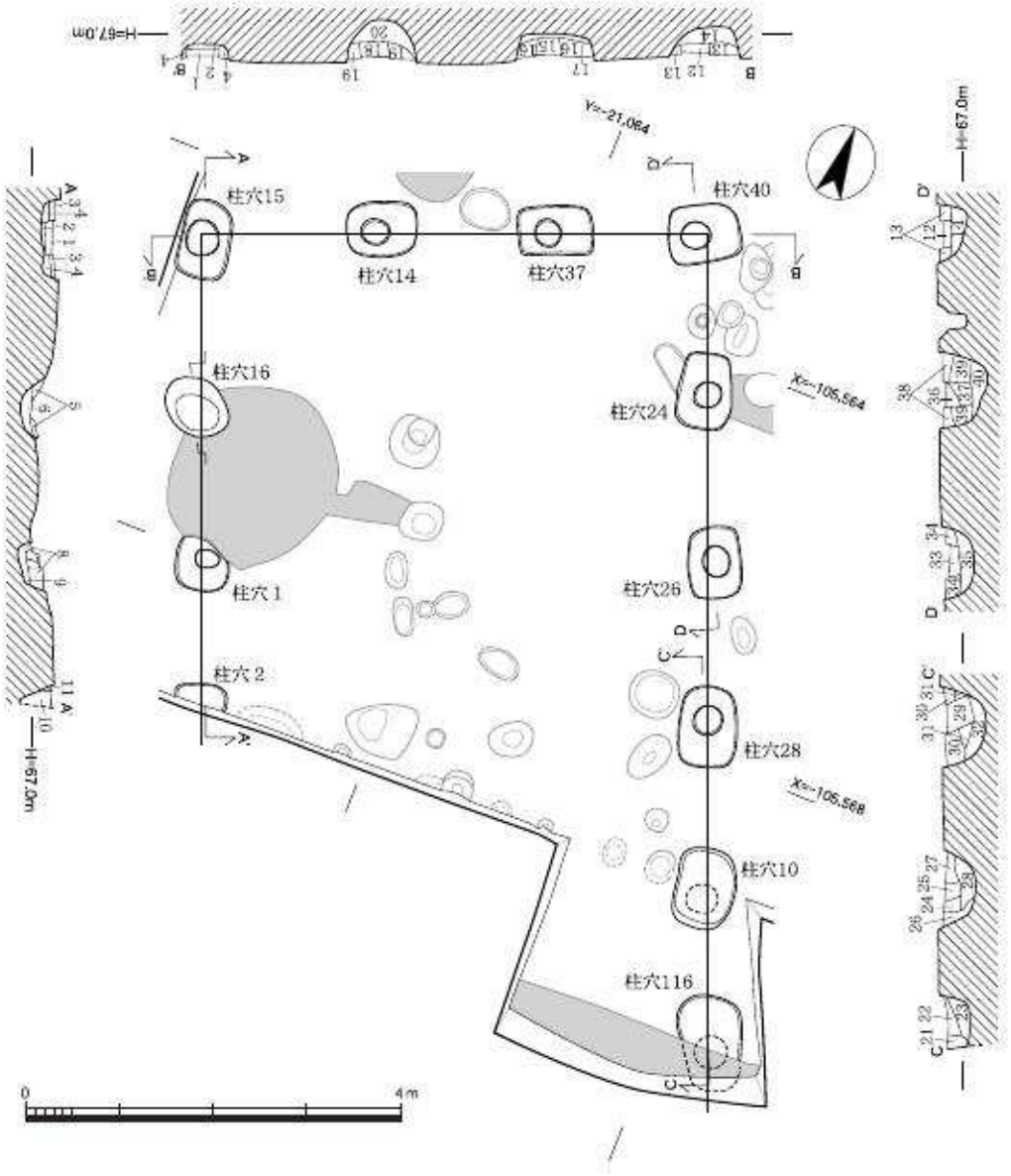


図53　遺構平面図（1：100）

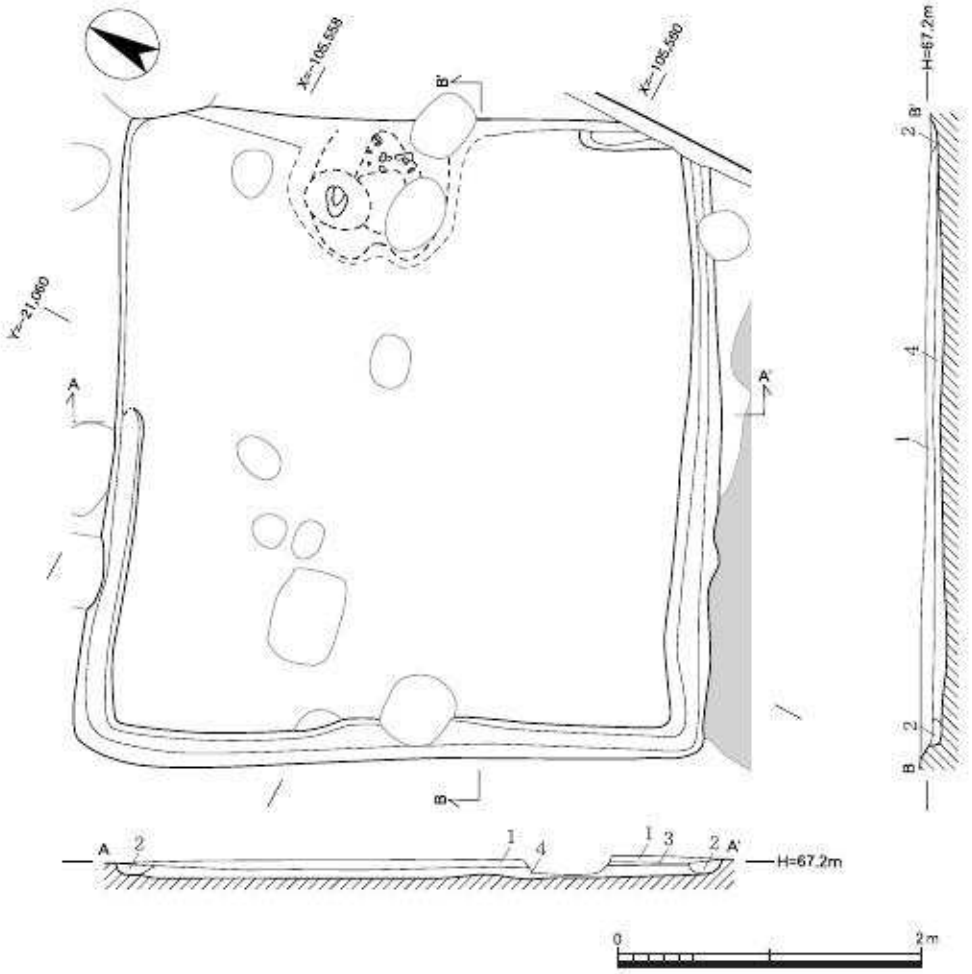


1 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ごく少量混
2 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥部分的に多量混
3 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥
4 10YR2/2黒褐色砂泥
5 10YR2/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ブロック中量混
6 10YR3/2黒褐色砂泥
7 10YR3/3暗褐色砂泥
8 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥
9 10YR3/2黒褐色砂泥
10 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥
11 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥
12 10YR2/2黒褐色砂泥
13 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥少量混
14 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥
15 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR2/3黒褐色砂泥中量混
16 10YR2/2～2/3黒褐色砂泥
17 10YR2/2黒褐色砂泥
18 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥少量混、礫径3cm以下ごく少量混
19 10YR2/3黒褐色砂泥
20 10YR2/2～2/3黒褐色砂泥
21 10YR2/2黒褐色粘質土
22 10YR2/3黒褐色砂泥、粘質
23 10YR3/4暗褐色砂泥
24 10YR3/2黒褐色粘質土、10YR4/4褐色泥土混
25 10YR2/3黒褐色砂泥
26 10YR3/4暗褐色泥砂
27 10YR2/3黒褐色砂泥
28 10YR2/2黒褐色砂泥～粘質土
29 10YR3/3暗褐色砂泥
30 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ブロック少量混
31 10YR2/2黒褐色砂泥
32 10YR2/2～2/3黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ごく少量混
33 10YR2/3黒褐色砂泥
34 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色砂泥
35 10YR2/2黒褐色砂泥
36 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR2/2黒褐色砂泥少量混
37 10YR2/3黒褐色砂泥
38 10YR2/2黒褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥中量混
39 10YR2/2～3/2黒褐色砂泥
40 10YR2/2黒褐色砂泥

図54　掘立柱建物1実測図（1：80）

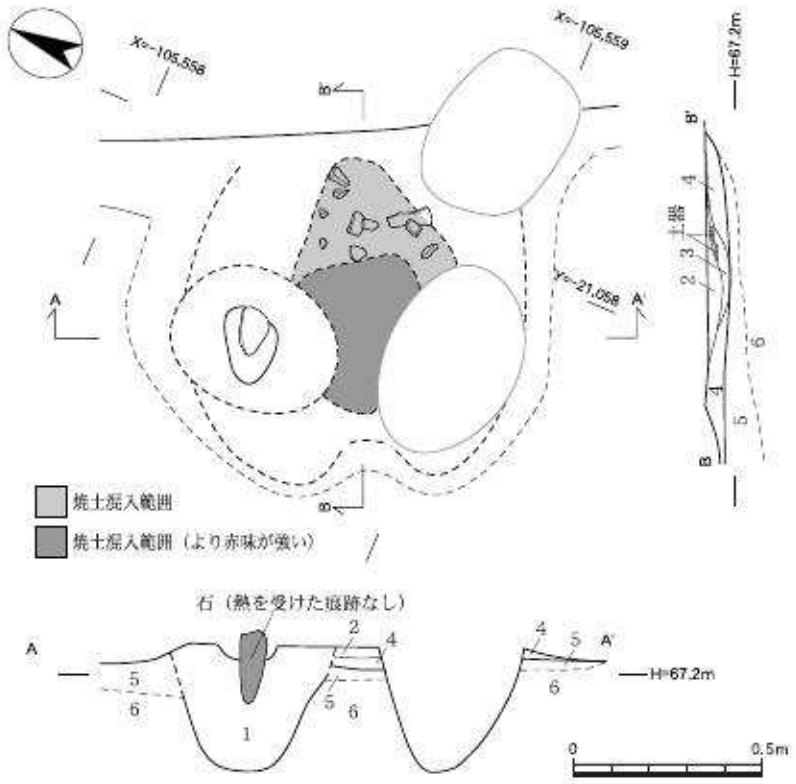
掘立柱建物１（図54）　梁間３間（東西約5.5m）、桁行５間（南北9.0m）以上の掘立柱建物である。各々の柱間は約1.8mである。北に対して約20°西に振れる。柱穴の平面形は短辺0.6m、長辺0.8m前後の隅丸長方形である。柱痕跡が明瞭に残るものは直径0.2m前後ある。深さは0.3m前後のものが多い。柱穴内からは時代が明らかな遺物は出土していないが、竪穴住居と方向が近似していることから存立時期は近いと思われるが、南壁断面図では柱穴10より古い層７の下で竪穴住居78が検出されており、掘立柱建物１のほうが新しい。

竪穴住居90（図55～57）　一辺約4.2mの方形で、方位は北で約25°西に振る。検出面から床面までの深さは、約0.1mある。全体に貼り床があるが、自然地形の窪み部分を厚く埋めて平坦面をなすように貼り付けてある。特に、地形の低い南西部分では0.2mをこえるところもある。壁際には壁溝が巡る。壁溝は幅0.15～0.30mで、深さは0.10m前後ある。また、東の壁際に造り付けの竈の痕跡を検出した。検出した竈は北側と南側で状況が異なり、南側は南北（横）0.9m、東西（縦）0.9m以上で、焼土面が径0.4mの円形状に広がる。袖の形状は不明瞭である。北側は、竈に



1　10YR3/3暗褐色砂泥，10YR4/4褐色砂泥少量混［埋土］
2　10YR3/2黒褐色（～3/3暗褐色）砂泥，10YR4/4褐色砂泥　場所によりごく少量～多量混［壁溝］
3　10YR3/3暗褐色砂泥，10YR4/4褐色砂泥中量混［床土］
4　10YR4/4褐色砂泥，10YR3/3暗褐色砂泥少量混［床土］

図55　竪穴住居90実測図（１：50）



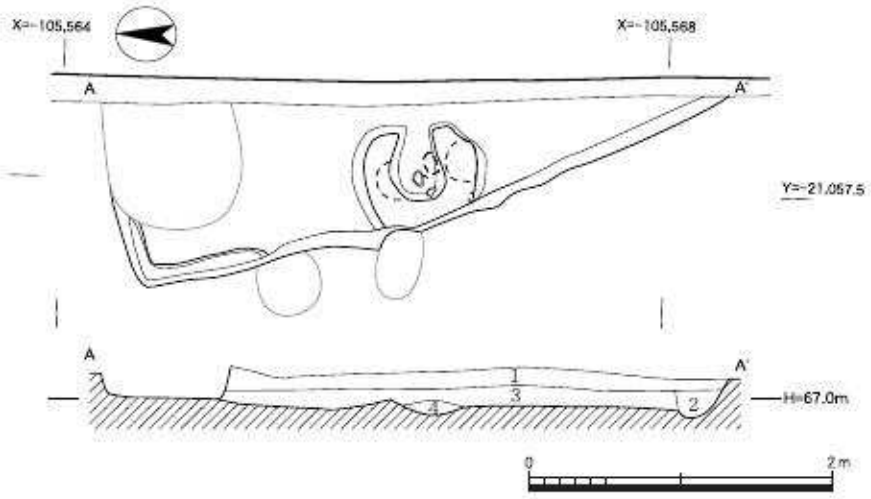
1　10YR4/4褐色砂泥、10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥少量混［別遺構もしくは新しい竈掘形］
2　7.5YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥、5YR4/4にぶい赤褐色焼土ごく少量混［竈埋土］
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥、5YR3/6暗赤褐色他焼土塊中～多量混、遺物混、礫径1cm以下ごく少量混［竈埋土］
4　10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥少量混［竈掘形］
5　10YR4/4褐色砂泥［地山］
6　10YR3/3～4/3暗褐色～にぶい黄褐色泥混じり砂礫、礫径3cm以下主体［地山］

図56　竪穴住居90竈実測図（１：20）

図57　竪穴住居90竈支脚（西から）

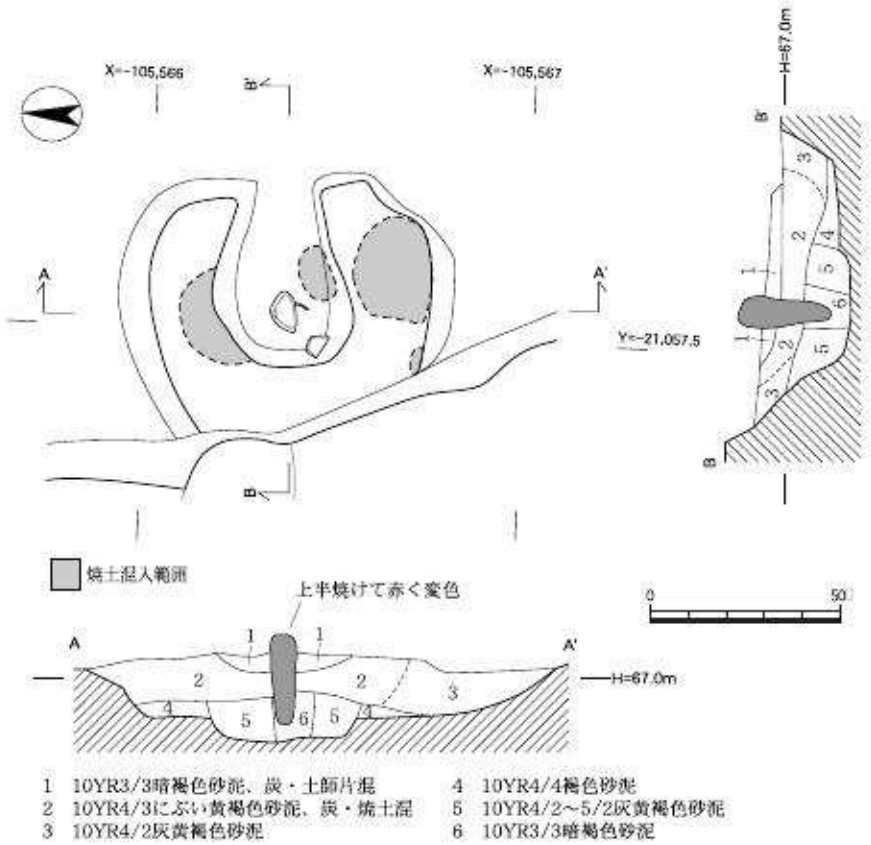
伴うと思われる支脚の可能性がある石材が直立する。石材は長さ0.2m、幅0.06m、露出長0.08mを測る。焼土や支脚などの位置から、南側の竈の廃棄の後、北側の石材のみ残る竈に作り替えた可能性がある。主柱穴は平面においては存在を想定したが、断割の断面観察では確認するには至らなかった。もとから存在しなかったと思われる。この住居は、出土した遺物から７世紀中頃のものと考えられる。

竪穴住居78（図58～60）　建物の大半が調査区東側に広がるため、全体の規模は不明であるが、西辺に付く竈の位置から竪穴住居90と同規模の住居跡と思われる。南北に4.0m、東西0.6mを検出した。方位は、竈から南側の肩は北で約25°西に振る。竈から北側は他の遺構との重複関係により、不明である。検出面から床面までの深さは約0.1mである。床は褐色と灰黄色が混ざった土を0.1～0.15m前後貼り付け、貼り床としている。壁溝は平面では見出せず断面観察において一部その存在を確認した。幅0.2m、深さ0.2m前後ある。主柱穴は調査範囲では見つかっていない。また、西側の壁際から竈の痕跡を検出している。馬蹄形状の袖部分が明瞭に残る。南北（横）0.9



1　7.5YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4～4/6褐色砂泥ブロック少量混［埋土］
2　7.5YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥底部近く中量混、上部はほとんどなし［壁溝］
3　7.5YR3/2～10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥ブロック少量混［床土］
4　10YR4/4褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥少～中量混、礫ほとんどなし、焼土わずかに混［床土］

図58　竪穴住居78実測図（1：50）



1　10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師片混
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、炭・焼土混
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥
4　10YR4/4褐色砂泥
5　10YR4/2～5/2灰黄褐色砂泥
6　10YR3/3暗褐色砂泥

図59　竪穴住居78竈実測図（1：20）

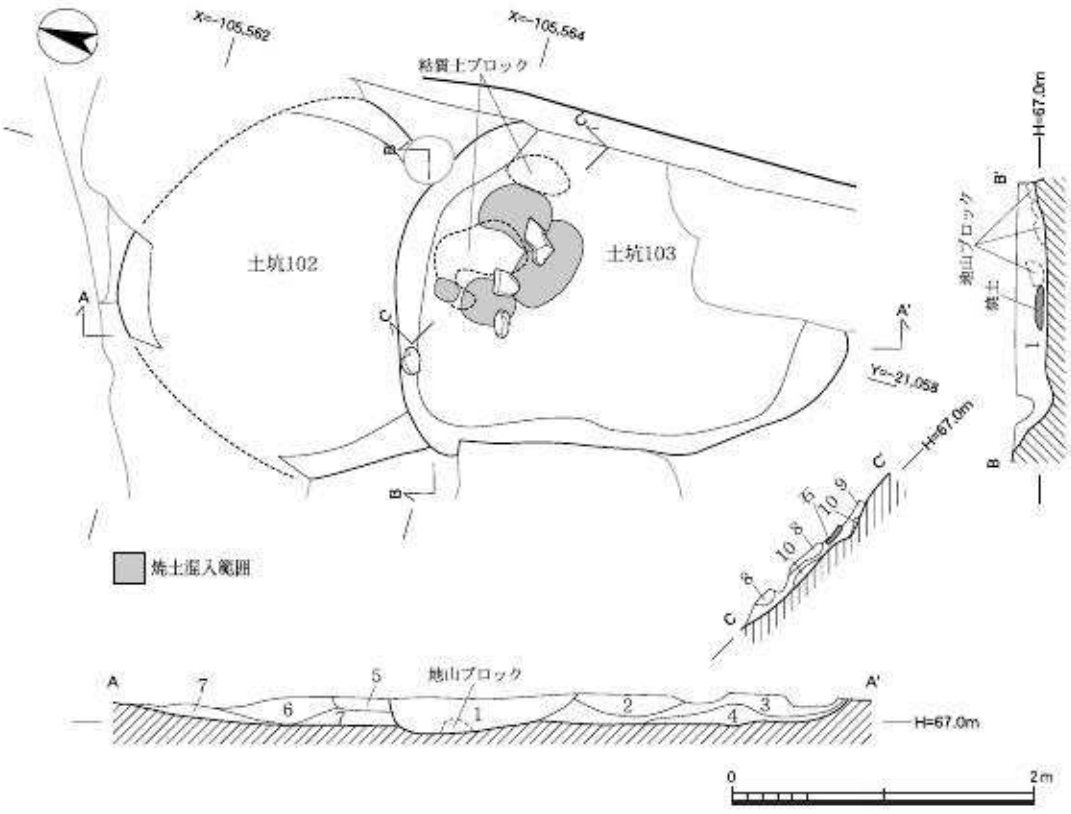
m、東西（縦）0.7mあり、燃焼部の焼土面は0.4mの円形状である。中央に支脚と想定される石材が埋め込まれており、その頂部および側面上部は熱を受け淡い赤褐色を帯びている。支脚は全長0.23m、径0.06m、露出長は0.10mある。この住居からは年代が明らかな遺物は出土していないが、方位や西辺が竪穴住居90に近似することから、それと同時期のものと考えられる。

図60　竪穴住居78竈支脚（東から）

土坑102（図61）　土坑103に切られ、その北側に広がる。南北1.8m以上、東西2.5mある。深さは0.2mまでに収まり、底面は概して平坦である。埋土は土坑103と類似する。

土坑103（図61）　竪穴住居78に切られる形で、その北側に広がる土坑である。東西2.1m以上、南北3.0mである。深さは0.2m前後である。土坑の底部には焼土と粘質土がブロック状に混入していた。何らかの工房に関連する遺構の痕跡である可能性もある。

その他の遺構　柱穴31・46・48などの柱穴群があるが、建物として復元には至らなかった。



1　10YR3/2黒褐色砂泥、炭混、土器混、2.5YR4/6赤褐色焼土ブロック、10YR4/4～4/6褐色粘質土ブロック多量混
2　10YR2/3黒褐色砂泥
3　10YR3/3～3/4暗褐色砂泥
4　10YR3/2黒褐色～4/2灰黄褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥混
5　10YR2/3黒褐色砂泥
6　10YR3/2黒褐色～4/2灰黄褐色砂泥、炭混、焼土混
7　10YR3/3～3/4暗褐色砂泥
（以下は層1を細分）
8　10YR4/4～4/6褐色粘質土、5YR4/6赤褐色能に変色［粘質土ブロック］
9　10YR3/2黒褐色砂泥、2.5YR4/6赤褐色焼土径0.5cm以下の小ブロック中量混
10　10YR4/4褐色砂泥［地山ブロック］

図61　土坑102・103実測図（1：50）

3．遺　　物

（1）出土遺物の概要

遺物はコンテナに５箱である。大半が土器類で、出土量は少ない。土師器甕や須恵器杯蓋・身、壷などがある。図示できたものは以下の遺物のみである。

（2）出土遺物（図62）

竪穴住居78出土遺物　１は土師器杯である。体部を内弯させて立ち上げ、端部は強くヨコナデする。体部外面ヘラケズリ、口縁部にヨコナデを施す。ミガキ痕跡は磨滅で消失している。口径10.5cm、器高3.5cmある。

竪穴住居90出土遺物　２は須恵器杯蓋である。短い返りを付ける。内外面回転ナデ、口径11.0cm、残存高は2.0cmある。

土坑103出土遺物　３は須恵器台付き壷である。体部を丸く立ち上げ、体部中央で内側へ屈曲させる。体部内面と外面上半部は回転ナデ、下半はヘラケズリを施す。肩部にクシ描き波状文を施す。胴部最大径は14.4cm、壷部底径は5.0cm、残存高8.0cmある。

その他の出土遺物　４は須恵器杯Ａである。内弯気味に体部を立ち上げ、口縁部は緩く外反させる。内面および外面上半部は回転ナデ、下部はヘラケズリを施す。口径12.5cm、残存高4.0cmある。

いずれの土器も、飛鳥Ⅱ～Ⅲに収まる。

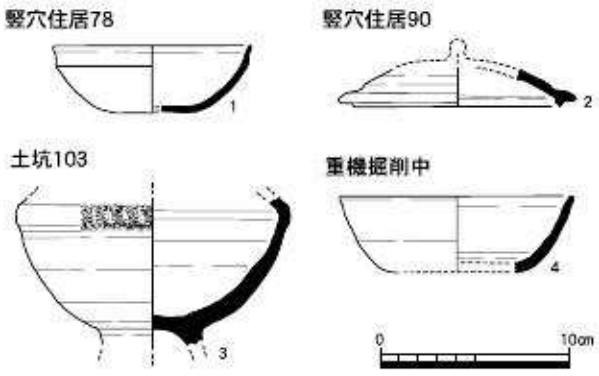


図62　出土土器実測図（１：４）

表13　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器１点、須恵器３点		
合　計		６箱	４点（１箱）	３箱	２箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

4．ま と め

今回の調査において、以下のことが明らかになった。

植物園北遺跡の推定範囲南端付近において、飛鳥時代の集落が広がることが明らかになった。これまでの植物園北遺跡は、弥生時代から古墳時代の集落遺跡が中心とされてきたが、調査地の北西の京都コンサートホール敷地内の発掘調査でも奈良時代から平安時代の建物群が検出されており、この一帯が古墳時代以降における遺跡の集中する地域であった可能性がある。

掘立柱建物１の規模は、梁間３間、桁行５間以上であり、この当時のものからすれば大きい。重複関係からみて、掘立柱建物１は竪穴住居群より新しいと考えられるが、存立時期は竪穴住居と近接しているものと思われ、当地を含めこの一帯に飛鳥時代の集落の重要施設が存在する可能性が高くなった。

また、今回の調査に関連する遺構は、調査地の南側にも展開するものと思われ、植物園北遺跡の範囲はさらに南方に広がるものと思われる。

なお、調査終了以降、北側および東側に隣接する地点で立会調査が行われた。その立会調査の東側では振れを同じくする掘立柱建物が、北側では詳細不明ながら竪穴住居が検出されている[1)]。

註

1）『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成23年度』　京都市文化市民局　2012年

Ⅳ　山科本願寺跡

1．調査経過

今回の調査は、京都市山科区西野山階町地内で実施した。敷地内西側には山科本願寺の「御本寺」を囲う土塁が残り、この地が「御本寺」中心部に近い場所にあたることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導により、過去の調査で明らかになっていない阿弥陀堂や御影堂など主要堂舎に関わる遺構の有無を確認するための調査を実施することとなった。調査は平成22年度と23年度の２ヶ年度にわたって実施した。山科本願寺跡の16次調査と17次調査となる。

16次調査は平成23年１月11日から３月11日まで実施した。調査区は文化財保護課の指導に従い、主要堂舎に関わる施設を確認することを目的として敷地東側に設けた。当初の調査面積は228㎡である。調査では、調査区全体で山科本願寺の整地面を確認した。整地面上では通路状遺構や柱列、集石遺構などを検出した。この整地面と遺構の広がりを確認するため調査区の拡張を行い、最終的な調査面積は295㎡となった。調査中の２月18日には現地説明会を行い成果の公表に努め、約300名の参加を得た。

17次調査は平成23年７月21日から９月28日まで実施した。調査は１区と２区の２ヶ所に分けて行った。１区は16次調査で見つかった通路状遺構の延長部分の確認と、屈曲する土塁の裾部を確認する目的で敷地南側に設けた。東側の一部を16次調査の調査区と重複させ、当初の調査面積は225㎡に設定した。２区は西側に現存する土塁の断面露出部分の土層観察と、土塁斜面から外側の濠にかけての状況を確認する目的で敷地西端に設けた。調査面積は13㎡である。１区では調査区全体で山科本願寺の整地面を確認した。整地面上では、東側で16次調査検出の通路状遺構の延長部分や柱列を確認した。北側では、坪庭状空間の一部と考えられる石組溝群などが見つかった。また、西側では屈曲する土塁の基底部を検出した。石組溝の延長部分と土塁基底部の残存状況を確認するため調査区の拡張を行い、１区と２区とを合わせた最終的な調査面積は305㎡となった。調査中の９月10日には現地説明会を行い、約300名の参加を得た。また、17次調査では土塁を含めた敷地全体と周辺道路の地形測量も実施した。

16次・17次調査ともに確認調査のため、各遺構は部分的な掘り下げに留め、土層観察のための畦を残すなどして図面作成、写真撮影などの記録作成を行った。その後、遺構を土嚢と真砂土で保護し、埋め戻しを行った。

なお、２ヶ年にわたる調査であるが、両調査で見つかった遺構の関連性を重視する立場に立ち、報告は本編でまとめて行うこととする。混乱を避けるため16次調査で検出した個別遺構には1000番台、17次調査で検出した個別遺構には2000番台の遺構番号を付している。

図63　16次調査前全景（北から）

図64　16次調査現地説明会

図65　16次調査埋め戻し状況

図66　17次調査前全景（北北東から）

図67　調査前現存土塁全景（北東から）

図68　現存土塁保護状況

2．遺　　跡

（1）遺跡の位置と歴史

山科本願寺跡は、山科盆地の中央やや西寄りに位置する。この地は山科川、四ノ宮川、音羽川、安祥寺川などにより形成された扇状地の先端にあたり、周囲より標高が高く、比較的安定した地盤を形成している。また遺跡北方には京と東国を結ぶ主街道である東海道が東西に通り、近くには東海道から分岐する奈良街道や渋谷道が通るなど交通と物流の要衝でもあった。

山科本願寺は、文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖・八世蓮如上人により造営が開始された。同12年には「御影堂」が落成、翌13年には「阿弥陀堂」が落成している。その後も造作は続けられ、文明15年（1483）までには「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。寺域は主要堂舎のある「御本寺」、有力末寺の坊舎のある「内寺内」、門徒の居住区などのある「外寺内」の３つの郭で構成され、それぞれの郭を土塁と濠で囲み、あるいは自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市であった。その範囲は、南北約１km、東西約0.8kmにおよぶ。また、延徳元年（1489）には、山科本願寺跡から約１km東に蓮如の隠居所として山科本願寺南殿が造営された。山科本願寺は寺内町の経済的発展に支えられ、公家鷲尾隆康の日記『二水記』に「寺中広大無辺、荘厳只如仏国云々」と記されるほど繁栄した。しかし天文元年（1532）、管領細川晴元率いる近江守護職六角定頼と法華宗および延暦寺の連合軍によって攻撃され焼け落ちた。

遺跡の現状は中心部を国道１号線と東海道新幹線の線路が東西に通る。それに沿って住宅や工場が建ち並び市街地化が進んでいるが、国道１号線の北側では土塁や濠の一部がわずかに残されている。今回の調査地に残る土塁もそのうちの貴重な一つである。山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁は、2002年に「山科本願寺南殿跡　附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。

（2）周辺の調査（図69、表14）

山科本願寺跡では、今回の調査を含めて17次にわたる発掘調査が行われている。またそれ以外にも多数の試掘調査、立会調査が実施されている。主要な調査については図69と表14にまとめた。なお、発掘調査ではないが、1980年には京都橘女子大学考古学研究会により山科本願寺跡全体に及ぶ現状調査がなされている。また、2009～2010年には京都橘大学文学部文化財学科により山科中央公園内に所在する土塁の現状測量調査が行われている。[1]

今回の調査地周辺では、山科本願寺跡２・11～14次の調査が実施されている。今調査地の南隣接地で実施された２次調査では、石室や石組溝、礎石などが見つかっている。２次調査の東で実施された14次調査では、池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などが見つかった。この14次調査では、各遺構埋土や遺構を覆う焼土層から多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵などの高級漆芸品が出土しており、付近に重要な施設が存在したと推測される。また、今調査地の南西で実施した13次

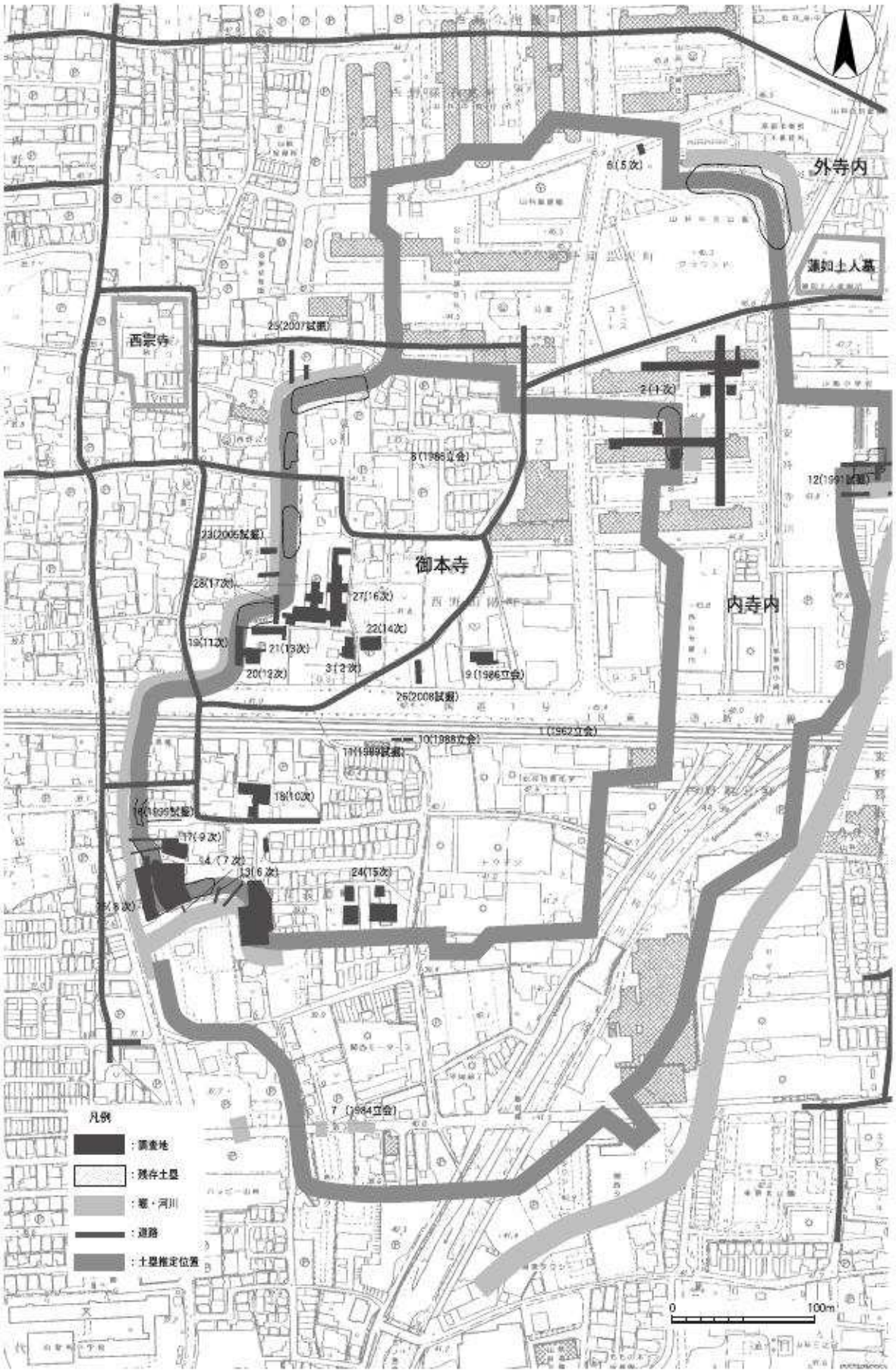


図69　主要調査位置図（１：4,000）

表14　主要調査一覧表

No.	調査名・次数	所在地：山科区	調査期間	方法	概　要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9～11.11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	山科寺内町遺跡第１次	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21～8.4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、塀、南北方向の堀・土塁	2
3	山科寺内町遺跡第２次	西野山階町	1974.10.9.～11.3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	76RT-YG001第３次	西野今屋敷町９（安祥寺中学校）	1976.11.17～11.30	発掘	旧耕土	3
5	76RT-YG002第４次	西野大手洗町20（山階小学校）	1977.2.14～3.5	発掘	整地層	4
6	76RT-JN001第５次	西野阿芸沢町（山科中央公園）	1978.10.30～11.13	発掘	攪乱	5
7	83RT-SW061	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6～11.17	立会	東西および南北方向の堀、土坑群	6
8	85RT-SW054	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1.～1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁、土坑	7
9	86BB-RT010	西野山階町12	1987.1.27～1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	88BB-RT005	西野山階町29	1988.5.30～6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	89BB-RT021	西野山階町29	1989.10.2～10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	91RT-AH001	西野大手洗町20（山階小学校）	1991.8.2～10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	96RT-HG001第６次	西野左義長町16ほか	1997.4.20～7.10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸	12
14	97RT-HG002第７次	西野左義長町23	1997.7.16～9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場	13
15	98RT-HG003第８次	西野左義長町23-1、23-4	1998.8.17～11.9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	センターNo.60	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	00RT-HG004第９次	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10～6.30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	04RT-HG006第10次	西野左義長町13-2	2005.1.17～3.18	発掘	東西および南北方向の堀、塀、柵	17
19	04RT-HG007第11次	西野山階町30	2005.3.1～3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	05RT-HG008第12次	西野山階町30	2005.5.11～5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠を検出	18
21	05RT-HG009第13次	西野山階町30	2005.5.30～7.2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠を検出	17
22	05RT-HG010第14次	西野山階町28-5、28-6	2005.11.11～12.16	発掘	焼成土坑、庭園遺構、柱列を検出 多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土	17
23	05Ｓ208	西野広見町31-1ほか	2005.9.20	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口を検出	19
24	第15次	西野左義長町25-4ほか	2006.7.31～9.15	発掘	御本寺南側を限る堀状の落ち込み、土坑、井戸、溝、柱穴を検出	20
25	07Ｓ274，275	西野広見町5-7，5-10	2007.9.25	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩を検出	21
26	08Ｓ103	西野山階町11-5ほか	2008.9.1	試掘	GL-0.4mで整地層を確認	22
27	10RT-HG012第16次	西野山階町30-1ほか	2011.1.11～3.11	発掘	整地面、焼土の堆積、通路状遺構を検出	本報告
28	11RT-HG013第17次	西野山階町30-1ほか	2011.7.21～9.30	発掘	整地面、石組溝、土塁などを検出	本報告

表15　山科本願寺関係略年表

応永22年（1415）		七世存如の嫡子として蓮如が生まれる。
長禄元年（1457）		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明３年（1471）		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
７年（1475）		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
９年（1477）		応仁、文明の乱一応終わる。
10年（1478）	１月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。（この年、大津近松にて越年。） （山科本願寺の造営始まる。）
11年（1479）	１月	整地と作庭を始める。
	３月	向所を新造。
	４月	堺の古坊を移し、寝殿をつくりはじめる。
	８月	庭できる。
	12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
12年（1480）	１月	三帖敷の小御堂を作る。
	２月	御影堂造作事始め。
	３月	御影堂、棟上の祝。
	８月	ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。 仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
	11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
	12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年（1481）	１月	寝殿の大門柱立。
	２月	阿弥陀堂の事始め。
	４月	阿弥陀堂棟上。
	６月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
14年（1482）	１月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋隠の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
	４月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
	５月	寝殿の天井をはる。
	６月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
	７月	仏壇に奈良塗師をやとってぬらせる。
	９月	仏壇ぬり終る。
15年（1483）	５月	河内誉田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。
	８月	阿弥陀堂瓦葺きおわる。
長享２年（1488）		加賀一向一揆おこる。
延徳元年（1489）		山科南殿を造営する。
明応６年（1497）		大坂石山坊舎造営。
８年（1499）	２月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
	３月25日	蓮如没す、85歳。
大永５年（1525）		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年（1532）	８月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
２年（1533）		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
５年（1536）	７月	天文法華の乱。
元亀元年（1570）		織田信長との石山合戦開始。
天正８年（1580）		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷺森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年（1586）		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年（1591）		本願寺、京都七条堀川（現西本願寺）へ移転。
慶長７年（1602）		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間（1716～1736）		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

（西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第８集　1985年を一部改変）

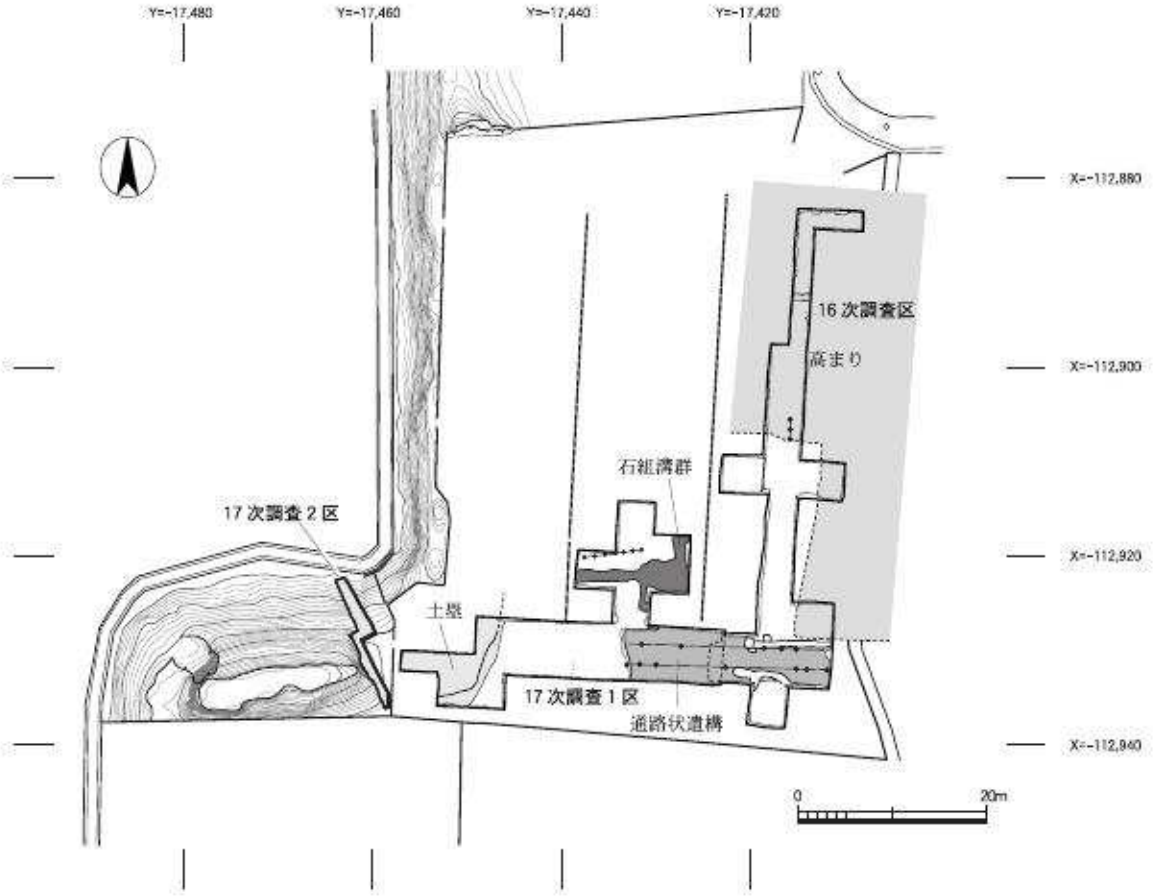


図70　調査区配置図（1：800）

調査では、土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や鉄釘などを生産したと考えられる小規模な炉、土取り穴などが見つかっている。11・12次調査では、南北方向の土塁と石組の暗渠が見つかっている。

以上のように今調査地周辺では、山科本願寺に関連する遺構の検出密度が高く、輸入陶磁器など高級な遺物の出土量が多いことから、「御本寺」の中心部に近いと推測される。

文献一覧（表14の文献番号と一致）

1　杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　日本国有鉄道　1965年

2　岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集　1985年

3　堀内明博『山科本願寺跡　安祥中学校校舎新築に伴う発掘調査の概要　昭和51年度』　51-4　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1977年

4　堀内明博『山科本願寺跡　山階小学校校舎改築に伴う発掘調査の概要　昭和51年度』　51-33　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1977年

5　前田義明『山科本願寺跡　山科中央公園内防火用貯水タンク建設に伴う発掘調査の概要　昭和53年度』53-47　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1980年
6　平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1987年
7　百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』　京都市文化観光局　1988年
8　百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1989年
9　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』　京都市文化観光局　1989年
10　久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』　京都市文化観光局　1990年
11　本弥八郎「山科本願寺跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1995年
12　永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1999年
13　近藤知子「山科本願寺跡２」『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　1999年
14　吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成10年度』　京都市文化市民局　2000年
15　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成11年度』　京都市文化市民局　2000年
16　吉崎　伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成12年度』　京都市文化市民局　2001年
17　小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（1）（2）（3）（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』　京都市文化市民局　2006年
18　柏田有香『山科本願寺跡』　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　2005年
19　長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』　京都市文化市民局　2006年
20　未報告（古代文化調査会による調査）京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課のご教示による。
21　家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成19年度』　京都市文化市民局　2008年
22　堀　大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成20年度』　京都市文化市民局　2009年

3．遺　　構

（1）基本層序（図71）

調査地は現在駐車場として使用されている。現地表面の標高は敷地北東では約42.4m、敷地南西では約41.8mあり、北東から南東に向かって低くなる。

地表下0.2～0.5mまでの駐車場盛土を除去すると駐車場造成以前の果樹畑であった時期の近現代土壌化層が堆積する。灰黄褐色のシルト～細砂を主体として締まりは悪い。層厚は0.05～0.3mある。その下には近世の整地層が堆積する。近世整地層は大きくは上下２層に分かれる。上層は礫混じりの灰黄褐色シルト～細砂が主体で、非常に締まりが悪い。層厚は0.1～0.3mある。下層は黒褐色シルト～細砂が主体で炭化物・焼土を多く含む。層厚は0.1～0.25mある。それらを除去すると山科本願寺の遺構面となる。遺構面の標高は、16次調査区北端では41.75m、南端で41.0m、17次調査１区西端では40.8mであり、北から南、東から西に低くなる。遺構面を形成する整地層は、にぶい黄褐色や褐色のシルト～細砂を主体とし固く締まる。下層では礫を多く含む層も認められる。整地層の層厚は、確認できた部分では0.6～1.5mある。その間では明確な遺構面は確認できなかった。山科本願寺の整地層直下が自然堆積層の基盤層となる。確認調査のため全体的な掘り下げを行っていないことから、調査区全体の基盤層の標高は不明であるが、17次調査１区の江戸時代の土坑2036壁面では標高40.1mで黄褐色シルトの基盤層を確認した。また、17次調査１区西端の断割調査では標高40.4mでオリーブ褐色シルト～細砂の基盤層を確認した。また、17次調査２区の土塁斜面では標高39.3m以下がオリーブ褐色シルト～細砂の基盤層となる。同じ敷地内で１ｍを超える高低差が生じているが、これが自然地形の変化に起因するものか、人為的

表16　16次調査遺構概要

時　代	遺　　構	備　考
室町時代	土坑1006、集石1061・1081、溝1040・1093・1119、高まり、通路状遺構、柱列１・２・３	山科本願寺関連遺構
江戸時代～近代	土坑1017・1026・1031・1055・1056・1079・1080・1086・1103・1104・1122・1123・1125・1126	

表17　17次調査遺構概要

時　代	遺　　構	備　考
室町時代	土坑2061・2064・2134・2156・2157、溝2084・2087・2117・2143・2148・2151、埋納遺構2160、柱列２・３・４、通路状遺構、土塁	山科本願寺関連遺構
江戸時代～近代	土坑2001・2018・2019・2033・2035・2036・2039・2040・2045・2105・2113・2115、溝2017・2026・2027	

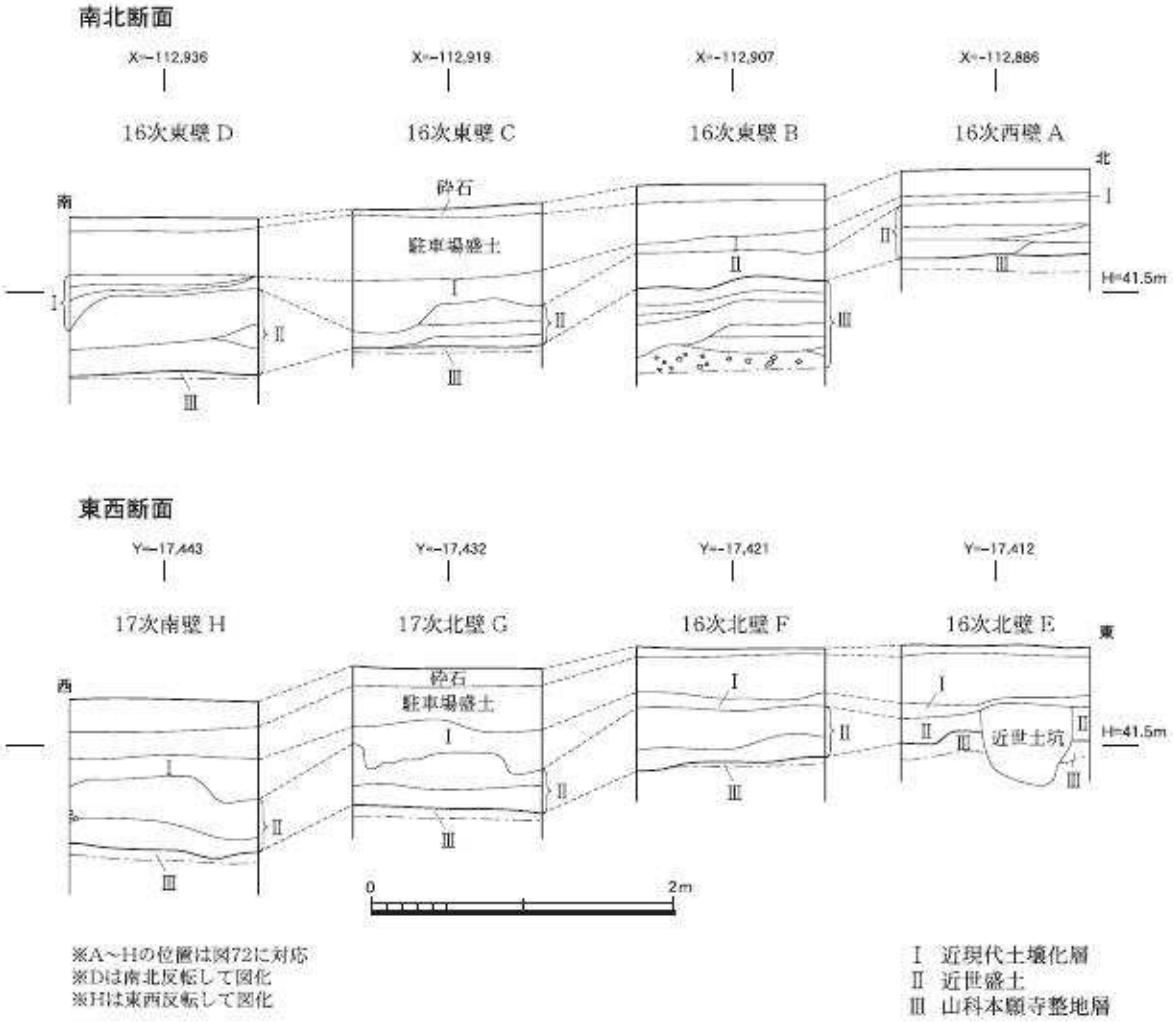


図71　調査区断面模式柱状図（１：50）

な造作によるものかは現状では不明である。遺構は全て山科本願寺の整地面上で検出した。大きくは室町時代と江戸時代から近代の２時期に分けられる。以下では、時代ごとに主要な遺構の概要を述べる。

（２）室町時代の遺構（図72）

整地面　16次調査区と17次調査１区全体で山科本願寺の整地面を確認した。整地の最上層に0.05～0.1mの厚さで、にぶい黄褐色粘土～シルトのブロックを多量に混ぜた化粧土と考えられる土が貼られ、非常に固く締まる。また、その上面に径１～５㎝程度の礫を多量に混ぜた土が貼られ、路面状に固く締まる箇所も認められた。全体が近世の整地土で覆われ、ほぼ後世の削平を受けることなく本願寺存続時期の生活面が良好な状況で残存しており、礎石と考えられる扁平な石が整地面上に据えられたままの状況で出土している。整地面の検出標高は、先述したように16次調査区北端で41.75m、南端で41.0m、17次調査１区西端では40.8mである。南北方向で見ると、X=-112,907ライン付近（図71・72－B）で、東西方向ではY=-17,412ライン付近（図71・72－E）で明瞭な段差がつき、それより北側、東側は高まりとして捉えられる。最上層の化粧土は段

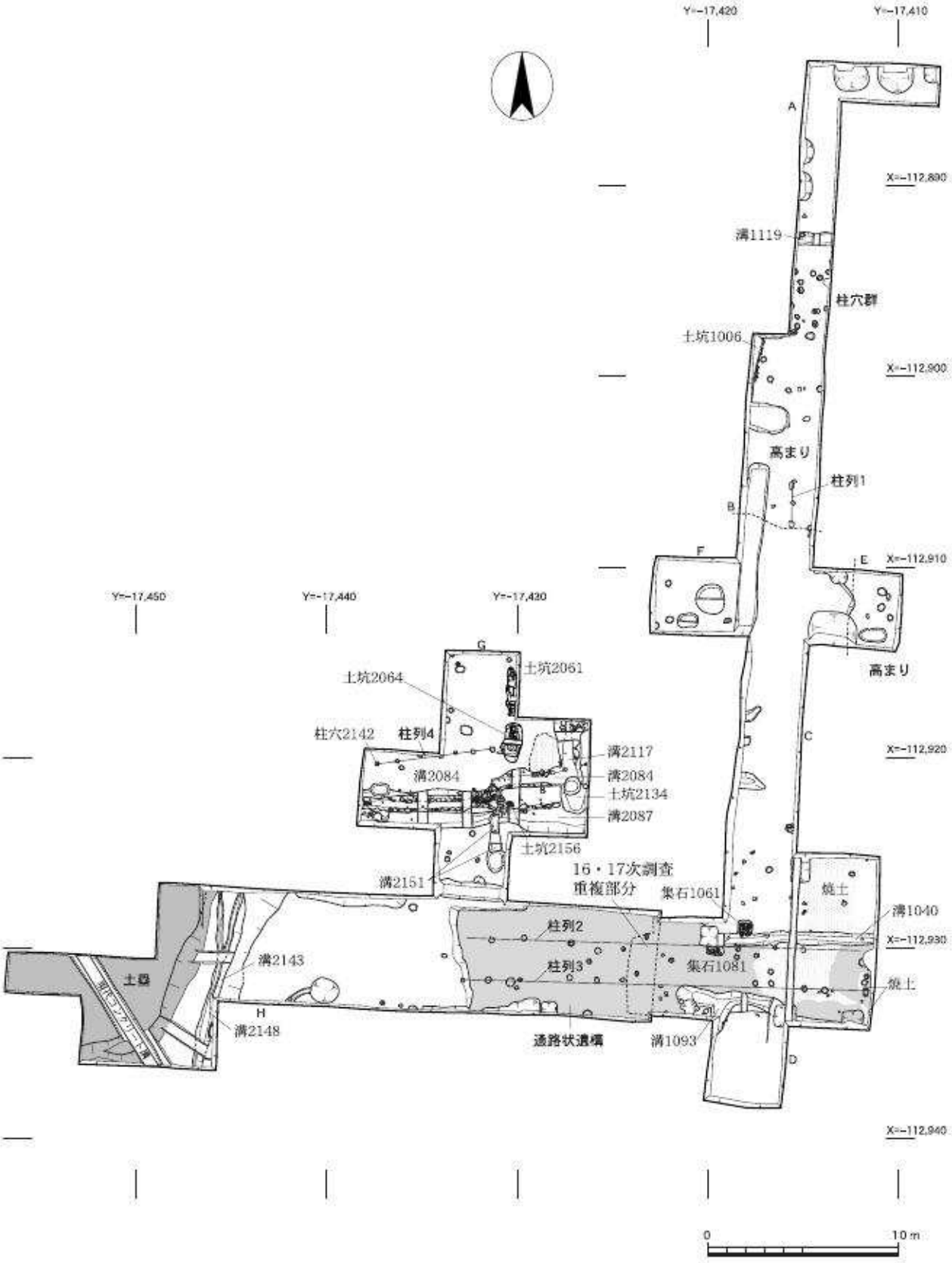


図72. 室町時代遺構平面図（1：300）

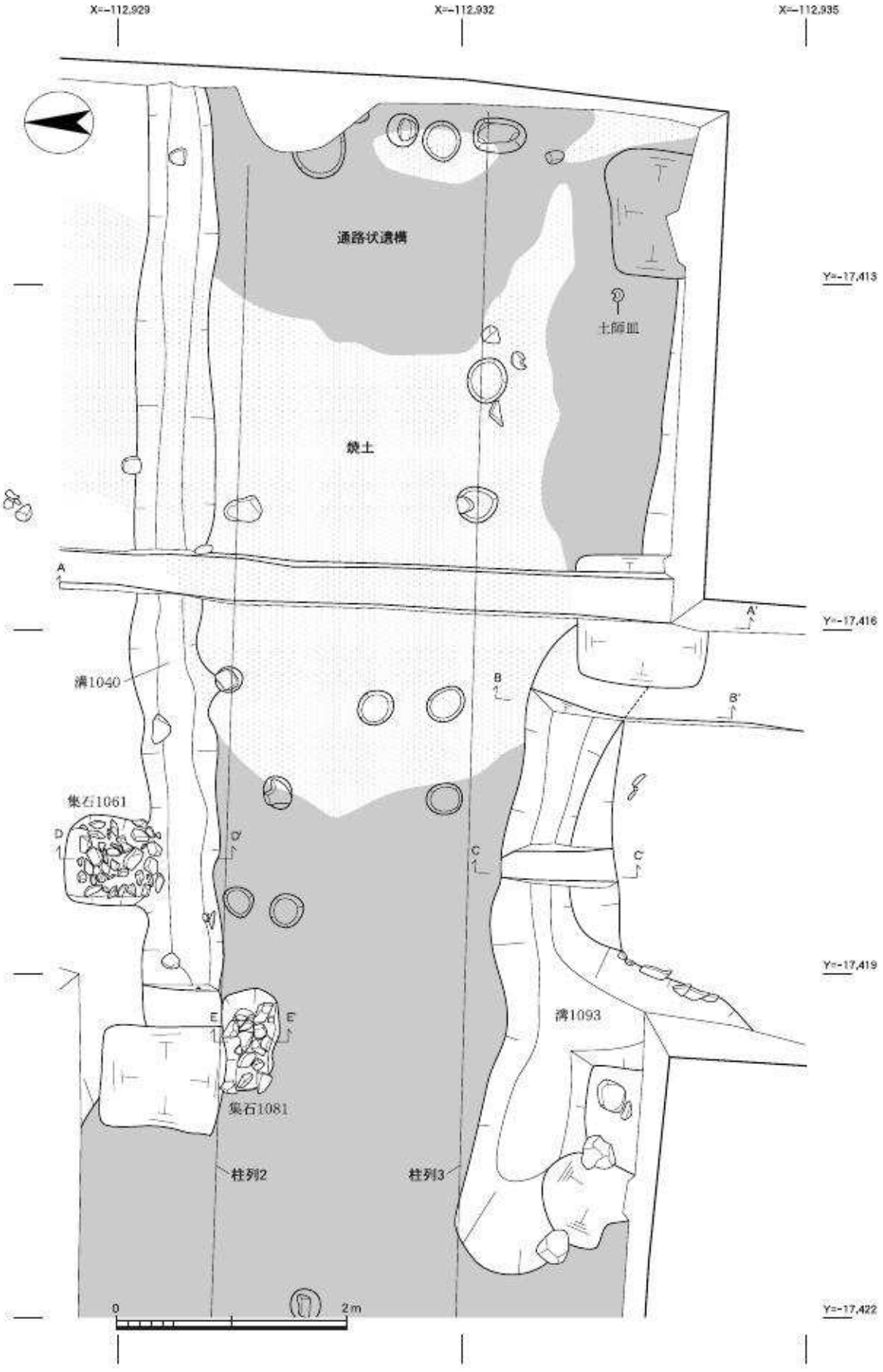


図73　16次調査南端平面図（1：50）

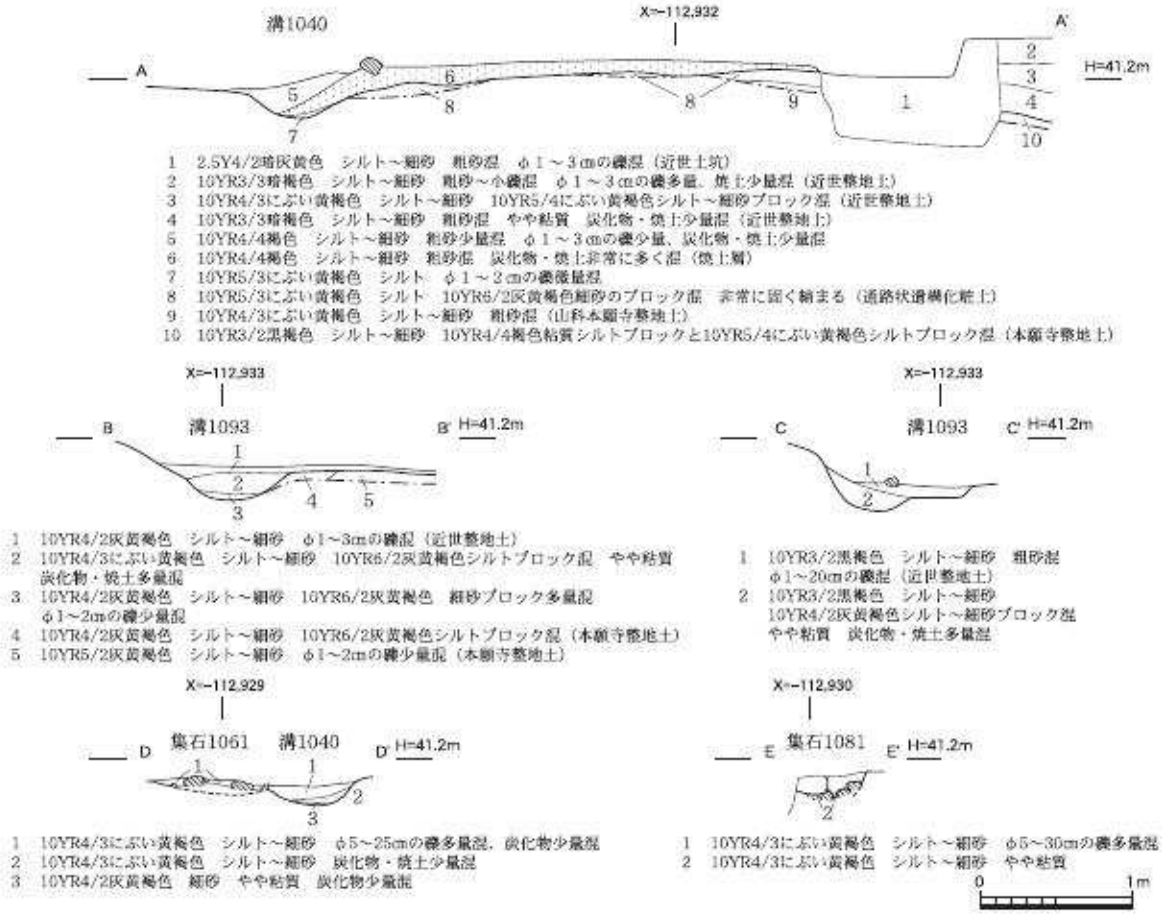


図74　16次調査南端断面図（1：50）

差部分でも連続して認められるため、低い部分が削平されたのではなく意図的に整地土を高く積んで高まりとしていると考えられる。

溝1119（図72）　北側の高まり上で検出した東西方向の溝である。検出長約1.8m、幅約0.6m、深さは0.2～0.25mある。断面は逆台形状を呈する。底面は西が低い。埋土は7.5YR3/3暗褐色のシルト～細砂で、炭化物と焼土が多量に混じる。この溝より北では室町時代の遺構は希薄である。

柱穴群（図72）　北側の高まり上、溝1119の南側で検出した小規模な柱穴群である。掘形は直径0.3～0.45mの円形で、完掘していないため深さは不明である。礎石建ちのもの、地下式礎石を持つもの、掘立柱のものが混在する。また、埋土に焼土が多量に混じるものと全く混じらないものがあり、調査区内では建物としてのまとまりは捉えられなかったが、数時期にわたる建物の建て替えが想定される。

土坑1006（図72）　北側の高まり上、柱穴群の西側で検出した。北に対して約15度東に振れをもつ土坑で、調査区内では南北3.5m分を検出した。深さは約0.1mある。底は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、縁に径0.05～0.1mの礫が並べられる。埋土は7.5YR3/3暗褐色シルト～細砂で焼土と炭化物が多量に混じる。

柱列1（図72）　北側の高まり上で検出した南北方向の柱列である。南北2間分の礎石3石を検出した。柱間は北から約1.0mと1.2mである。座標北に対してほぼ振れをもたない。礎石を整地

面上に直に据える。１石の大きさは径0.3～0.4mある。石材は北から花崗岩系、粘板岩系、花崗岩系である。

通路状遺構（図73・74）　16次調査区南側で検出し、17次調査１区でもその延長部分を検出した東西方向の遺構である。検出長は約28m、検出幅は最大で約5.2mある。16次調査部分では、溝1040と溝1093に挟まれ、その間が蒲鉾状の高まりとして捉えられた。版築状に均質なシルトと砂を混ぜたシルト、粘土ブロックを混ぜたシルトを薄く積み重ね、上面は土間状（三和土）に固く締まる。最上層には白みの強いシルトを貼り（図74－８層）、化粧土としている。遺構上に平行する東西方向の柱列２と柱列３があり、東側では上面に焼土が厚く堆積していた（図74－６層）ことから、屋根の付いた廊下状の施設の存在が想定される。

柱列２・３（図73）　通路状遺構の上面で検出した東西方向の礎石建ちの柱列である。東に対して約２度南に振れる。柱列２と柱列３との間隔は約2.1mある。柱列２では礎石を４石、礎石の据付痕跡と考えられる円形に焼けた箇所を３基確認した。柱列３では礎石を４石、礎石の据付痕跡を６基確認した。柱間は不等間である。いずれも礎石は二次的に火を受けて赤変する。大きさは径0.2～0.35mあり、石材はチャート系、花崗岩系、砂岩系のものがある。

溝1040（図73・74）　通路状遺構の北を画する東西方向の溝である。座標北に対してほぼ振れをもたない。検出長約8.2m、幅0.5～0.7m、深さは0.2～0.3mある。溝底の標高は東端では約41.05m、西端では約40.85mで東から西に向かって下がる。溝底には機能時に堆積したと考えられるシルトが薄く堆積し、その上に焼土が流れ込む状況が確認できた（図74－６・７層）。また、溝底と溝側面から平坦面を上に向けて据えられた礎石状の石が４石出土した。二次的に火を受けて赤変する。大きさは径0.25～0.3mあり、石材は花崗岩系、砂岩系、チャート系のものがある。

溝1093（図73・74）　通路状遺構の南を画する東西方向の溝である。東に対して約９度南に振れをもつ。検出長約8.7m、幅0.8～1.1m、深さは0.2～0.25mある。溝底の標高は東端では約41.0m、西端では約40.75mで東から西に向かって下がる。また、Y=-17,420付近で南に屈曲する。屈曲部では東壁面に平瓦が貼り付けられていた。

集石1061（図73・74）　溝1040の北肩部に取り付く集石遺構である。一辺約0.8m四方の隅丸方形で、径0.05～0.2mの礫が詰まる。石材はチャート系を主体とし、砂岩系、花崗岩系が少量混じる。

集石1081（図73・74）　溝1040の南肩部に取り付く集石遺構である。東西約0.9m、南北約0.5mの隅丸長方形で、径0.05～0.25mの礫が詰まる。石材はチャート系が主体で砂岩系が少量混じる。集石1061とともに位置や構造から見て、排水を浸透させて処理するための施設と推測される。

石組溝群（図75・76）　17次調査１区北半で検出した溝2084・2087・2117・2151、土坑2134などからなる一連の遺構群である。南北方向の溝2117がX=-112,921、Y=-17,427の交点付近で東西方向の溝2084に接続する。接続部南東には方形の土坑2134が配置される。東西方向の溝2084は、Y=-17,430付近で南に屈曲し、同じく東西方向の溝2087と合流し、さらに西へ延びる。溝2084と溝2087の間は島状遺構となる。また、南北方向の溝2151が溝2084と溝2087の合流部に

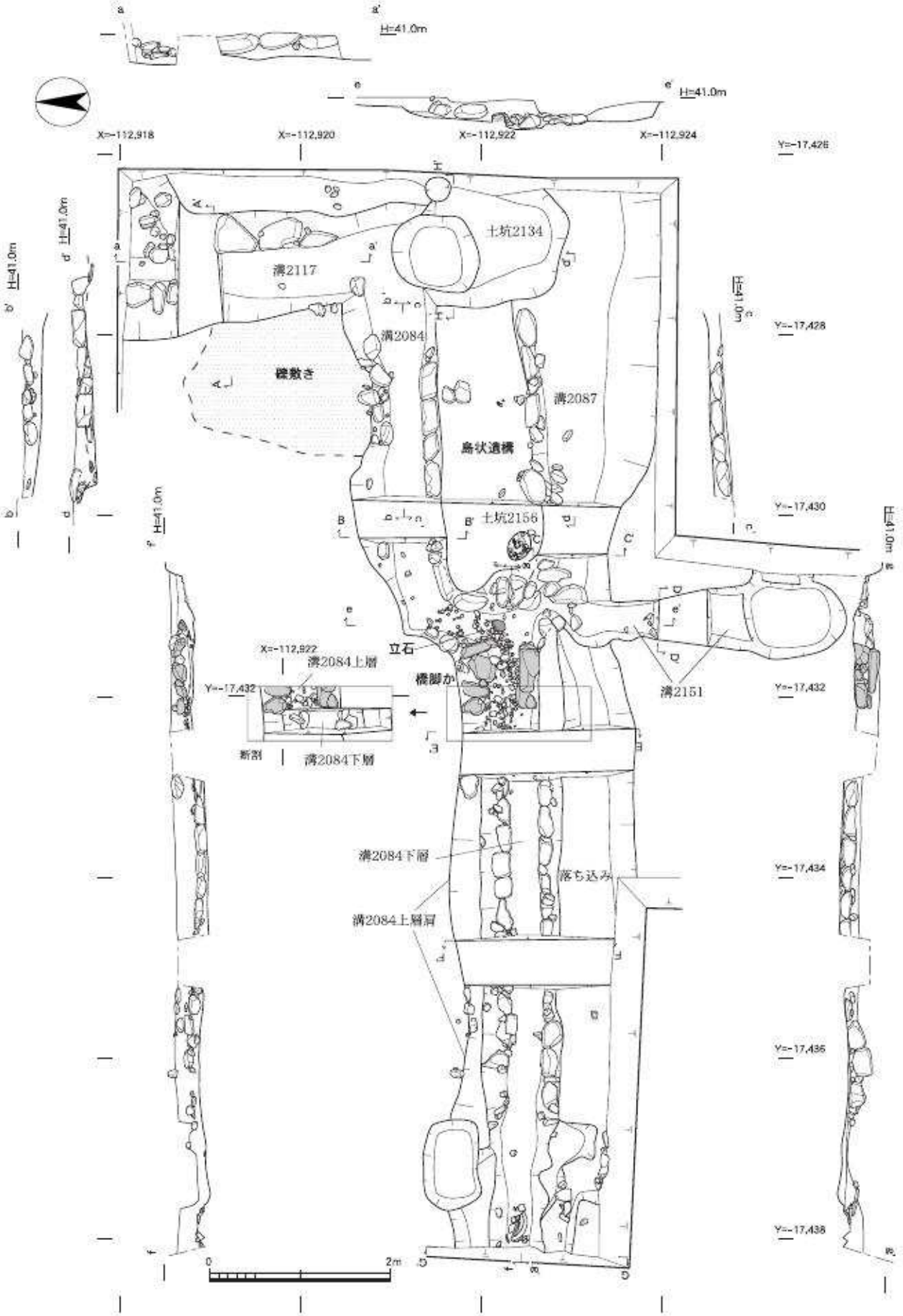


図75　石組溝群平面図（1：60）

図76　溝2084・2087・2117・2151、土坑2134断面図（1：50）

南から接続する。以下、個別の遺構について東側から順に詳説する。

溝2117（図75・76）　南北方向の石組溝である。南北約0.3m分を検出した。座標北に対してほぼ振れを持たない。幅は石の外法で1.0～1.5m、深さは0.2～0.25mある。調査区北端で東肩が北東方向に拡がる。溝底の標高は北端が最も低く、土層観察のための畦より南では北から南に緩

やかに下がることから、北側が池状に拡がり、そこから溢れた水を南へ流していた可能性が考えられる。石組みは東壁で比較的良く残り、北端の拡がり部分では径0.05～0.2mの石がまばらに敷かれる。その南側では径0.4～0.45mのやや大振りの石が３石、長辺を内側に向けて据えられる。西壁は北端に径0.2～0.3mの石が３石残る。中央の石は短辺を内側に向けて据えられる。石材は砂岩系、チャート系、花崗岩系が混じる。

土坑2134（図75・76）　溝2117の南に位置する土坑である。東は調査区外に延びる。北側が一段深い不整形な土坑で、南北約1.9m、東西約1.2m分を検出した。底は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。深さは浅い部分で約0.25m、深い部分で約0.5mある。底に砂が堆積することから、溝2117や溝2087から流れ込んだ水を一時的に溜める枡と考えられる。埋土からは多量の土師器皿や炭化物、貝殻などが出土した。

溝2084（図75・76）　溝2117と接続し、石組溝群の幹線となる東西方向の溝である。検出長は約10.5mある。Y=-17,431ラインで南へ屈曲し後述する溝2087と合流してさらに西へ伸びる。屈曲部より東側は、石の外法で1.0～1.5m、内法で約0.3m、深さは0.2～0.25mある。溝底の標高は、東端で40.75m、西端で40.8mあり東がやや低い。溝2087との間が島状遺構になり、南壁の石組みはその護岸を兼ねる。長径0.3～0.4mの石材が長辺を溝の内側に向けて据えられる。対して北壁の石組みは、径0.2～0.3mの石材が向きを揃えずに据えられる。溝屈曲部では、約0.1mの段差が付き西が低い。溝2087との合流部には、径約0.2mの花崗岩系の石が立てて据えられる。その西側の溝南壁では石が上下２段に積まれる。上段の石は長径0.5mのチャートで、平坦面を上に向け横長に据えられる。それと向き合う北壁の石組みは長径0.3～0.45mの石材が平坦面を上に向け、短辺を溝の内側に向けて据えられる。この部分は、使用された石材の大きさや石の組み方が他とは異なり、またこの間からは炭化した板材が溝に落ち込んだ状態で出土したことなどから、木製の橋が架けられていた可能性が考えられる。さらにこの溝2087との合流部から橋脚の可能性がある部分には、溝底に径0.03～0.05mの小礫が敷かれていた。溝のY=-17,432より西側では断面で溝の作り変えを確認した。図75・76の断面Ｅラインでは２時期、ＦラインとＧラインでは３時期の変遷を確認した。最も古いものを溝2084下層、次いで溝2084中層、最も新しいものを溝2084上層とする。溝中層と上層は石が抜き取られており、平面的には上層の北肩のみを検出した。断面で確認した溝上層の幅は0.9～1.0m、深さは0.1～0.15mある。溝底の標高は40.7～40.75mで西がわずかに低い。溝中層は幅1.0～1.2m、深さは約0.2mあり、溝底には層厚約0.05mの砂が堆積する。溝底の標高は約40.6mでほぼ平坦である。溝下層は石組みが良好に残る。幅は石据付の外法で0.7～0.9m、石組みの内法で0.3～0.35mある。深さは石の天端からで0.15～0.2mあり、底には砂が堆積する。溝底の標高は40.45～40.55mでやや起伏がある。石組みは北壁、南壁ともに径0.2～0.3mの石材が長辺を内側に向けて横向きに据えられ、間に径0.05～0.1mの石を差し込み固定している。使用された石材はチャート系が多く、他に砂岩系、花崗岩系がある。溝下層の段階では、溝の南側が整地面から深さ約0.1mの落ち込みとなる。Y=-17,432ラインの断割調査で、溝下層の石組みが橋脚状の石組みの下に続くことが判明したことから、橋脚状部分より東側の溝

群は西側の溝2084上層または中層に対応すると考えられる。溝2084下層に対応する東側部分については、今回保存のため掘り下げを行っておらず不明である。

また溝2117と溝2084の接合部北西では南北約2.0m、東西約1.5mの範囲にわたって礫敷きを検出した（図版17－３）。径0.01～0.05mの礫が平坦面を上に向けて敷かれ、固く敲き締まる。この付近には焼土が堆積し、礫敷きも二次的に火を受け、赤変する箇所が認められた。

溝2087（図75・76）　東西方向の溝で、Y=-17,431ライン付近で北に屈曲し溝2084と合流する。検出長は約4.5m、幅0.8～1.3m、深さは0.1～0.15mあり、西が低い。溝2084との間が南北約1.0m、東西約3.0mの島状遺構となる。溝2087の北壁は島状遺構の護岸と共有し、南壁は石組みがなく、なだらかに立ち上がる。島状遺構は黄褐色系のシルト～細砂で構築され、最上面には灰白色系のシルトが薄く化粧土として貼られ固く締まる。周囲に長径0.3～0.4mの石材が長辺を溝側に向けて据えられる。ただし、西突端部は石の小口面が外側に向けて据えられる。石材はチャート系、砂岩系、花崗岩系が混じる。

土坑2156（図版17－２）　島状遺構の上面で検出した土坑である。南北0.25m、東西0.3mの楕円形で深さは約0.05mある。埋土は7.5YR4/3褐色シルト～細砂で焼土が混じる。輸入陶磁器の白磁輪花皿や赤彩された瓦質の動物型土製品とともに土師器皿が重なった状態で出土した。

溝2151（図75・76）　南北方向の素掘り溝である。X=-112,923ライン付近で溝2084と溝2087の合流部に接続する。南端は一段深く土坑状になり東に屈曲する。検出長は約3.0m、幅0.4～0.7m、深さは0.2～0.25mある。溝底の標高は40.7～40.75mで北が低い。溝底には砂が堆積する。土坑部分は不整形で南北1.1m、東西0.8m、深さは約0.4mある。底には砂が堆積し、一時的に水を溜めた枡状の施設と考えられる。

土坑2061（図77）　石組み溝群の北側で検出した土坑である。土坑2064と南北に並ぶ北側の土坑である。南北に細長い土坑の中に３基の柱穴が配置される。土坑は南北約2.4m、東西約0.6m、深さは約0.15mある。南北軸は北に対して約３度西に振れる。中に配置された柱穴は、北柱が径約0.2m、深さ約0.5m、中央柱が径約0.35m、深さ約0.9m、南柱が径約0.2m、深さ約0.95mある。いずれも柱の抜き取りが行われており、柱痕跡は確認できない。柱を据える際の落とし込みのためのスロープがいずれの柱穴にも認められ、北柱では南西、中央柱では西、南柱では北西側にある。中央柱の径が最も大きいことから、中心に高い柱を立て、それを両側の柱で支える宝幢遺構の可能性がある。最上層の土坑の凹みには焼土が混じるが、柱穴は締まりの悪い土で埋まる。

土坑2064（図77）　土坑2061の南に並ぶ土坑である。土坑2061と同様に一段掘り下げた南北に細長い土坑の中に３基の柱穴が配置される。土坑は南北約2.1m、東西約1.0m、深さは約0.1mある。南北軸は北に対して約４度東に振れる。中に配置された柱穴は、完掘していないため不確定な部分もあるが、北柱が径約0.25m、深さ約0.8m、中央柱は径約0.35m、深さ約0.75m、南柱は径約0.35m、深さ約0.75mある。いずれも柱の抜き取りが行われており、柱痕跡は確認できない。柱を据えるためのスロープがいずれの柱穴にも認められる。北柱では南、中央柱では北東、南柱では南側にある。埋土は最上層の凹みに焼土が混じるが、柱穴埋土は締まりが悪く、礫や塼など

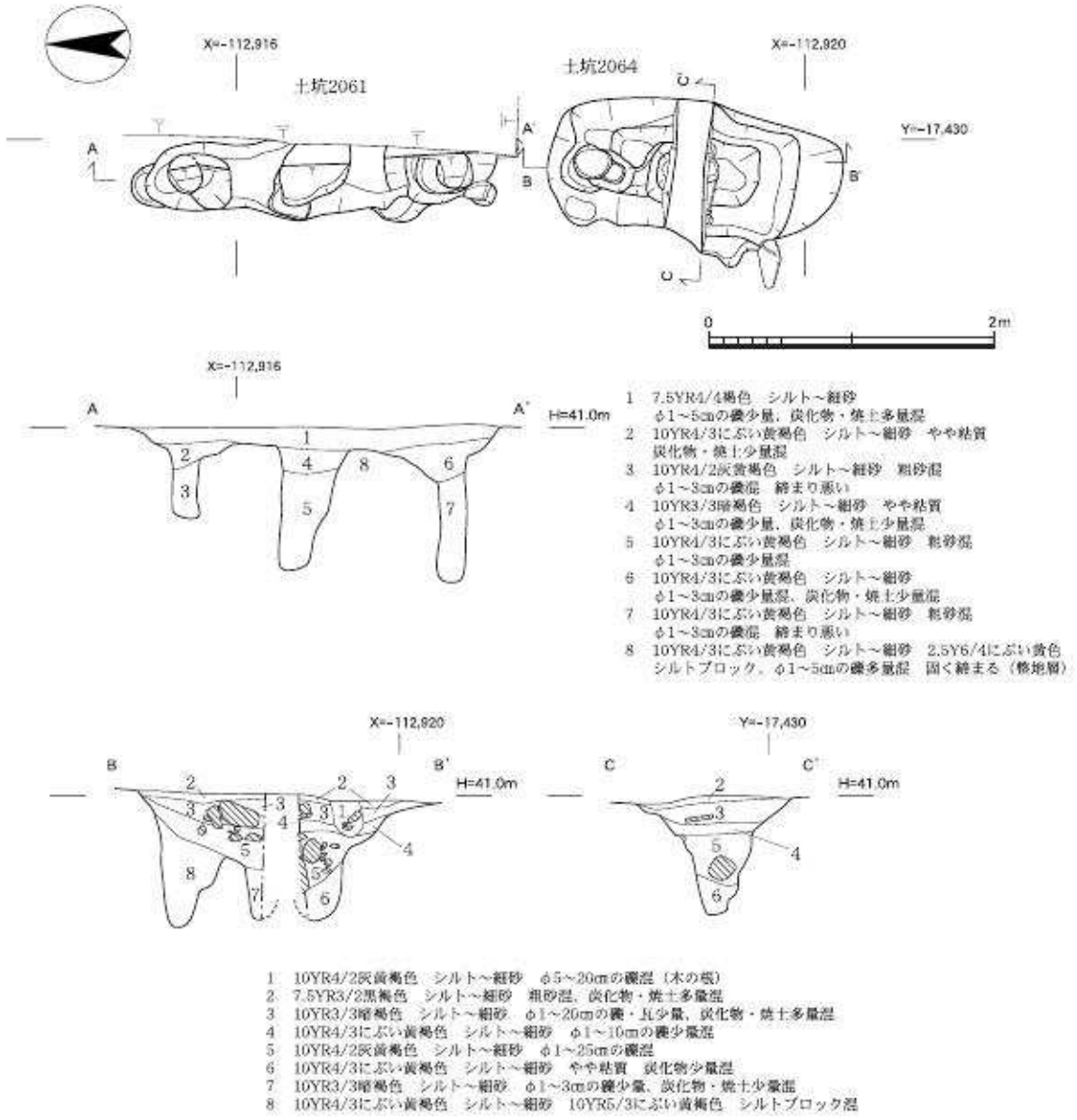


図77　土坑2061・2064実測図（１：50）

が混じる。土坑2061と同様、宝幢遺構の可能性がある。

柱列４（図72）　溝2084の北側で検出した東西方向の柱列である。６間分を検出した。方位は東に対して北に約10度振れる。柱間0.9～1.2m，柱径は0.2～0.25mある。深さは西端の柱穴2142のみ近世の土坑壁面で確認した。約0.3mあり、底には地下式礎石が据わる。それ以外の柱穴は完掘していないため不明である。

土塁（図78・79）　17次調査１区西側では、屈曲する土塁を検出した。肩部には腐植土が堆積していたが、それを除去すると土塁の基底部が良好に残存していた。基底部の検出標高は約40.5mで約35度の傾斜角で立ち上がる。１区西端では、約0.3mの現代駐車場盛土の直下が土塁構築土となる。断割調査の結果、土塁部分では図79のＡライン１～４層とそれ以東で明瞭な層界が認められた。１～４層は東西方向の土塁構築土、それ以東は南北方向の土塁構築土と考えられ、今回の土塁屈曲部では、南北土塁を先に構築したのち東西土塁を構築したことが判る。東西土塁構築

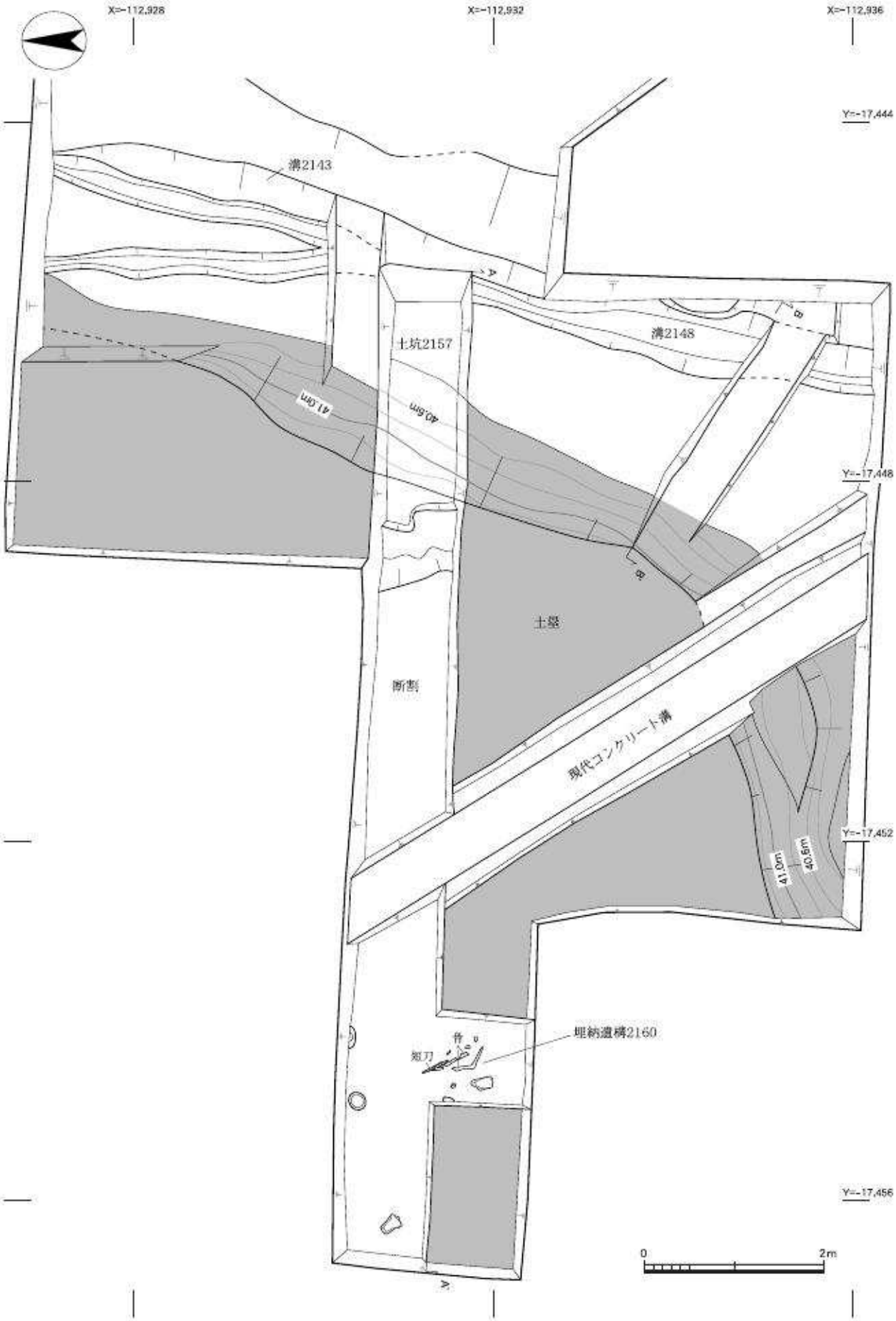
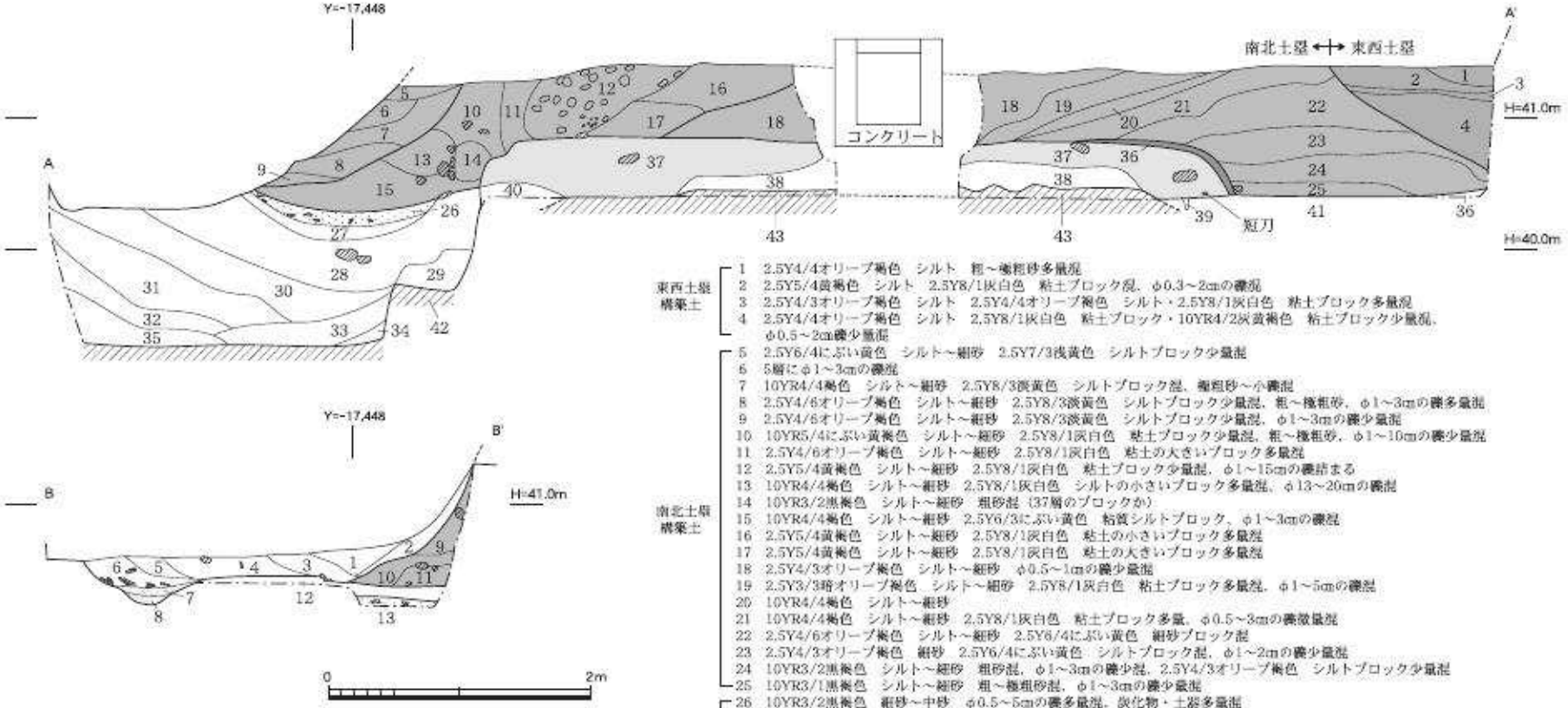


図78　17次調査西端平面図（1：60）



1 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ3～5cmの礫多量混（崩積土）
2 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂混 φ1～2cmの礫混
3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂少量混（溝2143）
4 10YR4/4褐色 シルト～細砂 やや粘質 φ1～5cmの礫少量混（溝2143）
5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫多量、土器多量混（溝2143）
6 10YR4/2灰黄褐色 細砂 粗砂混 φ0.5～3cmの礫多量、土器多量混（溝2143）
7 10YR5/4にぶい黄褐色 中～極粗砂 砂質 φ0.5～2cmの礫混（溝2148）
8 10YR4/4褐色 細砂 粗～極粗砂混 砂質 φ1～2cmの礫少量混（溝2148）
9 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混（土壇構築土）
10 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂 φ0.5～1cmの礫少量混（土壇構築土）
11 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫微量混（土壇構築土）
12 10YR5/4にぶい黄褐色 粘質シルト 細砂混 φ1～10cmの礫少量混（土坑2157）
13 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂 φ0.5～5cmの礫多量混、炭化物・土器多量混（土坑2157）
（Aライン26層に対応）

東西土壁構築土
1 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト 粗～極粗砂多量混
2 2.5Y5/4黄褐色 シルト 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック混、φ0.3～2cmの礫混
3 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト・2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック多量混
4 2.5Y4/4オリーブ褐色 シルト 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック・10YR4/2灰黄褐色 粘土ブロック少量混、φ0.5～2cm礫少量混

南北土壁構築土
5 2.5Y6/4にぶい黄色 シルト～細砂 2.5Y7/3浅黄色 シルトブロック少量混
6 5層にφ1～3cmの礫混
7 10YR4/4褐色 シルト～細砂 2.5Y8/3淡黄色 シルトブロック混、極粗砂～小礫混
8 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト～細砂 2.5Y8/3淡黄色 シルトブロック少量混、粗～極粗砂、φ1～3cmの礫多量混
9 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト～細砂 2.5Y8/3淡黄色 シルトブロック少量混、φ1～3cmの礫少量混
10 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック少量混、粗～極粗砂、φ1～10cmの礫少量混
11 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土の大きいブロック多量混
12 2.5Y5/4黄褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック少量混、φ1～15cmの礫詰まる
13 10YR4/4褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 シルトの小さいブロック多量混、φ13～20cmの礫混
14 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂混（37層のブロックか）
15 10YR4/4褐色 シルト～細砂 2.5Y6/3にぶい黄色 粘質シルトブロック、φ1～3cmの礫混
16 2.5Y5/4黄褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土の小さいブロック多量混
17 2.5Y5/4黄褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土の大きいブロック多量混
18 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂 φ0.5～1cmの礫少量混
19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック多量混、φ1～5cmの礫混
20 10YR4/4褐色 シルト～細砂
21 10YR4/4褐色 シルト～細砂 2.5Y8/1灰白色 粘土ブロック多量、φ0.5～3cmの礫微量混
22 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト～細砂 2.5Y6/4にぶい黄色 細砂ブロック混
23 2.5Y4/3オリーブ褐色 細砂 2.5Y6/4にぶい黄色 シルトブロック混、φ1～2cmの礫少量混
24 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ1～3cmの礫少混、2.5Y4/3オリーブ褐色 シルトブロック少量混
25 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂混、φ1～3cmの礫少量混

土坑2157
26 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂 φ0.5～5cmの礫多量混、炭化物・土器多量混
27 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫多量混 やや粘質
28 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ0.5～20cmの礫多量混 締まり悪い
29 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂混、φ0.5～3cmの礫混、炭化物少量混 締まり悪い
30 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ0.5～5cmの礫多量混 やや粘質 締まり悪い
31 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ0.5～2cmの礫混 締まり悪い
32 10YR4/4褐色 細砂 φ1～3cmの礫少量混 締まり悪い
33 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂混、φ1～3cmの礫多量混 締まり悪い
34 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 やや粘質 炭化物少量混
35 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂混、φ0.5～2cmの礫混 締まり悪い
36 10YR5/1褐灰色 粘質シルト（盛土）
37 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ1～25cmの礫少量混（盛土）
38 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂（土壌化層）
39 10YR3/1黒褐色 粘質シルト（杭か）
40 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混、φ1～7cmの礫多量混 固く締まる（本願寺造営時整地層か）
41 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂混（本願寺造営時整地層か）
42 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂（基盤層）
43 2.5Y4/6オリーブ褐色 シルト～細砂（基盤層）

図79 17次調査西端断面図（1：50）

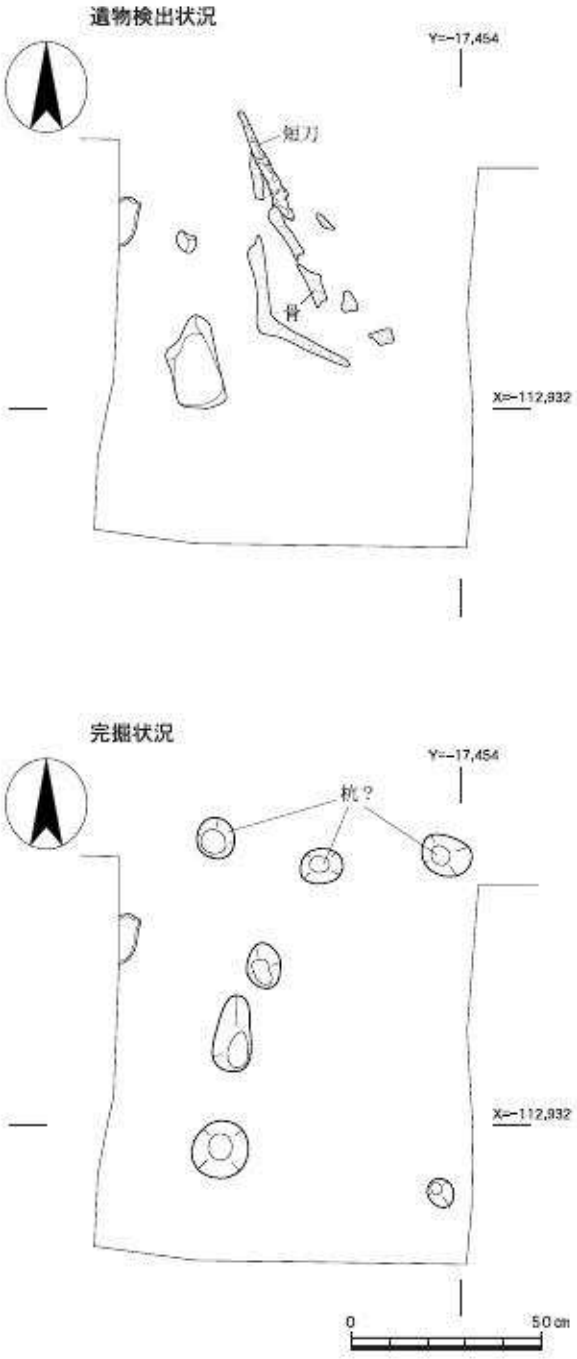


図80　埋納遺構2160実測図（１：20）

土は、礫をあまり含まない均質なシルト層を主体とし、灰白色の粘土～シルトのブロックや粗砂を混ぜた土を南北土塁の肩部に水平に積む。非常に固く締まる。図79のAライン５～25層の南北土塁構築土は、部分によって土の積み方が異なる。22～25層の土塁の郭となる部分では、礫をあまり含まない均質なシルト～細砂を主体とした土を0.1～0.3mの厚さで水平に積む。次いで18～21層は、郭となる土塁の西斜面に0.1～0.5mの厚さで斜め積みする。土は黄褐色の均質なシルト～細砂を主体として灰白色の細かい粘土ブロックが多量に混じり、非常に固く締まる。間には礫が多量に混じる層もある（19層）。そのさらに内側の10～17層では団子状に土が積み上げられる。１層の単位は径約0.3～1.0mとばらつきがある。やはり礫が多量に混じる土と混じらない土の両方が使用される。５～９層の土塁の内法面となる部分では、礫が多量に混じる層と混じらない層が互層となり0.1～0.2mの厚さで水平に積みあげられる。

南北土塁構築土の下層では、断面台形状の盛土を確認した（図79－Aライン37層）。東西幅約5.7m、高さは約0.4mある。黒褐色のシルト～細砂で、東側では褐灰色の粘質シルトが肩に貼り付く（36層）。これらは土塁構築土の主体となる黄褐色系の粘質の強いシルト～細砂とは土質が異なり、土の積み方も比較的細かい単位で積み上げられる土塁構築土と違い基本的には単層で、締まりも悪いことなどから、土塁構築以前のなんらかの区画施設に関わる盛土とその化粧土の可能性がある。この盛土下面では後述する埋納遺構2160が見つかった。盛土の下ではさらに、上から下に向かって漸次的に土壌化が進行する層を確認した（38層）。一時的に地表に晒されていたと考えられる。その下がオリーブ褐色シルト～細砂の自然堆積層と考えられる基盤層となる（43層）。この基盤層はY=-17,449.５より東、Y=-17,454より西でそれぞれ下がり、その上には本願寺の整地層と考えられる層（40・41層）が乗る。

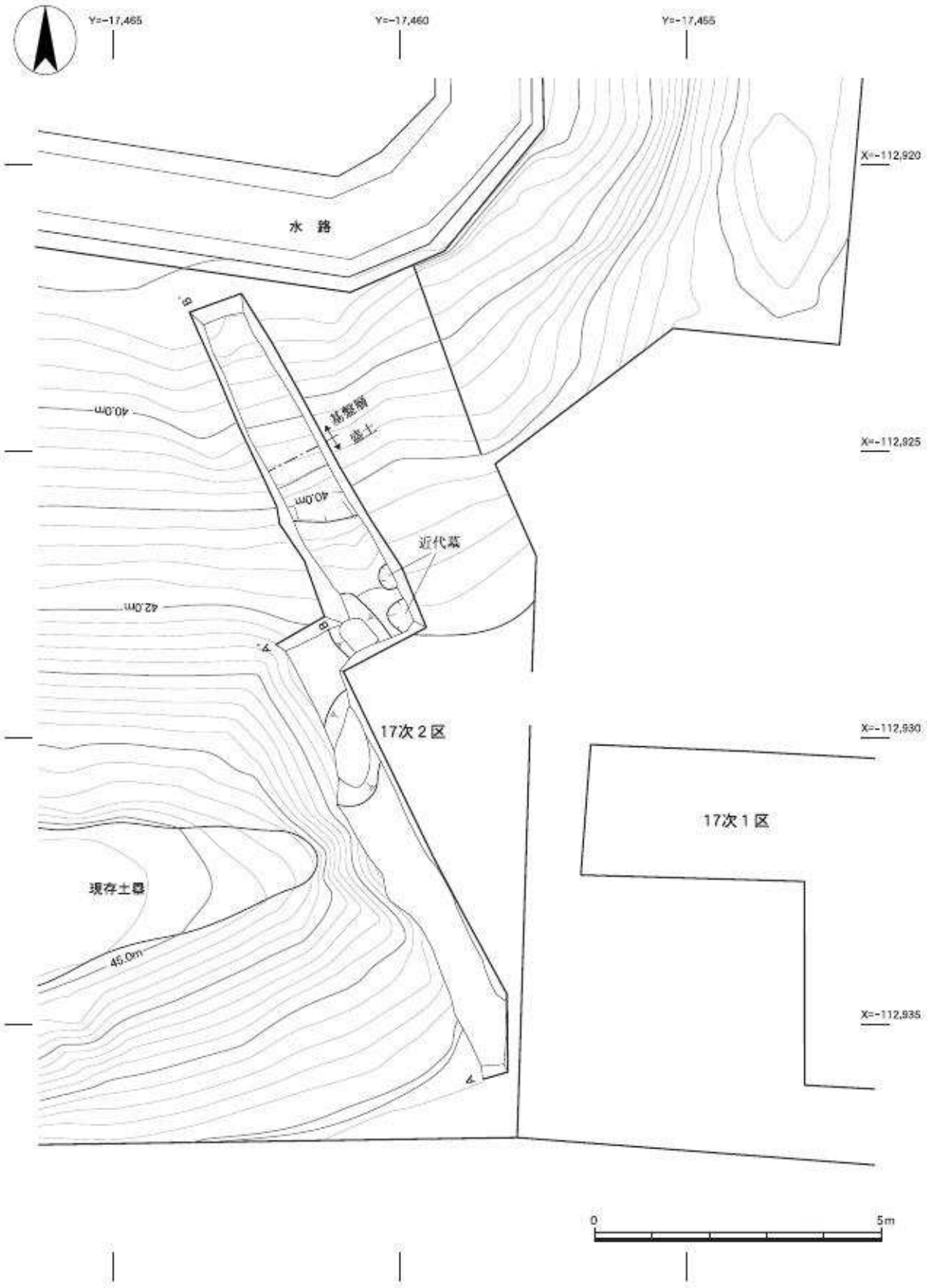


図81　17次調査２区平面図（１：100）

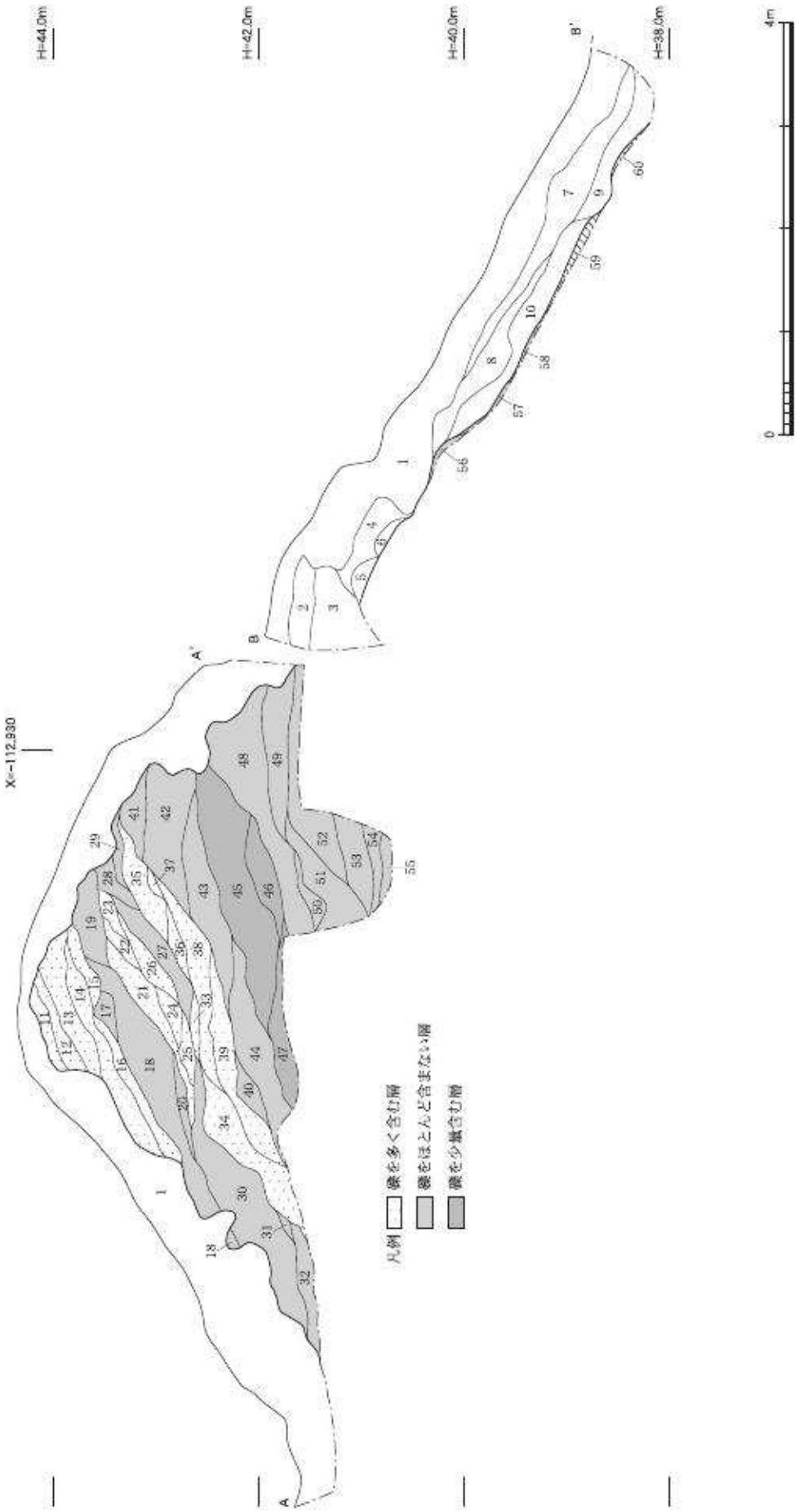


図82　土塁断面図（1：60）

1　腐植土
2　2.5Y8/4淡黄色　シルト　φ1～3cmの礫多量混（現代攪乱）
3　2.5Y7/4浅黄色　シルト～細砂　φ1～40cmの礫多量混（現代攪乱）
4　2.5Y6/3にぶい黄色　シルト～細砂　粗～極粗砂　φ1～2cmの礫混
5　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト～細砂　粗～極粗砂多量混
6　2.5Y7/3浅黄色　シルト　2.5Y8/1灰白色　シルトブロック混　φ1～2cmの礫少量混
7　2.5Y6/3にぶい黄色　φ1～15cmの礫つまる　粗～極粗砂混（下方の礫大）
8　2.5Y6/3にぶい黄色　細～粗砂　極粗砂混　φ1～3cmの礫混
9　10YR4/2灰黄褐色　シルト～細砂　粗～極粗砂混　φ1～5cmの礫混（腐植土）
10　2.5Y7/4浅黄色　シルト～細砂　粗～極粗砂混　φ1～2cmの礫混
11　2.5Y8/4淡黄色　粘質シルト　粗砂～小礫少量混
12　2.5Y5/3黄褐色　細～粗砂　φ1～3cmの礫混
13　10YR4/3にぶい黄褐色　細～粗砂　2.5Y7/6明黄褐色　シルトブロック少量混
φ1～4cmの礫混
14　2.5Y6/4にぶい黄色　中～極粗砂　φ0.5～2cmの礫多量混
15　2.5Y5/4黄褐色　細～粗砂　2.5Y6/4にぶい黄色　シルトブロック少量混
φ1～7cmの礫少量混
16　2.5Y5/3黄褐色　中～極粗砂　φ1～2cmの礫混
17　2.5Y8/4淡黄色　シルト　φ0.5～4cmの礫混
18　2.5Y5/4黄褐色　粘質シルト　2.5Y8/1灰白色　粘土ブロック多量混
19　2.5Y7/4浅黄色　シルト　粗～極粗砂混
20　2.5Y5/4黄褐色　粘質シルト　2.5Y8/1灰白色　粘土ブロック多量混　極粗砂～小礫混
21　2.5Y4/2暗灰黄色　粗～極粗砂　φ0.5～3cmの礫多量混
22　2.5Y5/3黄褐色　粗砂　φ1～10cmの礫混
23　2.5Y5/2暗灰黄色　粗～極粗砂　φ0.5～1cmの礫多量混
24　2.5Y6/2灰黄色　φ0.5～2cmの礫　粗～極粗砂混
25　2.5Y5/3黄褐色　φ1～5cmの礫　細砂混
26　2.5Y4/3オリーブ褐色　粗～極粗砂　φ0.5～1cmの礫混
27　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト　2.5Y8/1灰白色　シルトブロック混　φ0.5～2cmの礫混
28　2.5Y7/4浅黄色　粘質シルト　φ2～4cmの礫少量混
29　2.5Y6/4にぶい黄色　粘質シルト
30　2.5Y4/4オリーブ褐色　シルト　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック多量混　粗～極粗砂
φ1～3cmの礫少量混
31　2.5Y4/4オリーブ褐色　シルト～細砂　φ0.5～3cmの礫多量混
32　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　シルト～細砂　10Y5/4にぶい黄褐色　粘質シルトブロック多量混
φ0.5～1cmの礫少量混
33　2.5Y6/3にぶい黄色　細砂　2.5Y7/4浅黄色　シルトブロック少量混　φ1～4cmの礫少量混
34　10YR5/3にぶい黄褐色　細砂　粗～極粗砂混　φ0.5～5cmの礫多量混
35　10YR5/3にぶい黄褐色　細砂　2.5Y7/3浅黄色　シルトブロック混　φ0.5～5cmの礫混
36　2.5Y5/4黄褐色　細砂　φ0.5～5cmの礫多量混
37　2.5Y6/3にぶい黄色　細～粗砂　φ0.5～3cmの礫多量混
38　2.5Y5/3黄褐色　シルト～細砂　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック混　φ1～4cmの礫多量混
39　2.5Y5/4黄褐色　シルト～細砂　粗～極粗砂混　φ0.5～4cmの礫多量混
40　2.5Y5/3黄褐色　シルト　10YR4/2灰黄褐色　シルトブロック少量混　φ0.5～7cmの礫混
41　2.5Y7/3浅黄色　粘質シルト　φ1～5cmの礫混
42　2.5Y8/3淡黄色　粘質シルト　粗～極粗砂少量混
43　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　2.5Y8/3淡黄色　粘質シルトブロック混　φ1～5cmの礫微量混
44　2.5Y5/4黄褐色　シルト　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック多量混　φ1～5cmの礫微量混
45　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト～細砂　粗砂混　φ0.5～3cmの礫混
46　2.5Y5/4黄褐色　細砂　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック混　φ0.5～5cmの礫混
47　10YR4/4褐色　細砂　粗砂混　φ0.5～3cmの礫少量混
48　10YR7/4にぶい黄橙色　シルト　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック多量混
φ0.5～3cmの礫微量混
49　10YR6/6明黄褐色　シルト　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック混　φ0.5～2cmの礫微量混
50　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　φ0.5～1cmの礫微量混
51　2.5Y5/4黄褐色　シルト　2.5Y8/1灰白色　粘質シルトブロック少量混　φ0.5～2cmの礫微量混
52　10YR4/3にぶい黄褐色　シルトと2.5Y7/4浅黄色　シルトと10YR6/1褐灰色　細砂混
φ0.5～7cmの礫少量混
53　10YR6/1褐灰色　細砂と2.5Y5/3黄褐色　シルト混　φ0.5～2cmの礫少量混
54　2.5Y6/3にぶい黄色　シルト　10YR6/1褐灰色　細砂少量混　φ1～2cmの礫少量混
55　2.5Y6/2灰黄色　粘質シルト　φ1～2cmの礫微量混
56　2.5Y6/3にぶい黄色　シルト～細砂　粗～極粗砂少量混
57　10YR6/4にぶい黄橙色　細砂　2.5Y8/1灰白色　シルトブロック混　φ1～3cmの礫微量混
58　2.5Y5/4黄褐色　シルト～細砂　粗砂混　2.5Y8/1灰白色　シルトブロック多量混
φ1～5cmの礫少量混
59　2.5Y4/4オリーブ褐色　シルト～細砂（基盤層）
60　2.5Y5/4黄褐色　粘質シルト（基盤層）

図83　土壁断面土色

溝2143（図78・79）　土塁の内側裾をめぐる溝である。幅1.8～2.2m、深さは約0.15mある。溝底の標高は40.4～40.6mで起伏がある。肩部から土師器皿など多量の遺物が出土した（図版18-2）。

溝2148（図78・79）　溝2143下層で検出した溝である。X=-112,930.5ライン付近より北では二股に分かれる。幅0.15～0.7m、深さは0.1～0.15mある。溝底の標高は北端では40.4m、南端では40.3mで南が低い。溝底には砂が堆積し（図79-Bライン7・8層）、水流があったと考えられる。砂の中からは土師器皿などが多量に出土した。

土坑2157（図78・79）　断割調査で土塁構築土と溝2143・2148の下層で検出した土坑である（図79－Aライン26～35層）。西肩部のみを検出した。深さは約1.1mある。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は全体的に締まりが悪い。最上層の黒褐色細砂～中砂層には炭化物や焼土が多量に混じり、中からは土師器皿や鉄釘などの遺物が多量に出土した。

埋納遺構2160（図80、巻頭図版２－２）　土塁構築以前の盛土と考えられる黒褐色シルト～細砂層下面で検出した遺構である。断割調査の南壁面で短刀の柄部分を検出したため、断面の記録作成ののち断割を南側に拡張した。その結果、哺乳類の両脚のものと考えられる骨の上に完形の短刀が乗った状態で出土した。短刀は刃先を南東方向に向ける。掘形はなく、整地層（41層）の上にほぼ水平に置かれた状態で出土した。短刀と骨の取り上げ後、その下面で杭の痕跡と思われるものを７基検出した。径0.05～0.15m、深さは0.1～0.2mある。埋納遺構との関連は不明である。

現存土塁（図81～83）　17次調査２区南側では現存する土塁の断面露出部分の土層観察を行った。東西方向の土塁を北西から南東方向に切断した面で、表面を覆う腐植土を除去し、断面を検出した。検出幅は約8.0mである。土塁上には竹が生えており、その根や腐植土の堆積が0.1～0.7mまで及び、本来の土塁表面は大きく改変を受けている。現状では、土塁頂部の標高は約44.2mである。土塁外側をめぐる濠の名残と考えられるコンクリート水路底の標高はX=-112,921とY=-17,460の交点では約38.0mで、高低差は約6.2mある。斜面の傾斜角は土塁内法面で約35度、外法面で約40度あり、外側がやや急傾斜になっている。

次に土塁の土の積み方を見ると、図82の断面図40～55層が土塁の郭となる部分で、礫をほとんど含まない黄褐色系の均質なシルトを主体とし、そこに灰白色の粘質シルトブロックや粗砂を混ぜた土を0.1～0.5mの厚さで水平方向に積む。非常に固く敲き締まる。この段階で内法面より外法面を急傾斜に積み上げている。次いで、礫を多量に含む層と礫をほとんど含まない黄褐色系のシルトを主体とした土を交互に郭となる土塁の南斜面に0.1～0.4mの厚さで斜め積みする（11～39層）。礫層は水分の浸透層となって雨水などを逃がし、固く締まり粘性のあるシルト層は土の崩落を防ぐ意図があると考えられる。また土質の異なる層を積むことにより、層界で土が滑るのを防ぐ働きも期待できる。さらに細かく見ると、17層や30層、34層、40層などは礫層と礫を含まない層との大きな層界部分の内法面裾にブロック状に積まれる。これも、作業途中や構築後の上からの土の動きを抑制し、崩落を防ぐための造作と考えられる。

２区北側では土塁の外法面の平面調査を行った。現地表面から0.2～0.6mまで竹林の腐植土が及び、その下には流出した土塁構築土が0.3～0.4m堆積する。それらを除去して土塁の外法面を検出した。標高39.3m、断面図59層以下が自然堆積層と考えられる基盤層、それより上は黄褐色系シルト層にブロック土や粗砂が混じる人工的な盛土である。傾斜角度は約30度であるが、標高39.6mから40.2mの間は約50度と急傾斜となる（図82－56層部分）。2005年に今調査地の西側で実施された試掘調査（図69－23）では、南北方向の濠の西側（外側）肩口が検出され、コンクリート水路の底から、濠の西肩口までの高さは約2.2mと報告されている。水路の底の標高が今回の調査で約38.0mと判明したため、濠の外側肩口の標高は約40.2mと推定でき、土塁外法面の傾斜が急になる標高とほぼ一致する。このことから、標高40.2m以下が外濠と考えられ、その肩部を急傾斜に立ち上げている可能性が高い。また、2005年試掘調査では、濠の西肩口から水路の中心までの距離が約5.3mと約６mと報告されている。今回の調査区は土塁屈曲部であり、直線部分とは土塁や濠の規模が異なる可能性もあるが、仮に幅がほぼ一定であるとすれば、今回検出した濠の南肩から水路中心までの距離が約５mであることから、濠の幅は約10～11mと推測される。

（３）江戸時代から近代の遺構（図84）

16次調査、17次調査ともに調査区全域で江戸時代から近代の遺構を検出した。貯蔵施設と考えられる円形土坑群、火葬墓と考えられる方形土坑群、土器棺墓と考えられる土坑群などがある。なお、確認調査のため室町時代の遺構に関連しないものについては完掘せず、半裁や一部掘り下げに留めている。

円形土坑群

平面円形で壁が垂直に立ち上がる土坑を調査区全域で検出した。木枠痕跡のあるもの、石組のものなどがあるが、いずれも底が湧水層となる礫層まで達しないことから井戸ではなく、肥溜や貯水施設など貯蔵施設としての機能が考えられる。２基が近接して並ぶものが多い。

土坑1103　16次調査区北端で検出した。径約1.5m、深さ約1.2m、底面の標高は40.7mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で礫が少量混じる。埋土から焼締陶器や瓦質土器など18～19世紀代の遺物が出土した。

土坑1104　土坑1103の東隣で検出した。径約1.8m、深さ約1.1m、底面の標高は40.8mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。壁には部分的に白色系の粘土が残り、木枠があった可能性がある。埋土は10YR4/4褐色シルト～細砂で締まりが悪い。埋土から磁器や瓦片、ガラス片など19～20世紀代の遺物が出土した。

土坑1122　16次調査区北側で検出した。径約1.5m、深さ約1.0m、底面の標高は40.8mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂で下層では径0.05～0.2mの礫が多量に混じる。埋土から瓦質土器火鉢や瀬戸美濃系の施釉陶器、瓦片など17世紀後半代の遺物が出土した。

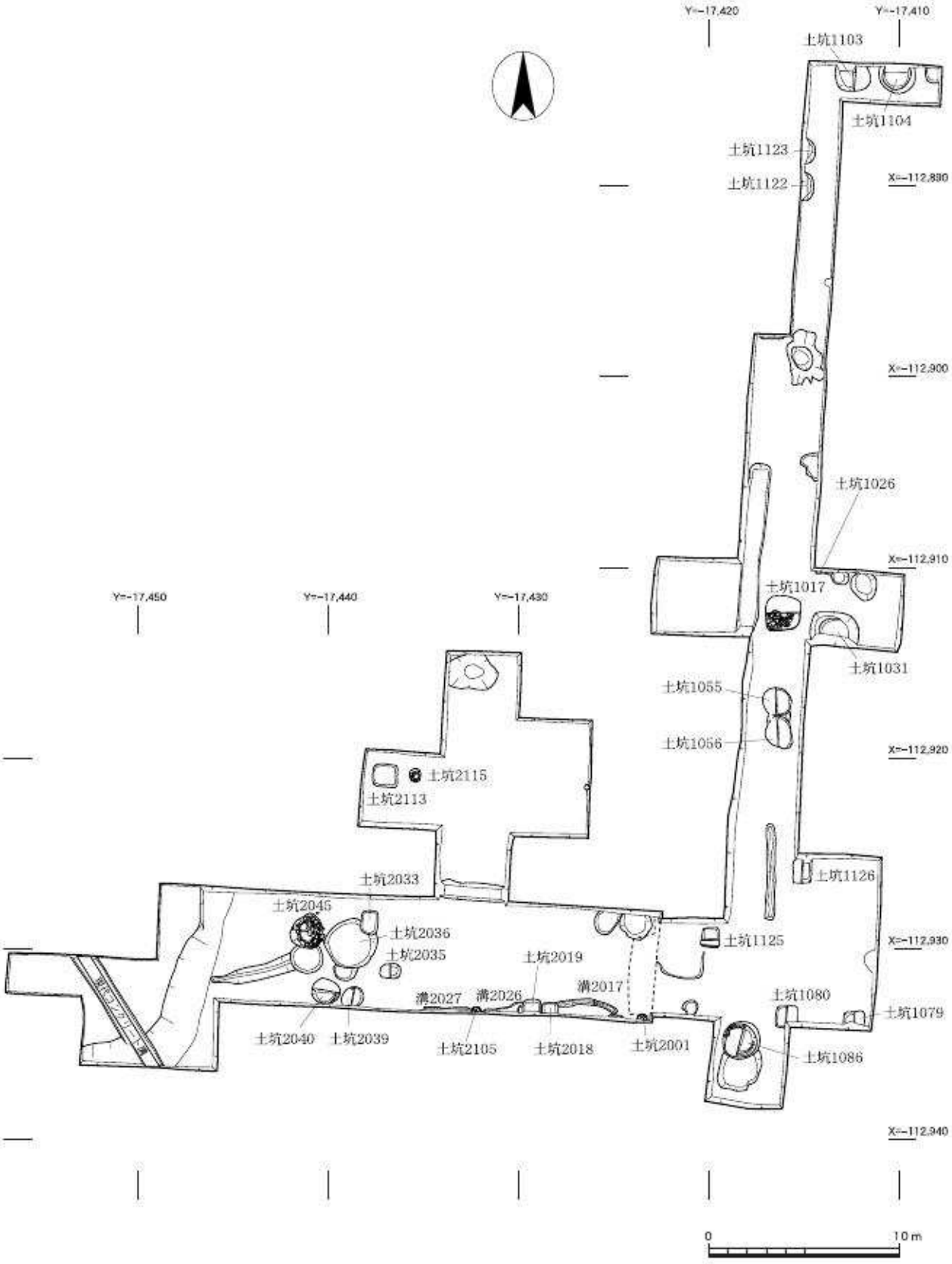


図84　江戸時代から近代遺構平面図（１：300）

土坑1123　土坑1122の北隣で検出した。径約1.5m、深さ約1.0m、底面の標高は40.8mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は下層が10YR3/3暗褐色シルト～細砂でやや粘質、上層は10YR3/2黒褐色シルト～細砂に炭化物が少量混じる。埋土から焼締陶器擂鉢・壷、瓦片など18世紀代の遺物が出土した。

土坑1031　16次調査区中央部で検出した。径約2.5m、深さ約1.0m、底面の標高は40.3mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で締まりが悪く、径0.03～0.4mの礫が多量に混じる。埋土から染付、瀬戸美濃系・京焼系・肥前系施釉陶器、瓦質土器、焼締陶器、瓦片、鉄釘など18世紀代の遺物が出土した。

土坑1055　16次調査中央やや南で検出した。径約1.5m、深さ約0.9m、底面の標高は40.3mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。壁に木枠の痕跡が残る。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色細砂で径0.01～0.2mの礫が多量に混じる。埋土から土師器皿・鍋、染付、焼締陶器擂鉢、瓦質土器、瓦、煙管など18世紀代の遺物が出土した。

土坑1056　土坑1055の南隣で検出した。径約1.5m、深さ約1.0m、底面の標高は40.2mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は下層が10YR3/1黒褐色シルト～細砂、上層が10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で焼土が混じる。全体的に径0.05～0.3mの礫が多量に混じる。埋土から土師器皿、染付、瓦質土器、焼締陶器、瓦、煙管など17世紀後半から18世紀代の遺物が出土した。

土坑1086　16次調査区南端で検出した。径約1.9m、深さ約1.0m、底面の標高は40.0mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。壁は石組みで、径0.1～0.3mのチャート系、花崗岩系の石が使用される。埋土は2.5Y3/2黒褐色シルト～細砂で径0.1～0.3mの礫が混じる。埋土から焼締陶器、瓦質土器、施釉陶器、磁器、水石など17世紀後半代の遺物が出土した。

土坑2039　17次調査１区西半で検出した。径約1.1m、深さ約0.3m、底面の標高は40.6mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に径0.01～0.15mの礫が混じる。埋土から17世紀代と考えられる土師器片が出土した。

土坑2040　土坑2039の西隣で検出した。径約1.4m、深さ約0.4m、底面の標高は40.4mである。底は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は2.5Y3/2黒褐色シルト～細砂に径0.01～0.05mの礫が混じる。埋土から土師器皿、染付、焼締陶器、瓦など17世紀後半代の遺物が出土した。

方形土坑群

平面方形で壁が垂直に立ち上がる土坑を調査区全域で検出した。底に炭が堆積し、骨片が混じるものが多く火葬墓と考えられる。

土坑1026　16次調査区中央部で検出した。一辺約１m、深さ約0.5m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で底から壁にかけて厚さ0.03～0.05mの炭が堆積する。炭層からは骨片のほか18世紀代と考えられる磁器片が出土した。

土坑1125　16次調査区南半で検出した。一辺約１m四方、深さ約0.4m、底面の標高は40.8m

である。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で底から壁にかけて厚さ0.03～0.05mの炭が堆積する。炭層や埋土から骨片のほか19世紀代の染付、施釉陶器、焼締陶器などが出土した。

土坑1126　16次調査区南半で検出した。一辺約1.0m四方、深さ約0.5m、底面の標高は41.0mである。埋土は10YR3/1黒褐色シルト～細砂で底から壁にかけて厚さ0.05～0.08mの炭が堆積する。炭層や埋土からは多量の骨片のほか19世紀代の焼締陶器、施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑1079　16次調査区南半で検出した。一辺約1.0m、深さ約0.3m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で炭化物が混じる。埋土からは骨片のほか、18世紀後半代の土師器、肥前系施釉陶器などが出土した。

土坑1080　16次調査区南半で検出した。一辺約1.0m四方、深さ約0.5m、底面の標高は40.8mである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で底から壁にかけて厚さ約３㎝の炭が堆積する。埋土から18世紀代と考えられる磁器片、炭層からは骨片が出土した。

土坑2018　17次調査１区東半で検出した。一辺約0.9m、深さ約0.2m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で炭化物が混じる。

土坑2019　土坑2018の西隣で検出した。一辺約１m、深さ約0.35m、底面の標高は40.75mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で底に厚さ0.03～0.05mの炭が堆積する。埋土から18世紀代と考えられる焼締陶器、施釉陶器、瓦が出土した。炭層からは骨片と染付の小椀が出土した。

土坑2033　17次調査１区中央部で検出した。南北1.2m、東西0.8mの長方形土坑で、深さ0.3m、底面の標高は40.6mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で、底から壁にかけて厚さ約0.1mの炭が堆積する。埋土からは焼締陶器、瓦などが出土した。炭層からは骨片、鉄釘、電球が出土した。20世紀代と考えられる。

土坑2035　17次調査１区中央部で検出した。南北0.8m、東西1.0mの長方形土坑で、深さ約0.2m、底面の標高は40.85mである。埋土は2.5Y5/4黄褐色シルト～細砂で礫が少量混じる。埋土からは土師器の小片が出土した。

土坑2113　17次調査１区北半で検出した。一辺約1.2m四方、深さ約0.2m、底面の標高は40.65mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に炭化物が混じる。埋土から18世紀代の土師器、焼締陶器、染付、瓦、鉄釘などが出土した。

その他の遺構

土坑1017　16次調査区中央部で検出した。一辺約1.8mの隅丸方形で、壁は垂直に立ち上がる。完掘していないため底面の形状は不明である。径0.05～0.25mの礫が多量に詰まる。石材はチャート系を主体とし、花崗岩系、砂岩系が少量混じる。埋土は10YR3/4暗褐色シルト～細砂で、17世紀代と考えられる土師器、磁器などが少量出土した。

土坑2001　17次調査１区東端で検出した。信楽産の焼締陶器壺の上半部が口縁を下にして据わる。土器棺と考えられる。掘形の径は0.6m、深さは約0.4m、底面の標高は40.7mである。埋土

は2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～細砂で、埋土からは17世紀代の土師器、肥前系施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑2105　17次調査１区中央部で検出した。瓦質土器の大型鉢が正位置に据わる。土器棺と考えられる。掘形の径は約0.6m、深さ約0.4m、底面の標高は40.7mである。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細砂で、埋土からは17世紀代の土師器、肥前系施釉陶器、瓦などが出土した。

土坑2115　17次調査１区北半で検出した。瓦質土器の大型鉢が正位置に据わる。土器棺と考えられる。掘形の径は約0.5m、深さ約0.4m、底面の標高は40.7mである。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト～細砂で炭化物が混じる。埋土から17世紀代と考えられる土師器片が出土した。

土坑2045　17次調査１区西半で検出した。石組みの隅丸長方形土坑である。外法で南北約1.7m、東西約0.8m、深さ約0.4m、底面の標高は40.5mである。壁と底の一部の石組みが残る。径0.1～0.3mのチャート系の石材を組む。埋土は10YR3/4暗褐色シルト～細砂で径0.05～0.3mの礫が混じる。埋土から18世紀代と考えられる土師器、焼締陶器、染付、鉄釘などが出土した。

土坑2036　17次調査１区西半で検出した。径約2.5mの円形土坑で、深さは３m以上ある。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂で径0.01～0.2mの礫が多量に混じる。非常に締まりが悪い。埋土からは19世紀代の焼締陶器、施釉陶器、瓦、煙管などのほか一朱金が出土した。

4．遺　　物

山科本願寺跡16次調査では整理箱にして30箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、銭貨、石製品がある。全体の約７割を土器・陶磁器類が占める。遺物の帰属時期は室町時代と江戸時代のものがある。

17次調査では、整理箱にして40箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、土製品、金属製品、銭貨、石製品がある。全体の約８割を土器・陶磁器類が占める。遺物の帰属時期は室町時代と江戸時代のものがある。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。なお、土器・土製品の個別の詳細については章末の表21にまとめた。

（１）土器・土製品

集石1061（図85）　土師器皿のほかに鉄釘などが出土した。京都Ⅹ期中段階[2)]に属する資料である。

１～７は土師器皿である。１～３は小型で口径は8.8～9.0㎝ある。３は灯明皿として使用されている。４・５は中型で口径は11.0と11.4㎝、６・７は大型皿で口径は13.4と13.6㎝である。出土した土師器皿は全て白色系である。

溝1119（図85）　土師器皿が出土した。京都Ⅹ期中段階に属する資料と考えられる。

８～10は白色系の土師器皿である。８・９は小型、10は中型である。

焼土層（図85）　16次調査南半に堆積した焼土層から出土した一群である。土師器、焼締陶器、瓦質土器、中国産天目茶椀を含む輸入陶磁器類、焼け瓦、銭貨（永楽通寶）、鉄釘、焼けた壁土などが出土した。京都Ⅹ期古～中段階に位置付けられる資料である。

11～43は土師器皿である。12のみ赤色系で、他はすべて白色系である。11はいわゆるへそ皿である。12～25は小型で口径は7.8～9.6㎝の間に分布する。18・19・22・25は灯明皿として使用されている。26～31は中型皿である。口径は10.0～11.4㎝の間に分布する。31以外は全て灯明皿として使用されており、中型皿の灯明皿としての使用割合が高いことが特徴である。32～43は大型皿で口径は12.4～15.2㎝の間に分布する。

44は瓦質土器の風炉である。一般的には金属製の風炉に多く見られる形状を呈し、瓦質土器の風炉としては出土例の少ないものである[3)]。中空の乳足（ちあし）と呼ばれる三足の脚が付き、口縁部は垂直に立ち上がる。火窓は雲形で１ヶ所残存する。口縁部にも火窓とずれた位置に雲形の透かしが穿たれる。残存するのは１ヶ所のみである。口縁部外面は横方向の密なヘラミガキで仕上げる。体部から脚部外面は縦方向の密なヘラミガキののち丁寧な研磨が施され光沢をもつ。脚底部外面は

表18　16次調査遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒瓦、金属製品、銭貨、石製品		土師器43点、瓦質土器１点、輸入陶磁器１点、平瓦１点、塼２点、雁振瓦２点	18箱	０箱
江戸時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、染付、磁器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、銭貨、石製品		土師器４点、瓦質土器４点、焼締陶器３点、施釉陶器11点、輸入陶磁器３点、軒瓦１点、金属製品３点、石１点	12箱	０箱
合　計		35箱	80点（５箱）	30箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より５箱多くなっている。

表19　17次調査遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒瓦、金属製品、銭貨、石製品、貝殻、骨		土師器319点、瓦質土器14点、土製品３点、山茶椀２点、焼締陶器８点、施釉陶器１点、輸入陶磁器11点、軒瓦１点、金属製品23点	32箱	０箱
江戸時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、染付、磁器、施釉陶器、金属製品、銭貨		瓦質土器２点、焼締陶器１点、施釉陶器２点、軒瓦１点、銭貨１点	８箱	０箱
合　計		55箱	389点（15箱）	40箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より15箱多くなっている。

未調整である。内面は底部ナデアゲ、体部から口縁部はヨコナデし、一部指オサエが残る。脚部内面はヨコナデする。45は中国製の白磁の小椀である。

土坑2134（図86）　土師器皿、瓦質土器鉢・蓋・風炉、焼締陶器甕（備前産）・擂鉢（信楽産・備前産）、施釉陶器天目茶椀・灰釉片（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器青磁椀・三彩香炉・施釉陶器瓶（李朝徳利）、平瓦、塼、鉄釘、漆片、貝殻（アカニシ）などが出土した。京都Ⅹ期中段階に属する一群である。

46～111は土師器皿である。46～50は赤色系の小型皿で口径は6.4～9.6cmの間に分布する。51は白色系のいわゆるへそ皿である。52～75は白色系の小型皿で口径は8.8～9.8cmの間に分布する。76～87は白色系の中型皿で口径は10.0～11.4cmの間に分布する。灯明皿として使用されているものが多い。88～110は白色系の大型皿で口径は12.2～14.6cmの間に分布する。111は土師器の皿であるが、口縁部が垂直に近い角度で立ち上がり、内面にヨコナデののちクシ状のもので３条の沈

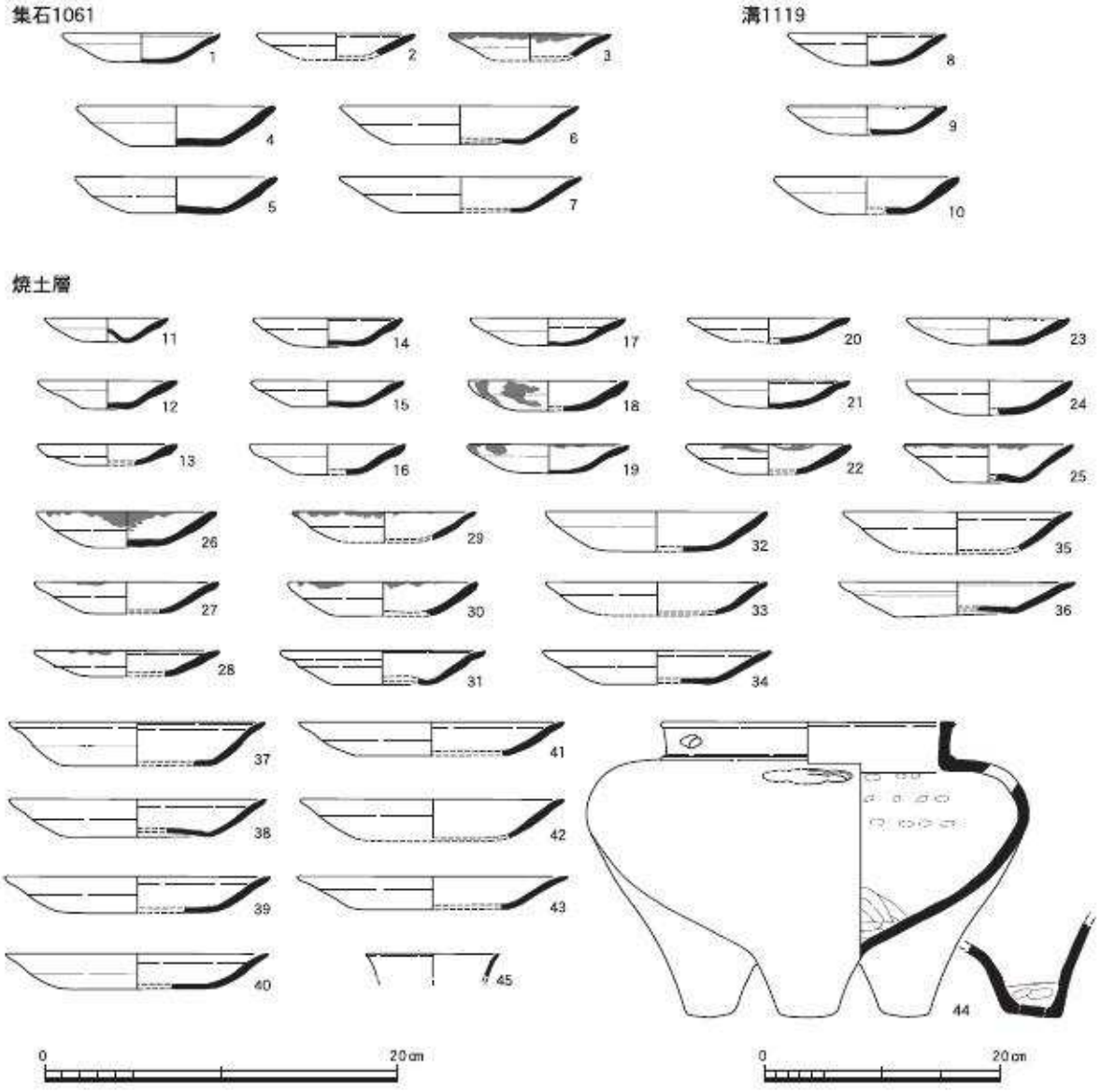


図85　集石1061、溝1119、焼土層出土土器実測図（１：４、１：６）

線を入れる。胎土と色調は京都産の赤色系土師器皿に類似するが産地が異なる可能性がある。112は土師質の円盤状土製品である。一部を欠損するがほぼ正円形で、手捏ねで成形されており、指頭圧痕が残る。

113は瓦質土器の蓋である。口縁部は外側に突出して端部は面をもつ。体部外面は縦方向の密なヘラミガキを施し光沢をもつ。内面はナデで仕上げる。口縁部は内外面ともに横方向の密なヘラミガキを施す。114も瓦質土器の蓋と考えられる。口縁端部が下方にわずかに屈曲する。口縁端部はヨコナデで仕上げる。体部外面は磨滅のため調整不明、内面はナデで仕上げる。115は瓦質土器の風炉である。口縁部は垂直に立ち上がり、雲形の火窓が１ヶ所残存する。口縁部、体部ともに外面は横方向の密なヘラミガキを施す。口縁部内面は板ナデ、体部内面はナデで仕上げられる。116～118は瓦質土器の捏鉢である。いずれも焼成後に内面に釘状のもので線刻を施す。118は小片のため全体像は不明であるが、116・117は鼓形を描く。いずれも体部外面下半はナデ、上半はヨコナデする。体部内面は横方向の密なヘラミガキを施す。底部付近には磨耗が認められる。口縁端部は丸くおさめる。119は焼締陶器の擂鉢である。信楽産で４条１単位のクシ描き擂目をもつ。120は中国龍泉窯系の青磁椀である。121は華南三彩の香炉の破片である。黄釉と緑釉部分が残る。

溝2084（図87）　土師器皿、焼締陶器甕（丹波産・備前産）・擂鉢（信楽産・備前産）、瓦質土器鉢・香炉、輸入陶磁器青磁椀・白磁椀・白磁皿、丸瓦、平瓦、鉄釘、壁土、白石、貝殻（アカニシ）などが出土した。瓦類や壁土は二次焼成を受ける。京都Ⅹ期中段階に属する一群である。

122～152は土師器皿である。122～135は白色系の小型皿で口径は8.6～9.8㎝の間に分布する。136～139は白色系の中型皿で口径は10.8～12.0㎝の間に分布する。うち２点は灯明皿として使用されている。140～152は白色系の大型皿である。口径は12.4～15.8㎝の間に分布する。144と145は内面に、147は外面に墨書が認められる。153は瓦質土器の鉢である。台形の脚が三方に付き、香炉と考えられる。外面は密なミガキで仕上げ、内面はナデで仕上げる。154は中国製の白磁皿である。

溝2084下層・掘形（図87）　155は溝2084上層の石据え付けのための掘形から出土した土師器の白色系中型皿である。口径は11.0㎝ある。底部から口縁部の立ち上がり部分が丸みを帯び、深みがあることから京都Ⅹ期古段階に位置付けたい。156～161は溝2084下層の埋土から出土した土器である。京都Ⅹ期古段階に属する一群と考えられる。156～160は土師器の白色系大型皿である。口径は13.0～15.0㎝の間に分布する。157は内面外面ともに墨描が認められる。161は瓦質土器の鉢である。いわゆる奈良火鉢で、口縁部に２条の凸帯がめぐり、その間に宝珠形のスタンプが押捺される。底部付近にも１条の凸帯がめぐり、三方に脚が付く。二次的に強く火を受け、赤変する箇所も認められる。二次焼成により外面調整は不明、内面はナデで仕上げる。他に鉄釘が出土している。

溝2151（図87）　土師器皿、焼締陶器擂鉢（信楽産）、鉄釘などが出土した。京都Ⅹ期中段階に属する一群である。

162～174は白色系の土師器皿である。162～170は小型皿で口径は8.4～9.8㎝の間に分布する。

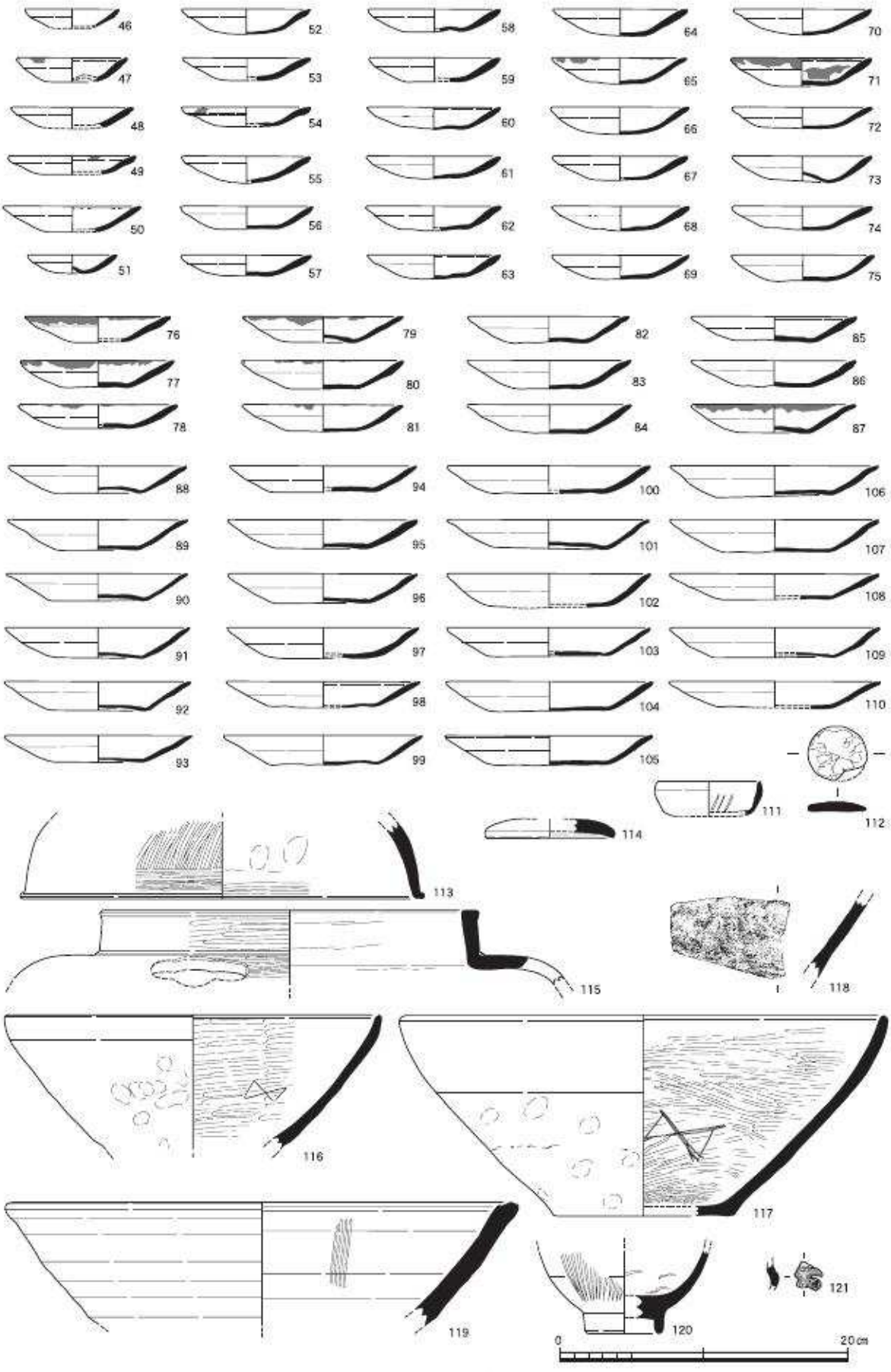


図86　土坑2134出土土器実測図（１：４）

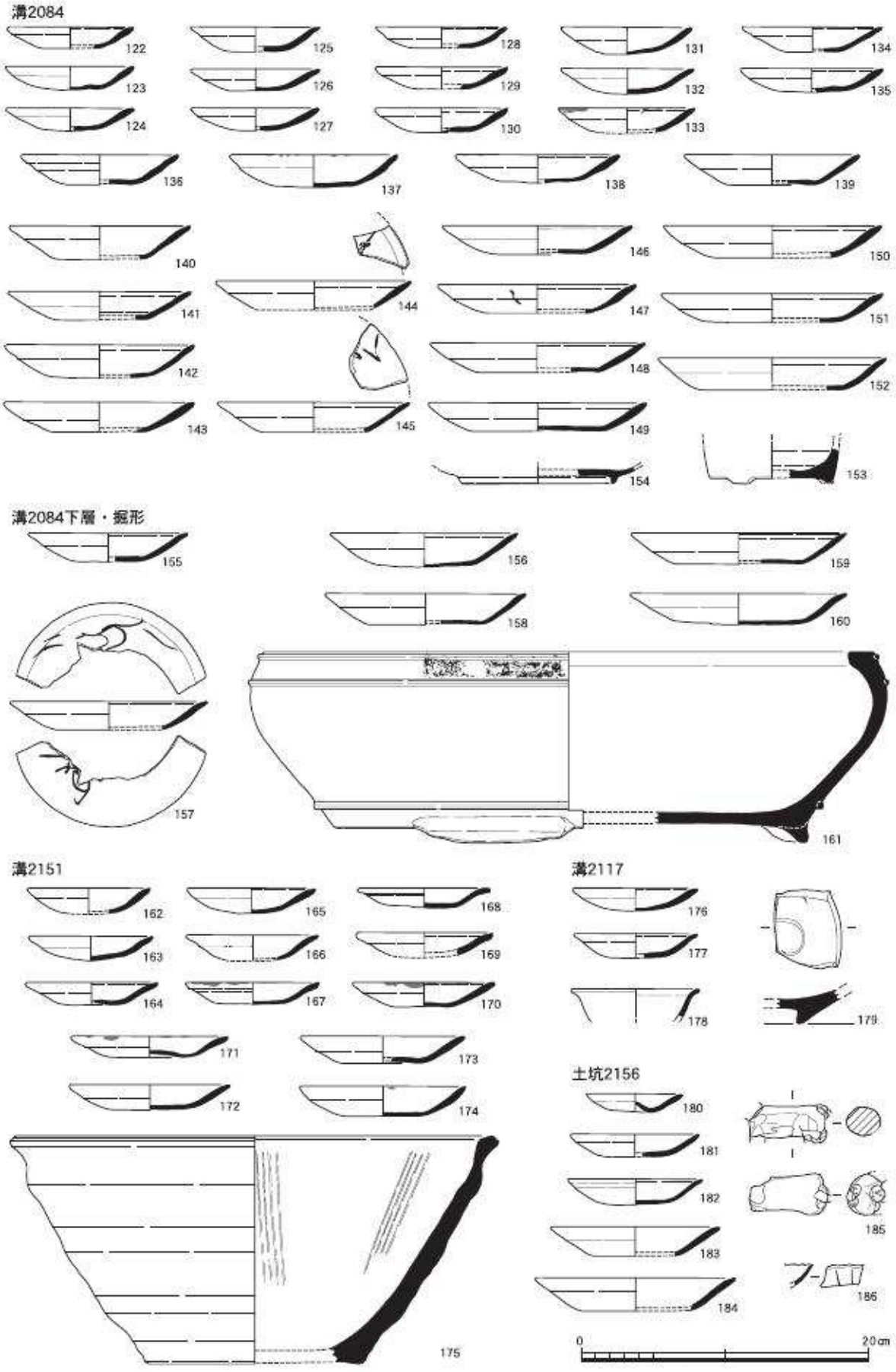


図87　溝2084、溝2084下層・掘形、溝2151・2117、土坑2156出土土器実測図（1：4）

171～174は中型皿で口径は10.8～11.2cmの間に分布する。175は焼締陶器の信楽産擂鉢である。４条１単位のクシ描き擂目をもつ。

溝2117（図87）　土師器皿、焼締陶器擂鉢（信楽産）、瓦質土器火鉢、施釉陶器皿（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器青磁盤・白磁椀、平瓦（二次焼成）、鉄釘、銭貨（天聖元寶）、銅片、白石などが出土した。

176・177は白色系の土師器小型皿である。178は中国製の白磁小椀で端反り口縁のものである。179は中国龍泉窯系の青磁盤である。

土坑2156（図87）　土師器皿、瓦質土器火鉢・土製品、輸入陶磁器白磁椀、鉄釘などが出土した。京都Ⅹ期中段階に属する一群である。

180～184は白色系の土師器皿である。180はいわゆるへそ皿で口径は6.6cmある。181・182は小型皿、183は中型皿、184は大型皿である。185は瓦質の動物型土製品である。頭部と両脚部、尻尾の先を欠損する。焼成は非常に硬質で、全体を丁寧なナデで仕上げている。尻尾の両脇に粘土が付加され、赤色顔料が塗布されている。後ろ脚の間にも直径約１cmの粘土が付加され、同様に赤色顔料が塗布されている。室町時代後半から安土桃山時代の遺跡で出土する動物型土製品の多くが犬形であることから[4]、これも犬を表現したものである可能性が高い。しかし類例の多くが土師質であることや、尻尾と股への粘土付加と赤色顔料の塗布は類例がなく、犬以外の牛や猿など別の動物である可能性も残る。186は中国製の白磁皿で輪花口縁のものである。

溝2087（図88）　土師器皿、焼締陶器甕（丹波産・備前産）・擂鉢（信楽産）、施釉陶器皿（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器青花椀・青磁椀、丸瓦・平瓦、壁土、鉄釘、銭貨（淳化元寶）などが出土した。瓦類と壁土は二次焼成を受ける。京都Ⅹ期中段階に属する一群である。

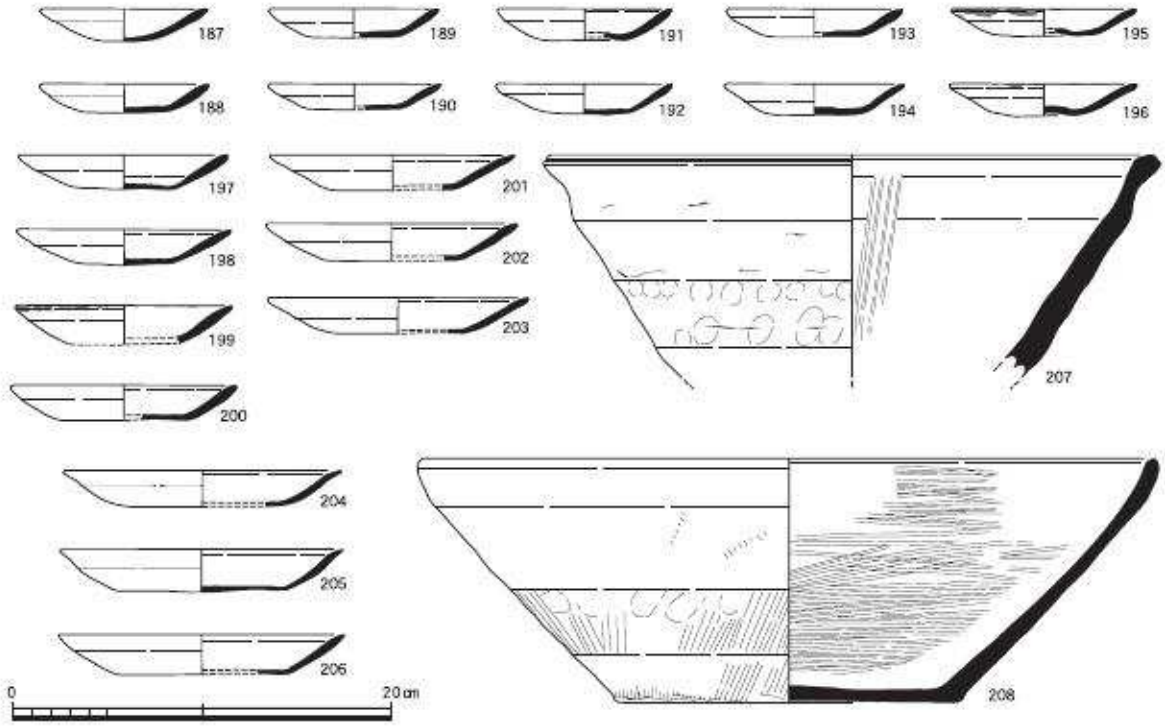


図88　溝2087出土土器実測図（１：４）

187～206は白色系の土師器皿である。187～196は小型皿で口径は8.8～9.8cmの間に分布する。197～200は中型皿で口径は11.0～11.8cmの間に分布する。201～206は大型皿で口径は13.0～15.0cmの間に分布する。207は焼締陶器の信楽産擂鉢である。４条１単位のクシ描き擂目をもつ。208は瓦質土器の捏鉢である。体部外面は縦方向のハケメをナデ消し、体部内面は横方向の密なヘラミガキを施す。口縁端部は丸くおさめる。

溝2143（図89）　土師器皿、焼締陶器甕（備前産・常滑産）・擂鉢（信楽産）、瓦質土器、施釉陶器天目茶椀（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器青磁片・白磁椀、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・塼、鉄釘、銭貨（元豊通寶）、貝殻（アカニシ）などが出土した。瓦類は二次焼成を受けたものが多い。京都Ｘ期中段階に属する一群である。

209～238は白色系の土師器皿である。209～213は小型皿で口径は8.6～9.4cmの間に分布する。214～226は中型皿で口径は10.7～11.6cmの間に分布する。灯明皿として使用されているものが多い。215は内面に墨書が認められる。226は内面に編目が１㎜以下の布目が着く。また胎土も他の土師器皿とは色調が異なり黒みが強いことから、産地が異なると考えられる。227～238は大型皿である。口径は12.0～15.0cmの間に分布する。231は外面に６条のハケメ状の調整が認められる。239・240は焼締陶器の信楽産擂鉢である。239は４条１単位、240は５条１単位のクシ描き擂目をもつ。241・242は中国産の輸入陶磁器である。241は青磁の香炉、242は白磁の皿である。白磁皿は体部下半に屈曲部をもつ。243は土師質土製品である。焼成は非常に硬質で、手捏ね成形である。円錐形で裾がやや開く。中空で、外面は丁寧なナデで仕上げられる。外面上半に２条のクシ描きによる沈線を入れる。外面には部分的に赤色顔料が付着する。用途は不明であるが、接地部に強いヨコナデにより面をつくりだしていることから立てて使用するものと考えられる。

溝2148（図89）　土師器皿、焼締陶器擂鉢（信楽産）、瓦質土器鉢・火鉢、輸入陶磁器青磁椀、平瓦・塼、鉄釘などが出土した。京都Ｘ期古～中段階に属する一群である。

244～294は白色系の土師器皿である。244～263は小型皿で口径は8.0～9.9cmの間に分布する。264～273は中型皿である。口径は10.9～11.8cmの間に分布する。265は胎土にクサリレキを含み赤みの強い色調を呈する。形状と製作技法は白色系の土師器と同様であるが産地が異なる可能性がある。274～293は大型皿である。口径は12.3～14.4cmの間に分布する。294は特大型の皿である。口径は17.3cmある。295は焼締陶器の信楽産擂鉢である。４条１単位のクシ描き擂目をもつ。296は中国龍泉窯系の青磁椀である。

土坑2157（図90）　土師器皿、焼締陶器壷（丹波産）・小壷（備前産）、瓦質土器鉢・火鉢、施釉陶器皿（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器天目茶椀・青磁椀、鉄釘、銭貨、貝殻（アカニシ）などが出土した。京都Ⅸ期新段階～Ｘ期古段階に属する一群と考えられる。

297～372は土師器皿である。297・298は赤色系の小型皿である。299～301は白色系のいわゆるへそ皿である。口径は6.4～7.8cmの間に分布する。302～329は白色系の小型皿で口径は8.4～9.4cmの間に分布する。322は内面に墨描のようなものが認められる。330は赤色系の中型皿である。331～342は白色系の中型皿である。口径は9.6～11.2cmの間に分布する。334は内面に墨描の

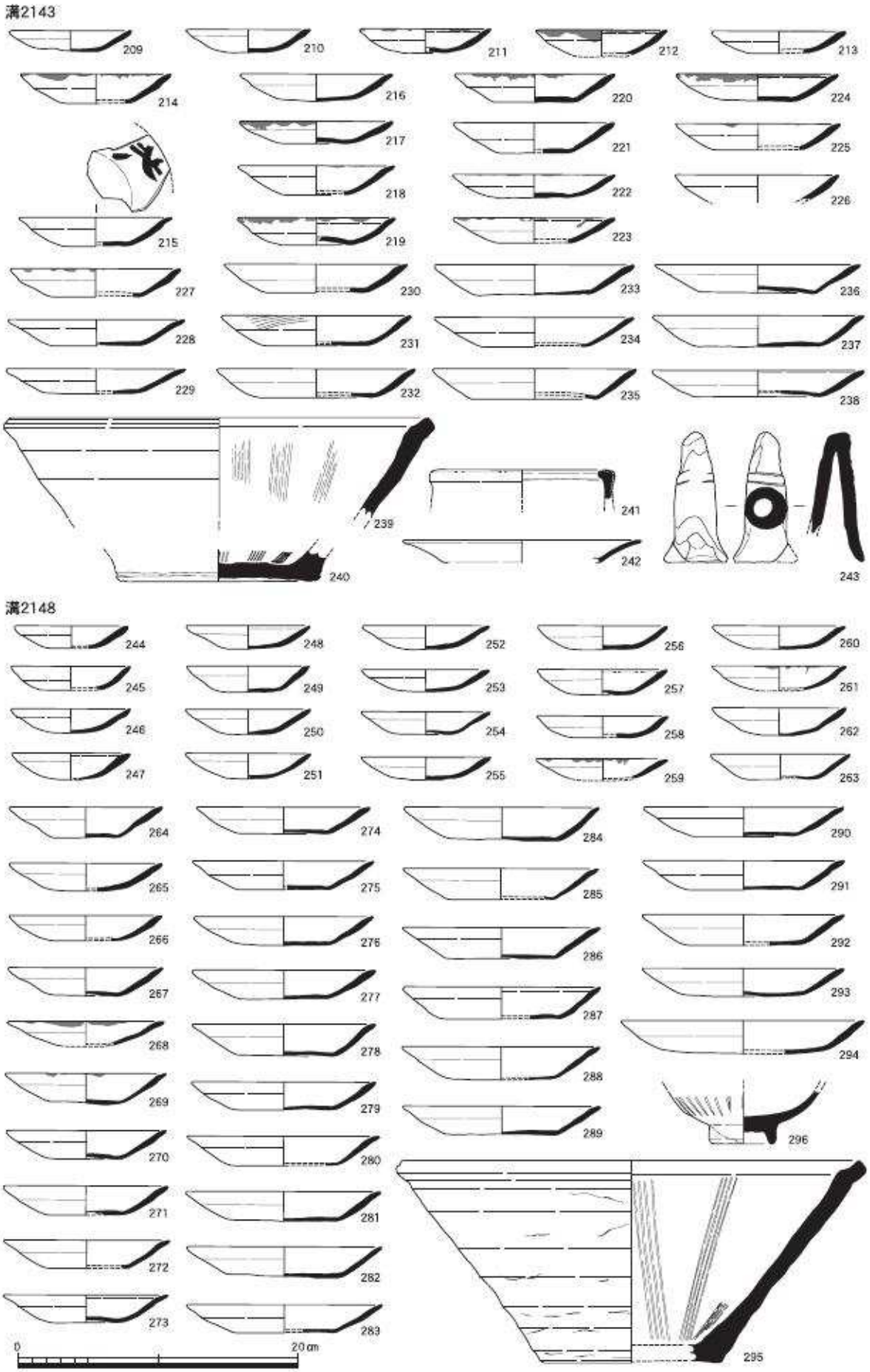


図89　溝2143・2148出土土器実測図（1：4）

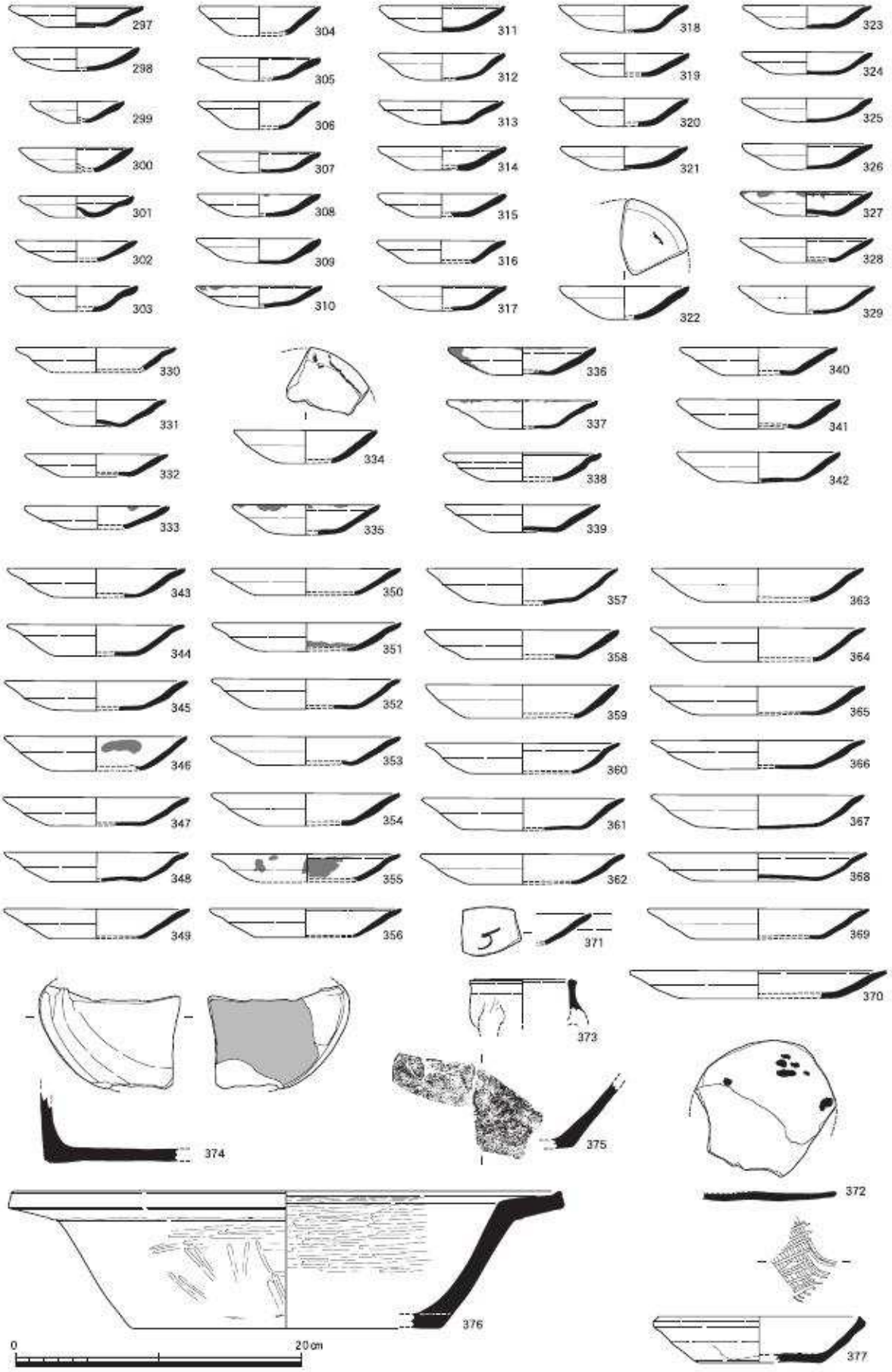


図90　土坑2157出土土器実測図（１：４）

ようなものが認められる。343～369は白色系の大型皿である。口径は12.2～15.2㎝の間に分布する。370は白色系の特大型の皿で口径は17.8㎝ある。371は白色系の土師器皿である。破片のため口径は不明であるが、大型皿と考えられる。内面に墨書が認められる。372は土師器皿の口縁部を打ち欠き、その破面を丁寧に磨く。表面は一定方向の擦痕が認められる。また墨が部分的に付着する。373は瓦質土器のミニチュア三足鉢である。口縁端部内側が短く立ち上がり、蓋が組み合う香炉と考えられる。374は瓦質土器の鉢である。平面形は楕円形を呈し、底部外面に１㎜以下の細かい編目の布が漆で貼り付けられている。体部外面は縦方向の密なヘラミガキで仕上げ、内面はタテハケののちナデで仕上げる。底部外面には脚が剥離したと考えられる痕跡が認められる。底部内面はナデで仕上げる。375は瓦質土器の捏鉢である。焼成後に内面に釘状のもので円形の線刻を施す。内面は横方向の密なヘラミガキを施す。外面はナデで仕上げる。376は瓦質土器の盤である。口縁部は水平に大きく開き、端部はつまみあげる。体部は内外面とも密なヘラミガキを施す。底部は内外面ともにナデで仕上げる。377は施釉陶器の瀬戸産灰釉卸目皿である。

整地面（図91）　山科本願寺の整地面上に投棄されていた土器群である。土師器・輸入陶磁器などがある。京都Ⅹ期中段階に属する資料である。378～385は白色系の土師器皿である。378～383は小型皿で口径は8.6～9.6㎝の間に分布する。383は灯明皿として使用されている。384は中型皿、385は大型皿である。386は朝鮮半島産で雑釉の徳利形瓶である。体部内面に同心円の当て具痕がつく。

整地層（図91）　山科本願寺の整地層中から出土した土器である。387～390は白色系の土師器皿である。387は中型皿、388～390は大型皿である。

土塁構築土（図91）　17次調査１区西端の断割り調査中に土塁構築土から出土した土器群である。土師器皿、焼締陶器壷・甕（丹波産か）、瓦質土器、輸入陶磁器青磁椀、鉄釘などが出土している。京都Ⅸ期新段階～Ⅹ期古段階に属する一群と考えられる。

391～396は白色系の土師器皿である。391は中型皿、392～396は大型皿である。397は中国龍泉窯系の青磁椀である。

土塁構築以前整地層（図91）　17次調査１区西端の断割調査中に土塁構築以前の整地土と考えられる土層中より出土した土器群である。401は図17の40層から出土、それ以外は38層から出土した。

398は白色系の土師器小型皿である。399・400は山茶椀である。399は内面底部が平滑で硯に転用された可能性がある。401は焼締陶器の壷の底部と考えられる。焼成は須恵質である。402は瓦質土器の鉢の口縁部と考えられる。端部に２条の凹線がめぐる。403は焼締陶器の信楽産擂鉢である。焼成は軟質で３条１単位のクシ描き擂目をもつ。

近世整地層（図92）　山科本願寺廃絶後の整地層から出土した土器群である。土師器・瓦質土器・施釉陶器・軟質施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などが出土した。16世紀後半～17世紀前半に位置付けられる資料である。

404～406は土師器皿である。404は灯明皿として使用されている。407は土師質土器の焙烙鍋

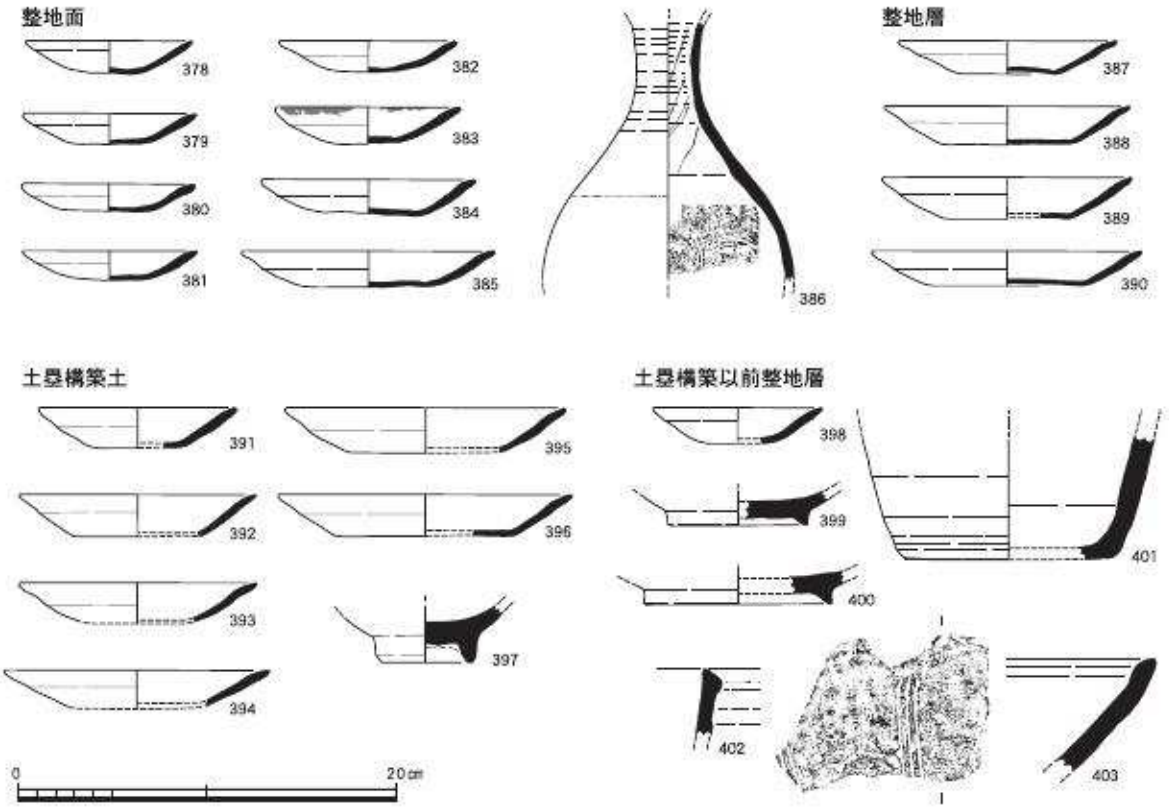


図91　整地面、整地層、土塁構築土、土塁構築以前整地層出土土器実測図（１：４）

である。408は瓦質土器の羽釜である。双耳がつく。外面体部下半から底部には煤が付着する。409～411・414は瀬戸美濃系の施釉陶器である。409は小型皿、410は小型の壷体部で、いずれも鉄釉がかかる。411は織部焼の向付である。414は志野焼の小椀で全面施釉、内面底部と外面高台脇にピン跡がつく。412・413は肥前系の施釉陶器皿である。412は灰釉がかかり、外面下半から底部は露胎、内面底部には5ヶ所の砂目の目跡がつく。413は口縁端部を屈曲させてつまみ上げるいわゆる溝縁皿で、全面に土灰釉がかかる。内面底部には砂目の目跡がつく。415は肥前系の施釉陶器椀である。高台接地部を除き全面に釉薬がかかる。17世紀末～18世紀初頭頃のものと考えられ混入品である。416・417は輸入陶磁器で、416は中国明時代の青花椀、417は中国龍泉窯系の青磁盤である。

土坑1086（図92）　焼締陶器・瓦質土器・施釉陶器・磁器・石製品などが出土した。17世紀後半に位置付けられる資料である。

418は焼締陶器の灯火具である。内外面に煤が付着する。419は瓦質土器の蓋である。内面に煤が付着することから火消し壷の蓋と考えられる。420は瓦質土器の火消し壷である。内面底部に炭が付着する。421は瓦質土器の浅鉢である。平面方形で内面底部と口縁部の一部に煤が付着することから火鉢と考えられる。419～421の瓦質土器はいずれもイブシが甘く土師質化している。422は焼締陶器の備前産の擂鉢、423は丹波産の擂鉢である。424・425は瀬戸美濃系の施釉陶器である。424は長石釉の鉢、425は灰釉の椀である。426は肥前系の施釉陶器椀である。高台接地部を除き全面に釉薬がかかる。427は施釉陶器の水鳥形製品である。外面は底部を除き全面施釉され、

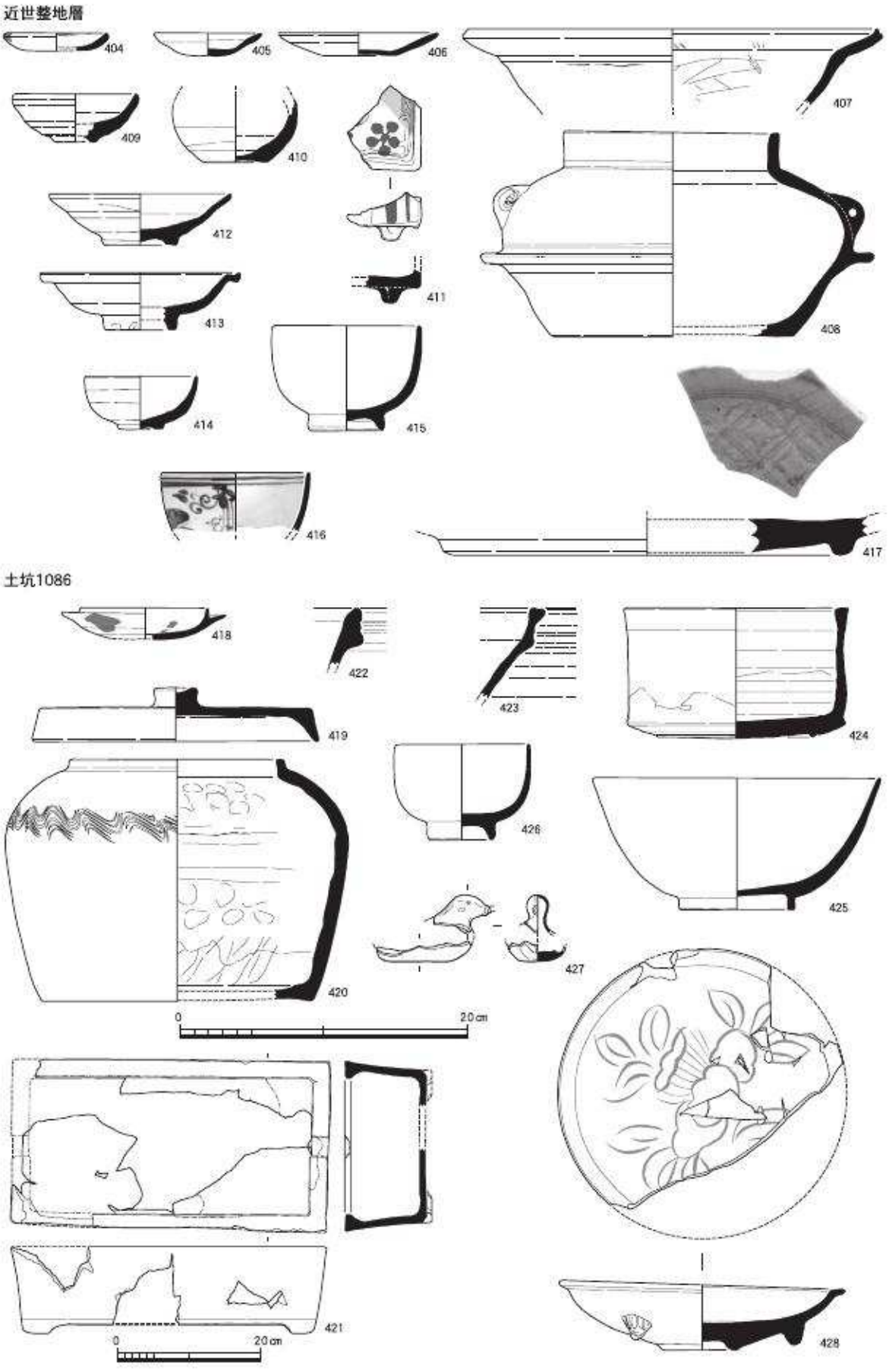
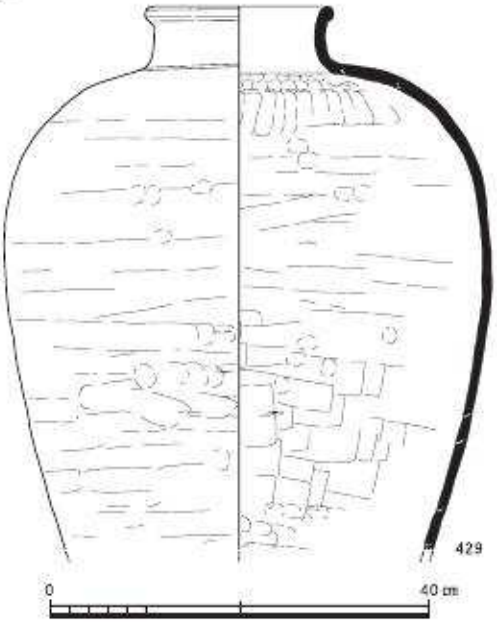
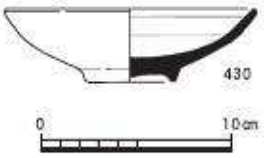


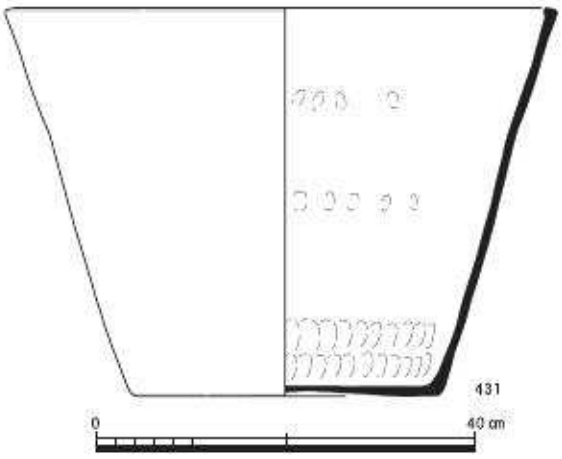
図92　近世整地層、土坑1086出土土器実測図（1：4、1：8）

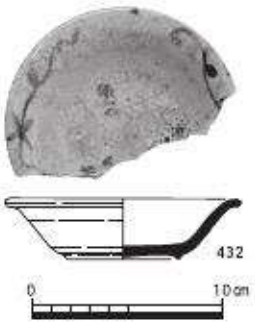
土坑2001





土坑2105





土坑2115

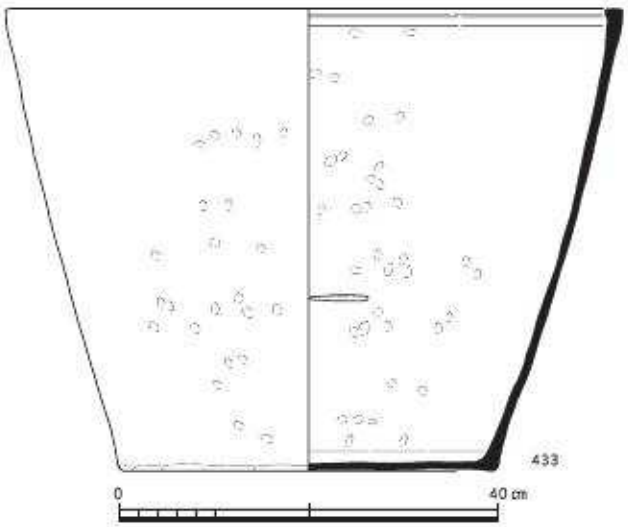


図93　土坑2001・2105・2115出土土器実測図（1：4、1：8）

器壁は薄く精巧なつくりである。428は肥前系磁器の青磁盤である。高台接地部を除き全面施釉し、獣足が三方につく。

土坑2001・2105・2115（図93）　いずれも墓と考えられる土坑から出土したものである。429・431・433は棺桶として使用されていたものと思われる。17世紀後半に位置付けられる。

429は土坑2001出土の焼締陶器の信楽産大型壷である。焼成は硬質。430は429とともに出土した肥前系の施釉陶器皿である。内面底部と高台に砂目の目跡が４ヶ所につく。土坑2001からは他に土師器皿、肥前系の染付皿、平瓦などが出土している。431は土坑2105出土の瓦質土器の大型深鉢である。焼成は硬質でイブシがかかる。432は431内部から出土した。瀬戸美濃系の施釉陶器皿である。他に土師器皿、焼締陶器擂鉢、染付椀、青磁皿、丸瓦、平瓦などが出土している。433は土坑2115出土の瓦質土器の大型深鉢である。焼成は硬質でイブシがかかる。内面体部に鉄釘が付着する。他に土師器皿、青磁片などが出土している。

（２）瓦類（図94）

各遺構や焼土層、整地層などから軒瓦・丸瓦・平瓦・塼・道具瓦が出土している。二次焼成を受けるものが多い。また軒瓦は少なく、掲載した軒丸瓦３点の出土にとどまる。

瓦１は16次調査の近世整地層掘り下げ中に出土した。右方向に巻き込む巴文軒丸瓦である。外区には珠文がめぐる。瓦当裏面下半はヘラケズリ、他はナデで仕上げている。瓦当面には雲母が付着する。胎土は精良で色調は内面灰白色、外面は灰色を呈する。瓦２は17次調査１区の重機掘削中に出土した。右方向に巻き込む巴文軒丸瓦である。外区には珠文がめぐる。瓦当面には金雲母が付着する。胎土は精良で色調は内面灰白色、外面は灰色を呈する。瓦１・２は近世瓦の可能性がある。瓦３は溝2143から出土した巴文軒丸瓦である。左方向に巻き込む三つ巴文で外区には珠文が密にめぐる。胎土はやや粗く径１～７㎜程度の石英・長石を多く含む。色調は内面灰白色、外面は灰色～褐灰色を呈する。瓦４は16次調査の近世整地層掘り下げ中に出土した平瓦である。凹面凸面ともにヘラミガキ、側面はヘラケズリする。胎土は細かい砂粒を少量含み、色調は内面灰白色、外面は灰色を呈する。瓦５・６は土坑1055から出土した雁振瓦である。いずれも二次焼成を受ける。凸面と側面はヘラミガキ、凹面側の側端面は面取りを行い、凹面はコビキ痕を一部ナデ消す。胎土は砂粒を少量含む。色調は内面は灰白色、外面は二次焼成により黄灰色～橙色を呈する。瓦７・８は塼である。瓦７は土坑1086出土で、一辺24.0㎝、厚さは3.0㎝ある。表面側にわずかに凸状に隆起する。表面はミガキ、側面は横ナデし、裏面は一部ナデでコビキ痕が明瞭に残る。胎土はやや粗く径１～５㎜の砂粒を多量に含む。色調は内面灰白色、外面は灰色～暗灰色である。瓦８は焼土層から出土した。厚さ約2.2㎝、表面ミガキ、側面は横ナデし裏面は未調整でコビキ痕が明瞭に残る。胎土は精良で径１～５㎜の砂粒を少量含む。色調は内面灰白色、外面は灰色である。

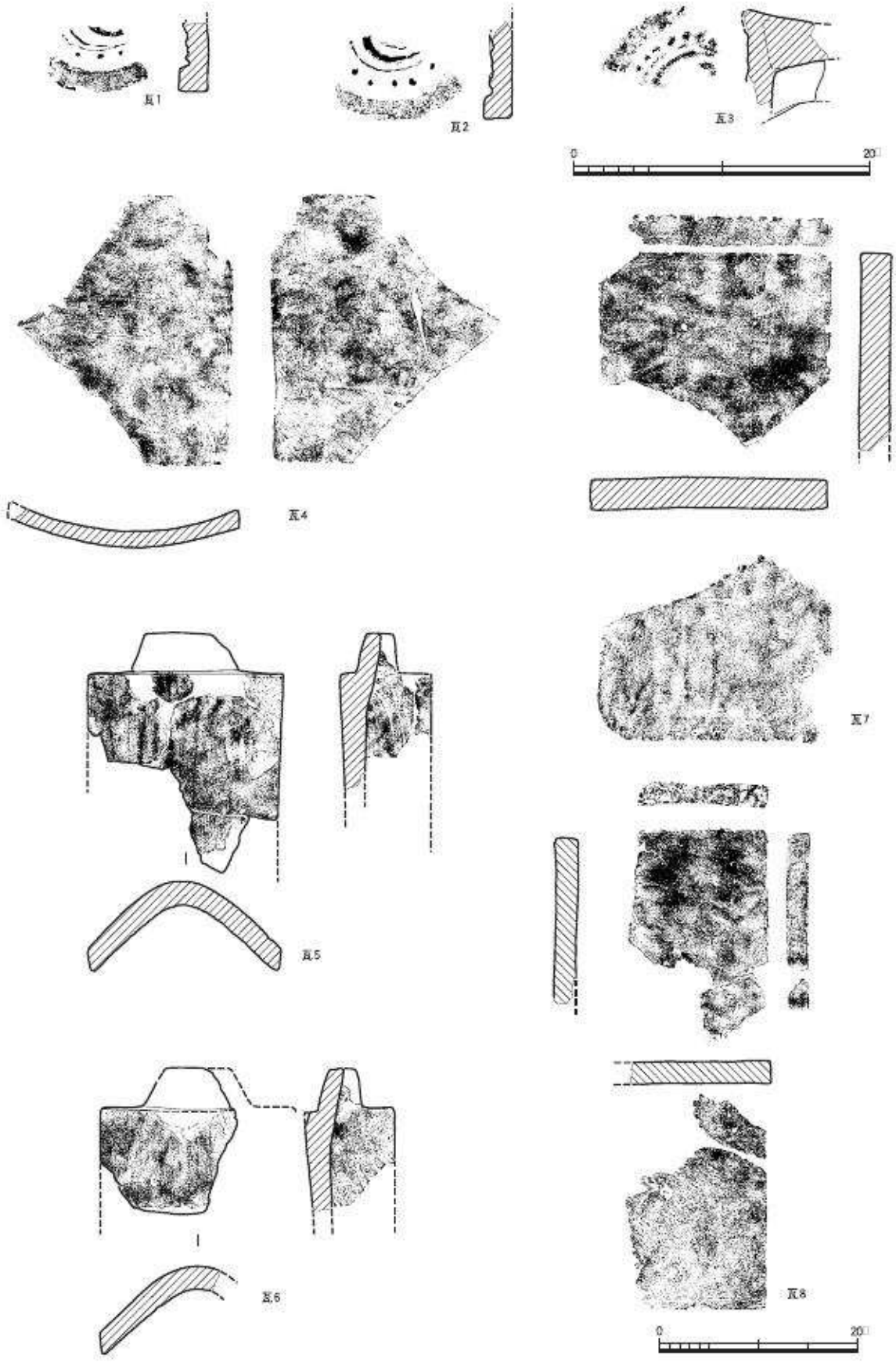


図94　瓦類拓影および実測図（1：4、1：6）

（３）金属製品（図95）

金１は埋納遺構2160から出土した鉄製短刀である。錆が進行するがほぼ完存で、全体的に鞘の木質が残る。全体の長さは31.5㎝あり、茎を除いた刃部の長さは20.3㎝ある。刃の厚さは最大で0.6㎝ある。残存重量は134.74ｇある。茎の目釘穴に鉄製の目釘が打ち込まれたまま残る。目釘の直径は0.4㎝、残存長は1.1㎝ある。

調査では総数にして約250本の釘状金属製品が出土した。特に溝2084からは33本、土坑2134からは31本、土坑2157からは47本とまとまって出土している。残存状況の良好なものについて図を掲載した（金２～22）。出土遺構、残存長、重量は表20にまとめた。金７のみ銅製、他は鉄製で

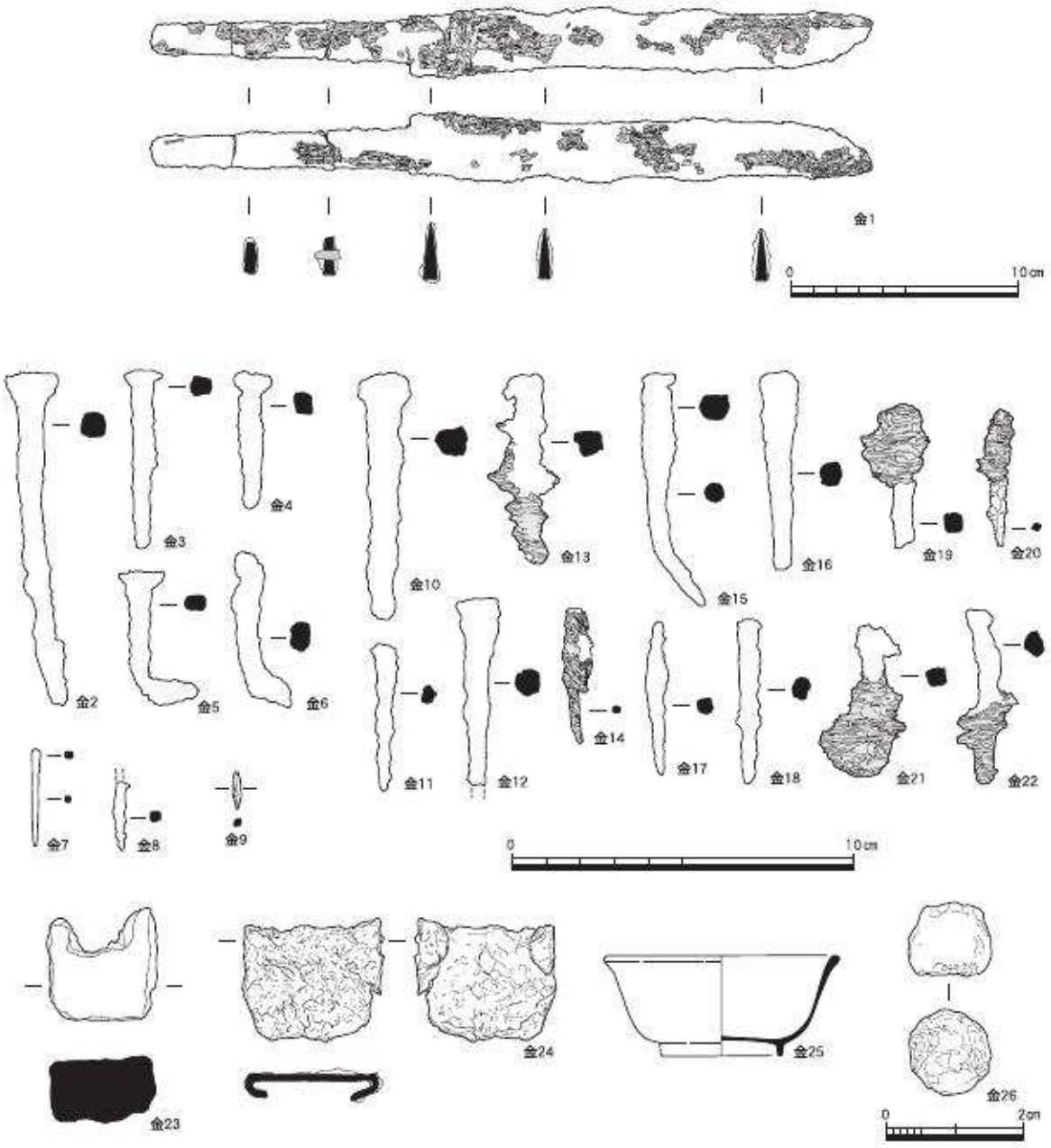


図95　金属製品実測図（１：３、１：２、１：１）

表20　釘状金属製品計測表

番号	遺構名	長さ(cm)	重量(g)	備考
金2	溝2084	9.8	12.39	
金3	溝2084	5.2	4.67	
金4	溝2084	4.1	3.49	
金5	溝2084	3.9	3.49	
金6	溝2084	4.6	6.38	
金7	溝2087	2.9	0.51	銅製
金8	溝2087	(2.0)	0.31	
金9	溝2117	1.1	0.24	
金10	土坑2134	7.3	10.52	
金11	土坑2134	4.3	1.55	
金12	土坑2134	(5.5)	6.54	
金13	土坑2134	5.6	6.19	木質残る
金14	土坑2134	4.0	1.16	木質残る
金15	溝2148	6.8	6.03	
金16	土坑2157	(5.3)	7.98	
金17	土坑2157	4.5	1.93	
金18	土坑2157	4.8	2.66	
金19	土坑2157	(4.2)	3.42	木質残る
金20	土坑2157	4.0	1.65	木質残る
金21	土坑2157	4.5	4.79	木質残る
金22	土坑2157	5.1	4.50	木質残る

※長さの（　）は残存長

図96　土坑1086出土　石1

ある。金13・14、金19～22は木質が残る。金7・8・9は径が小さいことから鋲の可能性がある。

金23は溝2117から出土した鉄製品である。重量は40.8ｇあり、平面形は凹字状を呈する。用途は不明。金24は土坑1086から出土した鉄製品である。両耳を内側に折り曲げ、平面形は舌状を呈する。重量は13.35ｇある。金25は16次調査で近世整地層中から出土した銅製の小椀である。完形で口径6.9cm、底径3.4cm、器高3.0cm、重量63.47ｇある。金26は土坑1086から出土した鉛玉である。径約1.2cm、重量は6.86ｇある。金27（図版22）は土坑2036から出土した文政一朱金である。鋳造期間は文政七年～天保三年(1824～1832)。正方形で表には五三の桐文と「一朱」の文字が、裏には「光次」の文字が刻印される。完存で重量は1.280ｇある。

（4）石（図96）

図96の石1は、江戸時代の土坑1086から出土したものである。砂岩系の石であるが脈や貫入が入り、遺跡近辺では採取できない石材である。水石の可能性がある。

5．ま と め

（1）遺構の変遷とその性格

２ヵ年度にわたる今回の調査では、山科本願寺に関わる多数の遺構を検出した。本願寺期の整地面が江戸時代の整地土で覆われることにより非常に良好な状態で残存し、一部では天文元年（1532）の焼き討ちに伴うと考えられる焼土の堆積も確認できた。16次調査区北側と東側では整地層を周囲より一段高く盛り上げた高まりを検出した。高まり上では柱穴を多数検出し、小規模な建物が存在したと推測される。また東西方向の溝1119は、この溝より北側では室町時代の遺構が極端に少なくなることから何らかの区画のための溝と考えられる。16次調査区南側では上面が土間状に固く敲き締まる東西方向の通路状遺構を検出した。17次調査ではこの延長部分を確認したが、Y=−17,433付近で途切れ、南に屈曲すると推測される。17次調査１区北側では複数の遺構で構成される一連の石組溝群を検出した。この溝群は、場所によって石の据え方を変え、架橋、屈曲、合流させるなど景色をつくり出しており、庭の一部と考えられる。また、数時期にわたって作り変えが行われていることも判明した。その北側では、土坑2061・2064の２基の土坑が見つかった。これらはその構造から高い柱を立てるための宝幢遺構と考えられる。17次調査１区西側では屈曲する土塁基底部とその裾に沿う溝2143・2148を検出した。排水のための溝と考えられるが、多量の遺物が出土しており、廃棄にも利用されたと推測される。さらに、土塁構築土の下からは次節で詳述する土取り穴と考えられる土坑2157を検出している。

以上の遺構群は、埋土の差異（焼土と炭を多量に含むものと含まないもの）、出土遺物の型式差、遺構の重複関係からおおよそ３時期の変遷が捉えられる。その変遷は

古：土坑2157、土塁構築土

↓

中：石組溝群中層・下層（溝2084中層・下層）、土坑2061・2064、溝2148

↓

新：溝1119、通路状遺構（溝1040・1093、集石1061・1081含む）、石組溝群上層（溝2084上層・2087・2117・2151、土坑2143含む）、溝2143

となる。最も新しいグループは、埋土に多量の焼土が混じり、1532年の焼き討ち後に埋まったものと考えられる。中段階のものはそれよりやや古く、今回検出した中で最も古いと考えられる土坑2157でも現在の土器編年[5]からは、15世紀末から16世紀初頭に位置付けられるものであり、山科本願寺の創建まで遡る確実な遺構は検出できていない。

次に、これらの遺構群の具体的な性格について、周辺調査の成果も加え検討してみたい。図97は周辺調査の成果を合わせた遺構分布図である。12・13次調査では、中央に巨大な景石を据えた泉状遺構とそこから排水するための石組溝、さらにその水を土塁の外側に排水するための石組暗渠が見つかっている。これらは景観を意識して作られた庭の一部と考えられる。２次・14次調査

では、土師器皿が多量に詰まる石室群、石組溝・石敷き・池からなる庭園遺構、多量の輸入陶磁器や漆芸品が出土した小規模な建物跡などが見つかっている。これらのことから、今回の調査成果と合わせると、約200m四方の範囲に、小規模な建物や複数の庭が近接して作られていることがわかる。

図98は、安永九年（1780）に製作された『都名所図会』に描かれた西本願寺である。東側からの構図で描かれている。これを見ると、阿弥陀堂・本堂の裏手（西側）に「黒書院」「白書院」「常御殿」「虎の間」「対面所」などと記された建物群が密集し、それらが廊でつながれている。また建物の間には樹木が描かれ、坪庭があることがわかる。西本願寺は元和三年（1617）の焼失後の建替えで阿弥陀堂と御影堂（本堂）の配置が逆転するため、御影堂が北側とされる山科本願寺の配置[6]とは逆になるが、それ以外の建物群については山科本願寺期に存在した建物の発展形とされるものも多い[7][8]。史料から山科本願寺の「御本寺」内には「寝殿」「御亭」「常屋」「向所」「馬屋」

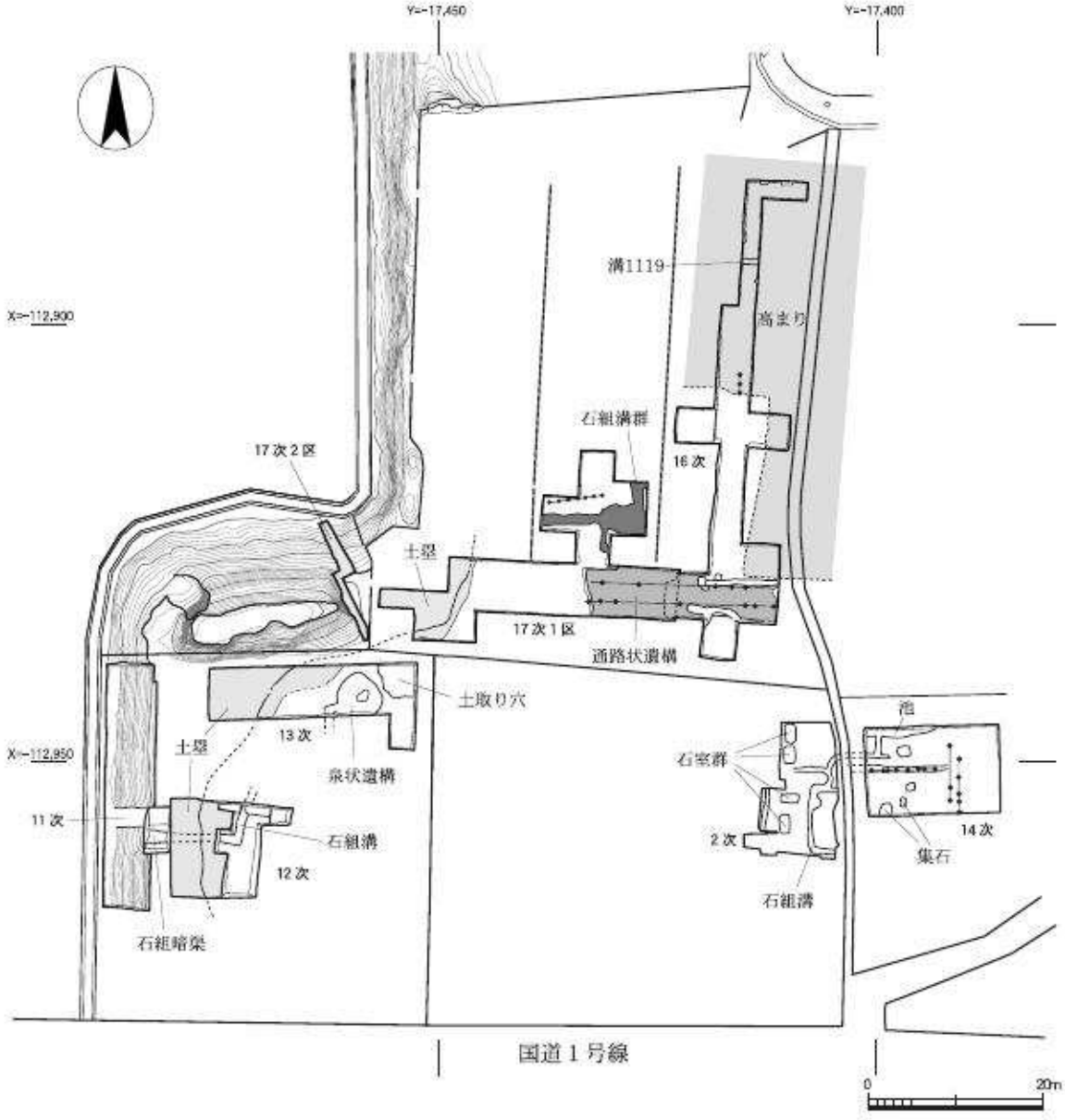


図97　周辺遺構分布図（1：800）

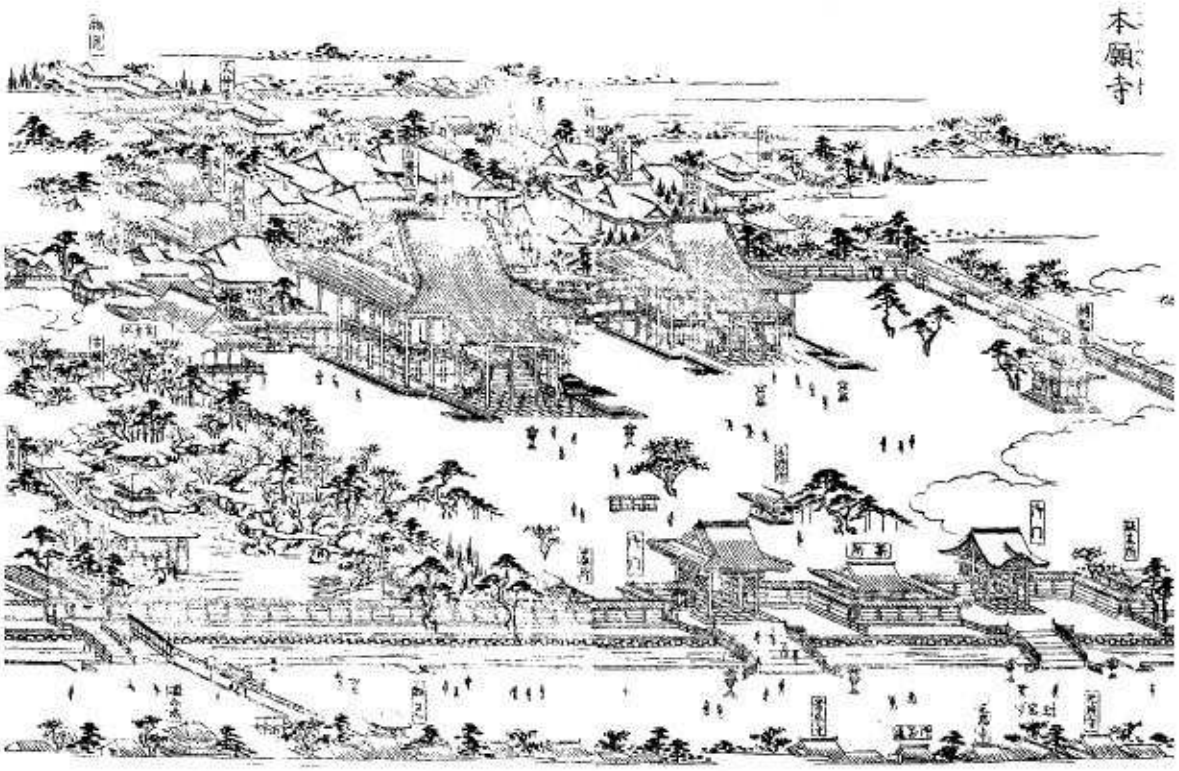


図98　「本願寺」『都名所図会』（『新修京都叢書』第６巻　臨川書店　1967年より転載）

などがあったことがわかっており、絵図に描かれた建物名称と対比できるものもある。これらのことから、西本願寺の堂舎配置が山科本願寺の系譜を引くとの前提で、今回とその周辺調査で見つかった遺構群を絵図と比較すると、小規模な建物の密集や庭の多さなどが絵図に描かれた主要堂舎の裏手の建物群とその間の坪庭空間に比定できる。すなわち見つかった遺構群は、宗主一族の居住空間および寺の実務空間で、一般門徒には開放されない私的な空間に建てられた建物とその間の坪庭であり、通路状遺構はこうした建物と建物をつなぐものと推測される。またその視点で見ると、これらの遺構の東側で見つかった高まりは、阿弥陀堂あるいは御影堂建造のための造成の一端である可能性が見出せる。

そうした中で、宝幢遺構と考えられる土坑2061・2064は私的空間に建てられたものとしては異質である。宝幢とは寺院や宮殿において、竿を高く立てて、その頂に幡などを掲揚して堂舎を荘厳する施設であり、仏事や特別な儀式に用いられるものである。その性格上、寺院では南門前や伽藍全体の左右、廊の四方や金堂の四方・前面左右、宮殿では前庭などに配置されることが多い[9]。今回見つかった遺構は、柱が抜き取られていることから見て、常設の宝幢ではなく、儀式などに際して一時的に立てられたものと考えられるが、主要堂舎からすれば裏手の空間にあたり、なおかつ私的な空間の中に位置することから、宝幢としては例外的であり、他の遺構との時期差も含めその性格については今後の検討課題としたい。

課題も残るが、今回の調査でこれまで点的にしか捉えられていなかった各調査の成果が、関連性をもって面的に捉えられるようになったことは重要であり、今後の阿弥陀堂、御影堂発見に向けての大きな手がかりとなる成果と言えよう。

（2）土塁の構築と規模

山科本願寺の外郭を囲う土塁と濠については、過去にも複数の箇所で調査が実施されている（図69・表14－12～17・19～21など）が、今回の調査では、土塁の構築に関していくつかの新たな知見が得られた。中でも最も重要な問題は、少なくとも今回の調査部分では土塁の構築が山科本願寺の造営開始時期より大幅に遅れる可能性が高くなったことである。17次調査１区西端では屈曲する土塁基底部を検出したが、断割調査の結果、その構築土の下で土坑2157が見つかった。大規模土坑と考えられ、壁面の形状が不整形である。南に隣接する敷地で実施した13次調査（図69・表14－21）で、土塁裾部分で壁土などに使用する土を採取するための土取り穴と考えられる壁が抉られ、底面が礫層上面で止まる大規模土坑が検出されているが、土坑2157も土塁裾付近という位置や規模、埋土の状況から見て同様に土取り穴の可能性が高いと考える。出土状況からは山科本願寺造営以前に掘削された土坑である可能性も考えられる。しかし、埋土から出土した土器群は、本願寺廃絶の前後に投棄されたと考えられる溝2143や石組溝群の焼土層出土の土器群よりは一型式古く見られるものの、実年代では15世紀末から16世紀初頭に位置付けられ、土器の年代観が一定正しいと仮定すれば、本願寺造営以前にまで遡るものではないと言える。つまり、山科本願寺の造営当初は土塁が存在しなかったということになる。また、土塁構築土中からも土坑2157出土土器と同じか、やや新しい要素をもつ土器が出土しており、このことからも土塁の構築が山科本願寺存続期でも後半に行われたことが指摘できる。

土塁が山科本願寺造営当初には存在しなかった可能性についてはすでに草野顕之氏による指摘がある[10]。草野氏は山科本願寺の堂舎に関する記述がある『御文』や『空善聞書』など複数の史料から、創建期に造営された堂舎とそれ以後に追加造営された堂舎の復元を試み、その結果、創建期の山科本願寺は本寺本願寺部分の阿弥陀堂、御影堂を始めとした幾つかの堂舎のみが造営され、その部分は土塁ではなく築地塀で方形に囲まれていた。第二郭、第三郭は蓮如の没後、実如期に形成された。築地ではなく土塁の形態をとる時期については、大きな普請が行われたことが史料に記された時期を勘案し、永正年間（1504～1521）ではないかと推測している。これは、今回の土塁の構築が造営当初より遅れるという考古学的成果と矛盾しない。また、土塁の構築時期が本願寺存続期でも後半であるということも出土した土器の年代観と合致する。ここで問題となるのは、土塁構築以前は築地塀であったとされることである。今回の調査では土塁構築土の下で断面台形状の盛土とその肩に貼りつく粘質シルト層を確認した（図79-Aライン36・37層）。この盛土は幅が約5.7m、高さが約0.4mあり、規模は築地塀の基礎部分としても遜色はない。しかし、古代以来、築地塀は通常、版築工法により非常に強固につくられる[11]が、今回検出した盛土は基本的には単一層で締まりが悪く版築工法は見られない。築地の基礎としては脆弱である。板塀や築垣など築地塀以外の遮蔽施設の存在も考慮に入れ、今後の調査で考古学的にも土塁構築以前に山科本願寺を囲っていた施設の実体を明らかにする必要がある。またこの盛土の下面からは哺乳類の両脚の骨の上に短刀が乗る埋納遺構2160が見つかった。骨は酸化により遺存状況が悪く、人骨か

獣骨かは不明であるが、出土地は「御本寺」とその外側を画する重要な敷地境にあたり、地鎮のために埋められたと推測される。調査ではこれ以外にも、石組溝群中の中島の上面で祭祀的要素が看守できる土坑2156を検出している。土師器皿や輸入陶磁器とともに赤彩した動物型土製品を並べたもので、埋納遺構2160とともに寺院内での祭祀行為について考える上で興味深い発見と言える。

17次調査２区の現存土塁の調査では、土塁のおおよその規模が判明した。竹の根などで攪乱を受けるが、現状で外側の水路底からの高さは約6.2m、１区で検出した内側基底部からの高さは約3.7mとなる。本文で述べたように、西側敷地での試掘調査の成果をもとに標高40.2m以下が外濠と推測され、濠部分を除いた土塁基底部の幅は約8.5mとなる。斜面の傾斜角は土塁内法面で約35度、外法面で約40度ある。外濠の幅は10～11mと推測され、濠法面の傾斜角は約30度、肩部のみ約50度と急傾斜となる。７次調査（図69・表14－14）で検出された「御本寺」南西コーナー部の土塁は、高さ５～６m、基底部幅は18mで上面に幅約２mの平坦部があり、斜面の最大傾斜角度は約45度と報告されている。今回の調査部分が後世の削平をかなり受けていると仮定しても、規模、特に基底部幅に大きな差がある。南西コーナー部には外濠がないということも大きく関係すると思われるが、場所により規模が異なることが明瞭である。また、土塁の断面露出部分の土層観察では、構築時の土の使い分けや、部分によって積み方を変えている様子が詳細に確認できた。過去の土塁の調査でも土の使い分けや積み方の変化は同様に確認されているが、それらは調査後消失したため、今回は調査した土塁が残されているということが重要であろう。

（３）本願寺廃絶以後の様相

今調査では、調査地全域で近世から近代の遺構や整地層を検出した。整地層から出土する遺物は16世紀後半から17世紀前半に比定でき、大規模な整地の時期は17世紀前半から中頃と推測される。その下には山科本願寺期の整地面が良好に残り、16世紀後半から17世紀前半に位置付けられる遺物が遺構からもほとんど出土しないことから、天文元年（1532）の山科本願寺の焼き討ち後、17世紀中頃に整地されるまでの約100年もの間、その跡地はほとんど人の手が加えられないままになっていたことがわかる。土層断面の観察では近世の耕作土層は認められず、整地が行われた後も、耕作地としては利用されなかったと考えられる。貯蔵施設と考えられる土坑などが散見されるものの、日常生活に用いられる土器類の出土は少なく、集落の一部となった形跡は認められない。唯一、土坑1086からはまとまって遺物が出土したが、土師器皿などは少なく、茶道具や棚飾りとして用いられるようなものが認められる。周辺に中・上流階層の居住があったことを物語るが、相対的には17世紀代の遺物の出土量は少なく、当地が活発に利用された状況は看守できない。その後17世紀末頃から、当地は墓地として利用されるようになる。土器を棺として用いた土器棺墓から方形の木棺直葬と考えられる火葬墓へと移行し、最も新しい土坑2033から電球が出土していることから、墓地としての利用は現代まで続いたようである。これらの墓と考えられる土坑群は、南北方向ではおおよそY=−17,415.5、Y=−17,437ラインに、東西方向ではX=−112,930ラ

イン、X=-112,933.5ラインに沿って配置されており、一定の規制のもとで構築されたと考えられる。戦後、当地は果樹畑となり、さらに駐車場へと変わり現在に至る。

山科本願寺廃絶後の土地利用の変遷については、中村武生氏による文献史学からの研究がある[12]。その中の主要事項を以下に列挙する。

- 山科本願寺・寺内町の跡地の支配権は山城都代から法華宗側へと変遷をたどる。天文五年（1536）の「天文法華の乱」で法華宗勢力が失墜した後、足利義晴が証如の罪を許し、山科の旧領を本願寺に返却する。領主は醍醐寺三宝院で、本願寺側は税を支払うが、結局この時本願寺は山科へは戻らなかった。
- 安土桃山時代に入り、豊臣秀吉が天正十四年（1586）に山科本願寺の跡地二十石を本願寺に寄付し、時の宗主准如は山科に堂舎を建立しようとするが、山科の住民が芝地がなくなると生活に不便になるとの理由で反対したことから准如はこれをあきらめる。
- 江戸時代に入り、徳川も跡地二十石を承認。
- 宝暦二年（1752）七月、西野村が西本願寺に対して、彼らが預かる「古屋敷」には「田畑これなく」、年貢が払えないと訴える。
- 明治時代に入り、明治二年（1869）、西野村が京都府に対して「古屋敷」の開墾を申し出る。これに対して、京都府は西本願寺に開墾を認めるよう指令する。

以上のことから、焼き討ち後、近代に至るまで耕作地としては開墾されなかったことが文献史料からも読み取れる。その要因については、中村氏も指摘するように、安土桃山から江戸時代を通して本願寺の所領であり続けたことがあげられる。さらにそれに加えて、遺跡の立地する扇状地の水はけが良すぎ耕作に不向きであったこと、また土塁や濠がそのまま残されたことで、後世にも山科本願寺の存在が強く意識され、その中心部の利用が忌避されたという可能性も捨てきれない。そのことにより近隣集落からは孤立した場所となり、墓地として利用されることになったと推測される。史料には大規模な整地が行われている17世紀中頃の様相やその主体者などは明確に記されず不明な点も多いが、これまで本願寺廃絶後の土地利用の状況について考古学的側面からは語られることがほとんど無かった中で、今回の調査成果は、その議論の端緒となる発見と言えよう。

註

1） 京都橘大学考古学研究同好会『山科分布調査概報復刻版　第１次～第５次』　2008年、京都橘大学文学部『京都橘大学　文化財調査報告2009』　2010年、『京都橘大学　文化財調査報告　2010年』2011年

2） 土器の型式については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　(財)京都市埋蔵文化財研究所　1996年に準拠する。

3） 元興寺文化財研究所の佐藤亜聖氏から御教示を得た。また、降矢哲男「喫茶文化と瓦質土器－風炉

を中心として－」『中近世土器の基礎研究』22　日本中世土器研究会編　2009年では、この種の風炉の出土は、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、新潟県下町・坊城遺跡など数例しかないとされる。

4）　江浦洋「大坂城跡出土の犬形土製品小考」『大阪文化財研究』第18号　(財) 大阪府文化財調査研究センター　2000年

5）　前掲註２に同じ。

6）　櫻井敏雄「第一章　第二節山科本願寺の堂宇とその類型」『浄土真宗寺院の建築史的研究』　財団法人法政大学出版局　1997年

7）　櫻井敏雄氏は、「寝殿」とは接客・対面機能を掌る書院造の中心的建物であり、そこから発達して会所、主殿、御広間、大・小書院を成立させ、段階的に変遷しその流れの中で対面所も書院造の一つとして形成されたとしている。櫻井敏雄「第三章　浄土真宗寺院大広間の研究」前掲註６に同じ。また、「御亭」は仏事や接客対面・遊興を行う会所的役割をもつ建物で、西本願寺飛雲閣につながる本願寺にとって重要不可欠な建築であるとされる。櫻井敏雄「第四章　本願寺の御亭に関する研究」前掲註６に同じ。

8）　「御文」「第八祖御物語空善聞書」「山科御坊事并其時代事」「本願寺作法之次第」　いずれも『真宗史料集成』第二巻　同朋舎1983年所収。

9）　金子裕之「幢竿支柱・荘厳施設」『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　2003年、高 正 龍「古記録にあらわれた寺院の宝幢」『九頭神遺跡Ⅲ（本文編)』　財団法人枚方市文化財研究調査会　2010年

10）　草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』　吉川弘文館　2002年

11）　山中敏史「築地塀」『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』　独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　2003年

12）　中村武生「山科本願寺・寺内町跡の近世・近代」『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町』　法藏館　1998年

表21　掲載土器・土製品一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
1	土師器	皿・小	集石1061	8.8	1.7		75	2.5Y8/3淡黄色	
2	土師器	皿・小	集石1061	(8.8)	(1.3)		口縁25	2.5Y7/2灰黄色	
3	土師器	皿・小	集石1061	(9.0)	(1.3)		20	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
4	土師器	皿・中	集石1061	(11.0)	2.3		45	10YR8/3浅黄橙色	
5	土師器	皿・中	集石1061	11.4	2.1		80	10YR8/3浅黄橙色	
6	土師器	皿・大	集石1061	(13.4)	2.2		口縁75	10YR8/3浅黄橙色	
7	土師器	皿・大	集石1061	(13.6)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
8	土師器	皿・小	溝1119	(8.8)	1.9		25	10YR7/4にぶい黄橙色	
9	土師器	皿・小	溝1119	(9.0)	1.6		40	10YR7/4にぶい黄橙色+2.5Y8/2灰白色	
10	土師器	皿・中	溝1119	(10.4)	2.1		20	2.5Y7/4浅黄色	
11	土師器	皿・へそ	焼土層	7.0	1.4		100	10YR8/3浅黄橙色	
12	土師器	皿・赤小	焼土層	(7.8)	1.6		25	外面7.5YR8/3浅黄橙色 内面7.5Y8/3浅黄橙色+7.5YR6/6橙色	
13	土師器	皿・小	焼土層	(7.8)	1.2		50	2.5Y8/2灰白色	
14	土師器	皿・小	焼土層	8.3	1.7		70	10YR8/2灰白色	
15	土師器	皿・小	焼土層	8.4	1.5		45	10YR8/2灰白色	
16	土師器	皿・小	焼土層	(8.6)	1.7		40	10YR8/3浅黄橙色+2.5Y6/2灰黄色	
17	土師器	皿・小	焼土層	8.8	1.6		75	2.5Y8/2灰白色	
18	土師器	皿・小	焼土層	(9.0)	1.7		45	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
19	土師器	皿・小	焼土層	9.0	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
20	土師器	皿・小	焼土層	9.0	1.5		70	10YR8/2灰白色+2.5Y6/2灰白色	
21	土師器	皿・小	焼土層	9.1	1.6		100	10YR8/2灰白色	
22	土師器	皿・小	焼土層	(9.2)	(1.7)		60	2.5YR7/1灰白色	灯明皿
23	土師器	皿・小	焼土層	9.2	1.5		口縁85 体部100	10YR8/2灰白色	
24	土師器	皿・小	焼土層	(9.4)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色+10YR7/3にぶい黄橙色	
25	土師器	皿・小	焼土層	(9.6)	2.2		25	10YR7/3にぶい黄橙色	灯明皿
26	土師器	皿・中	焼土層	10.0	2.1		100	10YR8/2灰白色	灯明皿
27	土師器	皿・中	焼土層	(10.2)	1.8		30	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
28	土師器	皿・中	焼土層	(10.4)	1.5		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
29	土師器	皿・中	焼土層	(10.4)	(1.6)		40	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
30	土師器	皿・中	焼土層	(10.6)	(2.0)		30	10YR8/2灰白色	灯明皿
31	土師器	皿・中	焼土層	(11.4)	1.9		25	10YR8/3浅黄橙色	
32	土師器	皿・大	焼土層	(12.4)	2.3		20	10YR8/2灰白色	
33	土師器	皿・大	焼土層	12.6	(1.9)		25	10YR8/3浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
34	土師器	皿・大	焼土層	(12.8)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色	
35	土師器	皿・大	焼土層	(12.8)	(2.2)		25	10YR8/2灰白色	
36	土師器	皿・大	焼土層	(13.4)	2.0		60	10YR8/3浅黄橙色	
37	土師器	皿・大	焼土層	(14.4)	2.5		20	10YR8/3浅黄橙色+10YR6/2灰黄褐色	
38	土師器	皿・大	焼土層	(14.5)	2.2		25	10YR7/4にぶい黄橙色	
39	土師器	皿・大	焼土層	(14.8)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
40	土師器	皿・大	焼土層	(14.8)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
41	土師器	皿・大	焼土層	(14.8)	1.9		30	10YR8/3浅黄橙色	
42	土師器	皿・大	焼土層	(15.0)	(2.2)		口縁60	2.5Y8/3淡黄色+2.5Y6/2灰黄色	
43	土師器	皿・大	焼土層	(15.2)	1.9		25	10YR8/3浅黄橙色	
44	瓦質土器	風炉	焼土層	(24.8)	(25.5)		30	外面N3/0暗灰色、内面N5/0灰色 断面10YR7/3にぶい黄橙色	
45	輸入白磁	椀	焼土層	(7.5)			20		
46	土師器	皿・赤小	土坑2134	(6.4)	(1.2)		20	7.5YR6/4にぶい橙色　クサリレキ少量	
47	土師器	皿・赤小	土坑2134	(7.6)	1.7		20	7.5YR8/4浅黄橙色	灯明皿
48	土師器	皿・赤小	土坑2134	(8.4)	1.5		15	外面5YR6/4にぶい橙色 内面10YR6/3にぶい黄橙色	
49	土師器	皿・赤小	土坑2134	(8.8)	1.3		15	10YR7/3にぶい黄橙色+10YR6/6赤橙色	灯明皿
50	土師器	皿・赤小	土坑2134	(9.6)	(1.8)		20	外面5YR5/1褐灰色、内面5YR4/1褐灰色	内面に漆状の物付着
51	土師器	皿・へそ	土坑2134	6.0	1.3		100	10YR8/4浅黄橙色	
52	土師器	皿・小	土坑2134	(8.8)	1.8		35	10YR8/2灰白色	
53	土師器	皿・小	土坑2134	(8.8)	1.6		35	10YR8/2灰白色	
54	土師器	皿・小	土坑2134	(8.8)	1.4		35	10YR7/2にぶい黄橙色	灯明皿　二次被熱
55	土師器	皿・小	土坑2134	(8.8)	1.9		45	2.5Y8/3淡黄色	
56	土師器	皿・小	土坑2134	(9.0)	1.6		45	2.5Y8/3淡黄色	
57	土師器	皿・小	土坑2134	9.0	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	
58	土師器	皿・小	土坑2134	(9.0)	1.6		30	10YR8/3浅黄橙色	
59	土師器	皿・小	土坑2134	(9.0)	1.7		40	10YR8/4浅黄橙色	
60	土師器	皿・小	土坑2134	9.1	1.6		50	10YR8/3浅黄橙色	
61	土師器	皿・小	土坑2134	9.2	1.6		100	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	
62	土師器	皿・小	土坑2134	(9.2)	1.7		30	7.5YR8/3浅黄橙色	
63	土師器	皿・小	土坑2134	9.2	1.7		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
64	土師器	皿・小	土坑2134	9.2	1.9		60	10YR7/4にぶい黄橙色	
65	土師器	皿・小	土坑2134	9.2	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
66	土師器	皿・小	土坑2134	9.4	1.9		100	10YR8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
67	土師器	皿・小	土坑2134	(9.4)	1.7		25	10YR8/3浅黄橙色	
68	土師器	皿・小	土坑2134	9.4	1.8		100	外面10YR8/4浅黄橙色+10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	
69	土師器	皿・小	土坑2134	(9.4)	1.7		45	外面10YR8/3浅黄橙色 内面10YR7/4にぶい黄橙色	
70	土師器	皿・小	土坑2134	9.4	1.8		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
71	土師器	皿・小	土坑2134	(9.6)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
72	土師器	皿・小	土坑2134	9.6	1.5		70	外面2.5Y8/3淡黄色、内面10YR8/2灰白色	
73	土師器	皿・小	土坑2134	9.6	1.9		75	10YR8/3浅黄橙色	
74	土師器	皿・小	土坑2134	9.6	1.7		100	2.5Y8/3淡黄色	
75	土師器	皿・小	土坑2134	(9.8)	1.9		40	外面10YR7/2にぶい黄橙色 内面10YR7/4にぶい黄橙色	
76	土師器	皿・中	土坑2134	(10.0)	1.8		45	10YR8/4浅黄橙色	灯明皿
77	土師器	皿・中	土坑2134	10.6	1.9		100	10YR8/2灰白色	灯明皿
78	土師器	皿・中	土坑2134	(10.8)	1.7		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
79	土師器	皿・中	土坑2134	11.0	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
80	土師器	皿・中	土坑2134	11.0	2.0		100	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
81	土師器	皿・中	土坑2134	11.0	1.9		100	10YR8/2灰白色	灯明皿
82	土師器	皿・中	土坑2134	11.0	1.9		55	10YR8/3浅黄橙色	
83	土師器	皿・中	土坑2134	(11.2)	2.0		45	10YR8/3浅黄橙色	
84	土師器	皿・中	土坑2134	11.2	2.1		80	10YR8/3浅黄橙色	
85	土師器	皿・中	土坑2134	11.4	1.8		100	10YR8/2灰白色	
86	土師器	皿・中	土坑2134	11.4	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
87	土師器	皿・中	土坑2134	11.4	2.0		100	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
88	土師器	皿・大	土坑2134	(12.2)	1.9		30	10YR7/3にぶい黄橙色	
89	土師器	皿・大	土坑2134	(12.4)	2.1		25	10YR8/2灰白色	
90	土師器	皿・大	土坑2134	12.4	1.9		50	2.5Y7/3浅黄色	
91	土師器	皿・大	土坑2134	12.8	2.2		100	10YR8/3浅黄橙色	
92	土師器	皿・大	土坑2134	12.8	2.1		60	10YR8/2灰白色、外面10YR6/1褐灰色	
93	土師器	皿・大	土坑2134	12.8	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
94	土師器	皿・大	土坑2134	(12.9)	1.8		35	2.5Y8/3淡黄色	
95	土師器	皿・大	土坑2134	(13.0)	2.1		40	10YR8/2灰白色	
96	土師器	皿・大	土坑2134	13.0	2.1		60	2.5Y8/3淡黄色	
97	土師器	皿・大	土坑2134	(13.1)	2.2		25	2.5Y8/2灰白色	
98	土師器	皿・大	土坑2134	(13.4)	1.8		35	2.5Y8/3淡黄色	
99	土師器	皿・大	土坑2134	13.6	2.1		70	外面10YR7/4にぶい黄橙色 内面10YR8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
100	土師器	皿・大	土坑2134	(14.0)	1.9		75	10YR8/2灰白色	
101	土師器	皿・大	土坑2134	14.0	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
102	土師器	皿・大	土坑2134	(14.0)	2.4		40	2.5Y8/2灰白色	
103	土師器	皿・大	土坑2134	(14.0)	2.0		45	10YR7/3にぶい黄橙色	
104	土師器	皿・大	土坑2134	14.2	2.1		100	2.5Y8/3淡黄色	
105	土師器	皿・大	土坑2134	14.2	2.1		100	10YR8/3浅黄橙色	
106	土師器	皿・大	土坑2134	14.4	2.2		100	10YR8/3浅黄橙色	
107	土師器	皿・大	土坑2134	14.4	2.3		口縁100	7.5YR8/4浅黄橙色	
108	土師器	皿・大	土坑2134	(14.4)	1.8		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
109	土師器	皿・大	土坑2134	(14.4)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
110	土師器	皿・大	土坑2134	14.6	1.9		65	10YR8/3浅黄橙色	
111	土師器	皿	土坑2134	(7.0)	(2.4)		20	10YR7/3にぶい黄橙色　クサリレキ少量	内面3条の 擦描沈線
112	土製品	円盤状 土製品	土坑2134				90	10YR8/3浅黄橙色	径4.0cm 厚6.5cm
113	瓦質土器	甕	土坑2134	(27.8)			10	N3/0暗灰色　φ1mm以下の長石・黒色粒含	
114	瓦質土器	蓋	土坑2134	(8.8)	(1.4)		15	外面N4/0灰色、断面N8/0灰白色	
115	瓦質土器	風炉	土坑2134	(26.0)	5.2		口縁10	N2/0黒色　φ1mm以下の石英・長石・ チャート含	
116	瓦質土器	鉢	土坑2134	(26.0)	9.4		口縁30	N3/0暗灰色　φ1mm以下の黒色粒子含	内面線刻あり
117	瓦質土器	鉢	土坑2134	(33.4)	13.9	(11.5)	20	N4/0灰色、断面2.5Y7/1灰白色 φ1mm以下の石英・長石・黒色粒子少量	内面線刻あり 内外面煤付着
118	瓦質土器	鉢	土坑2134				破片	N3/0暗灰色 φ0.5mm以下の長石・黒色粒含	内面線刻あり
119	焼締陶器	擂鉢	土坑2134	(34.4)			10	7.5YR7/6橙色　φ1～5mmの石英・長石・ 黒色粒多量	信楽 擂目4条1単位
120	輸入青磁	碗	土坑2134		(5.8)	(5.0)	15	胎土10YR8/3浅黄橙色 釉10Y5/2オリーブ灰色	
121	輸入 三彩陶器	香炉	土坑2134				破片		華南三彩
122	土師器	皿・小	溝2084	(8.6)	1.5		25	2.5Y8/3淡黄色	
123	土師器	皿・小	溝2084	8.8	1.7		75	2.5Y8/3淡黄色	
124	土師器	皿・小	溝2084	(8.8)	1.6		25	10YR8/1灰白色	
125	土師器	皿・小	溝2084	(8.8)	1.8		25	2.5Y8/3淡黄色	
126	土師器	皿・小	溝2084	(8.8)	1.6		30	10YR8/3浅黄橙色	
127	土師器	皿・小	溝2084	8.8	1.6		90	7.5YR8/4浅黄橙色	
128	土師器	皿・小	溝2084	(9.0)	1.5		25	10YR7/4にぶい黄橙色	
129	土師器	皿・小	溝2084	(9.0)	1.6		20	10YR8/2灰白色	
130	土師器	皿・小	溝2084	(9.0)	1.7		25	10YR8/2灰白色	
131	土師器	皿・小	溝2084	9.0	1.9		55	10YR8/4浅黄橙色	
132	土師器	皿・小	溝2084	(9.2)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
133	土師器	皿・小	溝2084	(9.4)			30	10YR8/2灰白色	灯明皿
134	土師器	皿・小	溝2084	(9.6)	1.8		25	10YR6/4にぶい黄橙色	
135	土師器	皿・小	溝2084	(9.8)	(1.7)		40	2.5Y8/3淡黄色	
136	土師器	皿・中	溝2084	(10.8)	2.1		25	10YR8/3浅黄橙色	
137	土師器	皿・中	溝2084	(11.6)	2.3		40	10YR8/2灰白色	灯明皿
138	土師器	皿・中	溝2084	(11.2)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
139	土師器	皿・中	溝2084	(12.0)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
140	土師器	皿・大	溝2084	(12.4)	2.3		20	2.5Y7/3浅黄色	
141	土師器	皿・大	溝2084	(12.6)	2.0		25	10YR8/4浅黄橙色	
142	土師器	皿・大	溝2084	(13.0)	2.3		25	2.5Y8/2灰白色	
143	土師器	皿・大	溝2084	(13.0)	2.1		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
144	土師器	皿・大	溝2084	(13.4)	(1.9)		5	10YR8/4浅黄橙色	内面墨書
145	土師器	皿・大	溝2084	(13.4)	(2.1)		10	10YR8/2灰白色	内面墨書
146	土師器	皿・大	溝2084	(13.2)	2.0		45	2.5Y8/3淡黄色	
147	土師器	皿・大	溝2084	(13.6)	2.0		20	2.5Y8/3淡黄色	外面墨書
148	土師器	皿・大	溝2084	(14.8)	2.0		20	10YR8/3浅黄橙色	
149	土師器	皿・大	溝2084	(14.9)	2.0		45	10YR8/3浅黄橙色	
150	土師器	皿・大	溝2084	(15.0)	2.2		25	10YR6/1褐灰色	
151	土師器	皿・大	溝2084	15.4	2.0		25	10YR7/2にぶい黄橙色	
152	土師器	皿・大	溝2084	15.8	2.2		20	10YR8/2灰白色	
153	瓦質土器	鉢	溝2084			(8.6)	底部30	N4/0灰色	香炉か
154	輸入白磁	皿	溝2084			(10.4)	底部10		
155	土師器	皿・中	溝2084掘形	(11.0)	2.0		15	2.5Y8/3淡黄色	灯明皿
156	土師器	皿・大	溝2084下層	13.0	2.4		75	10YR8/3浅黄橙色	
157	土師器	皿・大	溝2085下層	(13.6)	2.0		40	10YR8/4浅黄橙色	内外面墨描
158	土師器	皿・大	溝2086下層	(13.8)	2.2		40	10YR8/3浅黄橙色	
159	土師器	皿・大	溝2087下層	(14.8)	2.2		10	10YR8/3浅黄橙色	
160	土師器	皿・大	溝2088下層	15.0	2.2		80	10YR8/3浅黄橙色	
161	瓦質土器	鉢	溝2089下層	(42.4)	13.3		65	N3/0暗灰色、断面N7/0灰白色 φ2mm以下の石英・長石・黒色粒多量	奈良火鉢 二次被熱
162	土師器	皿・小	溝2151	(8.4)	1.8		40	10YR8/4浅黄橙色	
163	土師器	皿・小	溝2151	(8.6)	1.7		35	10YR8/3浅黄橙色	
164	土師器	皿・小	溝2151	(9.0)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	
165	土師器	皿・小	溝2151	8.8	1.8		100	7.5YR8/4浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
166	土師器	皿・小	溝2151	(9.0)	1.8		45	10YR8/3浅黄橙色	
167	土師器	皿・小	溝2151	9.0	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
168	土師器	皿・小	溝2151	9.2	1.4		85	10YR8/3浅黄橙色	
169	土師器	皿・小	溝2151	(9.2)			45	10YR8/2灰白色	
170	土師器	皿・小	溝2151	9.8	1.8		95	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
171	土師器	皿・中	溝2151	(10.8)	1.5		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
172	土師器	皿・中	溝2151	11.1	1.8		70	10YR8/3浅黄橙色	
173	土師器	皿・中	溝2151	(11.2)	1.9		45	10YR8/2灰白色	
174	土師器	皿・中	溝2151	(11.2)	2.1		35	10YR8/2灰白色	灯明皿
175	焼締陶器	擂鉢	溝2151	(33.0)	15.8	(14.9)	25	7.5YR8/2灰白色 φ1～3mmの石英・長石・チャート含	信楽 擂目4条1単位
176	土師器	皿・小	溝2117	(8.6)	1.6		45	10YR5/1褐灰色～10YR6/1褐灰色	
177	土師器	皿・小	溝2117	(8.4)	1.7		25	10YR8/2灰白色	
178	輸入白磁	椀	溝2117	(8.8)			10		
179	輸入青磁	盤	溝2117		(2.5)		破片	胎土N8/0灰白色、釉10Y6/2オリーブ灰色	
180	土師器	皿・へそ	土坑2156	6.6	1.3		80	10YR8/2灰白色	
181	土師器	皿・小	土坑2156	(8.8)	1.6		20	10YR8/2灰白色	
182	土師器	皿・小	土坑2156	9.3	1.8		95	10YR8/2灰白色	
183	土師器	皿・中	土坑2156	(11.6)	2.1		20	10YR8/2灰白色	
184	土師器	皿・大	土坑2156	(13.8)	(2.4)		20	10YR8/3浅黄橙色	
185	瓦質土製品	動物形土製品	土坑2156					外面N3/0暗灰色、断面N5/0灰色	一部赤色顔料で着色
186	輸入白磁	皿	土坑2156				破片		輪花皿
187	土師器	皿・小	溝2087	(8.8)	1.8		35	10YR7/2にぶい黄橙色	
188	土師器	皿・小	溝2087	(8.8)	1.5		25	10YR8/2灰白色	
189	土師器	皿・小	溝2087	(9.0)	1.6		25	10YR8/2灰白色	
190	土師器	皿・小	溝2087	(9.0)	1.4		30	10YR8/3浅黄橙色	
191	土師器	皿・小	溝2087	(9.1)	1.7		25	10YR8/3浅黄橙色	
192	土師器	皿・小	溝2087	9.2	1.7		100	2.5Y7/3浅黄色	
193	土師器	皿・小	溝2087	(9.2)	1.5		30	10YR8/3浅黄橙色	
194	土師器	皿・小	溝2087	(9.4)	1.7		35	10YR8/3浅黄橙色	
195	土師器	皿・小	溝2087	(9.6)	1.5		40	2.5Y5/1黄灰色	灯明皿
196	土師器	皿・小	溝2087	9.8	1.7		65	10YR8/2灰白色	灯明皿
197	土師器	皿・中	溝2087	11.0	1.8		100	10YR8/2灰白色	
198	土師器	皿・中	溝2087	(11.2)	1.9		45	10YR8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
199	土師器	皿・中	溝2087	(11.4)	(2.0)		20	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
200	土師器	皿・中	溝2087	(11.8)	1.9		25	10YR8/2灰白色	
201	土師器	皿・大	溝2087	(13.0)	1.9		30	2.5Y8/3淡黄色	
202	土師器	皿・大	溝2087	(13.2)	2.0		20	2.5Y8/3淡黄色	
203	土師器	皿・大	溝2087	(13.8)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色+10YR7/6明黄褐色	
204	土師器	皿・大	溝2087	(14.6)	1.9		25	2.5Y8/2灰白色	
205	土師器	皿・大	溝2087	15.0	2.3		15	10YR8/3浅黄橙色	
206	土師器	皿・大	溝2087	(15.0)	2.1		25	10YR8/3浅黄橙色	
207	焼締陶器	播鉢	溝2087	32.0	(11.8)		10	10YR8/2灰白色　φ1～6㎜の石英・長石多量	信楽 櫛目4条1単位
208	瓦質土器	鉢	溝2087	(38.8)	12.9	(18.0)	65	2.5Y3/1黒褐色、断面10YR8/2灰白色　φ1㎜以下の石英・長石・チャート・クサリレキ少量	
209	土師器	皿・小	溝2143	8.6	1.6		65	10YR8/2灰白色	
210	土師器	皿・小	溝2143	(8.8)	1.7		45	10YR8/3浅黄橙色	
211	土師器	皿・小	溝2143	(9.2)	1.8		20	10YR7/3にぶい黄橙色+10YR6/1褐灰色	灯明皿
212	土師器	皿・小	溝2143	(9.2)	(1.8)		20	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
213	土師器	皿・小	溝2143	(9.4)	1.6		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
214	土師器	皿・中	溝2143	(10.7)	(2.1)		40	10YR8/2灰白色	灯明皿
215	土師器	皿・中	溝2143	(10.8)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	内面墨書
216	土師器	皿・中	溝2143	(10.7)	2.0		30	10YR8/3浅黄橙色	
217	土師器	皿・中	溝2143	(10.8)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
218	土師器	皿・中	溝2143	(11.0)	2.1		25	外面2.5Y8/2灰白色、内面2.5Y7/2灰黄色	灯明皿
219	土師器	皿・中	溝2143	(11.2)	2.0		45	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
220	土師器	皿・中	溝2143	(11.3)	2.1		45	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
221	土師器	皿・中	溝2143	(11.4)	2.2		20	外面10YR8/3浅黄橙色 内面2.5Y7/2浅黄色	
222	土師器	皿・中	溝2143	(11.4)	1.7		20	2.5Y8/3淡黄色	灯明皿
223	土師器	皿・中	溝2143	(11.4)	1.8		25	外面10YR8/3浅黄橙色 内面10YR8/2灰白色	灯明皿
224	土師器	皿・中	溝2143	11.4	2.0		50	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
225	土師器	皿・中	溝2143	(11.6)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
226	土師器	皿・中	溝2143	(11.6)	(1.8)		20	外面10YR7/2にぶい黄橙色 内面10YR7/3にぶい黄橙色	内面に1㎜以下の布目 京都産以外か
227	土師器	皿・大	溝2143	(12.0)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
228	土師器	皿・大	溝2143	(12.4)	1.9		45	10YR8/3浅黄橙色	
229	土師器	皿・大	溝2143	12.6	1.8		95	外面10YR8/3浅黄橙色、内面7.5YR5/4にぶい褐色+10YR8/3浅黄橙色	
230	土師器	皿・大	溝2143	(13.0)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
231	土師器	皿・大	溝2143	(13.4)	2.2		20	10YR8/3浅黄橙色	外面6条ハケメか

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
232	土師器	皿・大	溝2143	(14.0)	2.1		30	10YR8/3浅黄橙色	
233	土師器	皿・大	溝2143	14.2	2.2		65	10YR8/3浅黄橙色	
234	土師器	皿・大	溝2143	(14.2)	2.1		45	10YR8/3浅黄橙色	
235	土師器	皿・大	溝2143	(14.4)	2.2		30	外面10YR8/3浅黄橙色 内面10YR6/6明黄褐色+10YR8/3浅黄橙色	
236	土師器	皿・大	溝2143	14.6	2.1		85	10YR8/3浅黄橙色	
237	土師器	皿・大	溝2143	(15.0)	2.3		40	10YR8/3浅黄橙色	
238	土師器	皿・大	溝2143	(15.0)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色	
239	焼締陶器	捕鉢	溝2143	(30.0)			15	7.5YR7/6橙色 φ1～3.5mmの石英・長石・チャート多量	信楽 擂目4条1単位
240	焼締陶器	捕鉢	溝2143			14.0	底面65	外面10YR6/2灰黄褐色+7.5YR7/6橙色 内面7.5YR6/4にぶい橙色+10YR8/4浅黄橙色 φ1～3mm石英・長石含	信楽 擂目5条1単位
241	輸入青磁	香炉	溝2143	(12.0)					
242	輸入白磁	皿	溝2143	(17.0)	1.6		口縁20	5Y7/1灰白色	
243	土製品	不明	溝2143					7.5Y7/4にぶい橙色	高9.3cm 部分的に赤色顔料付着
244	土師器	皿・小	溝2148	(8.0)	(1.6)		30	10YR8/3浅黄橙色	
245	土師器	皿・小	溝2148	(8.4)	(1.7)		20	10YR8/2灰白色	
246	土師器	皿・小	溝2148	(8.4)	1.8		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
247	土師器	皿・小	溝2148	(8.4)	(1.9)		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
248	土師器	皿・小	溝2148	8.8	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
249	土師器	皿・小	溝2148	(8.7)	1.9		30	2.5Y7/3浅黄色	
250	土師器	皿・小	溝2148	(8.9)	1.8		30	10YR8/3浅黄橙色	
251	土師器	皿・小	溝2148	8.9	(1.9)		40	10YR8/2灰白色	
252	土師器	皿・小	溝2148	8.9	1.7		30	10YR8/3浅黄橙色	
253	土師器	皿・小	溝2148	(9.1)	1.6		50	2.5Y8/2灰白色	
254	土師器	皿・小	溝2148	9.2	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
255	土師器	皿・小	溝2148	(9.2)	1.7		70	10YR8/2灰白色	
256	土師器	皿・小	溝2148	(9.2)	1.7		50	10YR8/2灰白色	
257	土師器	皿・小	溝2148	9.2	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
258	土師器	皿・小	溝2148	(9.3)	(1.6)		30	10YR7/3にぶい黄橙色	
259	土師器	皿・小	溝2148	(9.4)	(1.4)		20	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
260	土師器	皿・小	溝2148	9.4	1.7		90	2.5Y8/2灰白色	
261	土師器	皿・小	溝2148	(9.5)	(1.7)		30	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
262	土師器	皿・小	溝2148	(9.5)	2.0		50	2.5Y8/2灰白色	
263	土師器	皿・小	溝2148	9.9	1.8		30	10YR8/2灰白色	
264	土師器	皿・中	溝2148	(10.9)	2.2		25	10YR8/2灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
265	土師器	皿・中	溝2148	10.9	(2.0)		50	7.5Y7/6橙色　クサリレキ少量	産地異なるか
266	土師器	皿・中	溝2148	(10.9)	1.8		40	10YR8/2灰白色	
267	土師器	皿・中	溝2148	11.0	2.1		100	2.5Y8/2灰白色	
268	土師器	皿・中	溝2148	(11.1)	(1.7)		25	10YR8/2灰白色	灯明皿
269	土師器	皿・中	溝2148	11.4	2.2		70	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
270	土師器	皿・中	溝2148	11.4	2.1		80	2.5Y8/2灰白色	灯明皿
271	土師器	皿・中	溝2148	(11.7)	(2.1)		30	2.5Y8/3淡黄色 φ1mm以下の長石・チャート含	
272	土師器	皿・中	溝2148	(11.8)	(2.0)		20	10YR8/2灰白色	
273	土師器	皿・中	溝2148	(11.8)	2.0		25	2.5Y8/2灰白色	
274	土師器	皿・大	溝2148	12.3	1.9		90	10YR8/3浅黄橙色	
275	土師器	皿・大	溝2148	(12.8)	2.1		50	10YR8/2灰白色	
276	土師器	皿・大	溝2148	12.8	2.1		70	10YR8/2灰白色	
277	土師器	皿・大	溝2148	(13.0)	2.1		50	10YR8/2灰白色	
278	土師器	皿・大	溝2148	13.1	2.3		70	10YR8/3浅黄橙色	
279	土師器	皿・大	溝2148	(13.2)	2.0		20	2.5Y8/2灰白色	
280	土師器	皿・大	溝2148	(13.7)	(2.1)		15	2.5Y8/2灰白色	
281	土師器	皿・大	溝2148	13.9	2.2		90	10YR8/4浅黄橙色	
282	土師器	皿・大	溝2148	13.8	2.3		90	10YR8/3浅黄橙色	
283	土師器	皿・大	溝2148	(13.9)	2.0		20	2.5Y7/2灰白色	
284	土師器	皿・大	溝2148	13.9	2.4		100	10YR8/3浅黄橙色	
285	土師器	皿・大	溝2148	(13.9)	2.2		20	10YR8/2灰白色	
286	土師器	皿・大	溝2148	(14.0)	2.2		50	10YR8/2灰白色	
287	土師器	皿・大	溝2148	(14.0)	2.3		30	10YR8/3浅黄橙色	
288	土師器	皿・大	溝2148	(14.1)	2.4		25	7.5Y7/4にぶい橙色	
289	土師器	皿・大	溝2148	14.2	2.1		70	10YR8/4浅黄橙色	
290	土師器	皿・大	溝2148	(14.3)	2.1		40	10YR8/3浅黄橙色	
291	土師器	皿・大	溝2148	(14.3)	2.1		50	10YR8/2灰白色	
292	土師器	皿・大	溝2148	(14.4)	2.2		20	2.5Y8/2灰白色	
293	土師器	皿・大	溝2148	(14.4)	2.1		40	10YR8/2灰白色	
294	土師器	皿・特大	溝2148	17.3	2.4		70	10YR8/3浅黄橙色	
295	焼締陶器	擂鉢	溝2148	(32.6)	14.5	12.8	10	10YR7/4にぶい黄橙色　φ1～7㎜の石英・長石・黒色粒多量	信楽 櫛目4条1単位
296	輸入青磁	椀	溝2148			4.2	40	胎土10Y5/1灰色、釉5GY6/1オリーブ灰色	黒色粒多量
297	土師器	皿・赤小	土坑2157	(9.2)	1.5		45	10YR8/4浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
298	土師器	Ⅲ・赤小	土坑2157	(8.6)	1.7		45	外面7.5YR6/2灰褐色+7.5YR7/4にぶい橙色、内面7.5YR7/3にぶい橙色	
299	土師器	Ⅲ・へそ	土坑2157	(6.4)	1.5		40	10YR8/2灰白色	
300	土師器	Ⅲ・へそ	土坑2157	(7.8)	1.7		15	外面10YR8/2灰白色 内面10YR4/2灰黄褐色	
301	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	7.8	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	
302	土師器	Ⅲ・へそ	土坑2157	(8.4)	1.5		35	10YR8/3浅黄橙色	
303	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.4)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
304	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	8.4	2.0		20	外面10YR7/4にぶい黄橙色 内面10YR5/2灰黄褐色	
305	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.4)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	
306	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.4)	2.0		10	外面7.5YR5/1褐灰色 内面7.5YR6/2灰褐色	
307	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.4)	1.5		30	10YR8/2灰白色	
308	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.4)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
309	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	8.6	1.8		55	10YR8/3浅黄橙色	
310	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.6)	1.5		35	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
311	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.6)	1.8		30	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	
312	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.6)	1.9		35	10YR8/3浅黄橙色	
313	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.6)	1.7		55	10YR8/3浅黄橙色	
314	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	1.7		20	10YR8/3浅黄橙色	
315	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	1.7		45	10YR8/3浅黄橙色	
316	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	1.6		20	10YR8/3浅黄橙色	
317	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	8.8	1.7		80	外面2.5Y5/1黄灰色、内面2.5Y8/3淡黄色	
318	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	8.8	1.9		90	10YR8/3浅黄橙色+10YR7/6明黄褐色	
319	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	1.6		35	10YR8/2灰白色	
320	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	2.0		30	10YR8/4浅黄橙色	
321	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	8.8	1.7		60	10YR8/3浅黄橙色	
322	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	2.3		20	10YR8/3浅黄橙色	内面墨描か
323	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(8.8)	1.6		25	外面10YR5/1褐灰色+10YR8/3浅黄橙色 内面10YR4/1褐灰色+10YR8/3浅黄橙色	
324	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	9.0	1.6		100	外面10YR8/2灰白色 内面10YR7/6明黄褐色+10YR8/2灰白色	
325	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	9.0	1.7		60	10YR8/3浅黄橙色	
326	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	9.0	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
327	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	9.0	1.8		95	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
328	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(9.2)	1.7		25	10YR8/4浅黄橙色	
329	土師器	Ⅲ・小	土坑2157	(9.4)	1.9		30	10YR8/4浅黄橙色	
330	土師器	Ⅲ・赤中	土坑2157	(11.0)	1.6		10	5YR7/4にぶい橙色+5YR5/6明赤褐色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
331	土師器	皿・中	土坑2157	9.6	1.9		100	10YR6/2灰黄褐色+10YR5/1褐灰色	
332	土師器	皿・中	土坑2157	(9.8)	1.6		20	10YR8/4浅黄橙色	
333	土師器	皿・中	土坑2157	(10.0)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
334	土師器	皿・中	土坑2157	(9.8)	2.3		15	10YR8/3浅黄橙色	内面墨描か
335	土師器	皿・中	土坑2157	(10.1)	2.1		30	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
336	土師器	皿・中	土坑2157	(10.2)	1.9		40	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
337	土師器	皿・中	土坑2157	10.4	2.0		40	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
338	土師器	皿・中	土坑2157	(10.8)	2.0		20	10YR8/3浅黄橙色	
339	土師器	皿・中	土坑2157	(10.8)	1.9		50	10YR8/2灰白色	
340	土師器	皿・中	土坑2157	(10.8)	2.0		20	10YR8/3浅黄橙色	
341	土師器	皿・中	土坑2157	(11.2)	2.1		30	10YR8/2灰白色	
342	土師器	皿・中	土坑2157	(11.2)	2.2		45	10YR8/4浅黄橙色	
343	土師器	皿・大	土坑2157	(12.2)	2.1		20	10YR8/2灰白色	
344	土師器	皿・大	土坑2157	(12.2)	2.2		25	10YR8/3浅黄橙色	
345	土師器	皿・大	土坑2157	(12.6)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色	
346	土師器	皿・大	土坑2157	(12.6)	2.4		20	外面10YR8/3浅黄橙色、内面10YR5/1褐灰色+10YR7/2にぶい黄橙色	内面煤付着
347	土師器	皿・大	土坑2157	(12.8)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
348	土師器	皿・大	土坑2157	(12.8)	2.1		45	10YR7/4にぶい黄橙色	
349	土師器	皿・大	土坑2157	(12.8)	2.1		20	10YR8/2灰白色	
350	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	1.9		30	10YR7/3にぶい黄橙色+10YR5/2灰黄褐色	
351	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	2.0		20	10YR8/3浅黄橙色+10YR7/2にぶい黄橙色	内面底部煤付着
352	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	2.1		20	10YR8/3浅黄橙色　クサリレキ少量	
353	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	2.0		25	10YR8/4浅黄橙色	
354	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	2.3		25	10YR8/3浅黄橙色+10YR5/8黄褐色	
355	土師器	皿・大	土坑2157	(13.0)	2.0		20	10YR8/2灰白色	灯明皿
356	土師器	皿・大	土坑2157	(13.2)	2.0		30	10YR8/4浅黄橙色	
357	土師器	皿・大	土坑2157	(13.2)	2.5		15	10YR8/2灰白色	
358	土師器	皿・大	土坑2157	(13.4)	2.0		20	2.5Y7/4浅黄色+2.5Y6/1黄灰色	
359	土師器	皿・大	土坑2157	(13.4)	2.4		25	10YR8/2灰白色	
360	土師器	皿・大	土坑2157	(13.4)	2.1		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
361	土師器	皿・大	土坑2157	(14.0)	2.2		20	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色	
362	土師器	皿・大	土坑2157	(14.0)	2.1		25	10YR8/2灰白色	
363	土師器	皿・大	土坑2157	(14.6)	2.4		25	2.5Y8/3淡黄色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
364	土師器	皿・大	土坑2157	(14.8)	2.4		20	10YR8/3浅黄橙色	
365	土師器	皿・大	土坑2157	(14.8)	2.0		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
366	土師器	皿・大	土坑2157	(14.8)	2.0		20	10YR8/2灰白色	
367	土師器	皿・大	土坑2157	(14.8)	3.4		40	10YR8/4浅黄橙色+2.5YR7/6橙色	二次被熱
368	土師器	皿・大	土坑2157	(15.2)	2.0		35	10YR8/3浅黄橙色	
369	土師器	皿・大	土坑2157	(15.2)	2.2		25	10YR8/4浅黄橙色	
370	土師器	皿・特大	土坑2157	(17.8)	2.0		20	10YR8/2灰白色	
371	土師器	皿	土坑2157				破片	10YR6/2灰黄褐色	内面墨書
372	土師器	皿	土坑2157					外面7.5YR8/2灰白色+10YR6/1褐灰色 内面10YR4/1褐灰色	転用
373	瓦質土器	ミニチュア三足鉢	土坑2157	7.5			20	2.5Y8/1灰白色	香炉か
374	瓦質土器	鉢	土坑2157					N3/0暗灰色、断面2.5Y8/1灰白色 φ1mm以下の石英・長石・チャート含	香炉か
375	瓦質土器	鉢	土坑2157				破片	N3/0暗灰色 φ0.5mm以下の石英・長石・チャート含	内面線刻あり
376	瓦質土器	盤	土坑2157	(38.2)	9.6	(21.4)	20	N3/0暗灰色、断面N5/0灰色 φ1mm以下の石英・長石・チャート含	
377	施釉陶器	卸目皿	土坑2157	(14.0)	3.2	(8.5)	20	胎土10YR7/2にぶい黄橙色、釉7.5Y6/2灰オリーブ色　φ2mm以下の長石含	瀬戸 灰釉 底部糸切り
378	土師器	皿・小	整地面	8.6	1.8		100	10YR8/4浅黄橙色	
379	土師器	皿・小	整地面	(9.0)	1.7		35	10YR8/2灰白色	
380	土師器	皿・小	整地面	9.0	1.5		70	10YR8/3浅黄橙色	
381	土師器	皿・小	整地面	9.2	1.7		95	外面10YR8/2灰白色 内面10YR8/3浅黄橙色クサリレキ少量	
382	土師器	皿・小	整地面	9.3	1.7		95	10YR8/3浅黄橙色+10YR6/6明黄褐色	
383	土師器	皿・小	整地面	9.6	2.0		65	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
384	土師器	皿・中	整地面	11.2	2.0		55	10YR8/2灰白色	
385	土師器	皿・大	整地面	(13.2)	2.0		55	10YR8/2灰白色	
386	輸入施釉陶器	瓶	整地面				25	外面N5/0灰色、内面2.5YR5/4にぶい赤褐色 釉2.5Y4/6オリーブ褐色	李朝
387	土師器	皿・中	整地層	11.4	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
388	土師器	皿・大	整地層	(12.8)	2.1		35	10YR8/4浅黄橙色	
389	土師器	皿・大	整地層	(13.1)	2.2		45	10YR8/3浅黄橙色	
390	土師器	皿・大	整地層	14.2	1.9		80	10YR8/3浅黄橙色	
391	土師器	皿・中	土塁構築土	(10.4)	2.2		25	10YR8/3浅黄橙色	
392	土師器	皿・大	土塁構築土	(12.4)	(2.2)		20	10YR8/3浅黄橙色	
393	土師器	皿・大	土塁構築土	(12.4)	(2.1)		15	外面10YR7/4にぶい黄橙色 内面10YR8/4浅黄橙色	
394	土師器	皿・大	土塁構築土	(13.8)	(2.0)		15	10YR8/2灰白色	
395	土師器	皿・大	土塁構築土	(14.8)	2.4		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
396	土師器	皿・大	土塁構築土	(15.4)	2.2		5	10YR8/4浅黄橙色	

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
397	輸入青磁	椀	土塁構築土			4.8	40	胎土10YR7/3にぶい黄橙色 釉5Y5/2灰オリーブ色	
398	土師器	皿・小	土塁構築以前整地層	(8.8)	1.9		25	10YR4/3にぶい黄褐色	
399	山茶椀	椀	土塁構築以前整地層			7.4	底部20	2.5Y8/2灰白色 φ1㎜以下の石英・長石少量	硯転用か
400	山茶椀	椀	土塁構築以前整地層			9.9	底部15	2.5Y8/1灰白色	
401	焼締陶器	壺	土塁構築以前整地層			(11.0)	底部20	2.5Y7/1灰白色 φ0.5～3㎜の石英・長石多量	
402	瓦質土器	鉢	土塁構築以前整地層				破片	外面2.5Y5/1黄灰色、内面2.5Y5/1黄灰色+10YR7/3にぶい黄橙色 φ1㎜以下石英・長石多量	
403	焼締陶器	擂鉢	土塁構築以前整地層				破片	2.5Y8/1灰白色 φ1～5㎜の石英・長石含	信楽 擂目3条1単位
404	土師器	皿・小	近世整地層	(7.0)	1.2		35	10YR7/4にぶい黄橙色 クサリレキ少量	灯明皿
405	土師器	皿・小	近世整地層	7.4	1.6		95	10YR8/3浅黄橙色	
406	土師器	皿・中	近世整地層	(11.0)	1.6		15	7.5YR7/4にぶい橙色 φ1㎜以下の長石・褐色粒含	
407	土師器	鍋	近世整地層	(28.6)			10	10YR8/3浅黄橙色 φ1㎜以下の黒色粒含	焙烙鍋
408	瓦質土器	羽釜	近世整地層	(14.8)	14.3	(16.6)	口縁20 体部70	胎土2.5Y8/1灰白色、外面2.5Y6/1黄灰色	
409	施釉陶器	皿	近世整地層	(8.4)	3.4	(2.8)	25	胎土N5/0灰色 釉5Y4/2灰オリーブ色+5Y3/2オリーブ黒色	瀬戸 鉄釉
410	施釉陶器	壺	近世整地層			4.4	底部100	胎土2.5Y8/2灰白色 釉7.5YR2/1黒色+7.5YR3/4暗褐色	瀬戸 鉄釉
411	施釉陶器	皿	近世整地層					胎土2.5Y8/2灰白色、釉2.5Y8/3淡黄色黒色	織部 向付
412	施釉陶器	皿	近世整地層	(12.6)	3.6	5.0	40	外面2.5YR4/8赤褐色～10YR6/3にぶい黄橙色 釉7.5Y6/2灰オリーブ色 黒色粒含	肥前系
413	施釉陶器	皿	近世整地層	(13.8)	4.0	(4.4)	20	胎土10YR6/3にぶい黄橙色 釉7.5Y7/1灰白色 φ1㎜以下の黒色粒含	肥前系
414	施釉陶器	椀	近世整地層	7.7	3.7	3.2	75	5Y7/2灰白色 φ0.5㎜以下の長石含	志野
415	施釉陶器	椀	近世整地層	(10.0)	7.4	5.0	45	胎土10YR8/2灰白色、釉5Y8/3淡黄色	肥前系
416	輸入青花	椀	近世整地層	(10.2)			口縁25	胎土N8/0灰白色 φ0.5㎜以下の黒色粒含	
417	輸入青磁	盤	近世整地層			(28.0)		胎土N8/0灰白色 φ2㎜以下の褐色粒含	
418	焼締陶器	灯火具	土坑1086	8.8	2.2		50	外面5YR4/3にぶい赤褐色 内面5YR5/2灰褐色	煤付着
419	瓦質土器	蓋	土坑1086	(20.0)	3.8		60	7.5YR7/4にぶい橙色 クサリレキ多量 φ1～2㎜チャート・石英・長石少量	
420	瓦質土器	壺	土坑1086	(14.8)	16.9	(18.6)	45	10YR7/4にぶい黄橙色+7.5YR7/4にぶい橙色φ1～3㎜チャート・石英・長石少量	火消壺 外面下部・底部内面炭付着
421	瓦質土器	鉢	土坑1086	23.6 ×44.2	12.1		65	10YR6/3にぶい黄橙色 φ1㎜以下のチャート・長石・石英含	火鉢
422	焼締陶器	擂鉢	土坑1086				破片	外面2.5YR4/2灰赤色 内面2.5YR4/4にぶい赤褐色	備前
423	焼締陶器	擂鉢	土坑1086				破片	外面2.5YR4/3にぶい赤褐色、内面2.5YR4/2灰赤色 φ1～5㎜の石英・長石多量	丹波
424	施釉陶器	鉢	土坑1086	15.6	9.2	10.9	口縁60 体部75	胎土2.5Y8/2灰白色、釉5Y7/1灰白色 黒色粒多量	
425	施釉陶器	椀	土坑1086	(20.0)	9.2	8.0	口縁5 高台75	胎土10YR8/1灰白色 釉5Y6/3オリーブ黄色	瀬戸 灰釉
426	施釉陶器	椀	土坑1086	9.2	6.8	4.4	口縁60 体部100	2.5Y8/4淡黄色	肥前系
427	施釉陶器	鳥形土製品	土坑1086				50	2.5Y7/2灰黄色	京都系か
428	輸入青磁	盤	土坑1086	20.0	4.9	5.0	60	釉10GY7/1明緑灰色	
429	焼締陶器	甕	土坑2001	19.8	(57.5)		50	5YR5/4にぶい赤褐色、断面N5/0灰色 φ1～10㎜の石英・長石多量	信楽

No.	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調胎土	備考
430	施釉陶器	皿	土坑2001	(13.1)	4.9	4.8	40	胎土2.5Y7/3浅黄色、釉2.5GY8/1灰白色	肥前系
431	瓦質土器	鉢	土坑2105	(55.9)	41.0	32.5	60	N3/0暗灰色、断面N8/0灰白色 φ0.5mm以下の石英・長石・チャート少量	
432	施釉陶器	皿	土坑2105	12.0	3.2	5.0	65	5Y8/1灰白色～7.5YR7/6橙色 φ1mm以下の褐色粒子・黒色粒含	御戸美濃系
433	瓦質土器	鉢	土坑2115	(65.3)	49.0	40.3	60	N4/0灰色、断面N8/0灰白色 φ0.5mm以下の石英・長石・チャート少量	

※　口径の（）内数値は復元口径
　　器高の（）内数値は残存高

Ⅴ　長岡京跡北辺隣接地

１．調査経過

今回の調査目的は、長岡京の遺構が存在しているかを調べるための範囲確認調査である。2011年１月から３月にかけて実施した都市計画道路（向日町上鳥羽線）の整備事業に伴う発掘調査[1]により、長岡京の推定北限よりさらに約二町北で、長岡京期の南北方向の溝２条を検出した。この溝は、東四坊坊間西小路の北延長線上に位置する。

そのため、京都市建設局道路建設課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の３者で協議を行い、埋蔵文化財包蔵地以外である久世築山町地内で確認調査を行うこととなった。調査区は推定東四坊坊間小路推定地（１区）、推定北京極大路推定地（２区）に設定し、近隣住民への説明などの事前調整を行った後に調査を実施した。調査は、2011年４月中頃に開始し、４月末に終了した。調査中、文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を進めた。

４月25日には京都市立大藪小学校６年生の遺跡見学会を実施した。

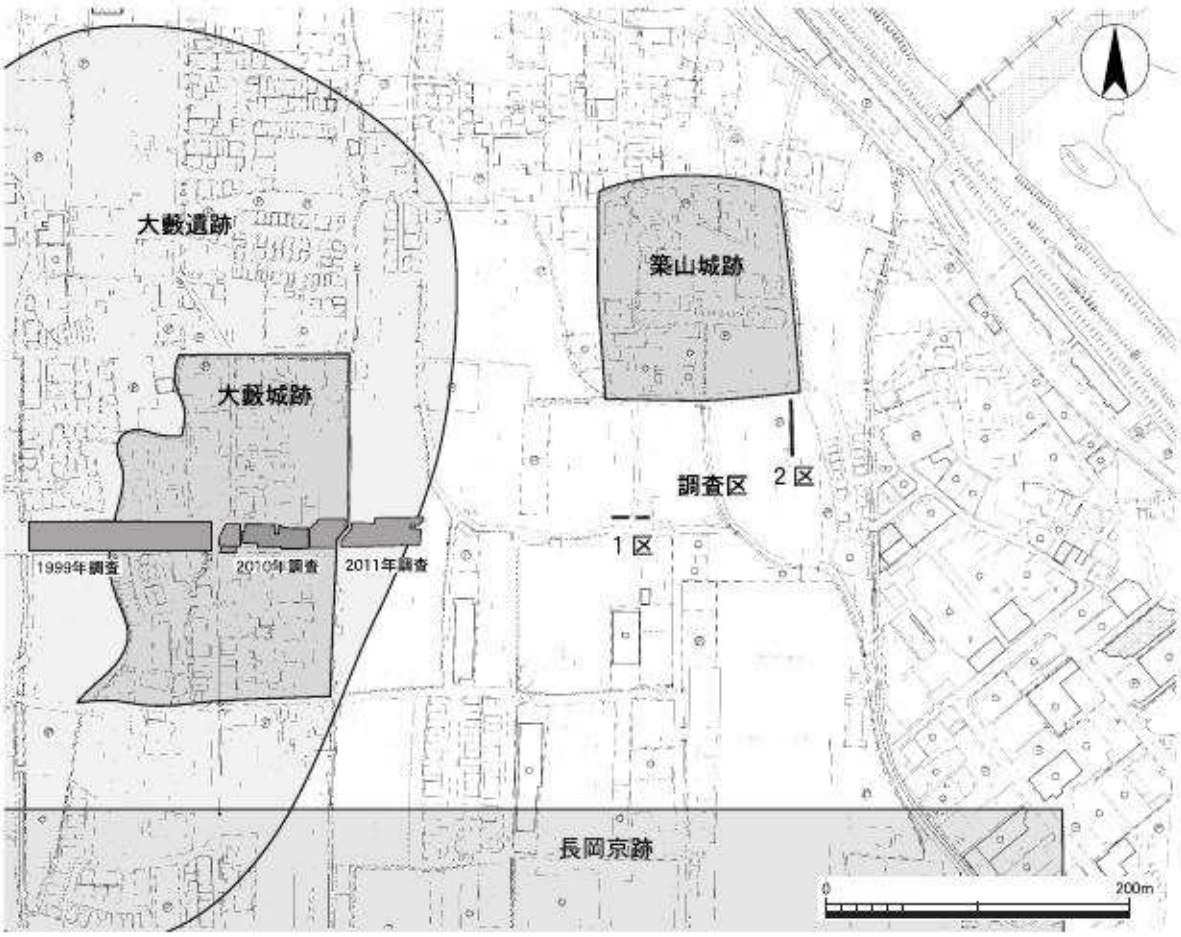


図99　調査位置図（１：5,000）

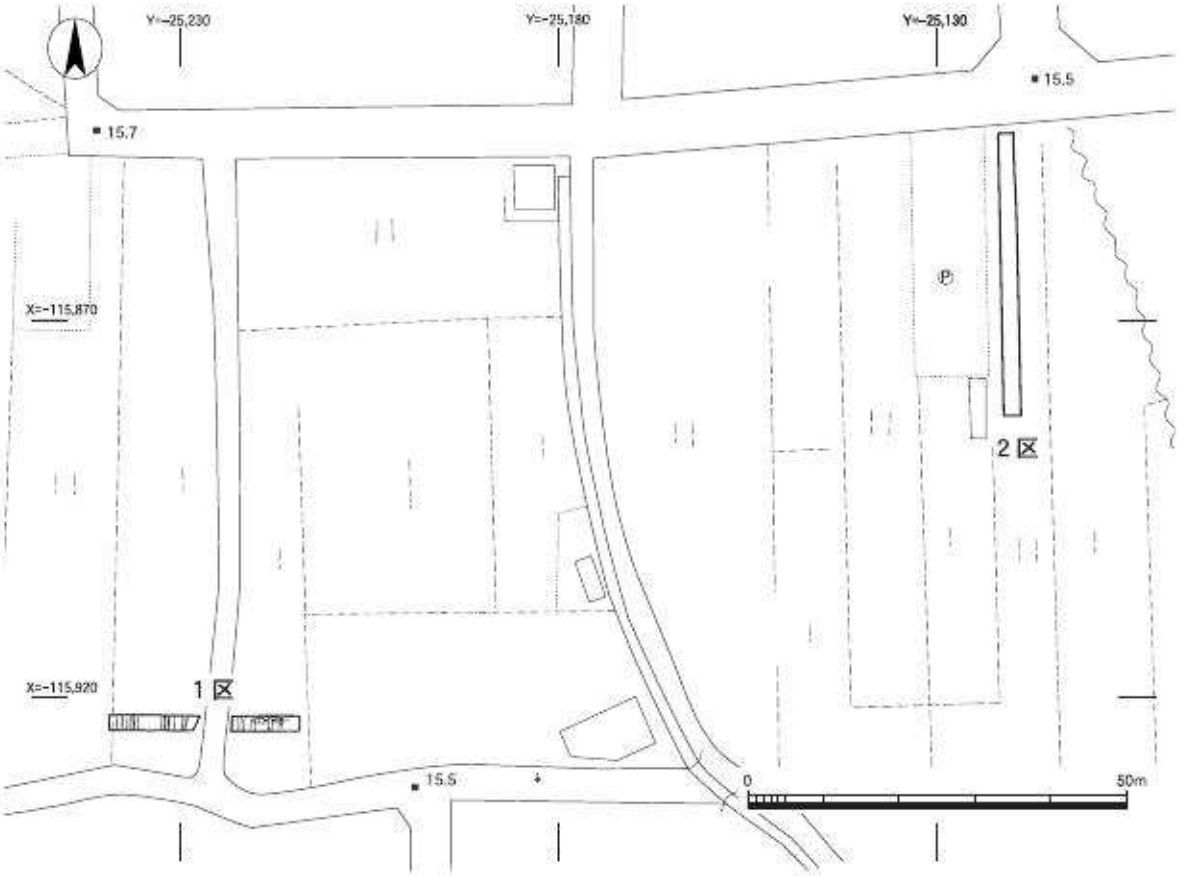


図100　調査区配置図（1：1,000）

図101　1区西半調査前全景（西から）

図102　1区東半調査前全景（東から）

図103　2区調査前全景（北から）

図104　2区作業風景（北から）

2．遺　構

（1）１区（図105）

基本層序は耕作土（0.3m）、１層：灰黄色砂泥（0.1m）、２層：灰オリーブ砂泥（0.1m）が堆積し、Y=-25,219以東では２層の下に３層：灰白色シルト（0.02～0.1m）が堆積し、以下地山となる。３層は平安時代の土器を少量含む遺物包含層である。

１層上面では近代の土坑１を検出した。３層上面および地山上面では室町時代～江戸時代初頭頃の溝２～14を検出した。

東西方向の溝２・３は、いずれも幅0.35m、深さ0.08mを測る。南北方向の溝４～14は、幅0.3～1.05m、深さ0.08～0.24mを測る。溝内の埋土は全て灰白色シルトである。

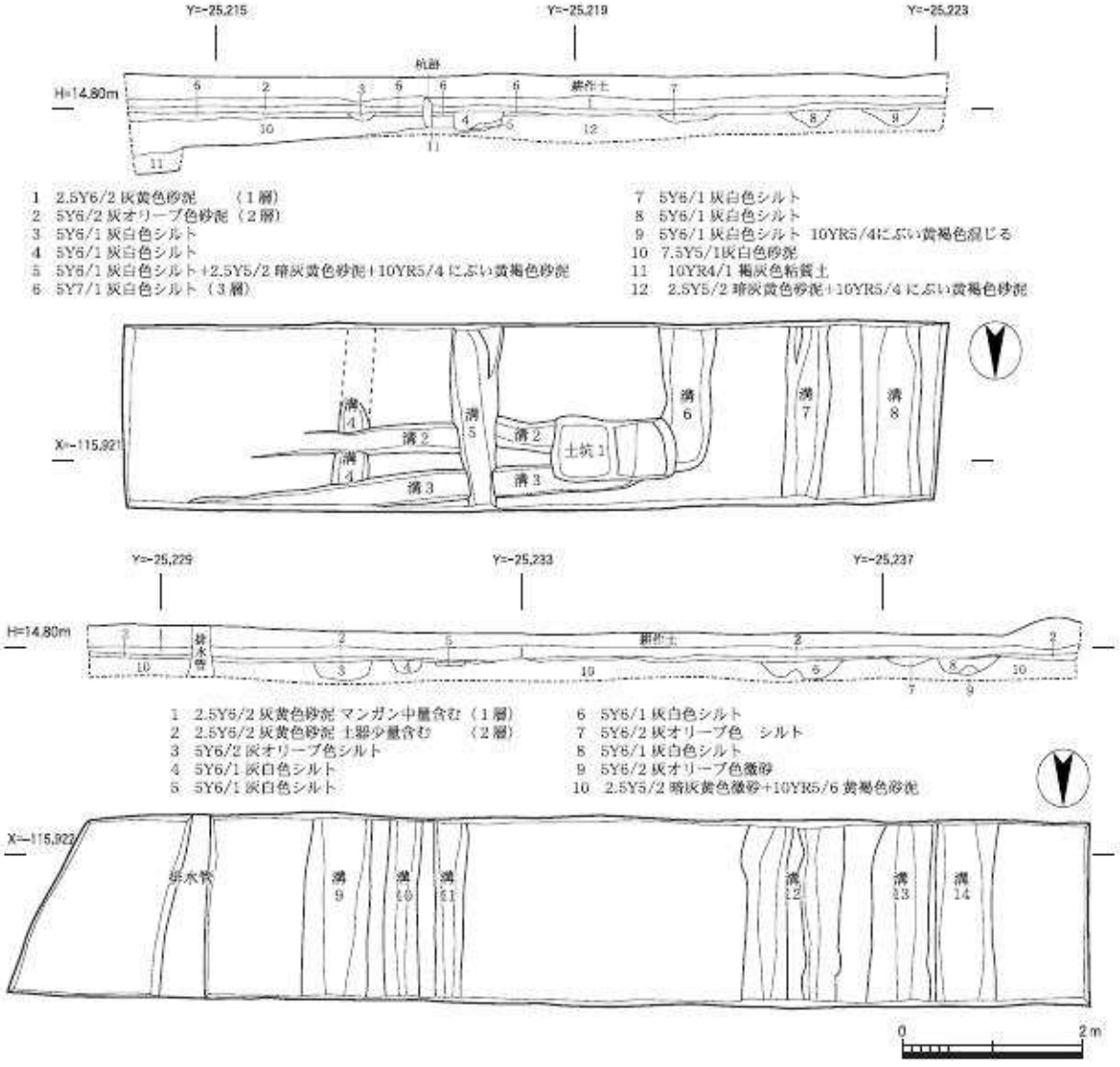


図105　１区遺構実測図（１：80）

表22　遺構概要表

時　代	遺　　構	備　考
室町時代～ 江戸時代初期	溝（溝２～14）	
近代	土坑（土坑１）	

（２）２区（図版23-３）

基本層序は耕作土（0.18m）、上部にマンガンを含む暗灰黄色砂質土（0.2m）、灰黄色混礫粘質土（0.2m）、地山の黄灰色砂礫となる。桂川の後背湿地であることを確認した。遺構・遺物は検出されなかったため平面図は割愛した。

３．遺　　物

出土した遺物は、整理箱で２箱である。古墳時代から江戸時代までのものがある。いずれの遺物も小破片であり、図示できるものは少ない。

室町時代から江戸時代初期の遺物としては、瓦器羽釜、青磁椀、白磁椀、瀬戸・美濃系のおろし皿、菊花皿、焼締陶器、土師器、滑石製鍋などがある。

平安時代の遺物としては、須恵器・杯B・壷E・鉢・把手付甕B、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿、黒色土器、土師器、平瓦などがある。

古墳時代の遺物は、後世の遺構・包含層から出土した。須恵器杯蓋・広口壷・甕・土師器甕・甑の把手がある。

室町時代から江戸時代初期

１は青磁椀。外面の花弁の文様は退化してヘラによる刻線となっている。２・３は瓦器羽釜である。２は口縁部が内弯する。３は口縁部上半と端部上面に浅い凹みがめぐる。２・３とも内外

表23　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器		土師器２点、須恵器２点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、瓦		須恵器６点、灰釉陶器１点		
室町時代～ 江戸時代初期	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、滑石製鍋		瓦器２点、輸入陶磁器１点		
合　計		３箱	14点（１箱）	２箱	０箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

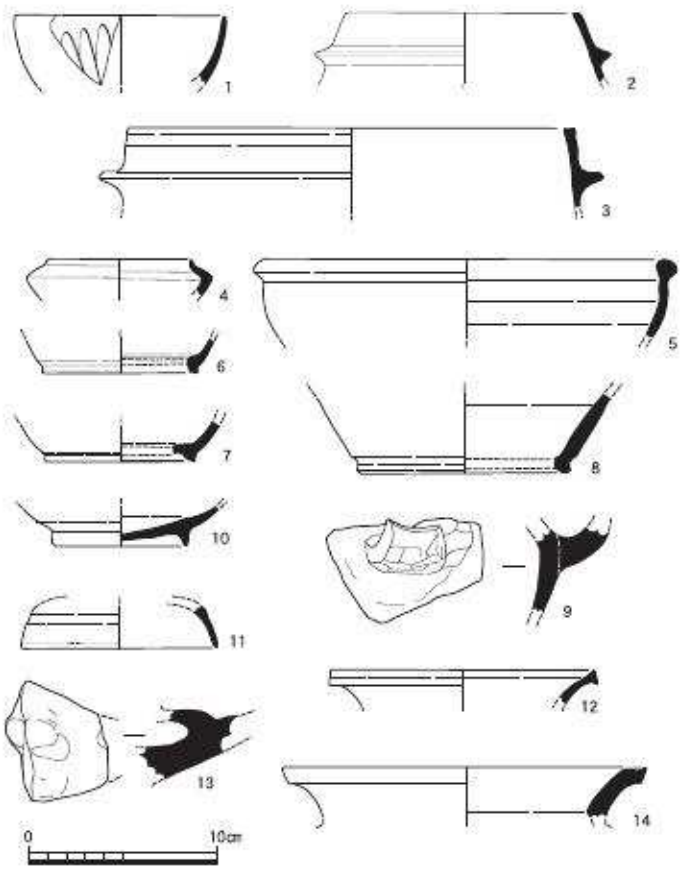


図106　出土土器実測図（１：４）

面磨滅している。１～３は１区２層出土。

平安時代

４～９は須恵器、10は灰釉陶器である。４は蓋受状の短い口縁部をもつ広口の小型壺Ｅである。５は玉縁状口縁をもつ小型の鉢である。やや軟質で内外面磨滅している。６・７は杯Ｂの底部。８は平瓶の底部か。９は体部に把手が付く甕Ｂ。把手部分は貼付で、ヘラで粗く成形している。内面は青海波文。10は灰釉陶器皿。底部に高い断面三角形を呈する高台が付く。底部外面には糸切りの痕跡が残る。底部内面に重ね焼き痕。４・６～10は１区３層、５は溝５出土。

古墳時代

11・12は須恵器、13・14は土師器である。11は復元口径が10.4㎝と小型の須恵器杯蓋。内外面ヨコナデ。12は大きく「八」の字状にひらく広口壺の口縁部。内外面に灰が付着している。13は土師器甑の把手。胎土に白色砂粒を多く含む。14は土師器甕。内外面磨滅している。12は１区２層、11・13・14は１区３層出土。

４．ま と め

今回の調査では、調査面積が限られ、長岡京期の遺構の拡がりは確認できなかった。しかし１区では、平安時代の遺物包含層を確認した。また古墳時代の遺物も後世の遺構・包含層から出土しており、周辺に関連する遺構が検出される可能性がある。２区は桂川の後背湿地であることが確認できた。

地山は１区では灰色～暗灰黄色砂泥層、２区では黄灰色砂礫層で、１区と２区の間を北から南東方向に流れる農業用水路付近を境として変わると考えられる。

註

１）『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-18（財）京都市埋蔵文化財研究所　2011年

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋　潔・家原圭太・吉崎　伸・鈴木久史・津々池惣一・柏田有香・伊藤　潔
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2012年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
法勝寺跡・岡崎遺跡	京都市左京区岡崎法勝寺町　京都市動物園内	26100	417-1 418	35度 00分 45秒	135度 47分 07秒	2011/６/６～ ８/９	315㎡	保存目的調査
角社瓦窯跡	京都市北区西賀茂角社町125-1	26100	132-9	35度 03分 33秒	135度 44分 33秒	2011/９/１～ 10/７	157㎡	記録保存調査
植物園北遺跡	京都市左京区下鴨北園町５・６	26100	146	35度 02分 54秒	135度 46分 09秒	2010/12/20～ 2011/１/14	140㎡	記録保存調査
山科本願寺跡（16次調査）	京都市山科区西野山階町30-1他	26100	626	34度 58分 55秒	135度 48分 33秒	2011/１/11～ ３/11	295㎡	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
法勝寺跡・岡崎遺跡	寺院跡 集落跡	平安時代	溝、池、土坑、地業	土器、瓦	法勝寺阿弥陀堂の基壇版築を検出した。
角社瓦窯跡	瓦窯跡	平安時代	瓦窯、灰原、溝	土器、瓦	角社東群Ⅱ号窯の一部を再確認し、新たに灰原を検出した。
植物園北遺跡	集落跡	飛鳥時代	竪穴住居、掘立柱建物、土坑	土器	
山科本願寺跡（16次調査）	寺院跡	室町時代	土坑、集石、溝、柱列、高まり、通路状遺構	土器、瓦、金属製品、石	山科本願寺の整地面が良好に残されていることが判明した。

報 告 書 抄 録

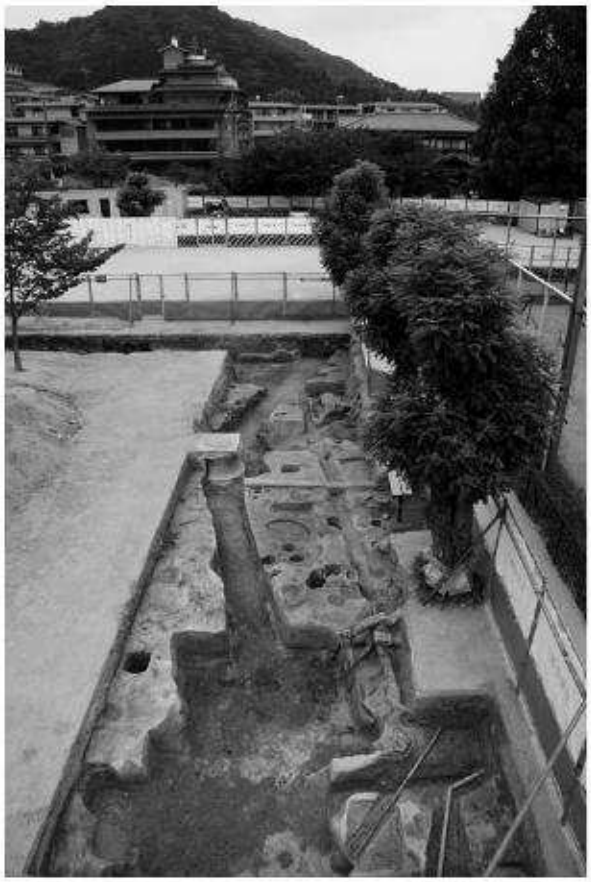
ふりがな	きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	京都市内遺跡発掘調査報告　平成23年度
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	高橋　潔・家原圭太・吉崎　伸・鈴木久史・津々池憲一・柏田有香・伊藤　潔
編集機関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　　TEL 075-415-0521
発行機関	京都市文化市民局
所在地	〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　　TEL 075-222-3108
発行年月日	西暦2012年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山科本願寺跡（やましなほんがんじあと）（17次調査）	京都市山科区西野山階町（きょうとしやましなくにしのさんかいちょう）30-1他	26100	626	34度58分55秒	135度48分32秒	2011/7/21～9/28	305㎡	保存目的調査
長岡京跡（ながおかきょうあと）北辺隣接地（ほくへんりんせっち）	京都市南区久世築山町（きょうとしみなみくくぜつきやまちょう）地内（ちない）	26100	(3)	34度57分17秒	135度43分26秒	2011/4/14～4/28	116㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山科本願寺跡（17次調査）	寺院跡	室町時代	土坑、溝、埋納遺構、柱列、通路状遺構、土塁	土器、瓦、金属製品	山科本願寺の整地面上で多数の遺構を検出した。
長岡京跡北辺隣接地	都城跡	室町時代～江戸時代	溝	土器	

図　　版

図版1　法勝寺跡・岡崎遺跡　遺構



1　1区西半全景（北から）

2　1区東端池41完掘状況（西から）

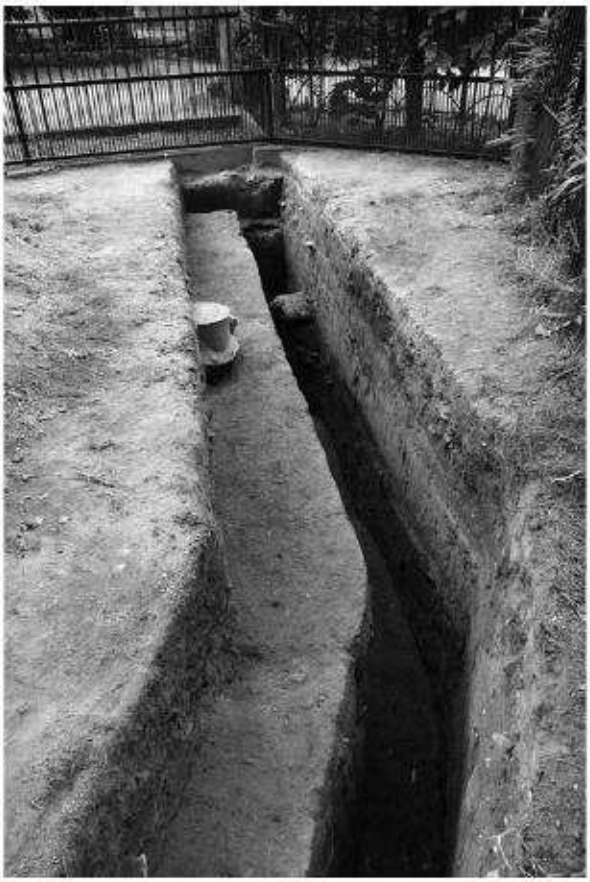
3　2区全景（東から）

4　2区北西部西壁基壇版築検出状況（南東から）

図版2　法勝寺跡・岡崎遺跡　遺構

1　3区基壇掘込地業検出状況（北東から）

2　4区掘込地業検出状況（北西から）



3　5区西壁断割状況（北から）

4　5区南区北壁断割状況（東から）

1

3

6

8

12

13

15

16

17

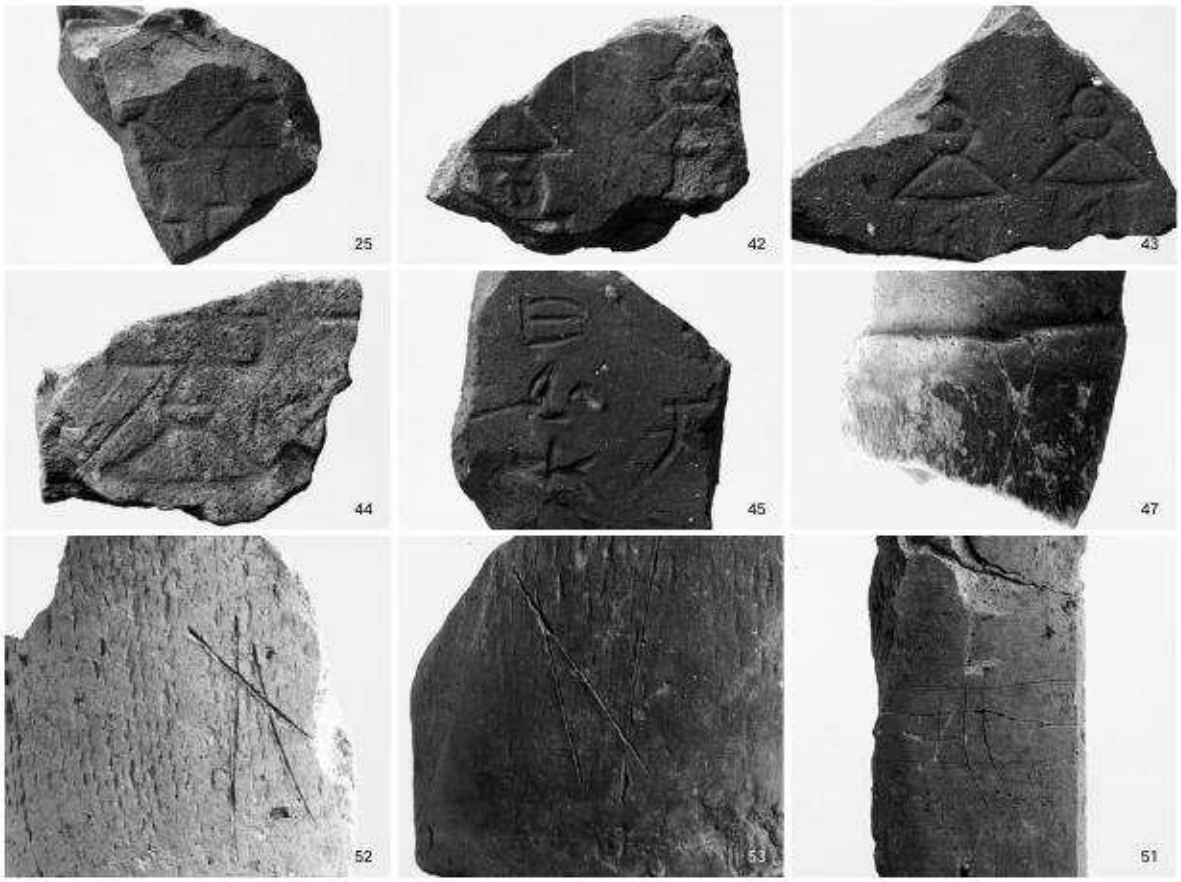
20

18

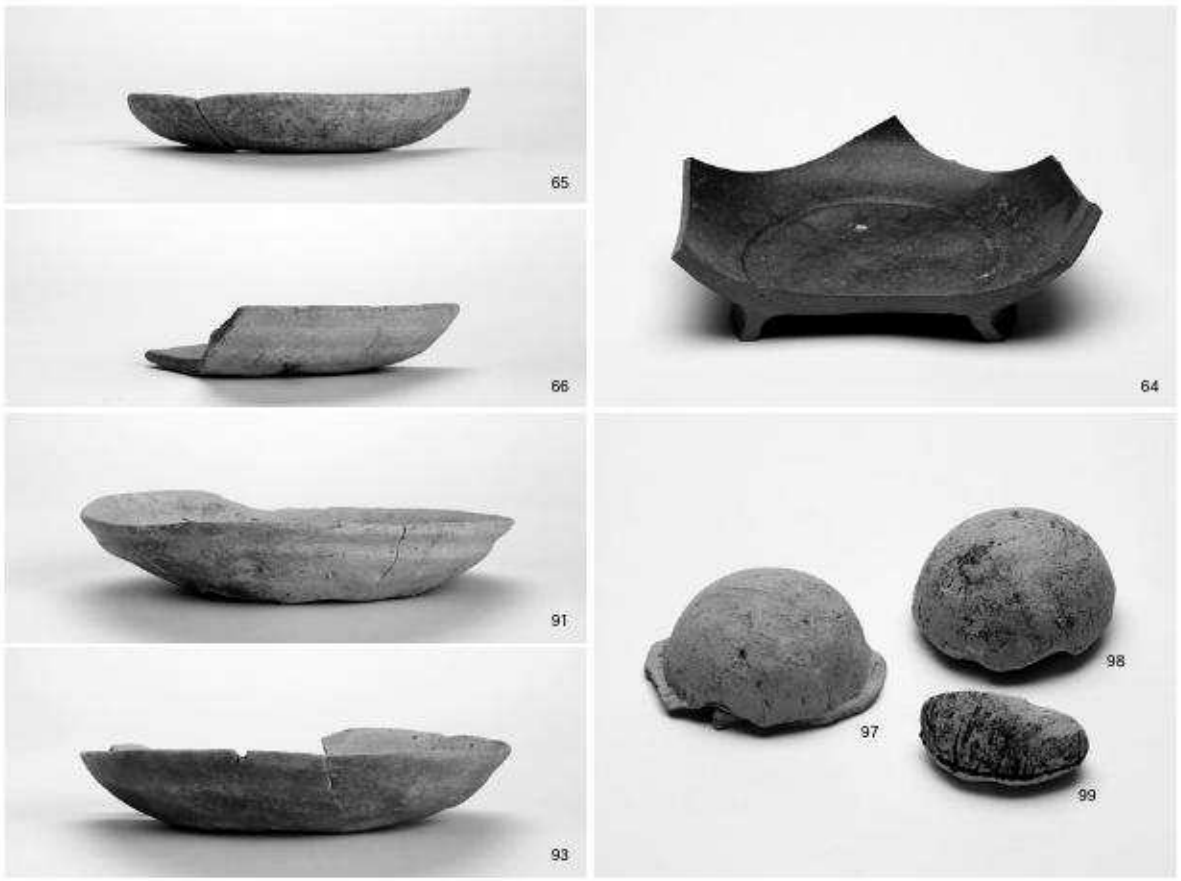
22

1・2区出土軒瓦

3・4区出土軒瓦

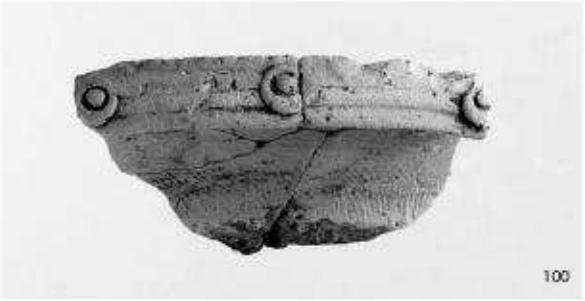


1　五輪塔押印文瓦・文字瓦・ヘラ記号瓦



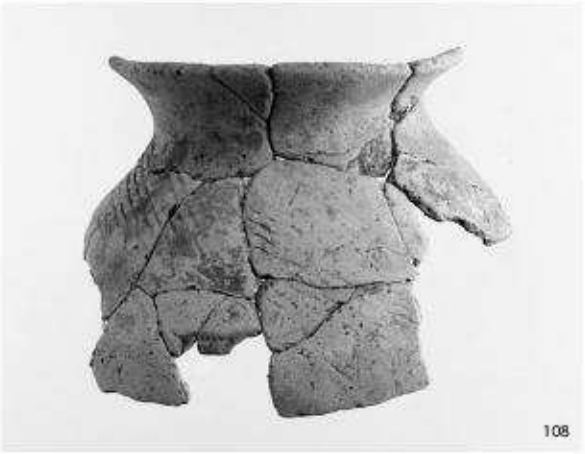
2　土器・土製品

120


100

118

124


108

112

123

133

土器

1　北区全景（北東から）

2　南区全景（北東から）

図版8　角社瓦窯跡　遺構

1　2号窯検出状況（東から）

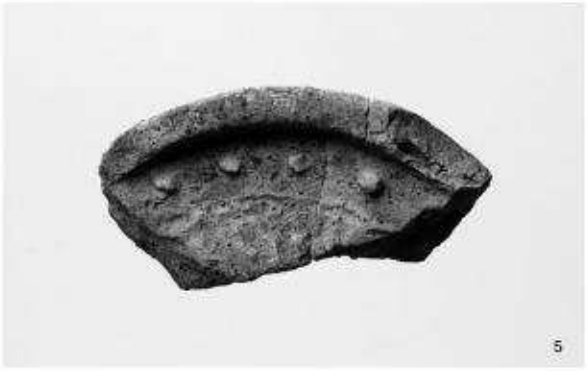
2　灰原1状況（北西から）

1

2

3

4


5

6

7

8

9

10

軒丸瓦・軒平瓦

11

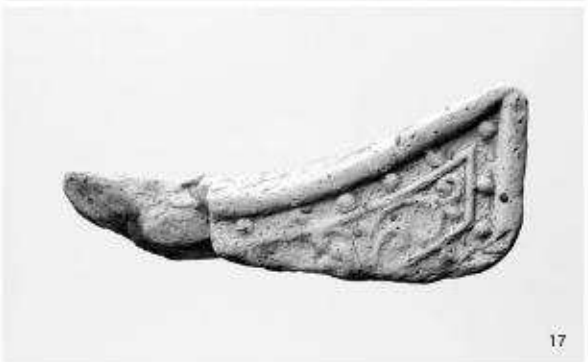
12

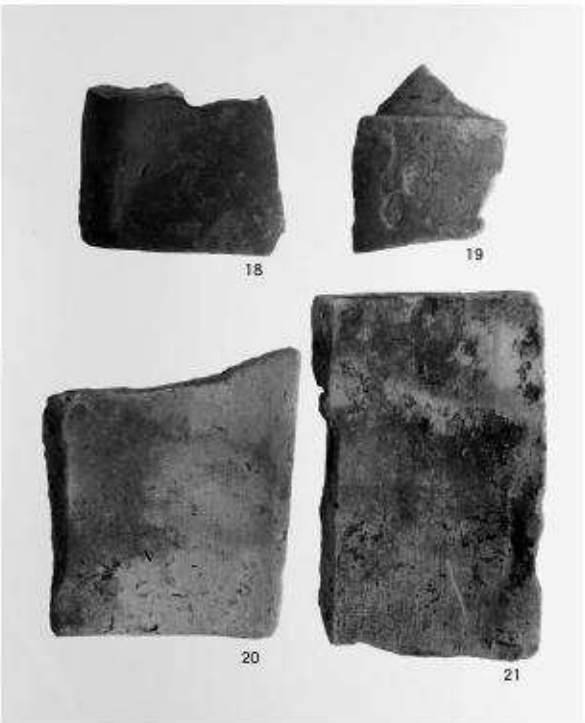
14

13

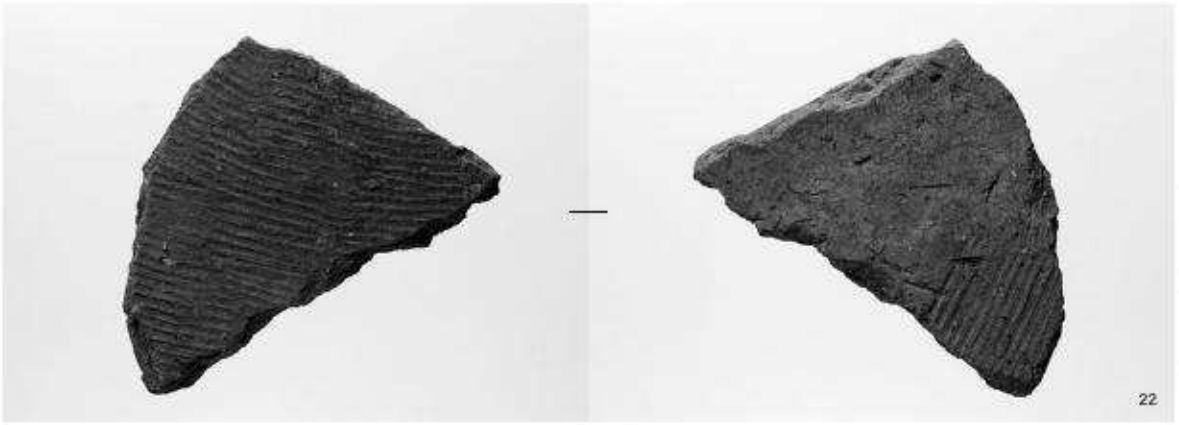
15

16


17


18
19
20
21

軒平瓦・丸瓦・平瓦


22

23

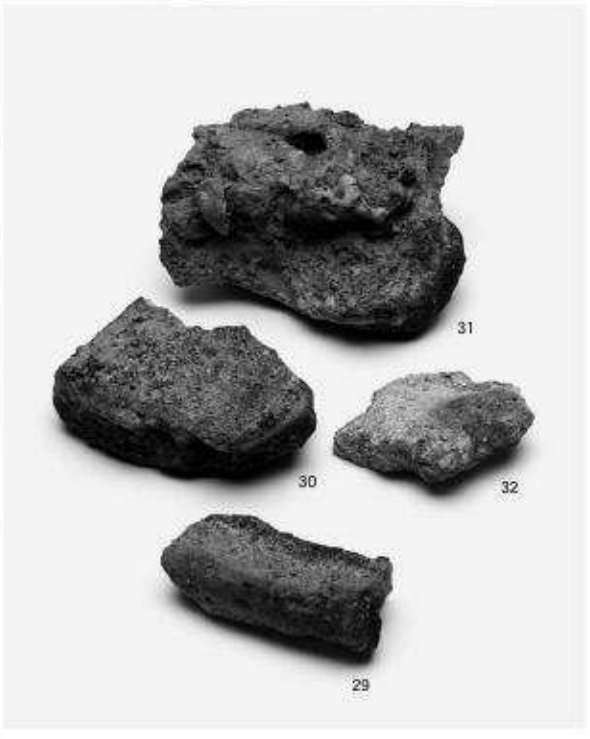
25

24

26

27

28


31
30
32
29

鴟尾・塼・須恵器・焼土塊・坩堝

1　第1回調査区全景（北から）

2　掘立柱建物1（北から）

1　第２回調査区全景（北から）

2　竪穴住居90（北から）

1　竪穴住居78（北西から）

2　出土遺物

1　16次調査区　通路状遺構全景（西から）

2　集石1061（北から）

3　16次調査区　北半全景（北から）

図版16　山科本願寺跡　遺構

1　17次調査１区　石組溝群全景（西から）

2　溝2084・2087合流部（北東から）

1　土坑2134土器出土状況（北西から）

2　土坑2156（南から）

3　礫敷き（北から）

4　土坑2061・2064（北西から）

図版18　山科本願寺跡　遺構

1　17次調査１区　南半全景（東から）

2　溝2143土器出土状況（北東から）

1　土塁基底部と溝2148（北東から）

2　土塁断割状況（南東から）

3　土塁断割断面短刀出土状況（北から）

4　17次調査２区　土塁斜面（北北東から）

図版20　山科本願寺跡　遺物

51

91

57

101

65

104

80

105

86

116

87

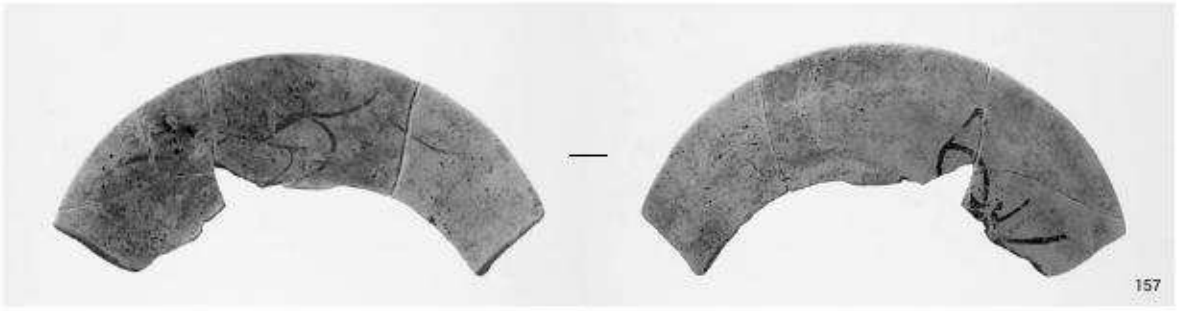
117

121

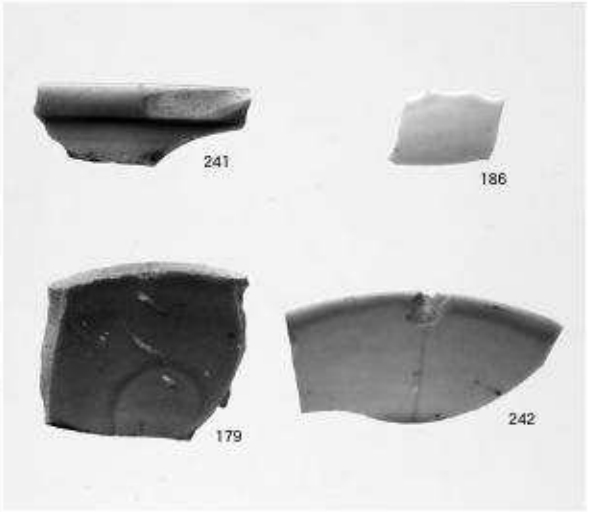
土器

144

145


157

215


241
186
179
242

185

243

土器・土製品

257

301

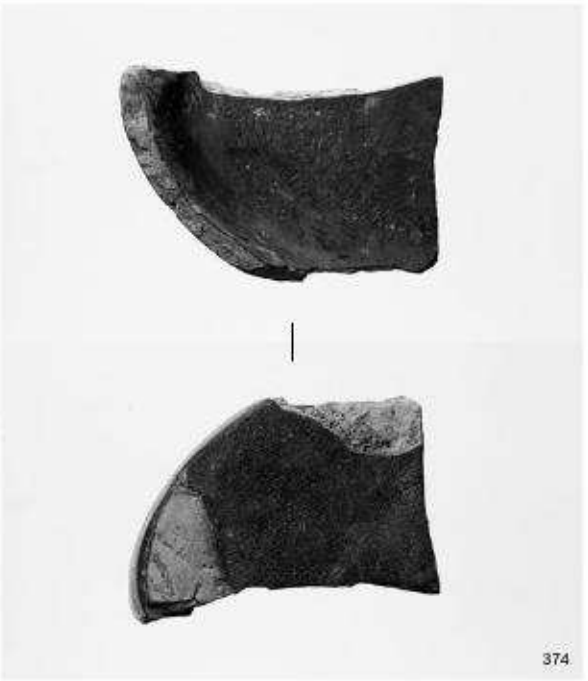
267

331

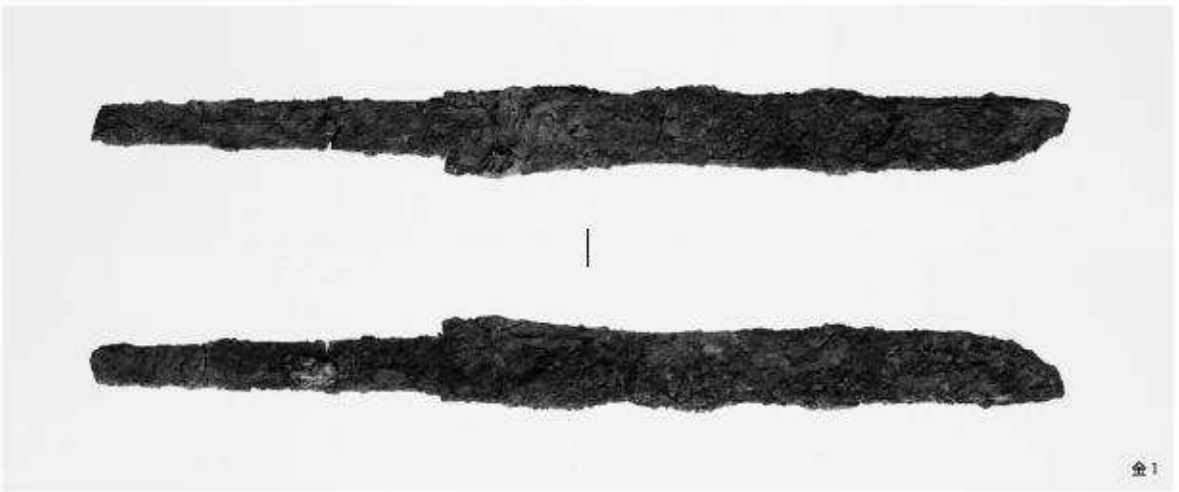
284

367

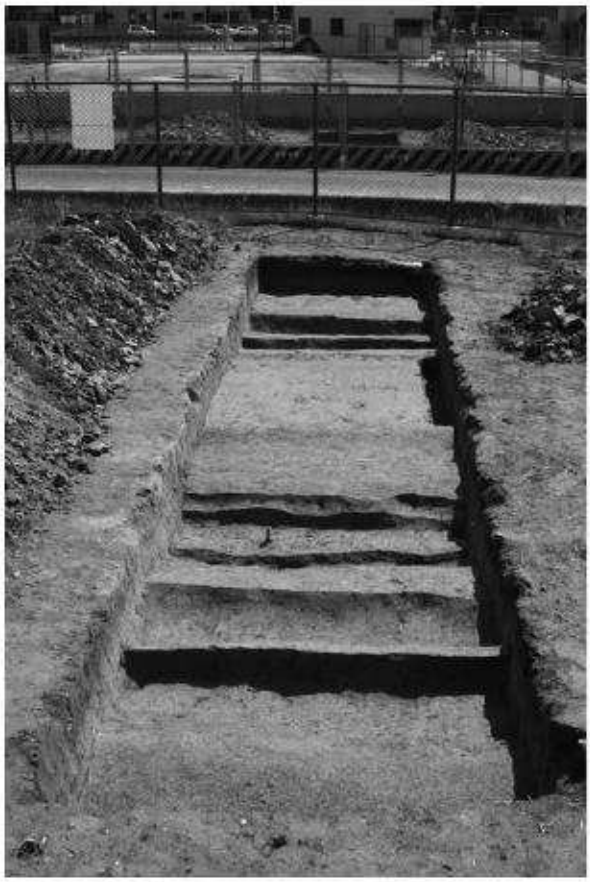
386


374

金2


金1

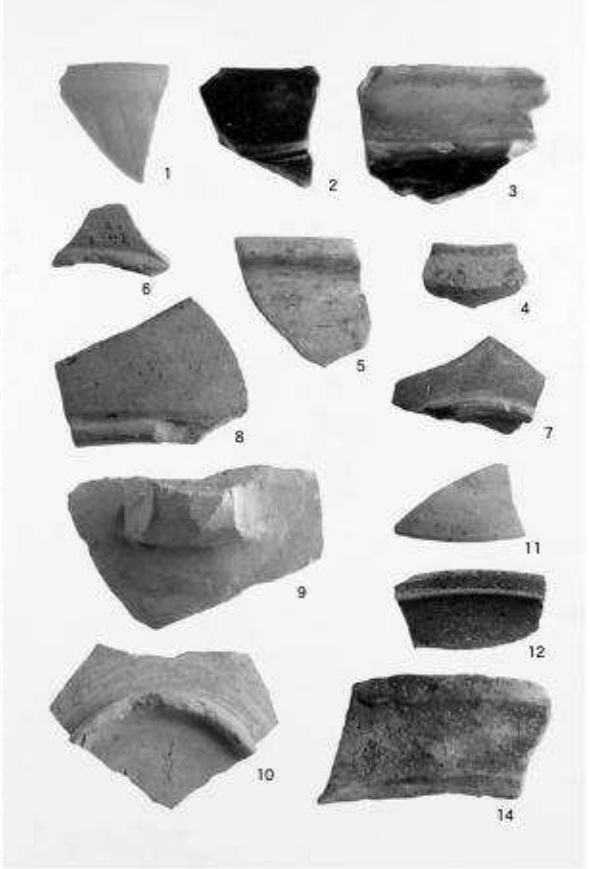
土器・金属製品



1　1区西半全景（西から）

2　1区東半全景（東から）

3　2区全景（北から）



4　出土遺物

京都市内遺跡発掘調査報告
平成23年度
発行日　2012年３月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/
印　刷　三星商事印刷株式会社